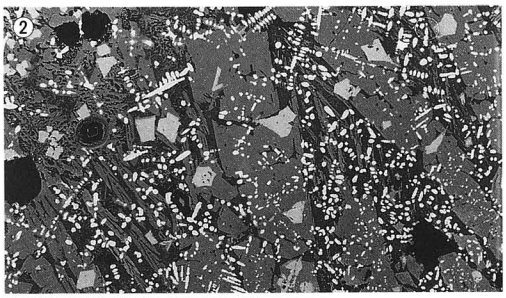
IMⅡ-3
今佐屋山遺跡Ⅱ区
(排滓場Ⅲ層出土)
砂鉄製錬滓

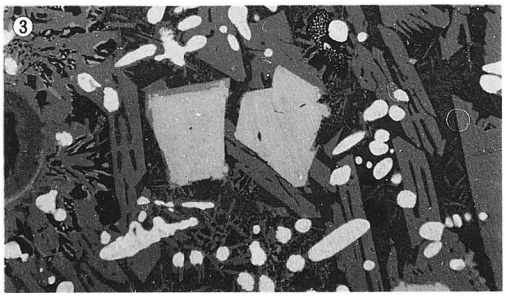
① ×100
Wüstite
＋Magnetite
＋Fayalite

② ×100
Wüstite
＋Magnetite
＋Fayalite

③ ×400
同左拡大

外観写真　1/2.7





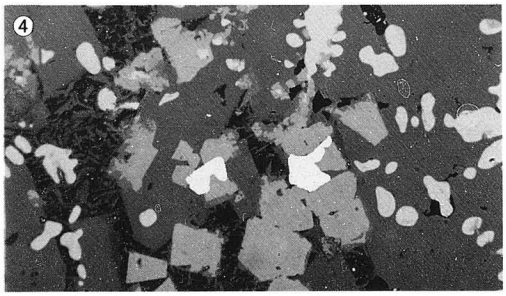
IMⅡ-5
今佐屋山遺跡Ⅱ区
(排滓場Ⅴ層出土)
砂鉄製錬滓

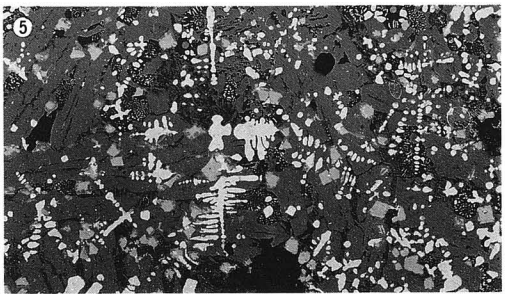
④ ×400
中央白色・金属鉄
Wüstite
＋Magnetite
＋Fayalite

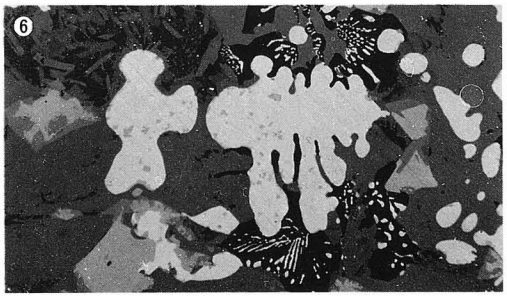
⑤ ×100
Wüstite
＋Magnetite
＋Fayalite

⑥ ×400
Wüstite粒内
Ti-Fe化合物

外観写真　1/2.7







IMⅡ-6
今佐屋山遺跡Ⅱ区
(排滓場Ⅵ層出土)
砂鉄製錬滓
(Wüstite粒内
Ti-Fe化合物析出)
×400

外観写真　1/2.7

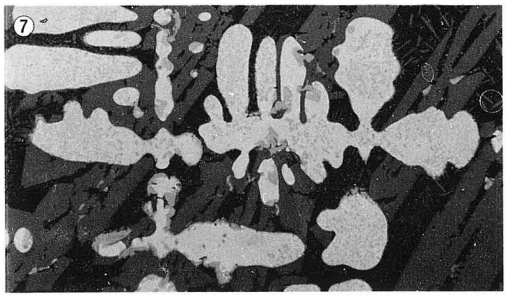


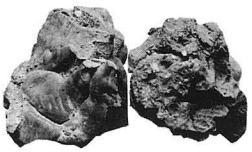
Photo. 11　鉄滓の顕微鏡組織(縮小0.8)

IMⅡ-7
今佐屋山遺跡Ⅱ区
(排滓場Ⅶ層出土)
砂鉄製錬滓

① ×100
Wüstite
+Magnetite
+Fayalite

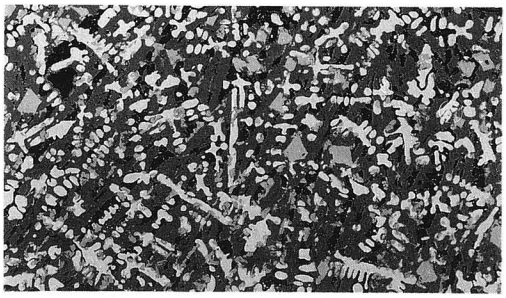
② ×100
Wüstite
+Magnetite
+Fayalite

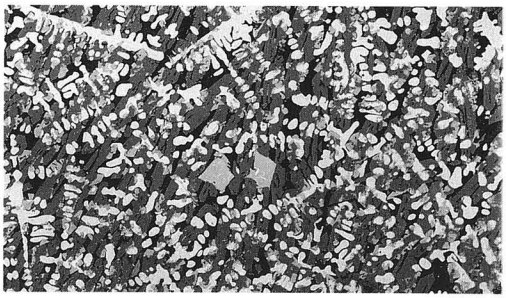
③ ×400
同左拡大

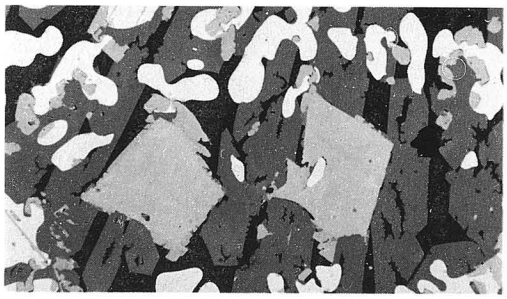


表側　　裏側

外観写真　1/2.7

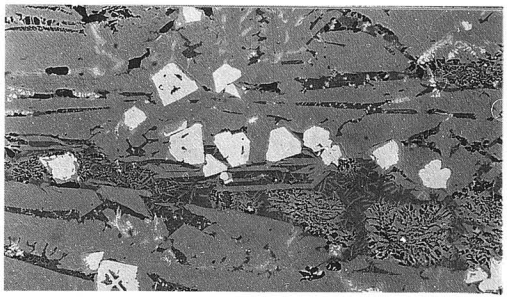






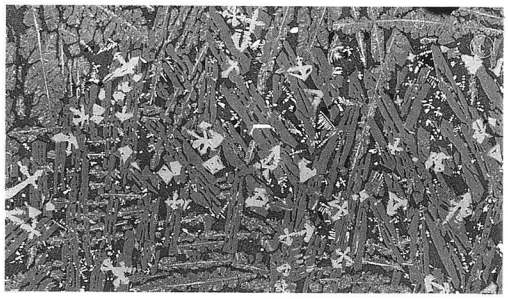
IMⅡ-8
今佐屋山遺跡Ⅱ区
(排滓場Ⅷ層出土)
砂鉄製錬滓
(Magnetite+Fayalite)

外観写真　1/2.7



IMⅡ-9
今佐屋山遺跡Ⅱ区
(排滓場Ⅸ層出土)
砂鉄製錬滓
(Magnetite+Fayalite)
×100

外観写真　1/2.7



IMⅡ-10
今佐屋山遺跡Ⅱ区
(排滓場Ⅹ層出土)
砂鉄製錬滓
×100

外観写真　1/2.7

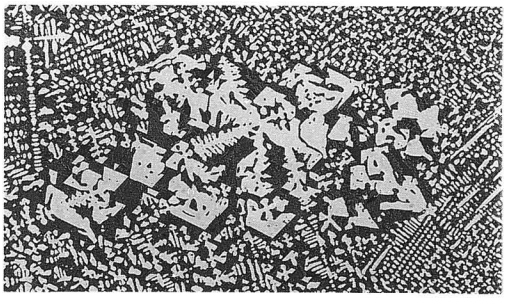


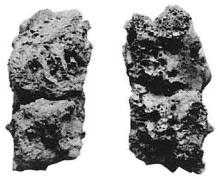
Photo. 12　鉄滓の顕微鏡組織(縮小0.8)

IMⅡ-11
今佐屋山遺跡Ⅱ区
(製鉄遺構炉底滓)
砂鉄製錬滓

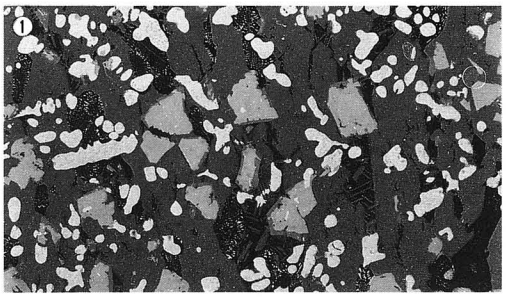
② ×100
Wüstite
+Magnetite
+Fayalite

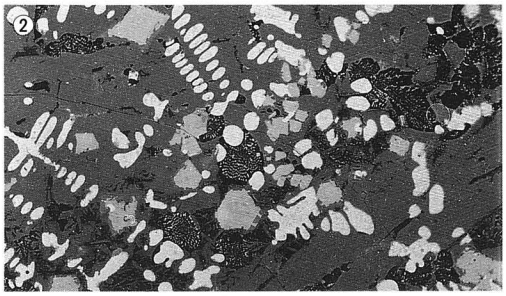
② ×100
Wüstite
+Magnetite
+Fayalite

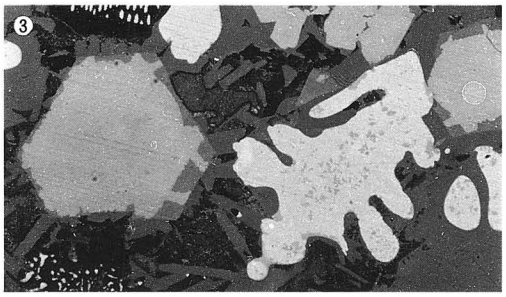
③ ×400
同左拡大



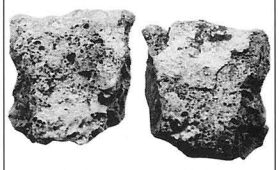
外観写真　1/2.7





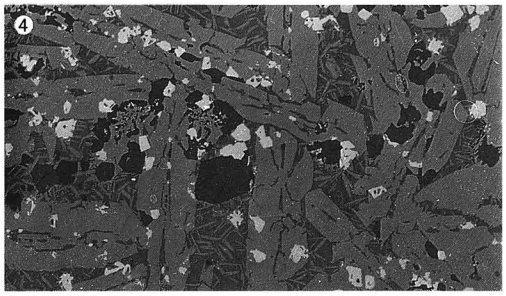


IMⅡ-12
今佐屋山遺跡Ⅱ区
(製鉄遺構1号土坑出土)
砂鉄製錬滓
×100



表側　裏側

1/2.7　外観写真　1/2.7



IMⅡ-13
今佐屋山遺跡Ⅱ区
(製鉄遺構炉底滓)
砂鉄製錬滓

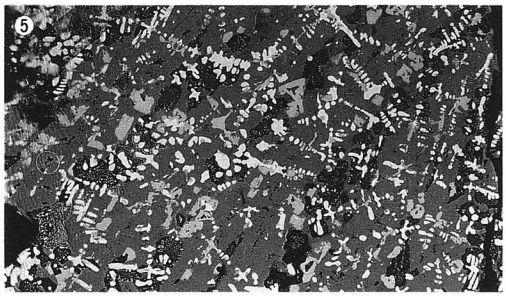
⑤ ×100
Wüstite
+Magnetite
+Fayalite

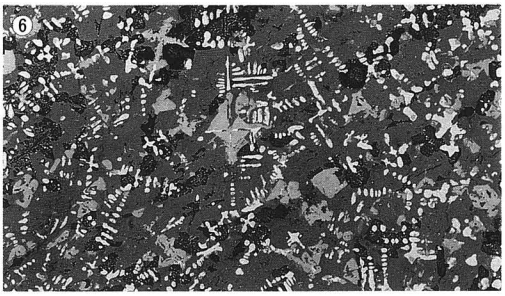
⑥ ×600
Wüstite
+Magnetite
+Fayalite

⑦ ×400
同左拡大

表側　裏側

外観写真　1/2.7





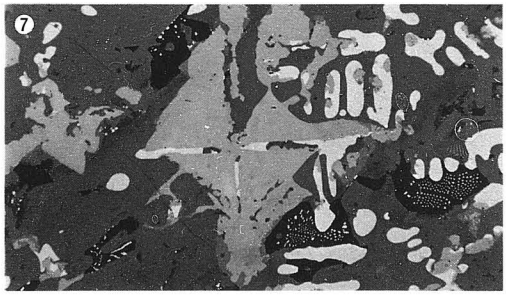
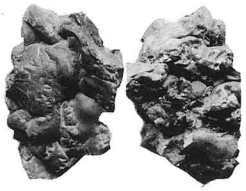


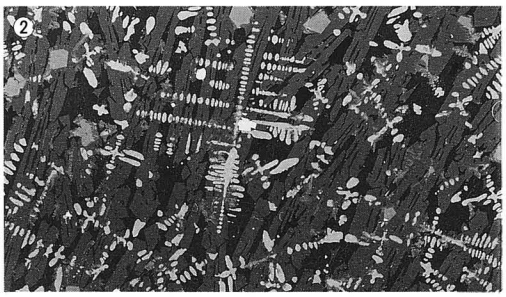
Photo. 13　鉄滓の顕微鏡組織(縮小0.8)

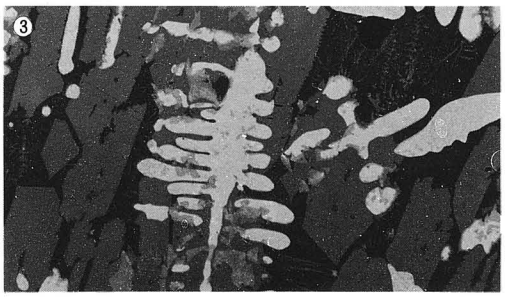
IMⅡ-14
今佐屋山遺跡Ⅱ区
(製鉄遺構1号土坑出土)
砂鉄製錬滓

	① ×100 Wüstite +Magnetite +Fayalite
② ×100 Wüstite +Magnetite +Fayalite	③ ×400 Wüstite粒内 Ti-Fe化合物



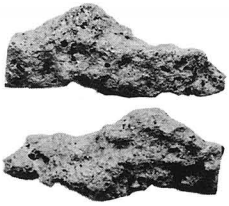
表側　裏側
外観写真　1/2.7



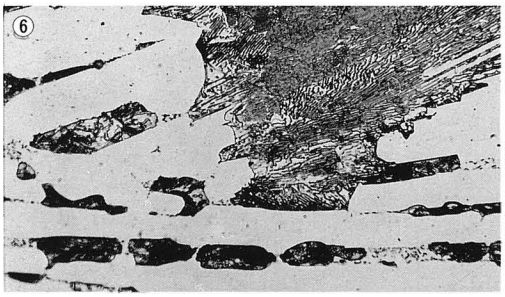


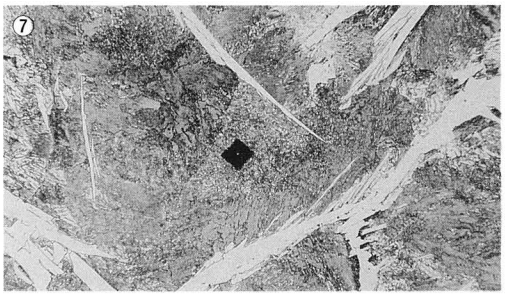
IMⅡ-15
今佐屋山遺跡Ⅱ区
(製鉄遺構出土)
鉄　塊

	④ ×100 左:表皮Slag 右:金属鉄
⑤ ×100 ピラクルetch 炭化物組織	⑥ ×400 同左拡大
⑦ ×200 硬度圧痕 256Hv荷重100g	⑧ ×200 硬度圧痕 960Hv荷重100g



上段：表側　下段：裏側
外観写真　1/2.7





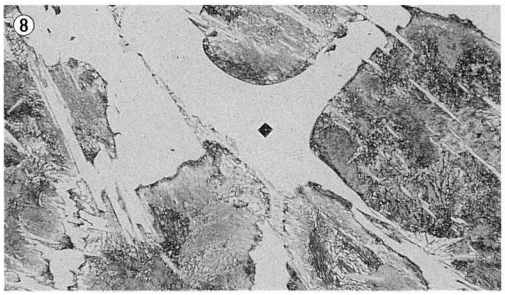


Photo. 14　鉄滓、鉄塊の顕微鏡組織(縮小0.8)

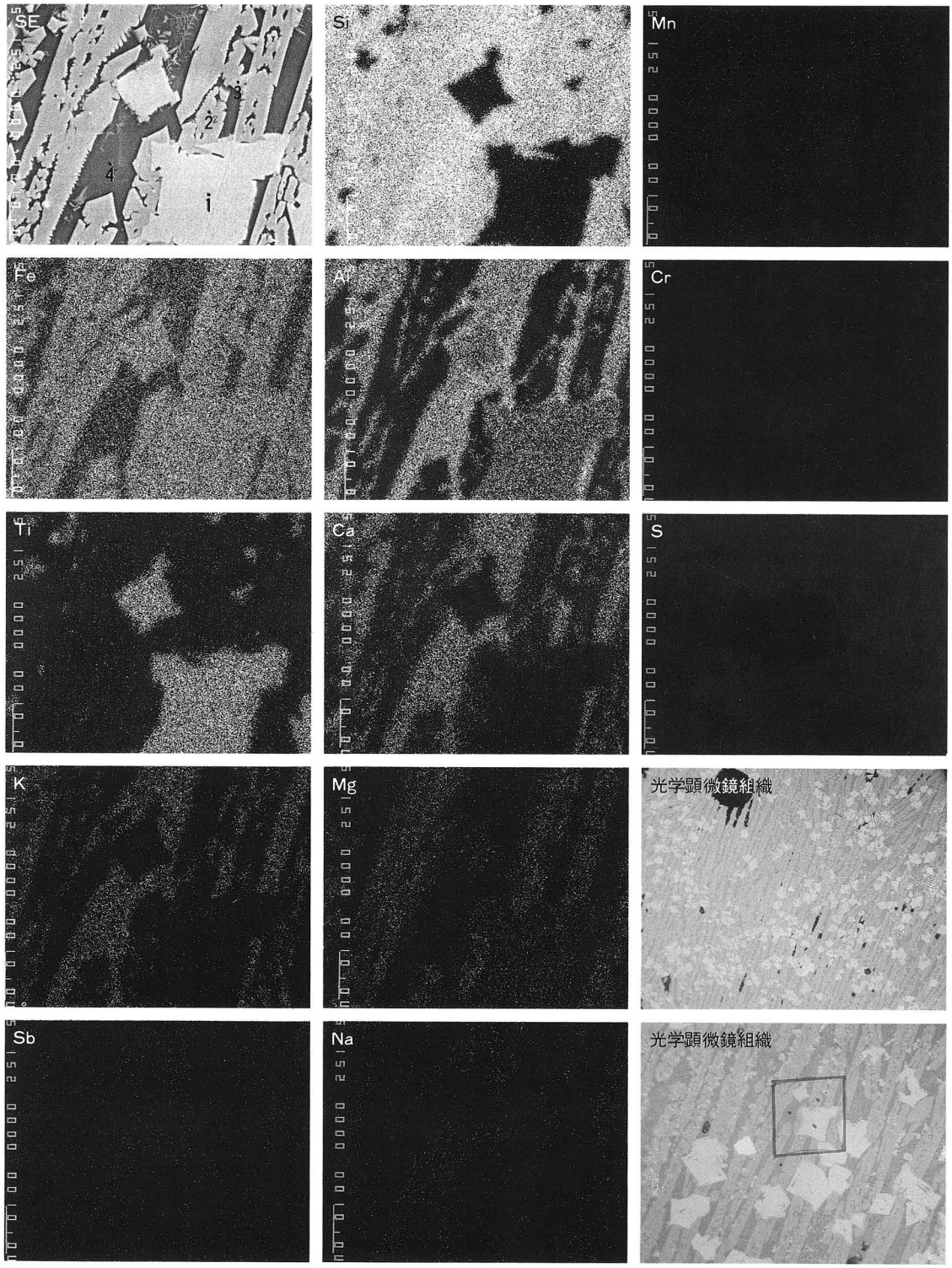


Photo. 15　今佐屋山遺跡Ⅰ区製鉄遺構出土製錬滓(Q-892A)の特性X線像　×1,500(縮小0.5)

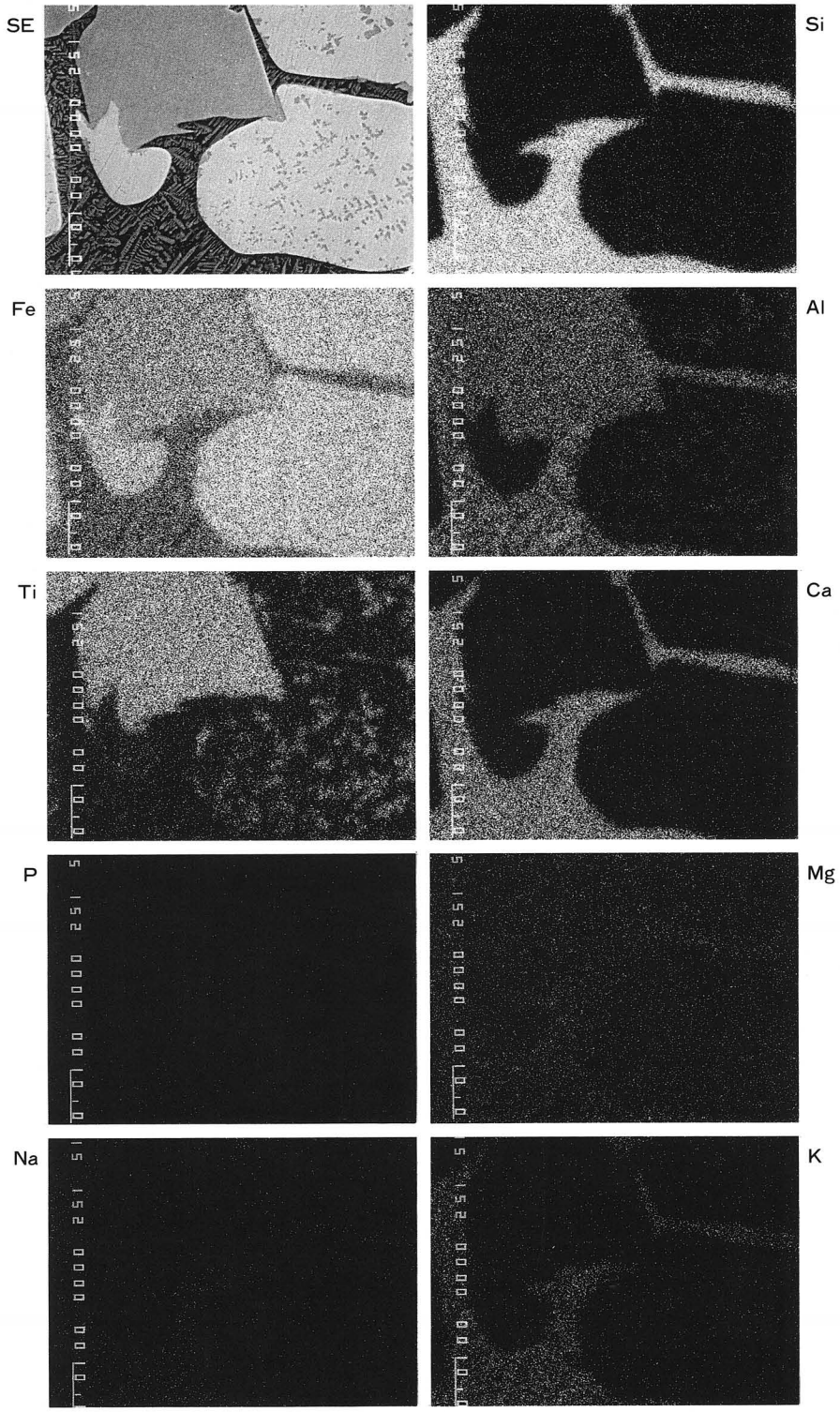


Photo. 16　今佐屋山遺跡Ⅰ区1号住居跡出土製錬滓(IMI-6-1)の特性X線像　×1,500(縮小0.55)

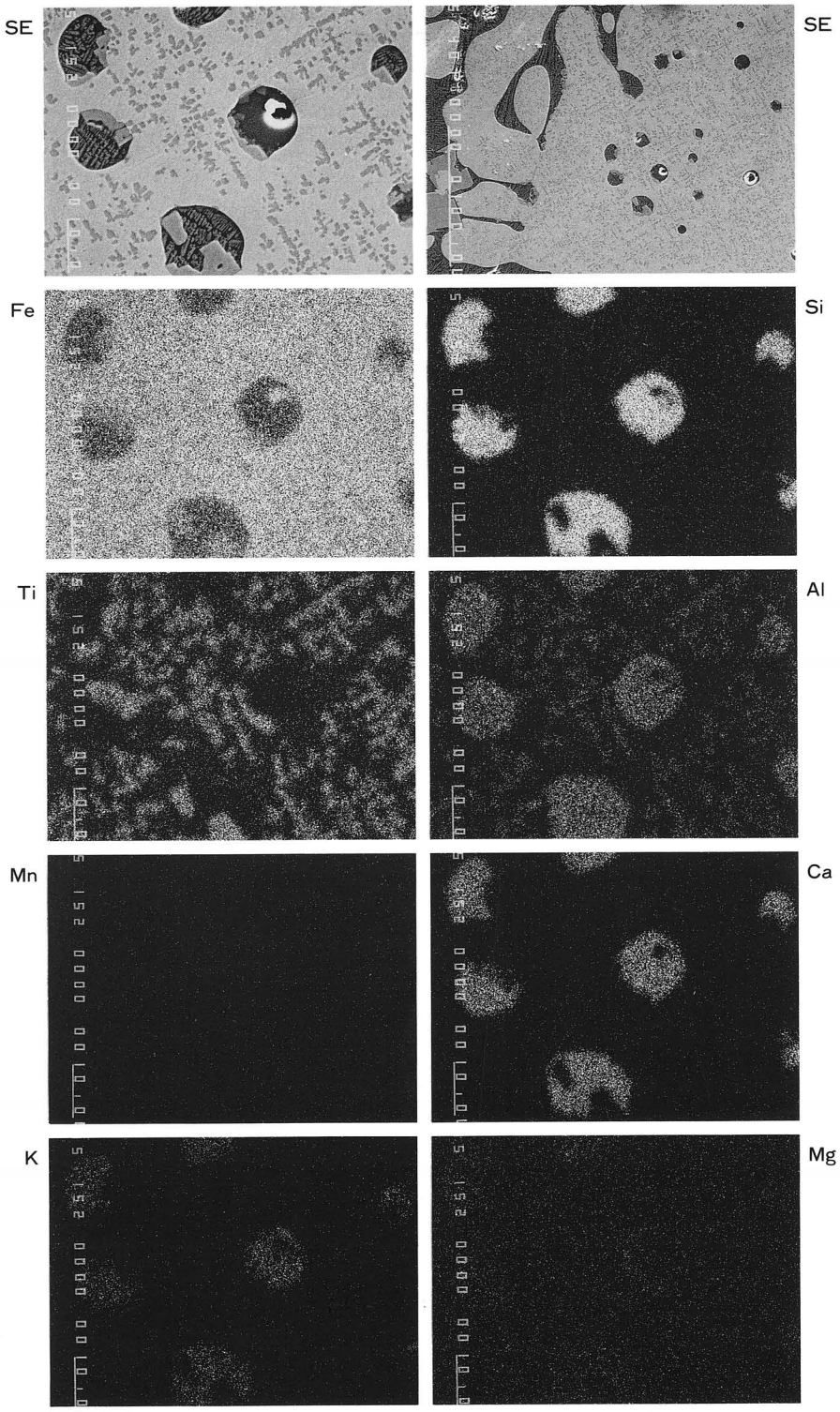


Photo. 17　今佐屋山遺跡Ⅰ区1号住居跡出土製錬滓(IMI-6-2)半還元砂鉄部の特性X線像　×1,500(縮小0.55)

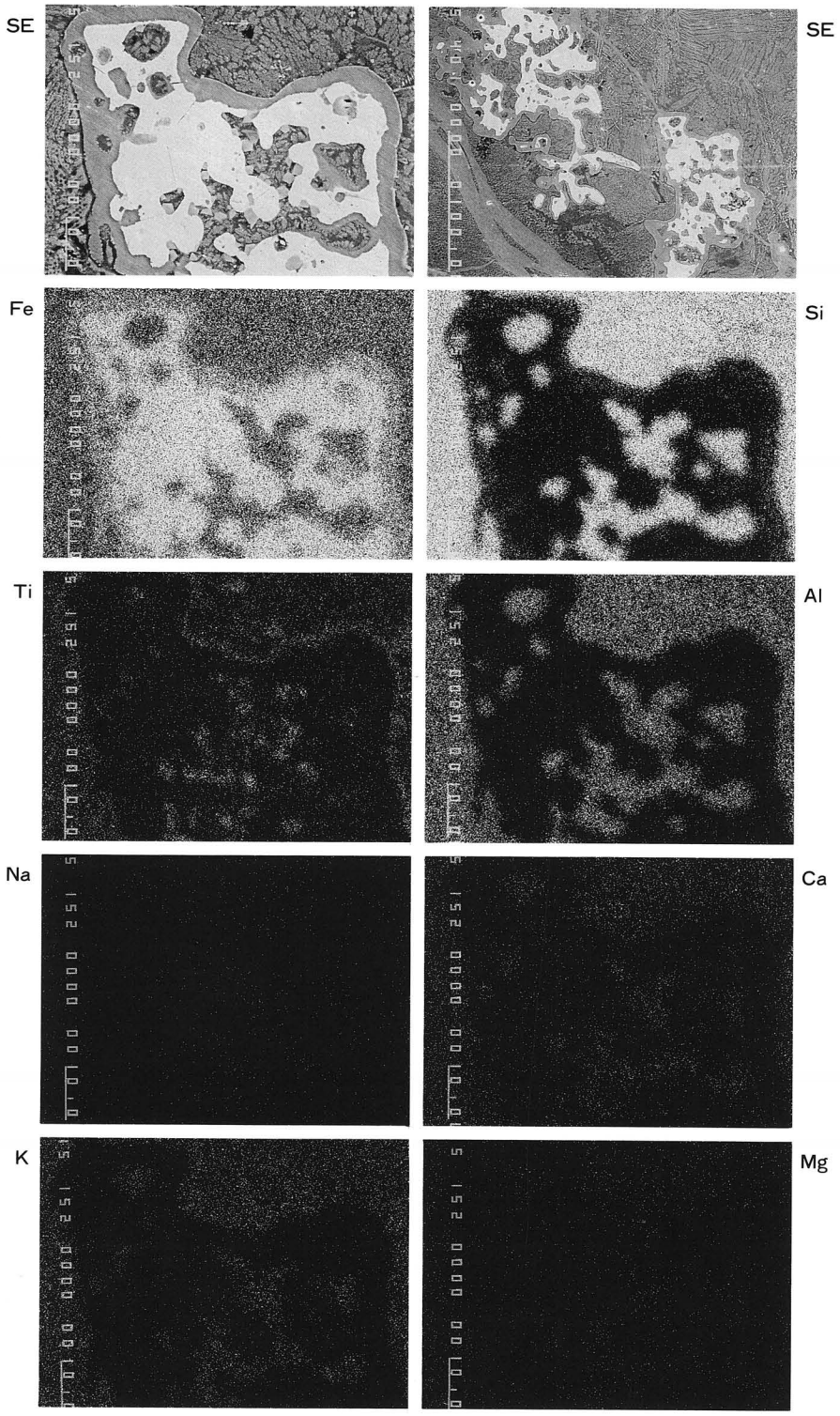


Photo. 18　今佐屋山遺跡Ⅱ区炉壁付着半溶融砂鉄(IMⅡ-17)の特性X線像　×1,500(縮小0.55)

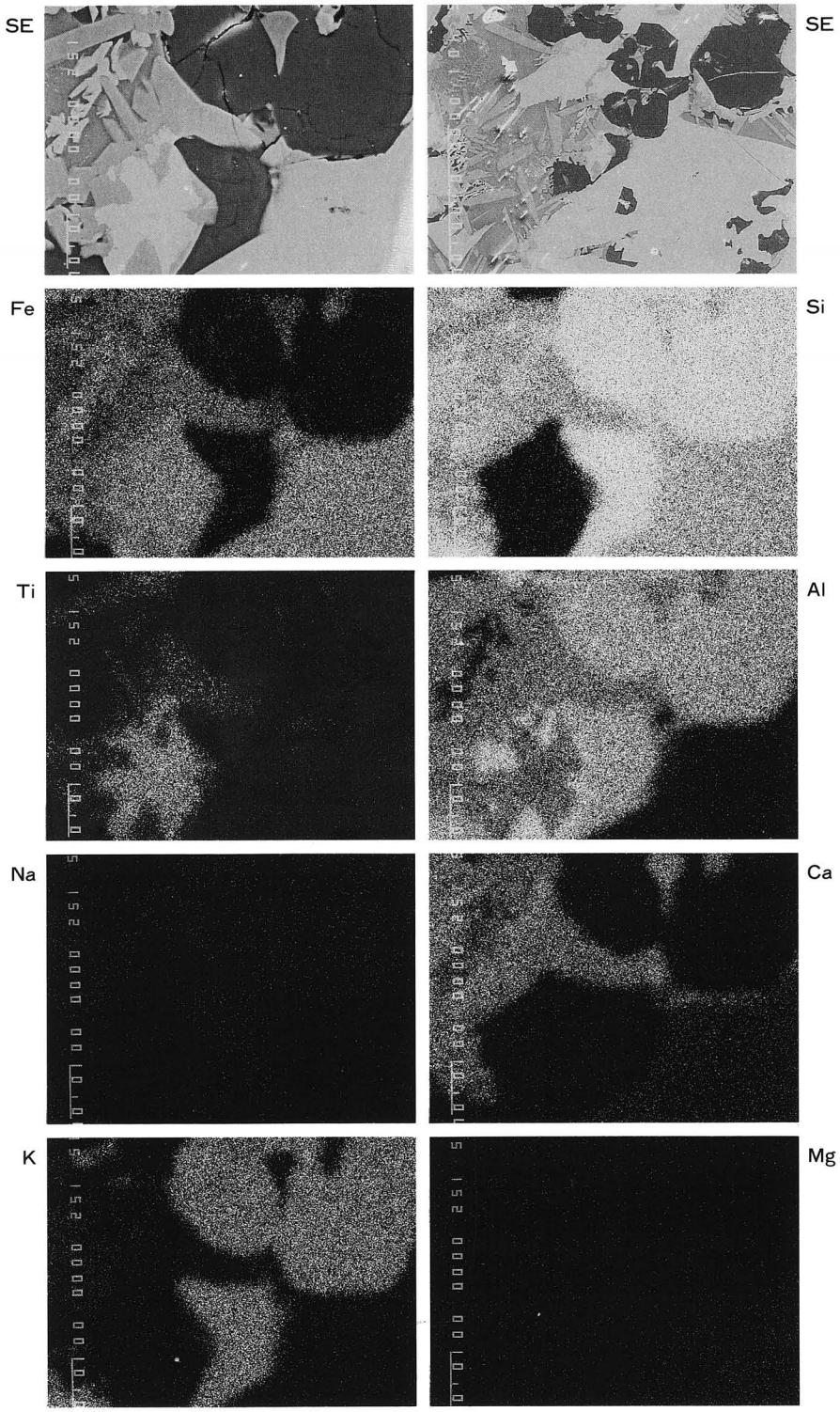


Photo. 19　今佐屋山遺跡Ⅱ区出土炉底滓(IMⅡ-12)の特性X線像　×1,500(縮小0.55)

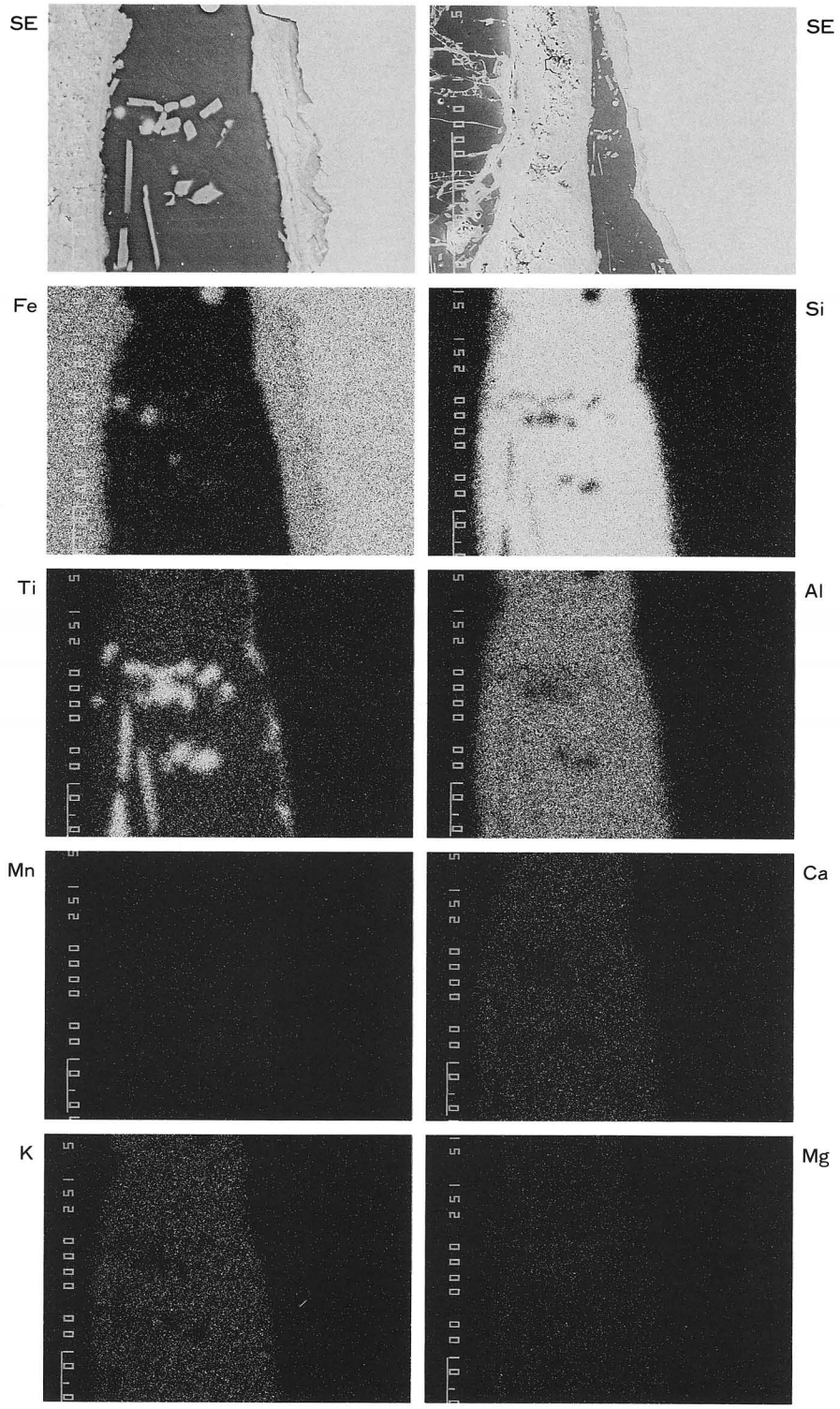


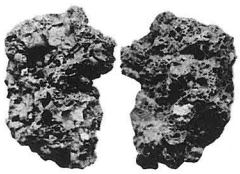
Photo. 20　今佐屋山遺跡Ⅱ区出土鉄塊(IMⅡ-15)の特性X線像　×1,500(縮小0.55)

IMⅡ-22A
瀧ノ上鈩
(表面採取)
砂鉄製錬滓

① ×400
中央白色・金属鉄
Ulvöspinel
＋Fayalite

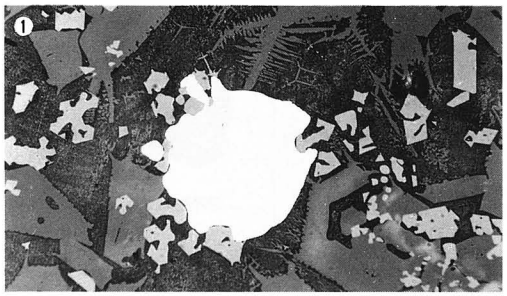
② ×100
Magnetite
＋Fayalite

③ ×400
同左拡大



表側　裏側

外観写真　1 / 2.7

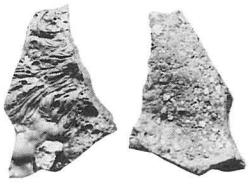


IMⅡ-22B
瀧ノ上鈩
(表面採取)
砂鉄製錬滓

④ ×100
Magnetite
＋Fayalite

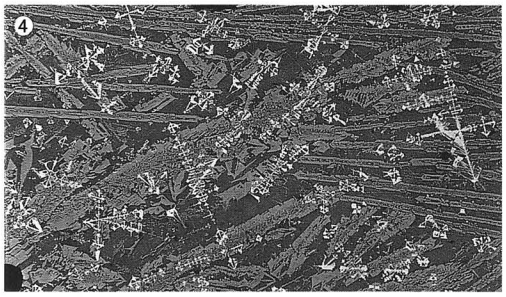
⑤ ×100
Magnetite
＋Fayalite

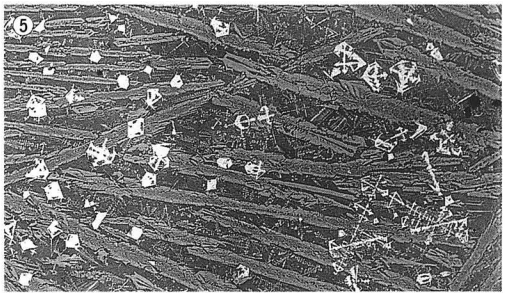
⑥
同左拡大

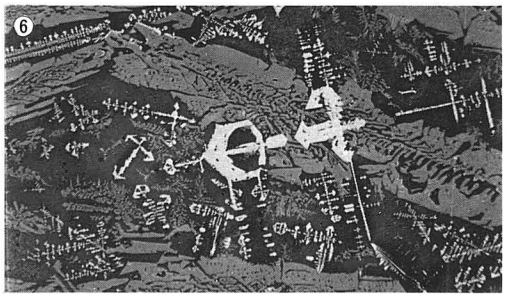


表側　裏側

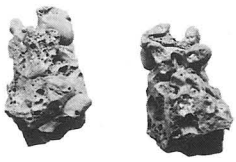
外観写真　1 /2.7







IMⅡ-22C
瀧ノ上鈩
(表面採取)
砂鉄製錬滓
中央白色・金属鉄
(Magnetite＋Fayalite)
×400



表側　裏側

外観写真　1 /2.7

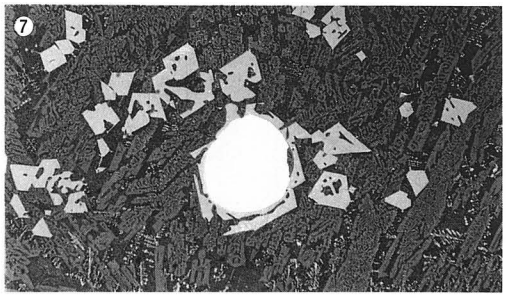


Photo. 21　鉄滓の顕微鏡組織(縮小0.8)

IMⅡ-22D
瀧ノ上鈩

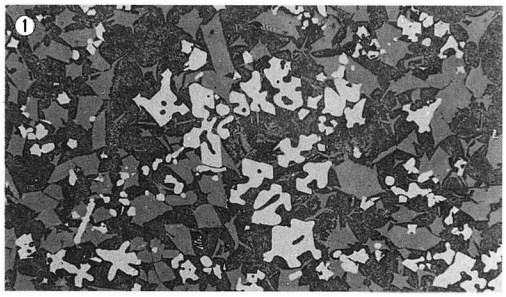
(表面採取)

砂鉄製錬滓
(Magnetite＋Fayalite)

×100

表側　裏側

外観写真　1/2.7

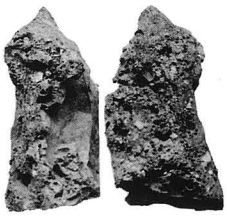


IMⅡ-23
長尾原E遺跡
(表面採取)
砂鉄製錬滓

② ×200
硬度圧痕
Ulvöspinel
649Hv荷重100g

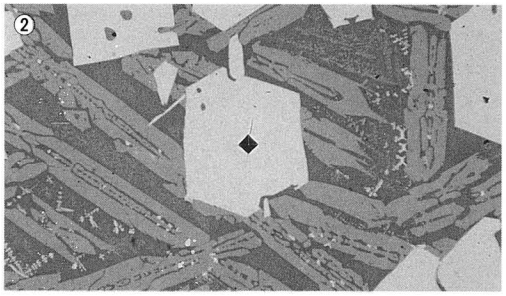
③ ×100
Ulvöspinel
＋Fayalite

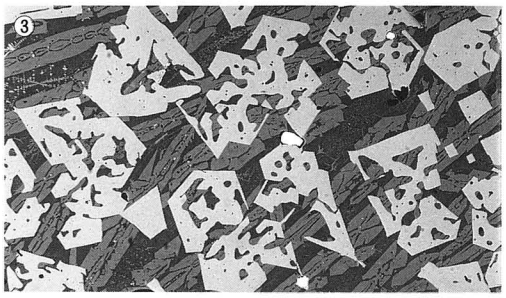
④ ×100
同左、但し
中央部
Goetihte

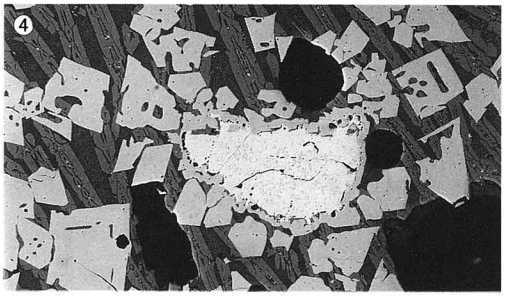


表側　裏側

外観写真　1/2.7







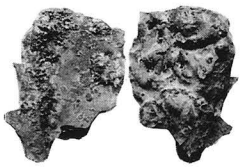
IMⅡ-24A
大林銀山

(山の内精錬所跡)

銀精錬滓？

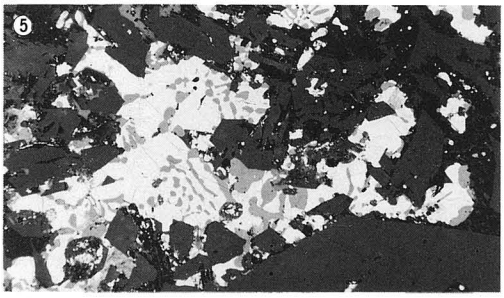
中央不定形白色部
(鉄-銅-硫昔化合物)

×400



表側　裏側

外観写真　1/2.7



IMⅡ-24B
大林銀山

(山の内精錬所跡)

銀精錬滓？

×400

表側　裏側

外観写真　1/2.7

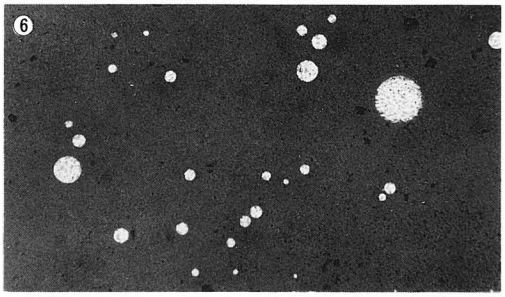
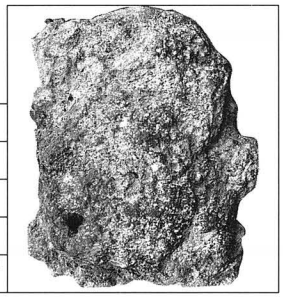
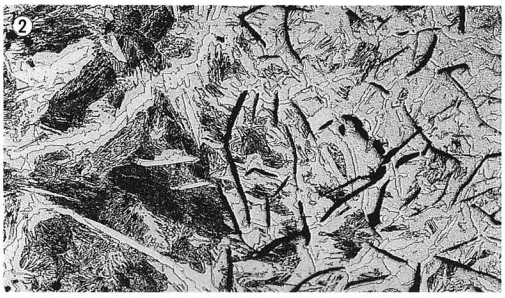


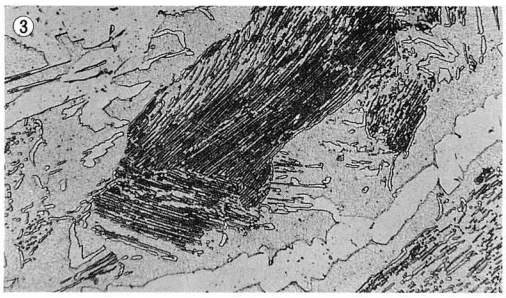
Photo. 22　鉄滓・銀精錬滓の顕微鏡組織(縮小0.8)

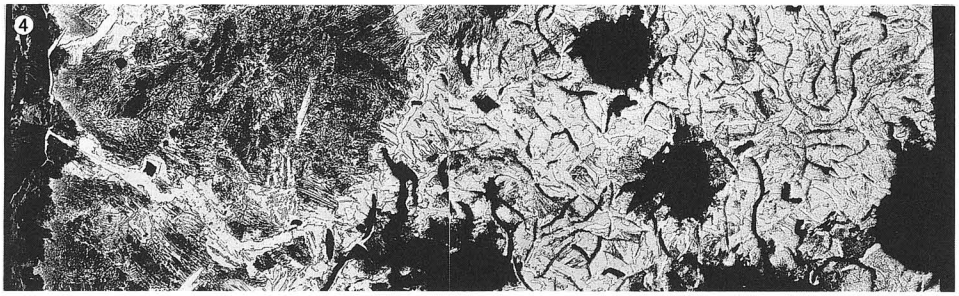
IMⅡ-25
大原大鍛冶屋
(保管品)
大鉄塊

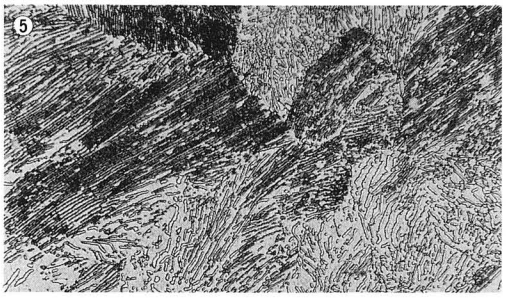
1/4.8	① ×100 ねずみ鋳鉄
② ×100 ピラクルetch 網状セメンタイト	③ ×400 パーライト
④ 左側 網状セメンタイト	右側 ×100 ねずみ鋳鉄
⑤ ×400 パーライト	⑥ ×400 片状黒鉛
⑦ ×200 硬度圧痕 205Hv荷重500g	⑧ ×200 硬度圧痕 117Hv荷重500g

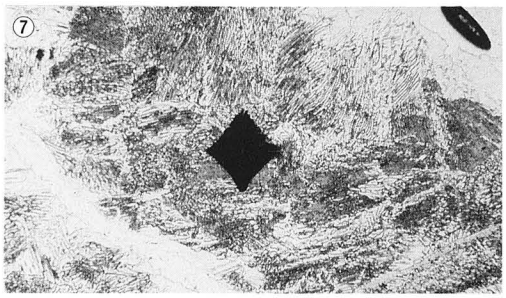












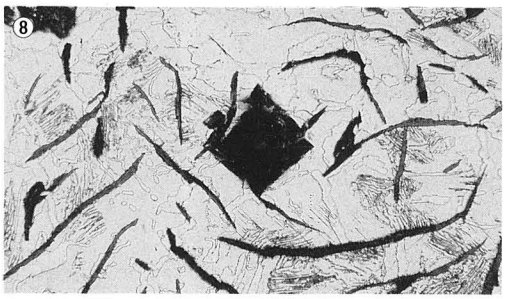


Photo. 23　大鉄塊の顕微鏡組織(縮小0.8)

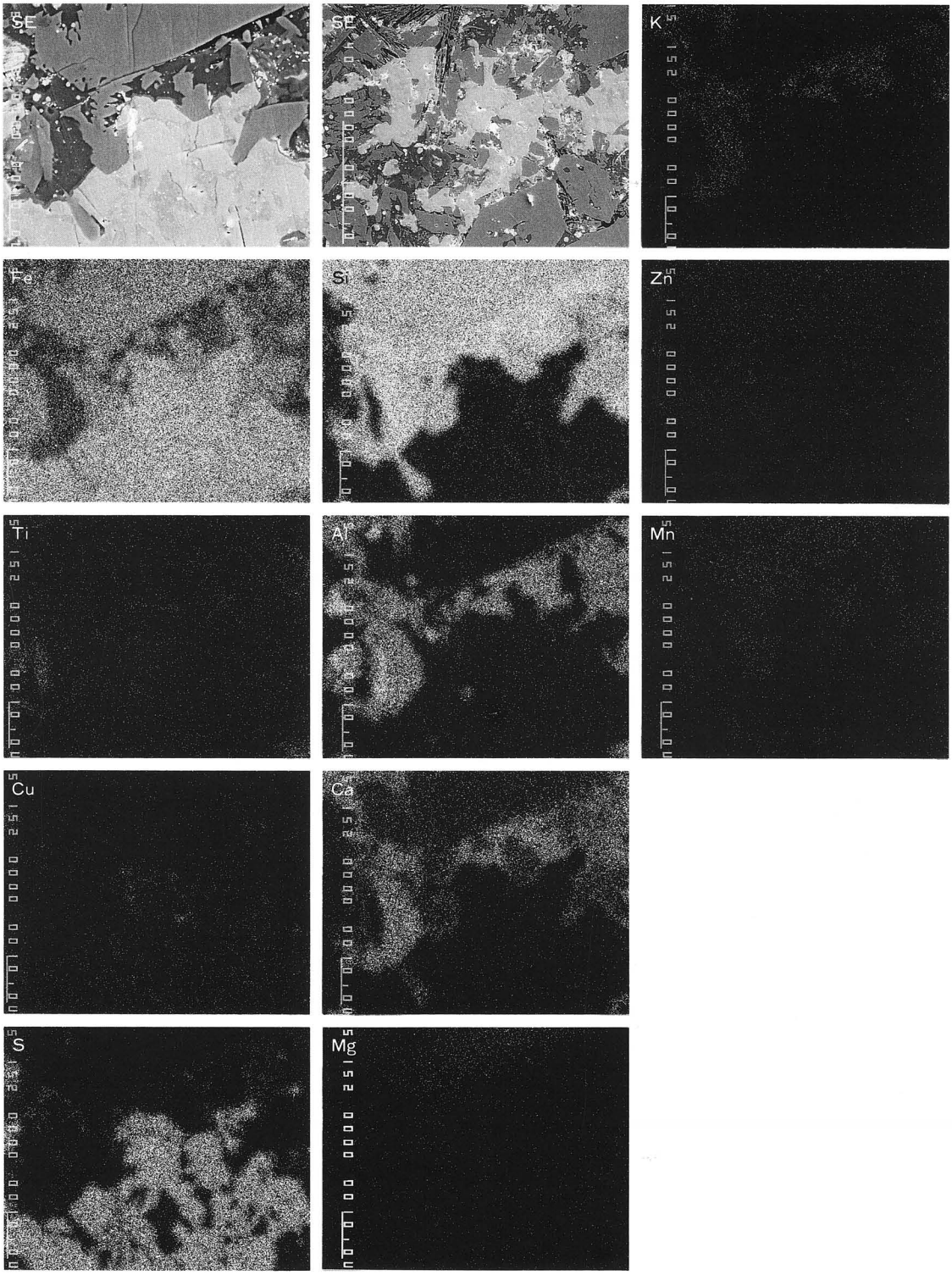


Photo. 24　大林銀山採取銀精錬滓(IMⅡ-24A)の特性X線像　×1,500(縮小0.5)

付論 2

今佐屋山遺跡の製鉄遺構と住居跡で検出された焼土の考古地磁気測定

島根大学理学部　伊藤晴明
時枝克安

1．考古地磁気年代推定法

自然科学的手法を使って遺跡や遺物の年代を測定する方法として，^{14}C 年代測定法[1]が最もよく知られている。その外，フィッショントラック法[2]，熱ルミネッセンス法[3]，電子スピン共鳴（ESR）法[4]，考古地磁気法[5]等がそれぞれの特長を活かして広く利用されている。

考古地磁気法は，遺跡に残された窯や炉跡の焼土を測定試料とし，操業時に獲得された熱残留磁気方向を測定して，その方向から焼成年代を推定する方法である。窯や炉跡の焼土には，普通数パーセント程度の強磁性鉱物（主として磁鉄鉱，Fe_3O_4）が含まれている。この種強磁性鉱物は，操業時の加熱・冷却により，その時の地磁気の方向に帯磁し，熱残留磁気を獲得する。このようにして獲得された焼土の熱残留磁気は，その方向を現在まで保持し続け，われわれに操業時の地磁気の方向を教えてくれることになる。焼土の持つこの熱残留磁気を普通自然残留磁気（NRMと略記）と呼んでいる。

一方，地磁気は，数十年から数百年のオーダーで，その方向を変化して来ている。この変化が地磁気永年変化である。地磁気永年変化のため，焼成時に獲得された熱残留磁気は，異なる時代では異なる方向を示すことになる。従って，時代のわかった焼土のNRM方向を測定すれば，その時代の地磁気の方向を測定したことになる。このようにして，時代のわかった窯や炉跡のNRM方向を測定することによって，過去の地磁気永年変化曲線を作成することが可能となる。地磁気永年変化曲線が作成されると，それを時間尺度として，未知の窯や炉跡のNRM方向を測定し，焼成年代が推定できることになる。幸いに西南日本では，過去2,000年にわたる，地磁気永年変化曲線が広岡[6]の精力的な研究により作成されている。考古地磁気法の時間尺度は，この西南日本の地磁気永年変化曲線であり，これを用いて操業年代を推定することができる。

2．遺跡の概要

今佐屋山遺跡は島根県のほぼ中央，邑智郡瑞穂町市木（34°49′43″N，132°24′14″E）にある。この遺跡は，小さな谷川を挟んで遺構が分布しているため，便宜上南側をI区，北側をII区と呼称している。I区では，古墳時代後期の竪穴式住居跡が3棟と，これに伴う製鉄遺構1基が検出され，

Ⅱ区では，中世の製鉄遺構１基が確認されている。[7] 遺跡周辺の山塊は，風化した花崗岩の土質で砂鉄も豊富にあり，鉄生産には持って来いの地域である。瑞穂町は，島根県製鉄遺跡分布調査報告書[8]によると，県内屈指の製鉄遺跡分布地帯（182ケ所）であるが，市木周辺では，10ケ所余りの製鉄遺跡が確認されている。

今佐屋山遺跡で検出された製鉄遺構は２基であるが，Ⅰ区の製鉄遺跡は，長さが1.2m，幅が30㎝程の炉床部と，それに続く長軸径が1.5m，短軸径が約1.3mの楕円形の土坑である。炉床部の南北両側壁は，加熱のため青灰色から茶褐色に変色し，固く焼きしめられていた。しかし，炉床底面には，焼土は認められたが，固い焼土は確認できなかった。炉床に接する楕円形土坑では，流出滓が検出されているが，土坑底面は極く弱い焼成を受け，黄褐色に変色しているだけであった。

Ⅱ区の製鉄炉床は，長さ4.8m余り，幅1.1m程の規模である。炉床底面には固い焼土は少なく，固く焼きしめられた焼土は，東西の両側壁と，炉床南側に部分的に散在するだけであった。

Ⅰ区で検出された竪穴式住居跡３棟のうち，製鉄遺構の北側約６mのところにある１号住居跡（SI01）は，５m×3.6mの長方形をなし，遺存状態が比較的良好であった。この住居跡からは，北側の長辺中央部で石組のカマド跡が検出され，中央の床面では，直径20㎝程の焼土面が確認されている。この住居跡からは，土師器甕・坏，須恵器蓋坏が出土している。また住居跡床面に近いところで，炉壁片や鉄滓が採集されていることから，住居跡と製鉄遺構は，極めて近い時期のものと考えられている。

3．試料採取

考古地磁気測定のための試料採取は，最初1989年７月26日に実施し，Ⅰ区の製鉄遺構と，１号竪穴式住居跡で検出されたカマド跡および焼土跡の試料を採取した。２回目は約２ケ月後の９月14日に実施し，Ⅱ区で発掘された中世の製鉄遺構から試料を採取した。

Ⅰ区の製鉄炉床は，炉床規模が小さく，その上固い焼土の残りが少ないため，採取場所が残された側壁の狭い範囲に限定されてしまった。試料は，北側壁の焼土面から，プラスチック・ケースの打ちこみにより10個，南側壁の焼土面から，同じくプラスチック・ケースの打ちこみで20個の計30個を採取した。炉床東側の楕円状土坑では，黄褐色に変色した底面焼土から，プラスチック・ケースの打ちこみによる試料として15個採取した。製鉄遺構に隣接する１号住居跡で検出されたカマド跡からは，プラスチック・ケースを被せる方式の試料として８個，中央にあった焼土面から，同じ方式で８個の計16個をこの住居跡から採取した。

Ⅱ区の製鉄遺構は，炉床の遺存状態が余りよくなく，残されている焼土も脆くなっていたため，焼土を一辺５㎝程の立方体状に削り，石膏をかけ固めて試料とした。炉床南側に残された底面焼土

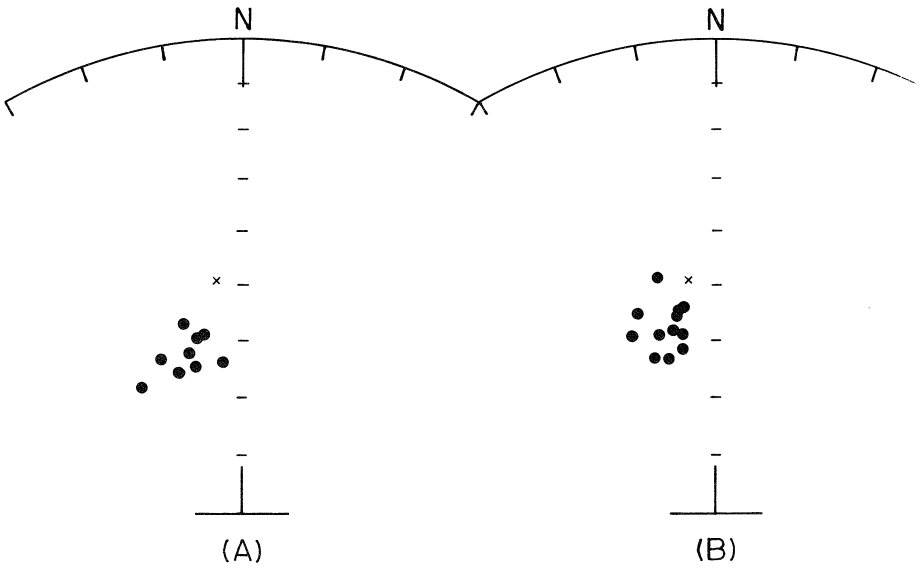
から，石膏試料として24個，径20cm程で深さ15cm余りのピットの焼土から，同じく石膏試料として5個採取した。西側壁に残存する赤茶色に変色した焼土は，水分を含み少し軟くなっていたため，プラスチック・ケースの打ちこみで20個採取した。Ⅱ区の製鉄遺構からは，総計49個の試料を採取したことになる。

4．NRM測定結果

石膏試料のNRMは高感度無定位磁力計で測定し，プラスチック・ケース試料のNRMはスピナー磁力計で測定した。その結果，Ⅰ区の製鉄炉床北側壁焼土と炉床東側の楕円状土坑底面の焼土はNRM方向のバラツキが大きく，一定の方向が得られなかったため，年代推定のデータとして使えず除外した。Ⅰ区の製鉄炉床南側壁焼土で採取した試料20個のうち，11個のNRM方向は，偏りが大きく除外せざるを得なかった。残り9個のNRM方向は，比較的よいまとまりを示し，この炉床焼成時のNRM方向を保持していると判断された。製鉄遺構に隣接する1号住居跡で採取した試料は，NRM方向のバラツキが比較的小さく，一定の方向を示していたので，年代推定可能なデータとして採用した。Ⅰ区で採取した試料のNRM測定結果は下記の通りである。

（A）　Ⅰ区製鉄炉床南側壁焼土　　N　＝　9

Dm　＝　－ 19.9°

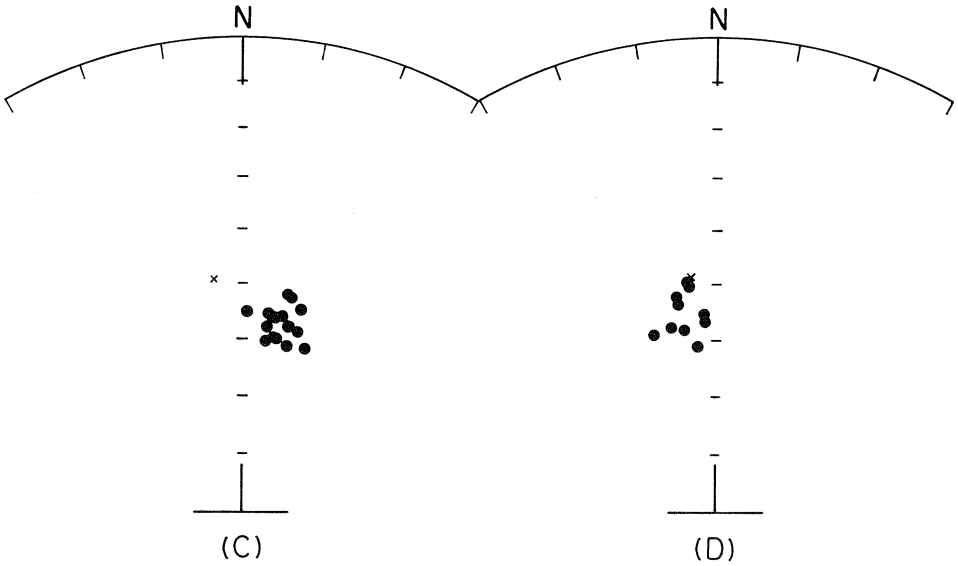


第1図　Ⅰ区製鉄炉床と住居跡のNRM方向
（A）：Ⅰ区製鉄炉床南側壁焼土
（B）：Ⅰ区1号住居跡焼土
×　：現在（1980年）の地磁気の方向

	Im	=	61.1°
	K	=	234.0
	θ_{95}	=	3.4°
（B）　Ⅰ区１号住居跡焼土	N	=	12
	Dm	=	− 15.3°
	Im	=	56.7°
	K	=	240.0
	θ_{95}	=	2.8°

ただし，Nは測定試料数，Dmは平均偏角，Imは平均伏角，Kは信頼度係数，θ_{95}は誤差角である。誤差角が小さい程，方向のバラツキが小さく信頼性が高いことを示しているが，上記の結果では，誤差角が3.4°と2.8°であり，それ程大きな値ではない。従って，年代測定のデータとして採用してよいと考えられる。各試料のNRM方向は図１に示す。

Ⅱ区の製鉄遺構では，炉床南側底面焼土から石膏試料として29個採取している。しかし，ここでも13個の試料のNRM方向が大きく偏向していたので，除外した。残り16個の試料は，ほぼ一様な方向を示し，年代推定ができる試料であった。炉床西側壁で採取したプラスチック・ケースの打ちこみ試料は，半分の10個がほぼ一様な方向を示していたが，残りは方向の偏りが大きく除外した。



第２図　Ⅱ区製鉄炉床のNRM方向
（C）：Ⅱ区製鉄炉床南側底面焼土
（D）：Ⅱ区製鉄炉床西側壁焼土
×　：現在（1980年）の地磁気の方向

Ⅱ区で採取した試料の測定結果は下記の通りである。

（C）	Ⅱ区製鉄炉床南側底面焼土	N	=	16
		Dm	=	11.6°
		Im	=	56.6°
		K	=	433.5
		θ_{95}	=	1.8°
（D）	Ⅱ区製鉄炉床西側壁焼土	N	=	10
		Dm	=	− 9.1°
		Im	=	55.4°
		K	=	328.7
		θ_{95}	=	2.7°

図２はⅡ区で得られた各試料のNRM方向である。

上記測定結果から明らかなように，同じ炉床の２ケ所で採取した試料のNRM方向が異なる方向を示し，一致していない。炉床南側底面焼土の平均偏角は11.6°東に偏り，炉床西側壁焼土の偏角は9.1°西に偏向している。これら焼土が同じ時期に焼成されたものであれば，NRM方向は，採取場所に関係なく，一致していなければならないはずである。ただし，炉床焼土が炉廃絶後に一部傾いたとすれば，NRM方向に食い違いが生じても不思議ではない。また，焼成時の鉄塊の影響で，地磁気の方向が場所により異なっていたと考えることもできる。しかし，現時点では，残存焼土の繋がり具合や，廃絶後の焼土の動きが不明なため，食い違いの原因を明確にすることは不可能である。従って，ここでは両方のデータを併記しておく。

5．推定年代

年代推定に必要な時間尺度は，既述の広岡[9]による西南日本の地磁気永年変化曲線である。図３は，今佐屋山遺跡から求めたそれぞれの平均NRM方向（Dm，Im）を，地磁気永年変化図にプロットしたものである。推定年代は，測定値から近接する曲線に垂線を下ろし，交点の年代を読み取ればよい。測定値が複数の曲線に接近している場合には，複数の年代値が与えられることになる。複数の年代値が与えられた場合は，考古資料や他の年代測定法を参照して年代値を選定するしか方法はない。図３から読み取れる年代は下記の通りである。

（A）	Ⅰ区製鉄炉床	A.D. 650±40
（B）	Ⅱ区１号住居跡	A.D. 620±30
（C）	Ⅱ区製鉄炉床南側底面焼土	A.D.1250±30

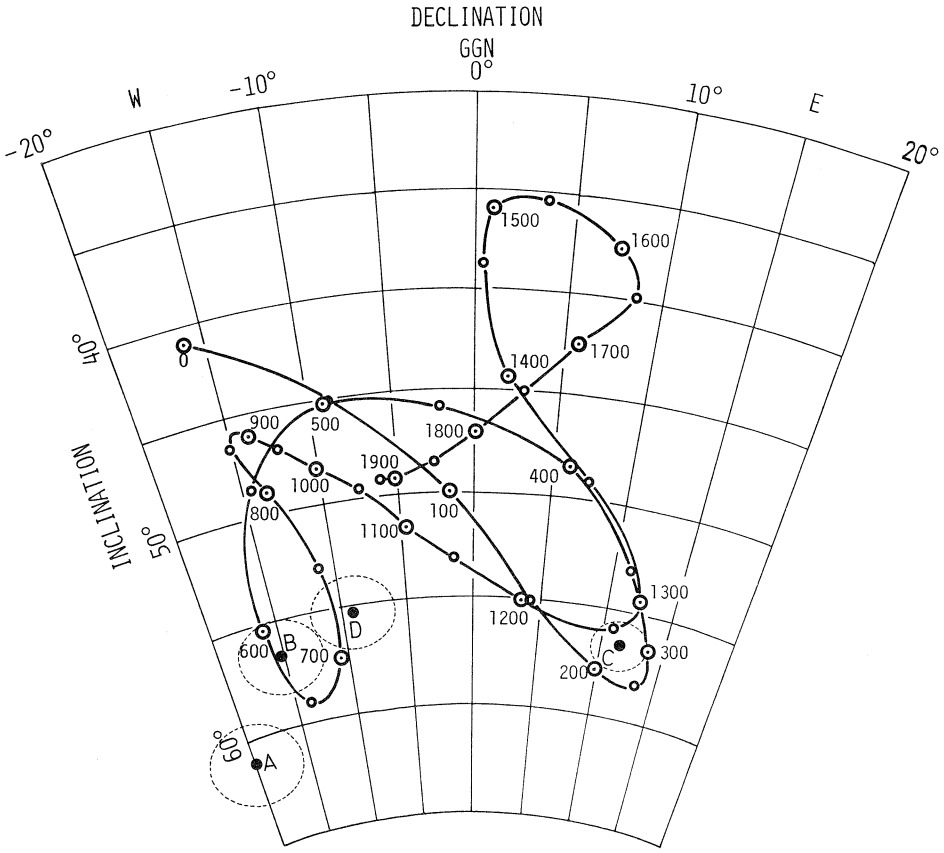
A.D. 300±40

A.D. 200±40

（D）　Ⅱ区製鉄炉床西側壁焼土　　A.D.1120±40

A.D. 720±20

Ⅰ区で検出された製鉄遺構と1号住居跡は，どちらも一つの年代値が与えられ，7世紀前半を示唆している。既述のように1号住居跡は，須恵器蓋坏や土師器坏・甕などの出土遺物から，古墳時代後期に位置づけられている。また，製鉄遺構は，住居跡の底面近くで鉄滓や炉壁片が検出されたことから，住居跡とほぼ同じ古墳時代後期のものと考えられている。他方，製鉄遺構出土の木炭による^{14}C年代値は，1330±75B.P.（A.D.620±75）となっている。[10] 以上のことから，Ⅰ区の製鉄遺構および1号住居跡の考古地磁気推定年代は，須恵器による考古編年とは多少食い違いを示しているが，^{14}C年代値とはほぼ一致した結果を与えていることがわかる。従って，上記の7世紀前半を示唆する値は，妥当な結果と考えてよいであろう。



第3図　西南日本の地磁気永年変化図と今佐屋山遺跡のNRM測定値（●印）

Ⅱ区の製鉄遺構では，同一炉床の２ケ所で試料を採取しているが，得られたNRM方向は両者で一致せず，推定年代も少し異なる結果を与えている。然も，両方とも複数の年代値が与えられているが，南側底面焼土のA.D.300±40とA.D.200±40の年代値は，この炉床に関する限り，除外してよいと考えられる。それ故，この炉床の焼成年代は，南側底面焼土ではA.D.1250±30，西側壁焼土ではA.D.1120±30かA.D.720±20ということになる。しかし，炉床は一つであり，この炉床がある期間をおいて，２回焼成された証拠は見出せない。従って，考古地磁気測定結果からはこれ以上の議論はできないが，この製鉄遺構出土の木炭の^{14}C年代が820±75B.P.（A.D.1130±75）であること，[11] が参考になろう。この^{14}C年代値は，西側壁焼土から得られた推定年代（A.D.1120±40）とほぼ一致している。これが唯一の積極的な拠り所である。これ以外に参考となる資料が見当らないので，ここでは^{14}C年代値に準拠し，Ⅱ区の製鉄遺構の考古地磁気推定は年代A.D.1120±40としておきたい。

以上の考察から，今佐屋山遺跡Ⅰ区の製鉄遺構，および１号竪穴式住居跡の考古地磁気推定年代は，それぞれA.D.650±40とA.D.620±30であり，共に７世紀前半に比定することができる。Ⅱ区の製鉄遺構については幾つかの不確定要素が残されているが，考古地磁気推定年代は，^{14}C年代測定値（820±75B.P.）を拠り所に，炉床の形態や規模を考慮して，12世紀前半（A.D.1120±40）に焼成されたと考えてよいであろう。

最後に，考古地磁気試料採取の機会を与えていただき，現地でも種々お世話になった島根県教育庁文化課の方々，特に報告書作成に際しご教示いただいた角田徳幸氏に心からお礼を申し上げる。

註

（１）　遠藤邦彦　^{14}C年代測定法，考古学ライブラリー１，ニュー・サイエンス社　1978
（２）　鈴木正男　人類史への模索－フィッショントラック年代測定法「考古学のための化学10章」　馬淵久夫・富永健編，東京大学出版会　115－133　1981
（３）　市川米太　土器の年代をはかる－熱ルミネッセンス法「考古学のための化学10章」馬淵久夫・富永健編　東京大学出版会　91－114　1981
（４）　池谷元伺　化石骨の年代を測る－電子スピン共鳴法「続考古学のための化学10章」馬淵久夫・富永健編　東京大学出版会　173－194　1986
（５）　中島正志・夏原信義　考古地磁気年代推定法　考古学ライブラリー９　ニュー・サイエンス社　1981
（６）　広岡公夫　考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向，第四紀研究，15巻，４号，200－203　1977
（７）　角田徳幸　島根県今佐屋山遺跡の古墳時代製鉄遺構「たたら研究」30号，50－58　1989
（８）　島根県教育委員会　島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅱ「石見部製鉄遺跡」1984
（９）註（６）参照。
（10）本報告書の^{14}C年代値による。
（11）本報告書の^{14}C年代値による。

付論3

今佐屋山遺跡製鉄遺構（Ⅱ区）熱ルミネッセンス年代測定報告

奈良教育大学応用物理学教室　長　友　恒　人

1．はじめに

遺跡の出土遺物を熱ルミネッセンス（TL）年代測定する場合，遺構が残されていることが望ましい。今回のタタラ炉の場合にはTL年代測定をすることが決まったときには遺構は残されていなかった。遺構が残されていない場合に最も問題となるのはγ線の年間線量の現場での測定ができないことである。化学分析によってγ線量率を推定する方法もあるが，遺構がない状態ではこの方法も不確実さが伴う。この点については，後述するように試料処理をする前に壁土の塊を使用して，β線とγ線の年間線量を同時に測定をすることによって解決した。

蓄積線量測定に使用可能な試料としては鉄滓に付着した炉壁の土が保管されていた。この壁土はタタラ炉の操業時に高温度になったと考えられるので，これを測定試料とする事にした。

2．試料処理

試料は鉄滓に付着した炉壁の焼けた塊状の粘土である。後述するように，この塊を年間線量測定のために土中に埋め，36日後に掘り出した後，試料処理を行った。

鉄滓は，発掘後長期間，野外または室内に保管されていたので，光ブリーチング（光線に曝されることによるTL強度の減衰）をしている可能性があった。この影響を除去するために表面を約1㎜以上ハンドグラインダーで削り取った。通常は，試料を万力で粉砕し乾燥させた後に標準篩で74μm以下，74－145μm，145μmの粒度にふるい分けるが，今回は回収可能な石英試料の量が不十分であると予想されたので，49μm－250μmの粒度の鉱物粒子を対象として次の手順により試料処理を行った。

①年間線量測定のための埋め込み終了後，鉄滓が付着した壁土をバケツの水中に5日間浸した。②壁土をタワシを使って鉄滓から分離した。塊となって割れにくい部分は，先端がとがった銅の棒で砕いて，万力でつぶした。③＃60－300の標準篩を通した。④フッ酸処理（20％，15分）をして石英以外の鉱物と磁性成分を溶かした。⑤完全に溶解されなかった磁性成分をマグネティックセパレーターによって除去した。

この後の試料処理のプロセスは通常の方法によったが，最終的に得られた石英の量が十分であったので，測定試料としては74－145μmの粒度の石英を使用することができた。

3．蓄積線量と年間線量の評価

蓄積線量評価

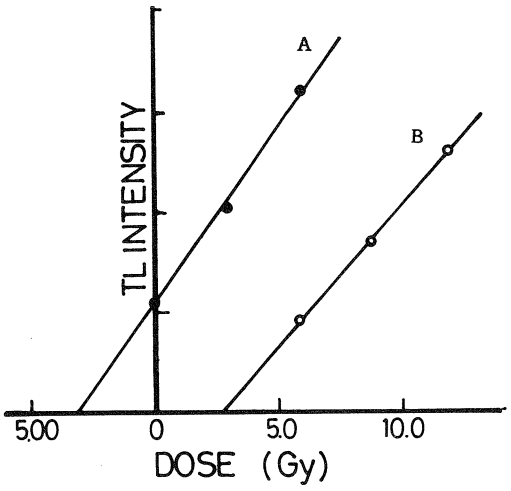
蓄積線量は付加線量法により測定した。付加線量を与えない試料の低温の発光は減衰している事が明らかであり，付加線量を与えた試料の低温の発光は強度が大きすぎる。このことを考慮して，測定では試料を180℃まで昇温させて，冷却した後にグローカーブを描かせた。

プラトーテストの結果，TL強度は350℃から400℃の範囲で時間的な減衰がないことが分かった。第１図(A)のように付加線量に対してTL量を取った結果，６Gyまでの付加線量に対してTL量の比例性がある事が確認された。この線量範囲の直線回帰より等価線量は3.10Gyであると評価された。放射線量が少ない領域ではTL量の成長が緩やかで線量に対して比例性がない場合があるので，スプラリニア補正テスト（線量に対するTL量の成長を調べるテスト）を行った。第１図(B)に示すようにスプラリニテイが認められ，補正値は2.92Gyと評価された。

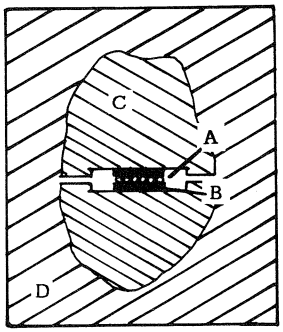
従って蓄積線量（等価線量とスプラリニアリテイ補正線量の和）は3.10＋2.92＝6.02Gyであると評価された。

年間線量評価

蓄積線量測定は測定に用いた鉱物粒子がタタラ炉の操業停止後に，周囲の土から吸収したβ線量，γ線量と宇宙線量の総量である。これらの放射線の年間線量をβ線量とγ線量＋宇宙線量に分けて別々に測定するのが通常行っている方法である。今回の場合，遺構が残されていなかったのでγ線量率を現地測定できなかった。そこで，β線量，γ線量，宇宙線量の総和を同時に測定することとし，以下のような測定を行った。



第１図　蓄積線量の決定
Ａ：１次発光
Ｂ：スプラリニア補正



第２図　年間線量の測定
Ａ：線量計素子紛末
Ｂ：プレスした壁土
Ｃ：壁土
Ｄ：土

壁土の一部を粉砕してコイン状にプレスした２枚の板の間にTL線量計素子の粉末をはさんだセットを準備して，炉壁の粘土の塊をほぼ２分したものの間に挟んでテープで固定した。これをポリエチレンの袋に二重にしていれたものを地面に埋め込んだポリエチレン製のバケツ（20ℓ）の中央に位置するように置き，周りに土をいれて36日間放置した（第２図参照)。

36日後に，掘り出した線量計のセットから，TL線量計粉末をとりだし，Co－60線源によりγ線を標準照射したものとの強度比から年間線量を算定した。結果は5.50mGy/yであった。

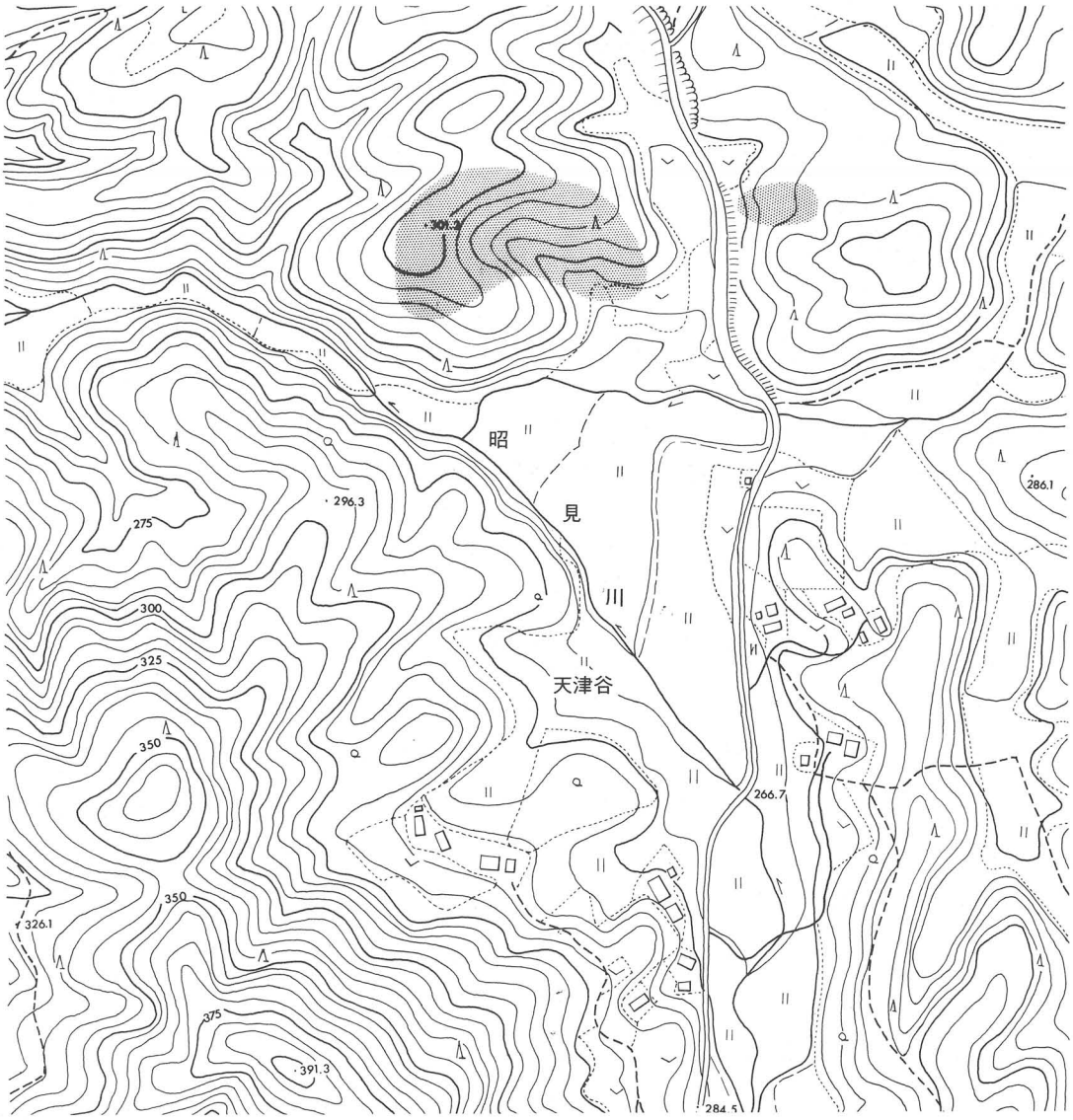
４．結　　果

TL年代は蓄積線量を年間線量で割ることによって求められる。蓄積線量および年間線量の測定値からTL年代は1095年前（A.D.896年）と評価された。この年代値は年間線量の測定法が従来と異なり，誤差の評価法が確立していないので，誤差の評価はしなかった。

第Ⅱ章　小　才　遺　跡

第1節　調査の概要

小才遺跡は，島根県那賀郡旭町大字和田字小才（1859－9外）に所在する（第１図，図版１）。旭町は，島根県の中央部やや西寄りの浜田市から南西約25kmに位置し，南側は広島県境に接している。



第１図　小才遺跡の位置（1：5000）

第２図　小才遺跡調査区配置図

旭町和田地区周辺は，本郷川，重富川，昭見川といった八戸川（江川の支流）の小支流ごとにややまとまった平地がみられ，遺跡の多くはその周辺に分布している。

小才遺跡は，天津谷と呼ばれる小さな谷（南北約700m，東西200～300m）の北側丘陵に位置する。丘陵上からは，眼下に蛇行して流れる昭見川と天津谷の水田が見え，さらに南方には土居谷とその両側にそびえる尼御前城跡（標高469m）・大石谷城跡（標高392m）の秀麗な山並みを望むことができる。天津谷の水田面の標高は約265mあり，遺跡は水田との比高５～40mの丘陵斜面に位置している。

この遺跡は，昭和63年に実施した分布調査によって，横穴式石室を有する２基の古墳を確認したことで明らかになったものである。そこで，第１次調査として周辺の尾根や斜面に計23箇所（245㎡）のトレンチを設定して，その他の遺構の有無を確認することとなった。その結果，７箇所のトレンチにおいて，古墳・遺物散布等が明らかになった。

平成元年度は，第２次調査として工事用進入路に相当する部分の調査を実施した。調査区は遺跡の南端に位置する。丘陵斜面（Ａ地点）と水田（Ｂ地点）の２箇所に分かれて合計120㎡の発掘調

査を実施した。A地点において2基の古墳（5号墳・6号墳）を調査した。調査期間は平成元（1989）年7月31日から同年11月7日までである。

平成2年度は，第3次調査として全面的な発掘調査を実施した。調査対象地は，地形の変化等により東側から便宜上Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区に分けて調査を実施した（第2図）。Ⅰ区は旭町道71号線より東側の丘陵斜面にあたる。Ⅱ区は遺跡中央部の丘陵で，南向きの斜面にあたる。Ⅲ区はⅡ区の西側にある小谷を隔てた丘陵である。現地調査期間は，平成2（1990）年4月6日から同年7月24日までで，3655㎡の発掘調査を実施した。（松本岩雄）

第2節　小才Ⅰ区の調査

Ⅰ区は西向きに開口する小さな谷である。第1次調査により，段状の落ち込みと須恵器・土師器が確認されたことから，住居跡等の遺構が予想されたところである。第1次調査結果をもとに，標高280～290mの丘陵南向き斜面を中心に発掘を実施した。その結果，斜面をL字形に削って造成した加工段1と土坑3，ピット3，溝状遺構1のほか炭の集積3箇所が検出された（第4図）。

1．層　序（第3図，図版4－2）

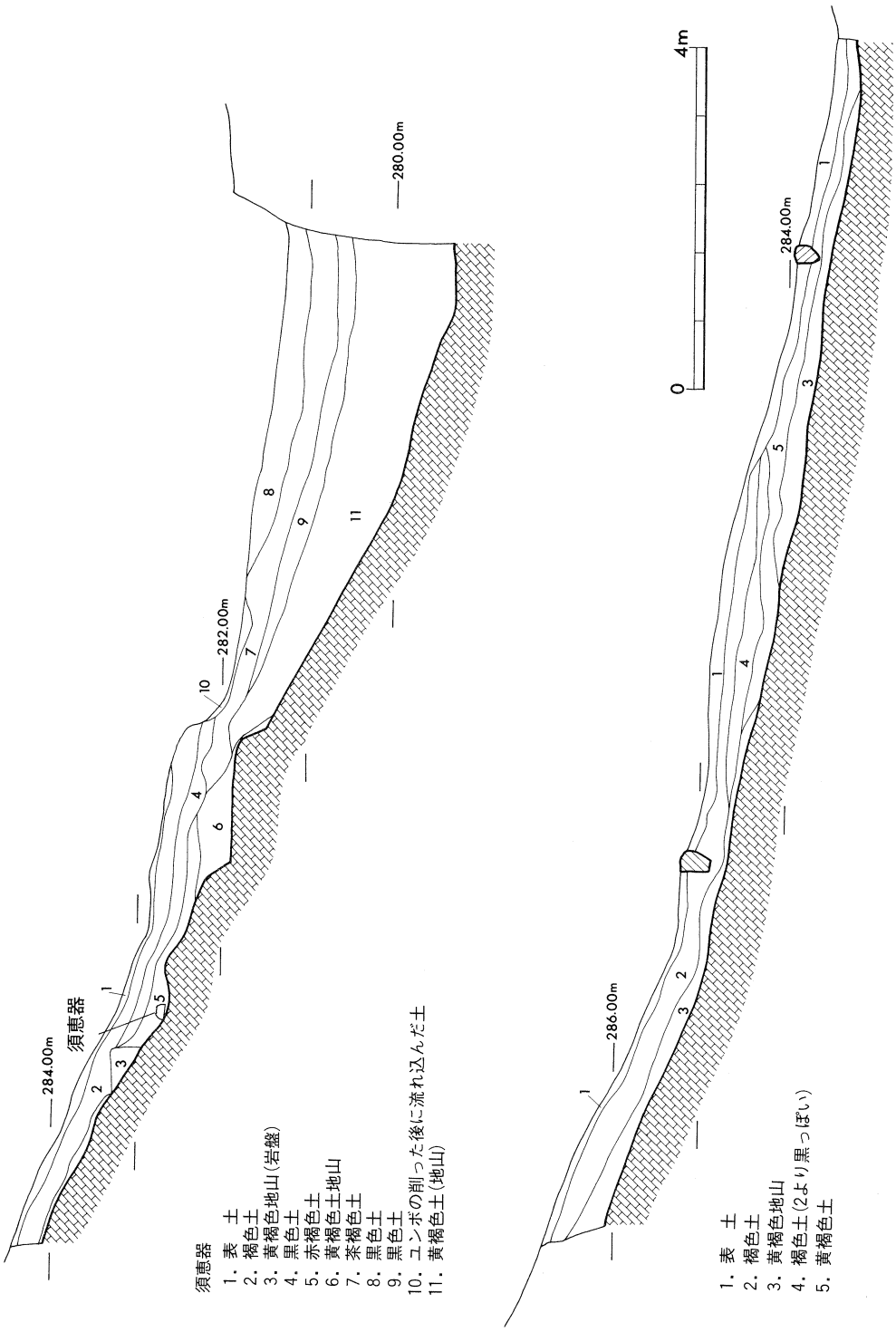
南北方向の土層は，斜面から谷底に流れて堆積したとみられる状況を示している。場所によって若干異なるが，基本的には上から表土（1層），褐色土（2層），黒色土（4・8層），褐色土（7層），黒色土（9層）となっている。8層の上面は後世の掘削を受けていることから8層と4層は基本的に同じ層であろう。須恵器，土師器は主としてこの4・8層と9層に含まれていた。4・8層と9層の間には褐色土（7層）があるが，遺物では時期的な差をとらえることはできなかった。5層では地山直上付近で須恵器が出土している。6層と11層は黄褐色を呈した均一な層であり，地山と判断される。

東西方向の土層は，全体に薄く，褐色土・黄褐色土などがみられた。3層は黄褐色の均一な層であり，地山と考えられる。

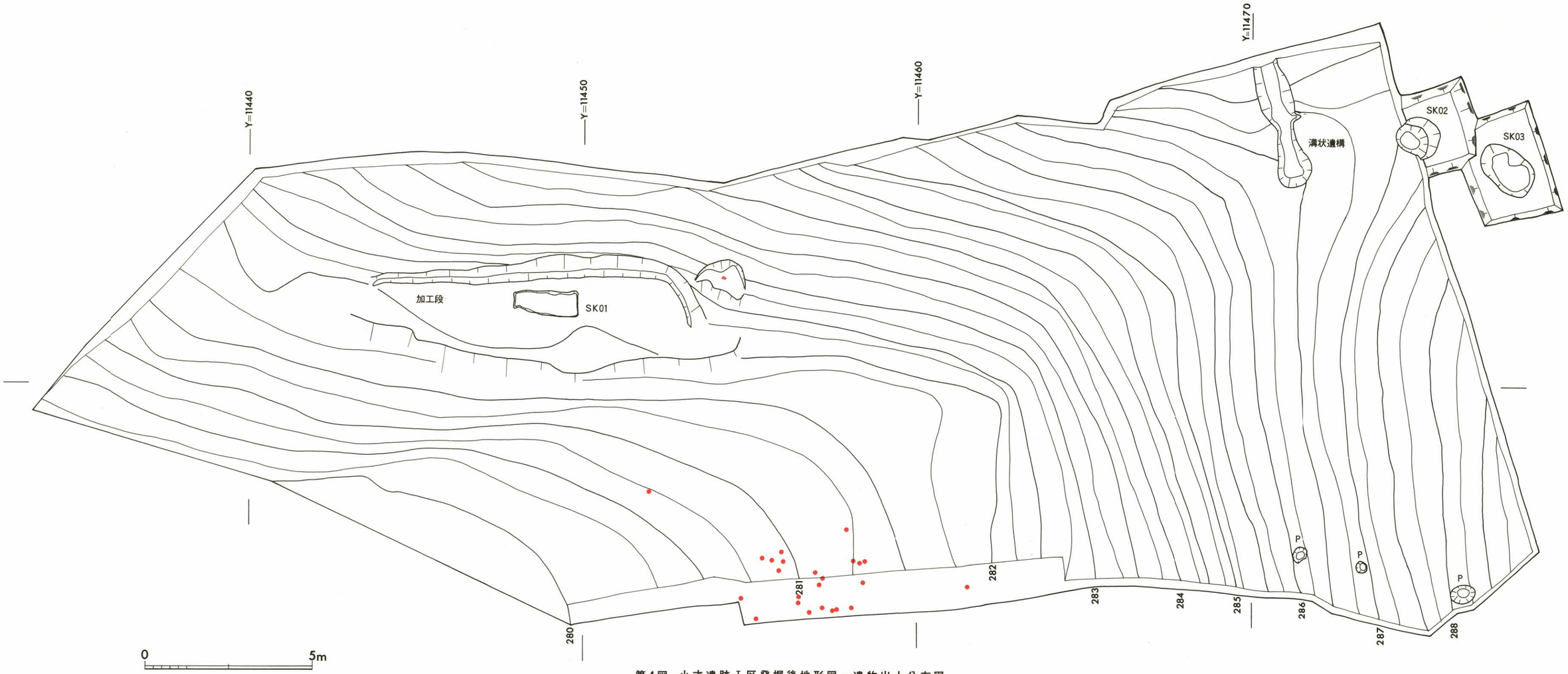
2．遺　構

(1)　加工段（第5図，図版4－3）

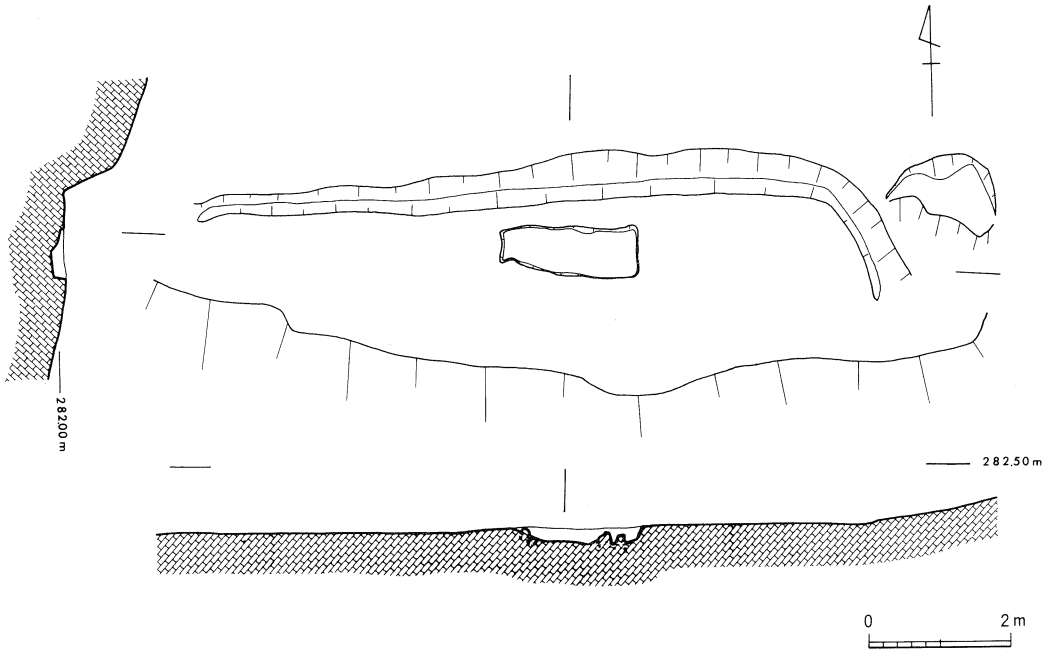
加工段は，南向き斜面の北側と東側をL字形に削って造成したものである。長さは約10mあり，幅は最大残存部で約3mある。北側では約67度の急角度で掘り込まれており，壁面の残存高は70cmあまりある。平坦部（床面）はほぼ水平で，壁際には幅20cm，深さ10cmの溝がめぐらされている。



第3図　小才遺跡Ⅰ区土層断面図



第4図　小才遺跡Ⅰ区発掘後地形図・遺物出土分布図



第５図　小才遺跡Ⅰ区加工段・SK01実測図

平坦面の中央部北壁寄りで長方形の土坑（SK01）が検出されたが，加工段に伴うものかどうか判断できなかった。土坑の周囲には焼土がみられたが，ピット等は検出されなかった。この加工段からは，須恵器坏身が出土しており，平安時代頃に造成されたものと推測される。

なお，この加工段の北東コーナー付近で，1.2×0.8mに加工された平坦面が検出されたが，加工段との関係については不明である。

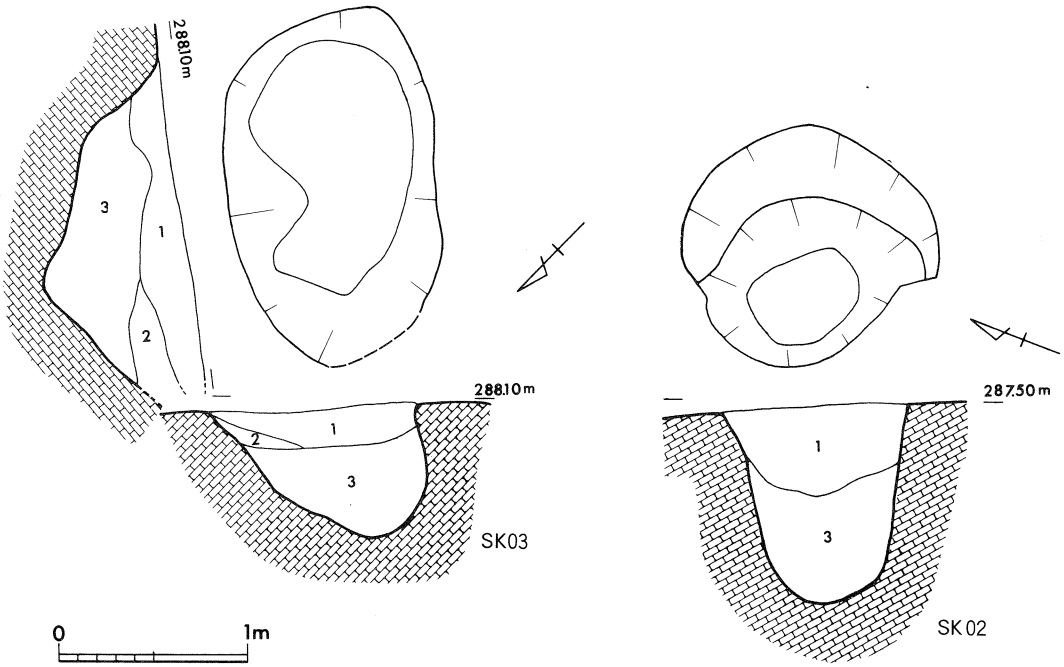
(2) 土　坑

土坑は，加工段平坦面で１個，調査区西端で２個並んで確認された。

SK01　不整な長方形を呈する土坑である。長さは1.9mあり，幅は75～45cmで東側が広くなっている。深さは10～20cmで底面は地山の礫などが露出して凸凹になっており，平坦に整えられたものではない。遺物は出土しなかった（第５図，図版５－１）。

SK02　不整な楕円形を呈するもので，長径1.4m，短径1.3m，深さ１mを測る。断面はU字形を呈し，炭化物を含む黒褐色土層と淡黒褐色土層がみられた。遺物は出土しなかった（第６図，図版６－１）。

SK03　SK02と1.3m隔てたところに位置する。楕円形の土坑で，長径1.9m，短径1.15m，深さ0.7mを測る。断面はU字形を呈し，平坦ではない。坑内には黒褐色土，暗黄褐色土，淡黒褐色土がみられた。遺物は出土しなかった（第６図）。



第6図　小才遺跡Ⅰ区SK02・SK03実測図

(3) ピット

調査区西側の斜面に3つ並んで検出されたが，いずれも不整形で，径0.4～0.8m，深さ0.1～0.3mのものであり，性格は不明である。

(4) 溝状遺構

SK02の西方約3mの地点で検出された。南東から北西方向に走る溝であるが，調査区外にまで及んでいるため全容をつかむことができなかった。検出した全長は約4mあり，幅0.5～1m，深さ0.1～0.2mのものである。遺物は出土していない。

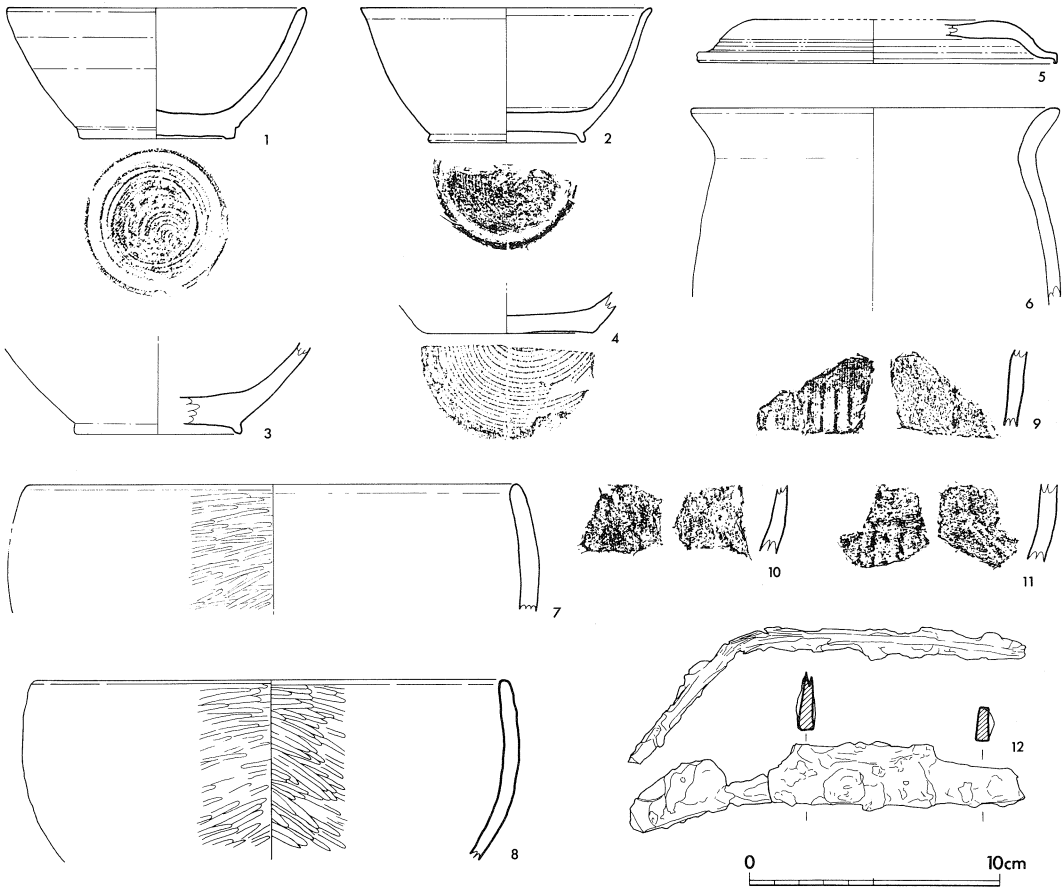
(5) 炭の集積

加工段の南東付近，そこから北東約6mの丘陵斜面，そこから南東約8.5mの谷部で炭の集積が認められた。径0.8～1.5m，厚さ5～15cmの炭の集積であるが，明確な掘り込み等はなく性格については不明である。

3．遺　物

須恵器，土師器，製塩土器，鉄製品などが出土している(第7図，図版5－2・3，図版6－2・3)。

須恵器　高台付きの坏（第7図1・2），高台の付かない坏（4），壺（3），蓋（5）などがある。1・2はいずれも底部糸切りのあとわずかばかりの高台を付したものである。1はやや焼成不良で，



第７図　小才遺跡Ⅰ区出土遺物実測図

土師質に焼きあがっているが，２は焼成が良好で明青灰色を呈している。３は底部がナデ仕上げとなっており，糸切りの痕跡はみられない。やや大形であることや底部が厚いことなどから壺と思われる。５は１㎜以下の小砂粒をわずかに含み，焼成は良好で，青灰色を呈する。

土師器　甕（６）と椀あるいは鉢形（７・８）とでも称すべきものがある。６は１～４㎜大の砂粒を多く含み，赤褐色～褐色を呈する。口縁部は内外面ともにヨコナデであるが，胴部は風化が著しく調整不明。７・８は口縁部がわずかに内湾して単純におわる。内外面ともにヘラミガキがなされている。１～３㎜大の砂粒を含み，焼成は良好で，明茶褐色を呈する。

製塩土器　３点認められた（９・10・11）。いずれも須恵器と同様な叩き痕がありながら土師器の焼成であり，いわゆる玄界灘式製塩土器と考えられる（内田律雄氏の御教示による）。９は厚さ約３㎜の甕形土器頸部～肩部片である。外面に平行叩き痕がみられる。10・11は胴部片で外面に叩き痕，内面に青海文痕がかすかにみえる。

鉄製品　刀子状の鉄製品が１点出土している。全体に銹化が著しいうえ，刀身中央部で折れ曲がっ

ている。全長17.5cmあり，刀身長14cm，茎長3.5cmである。刀身は最大幅2.4cm，棟幅0.6cmを測る。茎は幅1.4cm，厚さ0.6～0.4cmあまりある。刃関は明瞭であるが，棟関はわずかにみとめられる。

（松本岩雄・森山敏広）

第3節　小才Ⅱ区の調査

Ⅱ区は旭町道71号線の西側に位置し，小才遺跡中央部の丘陵にあたる。北側に標高約300mの尾根が東西に延びており，その尾根の南側斜面である。

分布調査の段階では，地形の変化等から明確に古墳と判断されるものは1基しかなく（1号墳），ほかに石材が一部露出しているところが1箇所確認されたのみである（第8図）。この石材を中心にトレンチを設定して調査したところ，これが横穴式石室の天井石であることが判明した（2号墳）。そこでこの丘陵全体にさらに9箇所のトレンチを設定して遺跡の広がりを把握することにした。その結果，1号墳の南側にひろがる丘陵緩斜面において，かなり広範囲にわたって遺物包含層や遺構の存在することが判明した。なお，1号墳の南東に延びる尾根筋，およびその東側斜面は後世の削平を受けている部分が多く，遺構・遺物は確認されなかった。

以上の調査結果にもとづいて，1号墳およびその南側にひろがる丘陵斜面の全面的な調査を行ったところ，地表には何ら痕跡が認められなかったにもかかわらず，横穴式石室・横穴墓など各種の遺構が検出された。Ⅱ区で検出された遺構は，石室を有する古墳7基，周溝のみ遺存していた古墳1基，木室墳とでも称すべきもの2基，横穴墓2基，石組遺構1である（第9図，図版3－1）。

（松本岩雄）

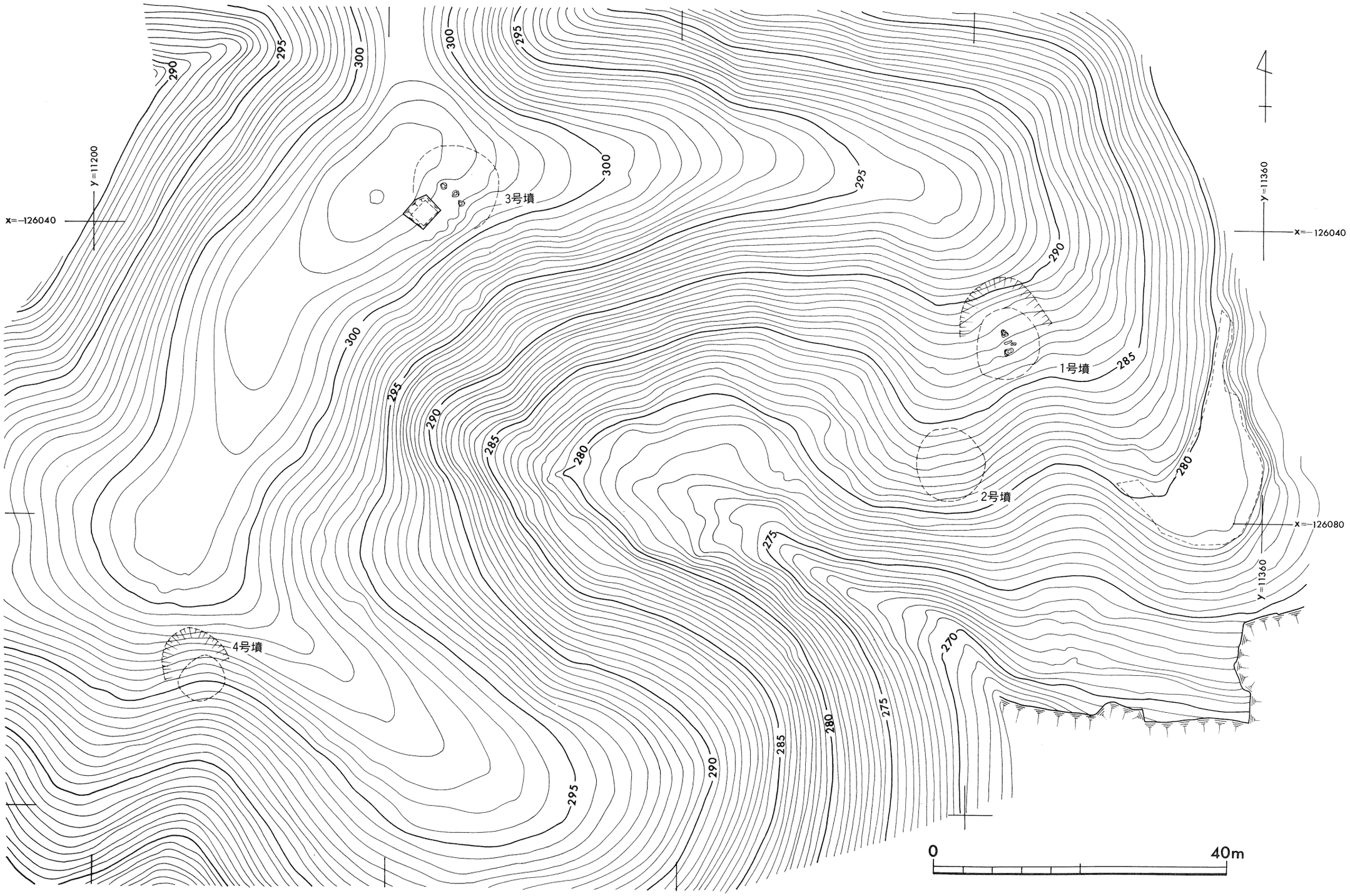
1．小才1号墳

(1) 位　置

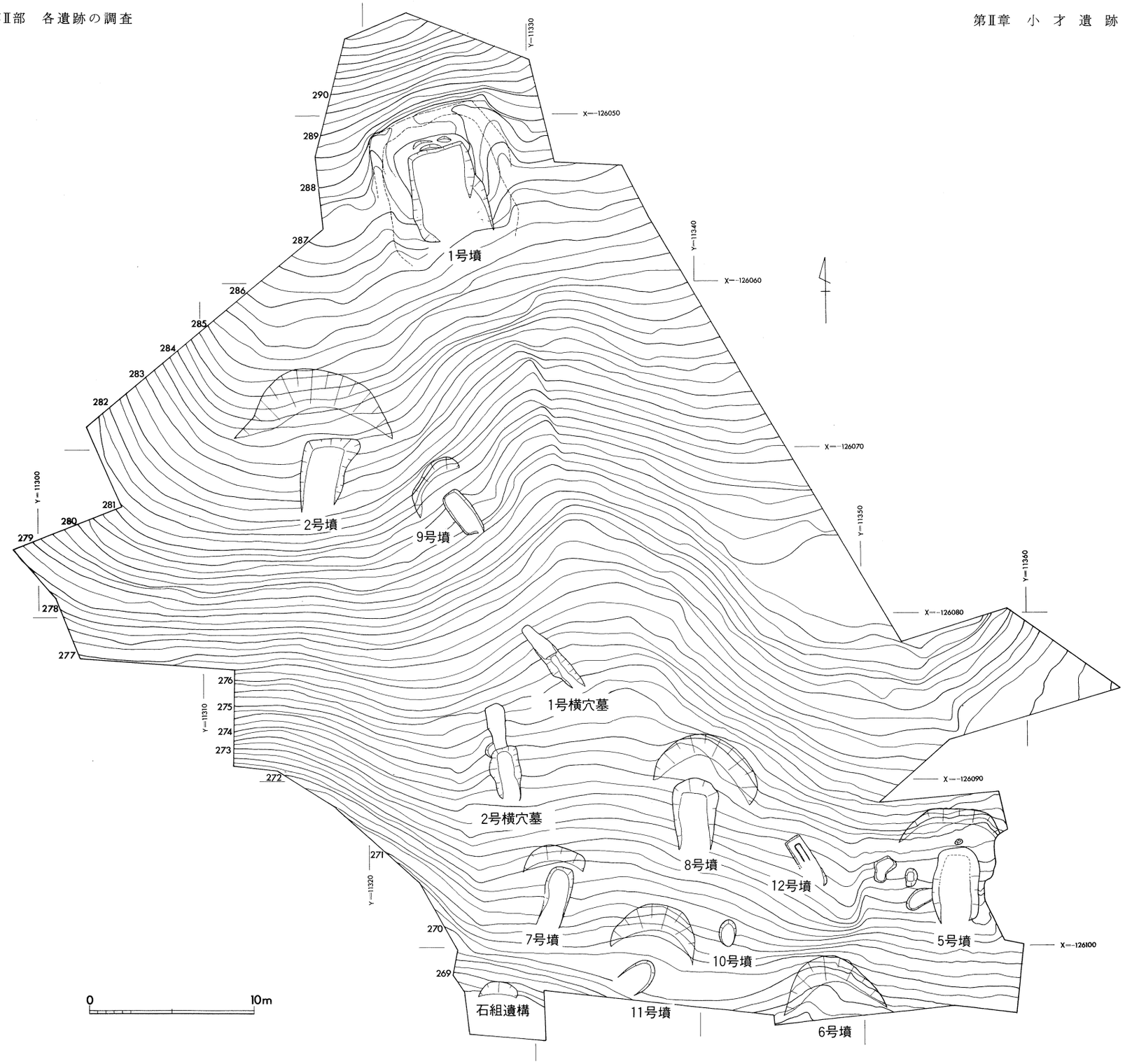
Ⅱ区の中では最も北側にあり，西から東へ向かって派生する細長い尾根の先端付近に位置している。標高285～290mの丘陵斜面に立地している（第8図）。

(2) 墳　丘

発掘前の地形を観察したところ，丘陵斜面に大きな切削加工痕がみとめられ，その南側にわずかばかりの墳丘が確認された。墳頂部には南北4m，東西2.5mのくぼみがあり，石室の天井石とみられる大きな石が2個露出していたほか，3個の小さな石材が散在していた。調査前の地形測量では東西8m，南北8.5mの円形のマウンドで，南側墳裾標高285.86mから見掛けの墳丘残存最高所標高288.17mまでの比高は約2.3mあった。墳丘北側の丘陵切削部は三日月形を呈しており，最大幅4.5m，最



第8図　小　才　遺　跡　Ⅱ　・　Ⅲ　区　調　査　前　地　形　図



第9図　小 才 遺 跡 Ⅱ 区 調 査 後 地 形 図

大高2.7mあり，墳丘との間に掘削された溝の幅は１mあまりと観察された（第10図，図版９－１）。

発掘調査の結果，墳形は方墳であることが明らかになった。方墳といっても正確に言えば山側の一辺が短く，谷側の一辺が長くなっており，台形状を呈している。したがって墳丘規模は中軸線上では南北約7.8m，東西約6.9mとなり，北辺長約5.5m，南辺長約7.6m，東辺長・西辺長ともに約８mを測る。墳裾と想定されるところは南側で標高285.80m，北側で標高287.65mあり，南北軸における墳裾の高低差は1.85mある。また，東側墳裾標高は286.4m，西側墳裾標高は286.95mあり，東西方向においても墳裾の高低差が0.55mある。したがって土層観察の結果得られた墳丘残存部最高所（標高288.25m）と比較した場合，南墳裾からの高さ2.45m，北墳裾からの高さ0.6m，東墳裾からの高さ1.85m，西墳裾からの高さ1.3mとなる（第11図，図版９－２・３）。

［墳丘規模］

中軸線長	南北約7.8m	東西約6.9m		
四 辺 長	南辺長約7.6m	北辺長約5.5m	東辺長約８m	西辺長約８m
高　　さ	南辺墳裾から2.45m	北辺墳裾から0.6m	東辺墳裾から1.85m	西辺墳裾から1.3m

周溝は山側に「コ」の字形にめぐらされていた。幅は0.6～１mのものである。北辺側の周溝は断面「U」字形を呈し，内部には約１mの土が堆積していた。若干の砂粒を含む淡黄色・淡茶色土・明黄色土などがみられ，丘陵の上部から堆積したものが大半であると判断される。なお，７層（明赤褐色土）と11層（淡黄色土）のみは粘質の層である。東辺側の周溝は浅い「U」字形の断面を示している。７・８・９層はやや粘性があるが，その他の２～６層は粘性の少ない茶灰色土や淡黄色土で，多くの場合炭化物等を含んでいる。西辺側の周溝も浅い「U」字形の断面形を有している。東側と同様に溝底に近いところは粘性があるが，その他の層は粘性の少ない茶灰色土や淡黄色土で，若干の炭化物を含んでいることが多い（第12図，図版11）。

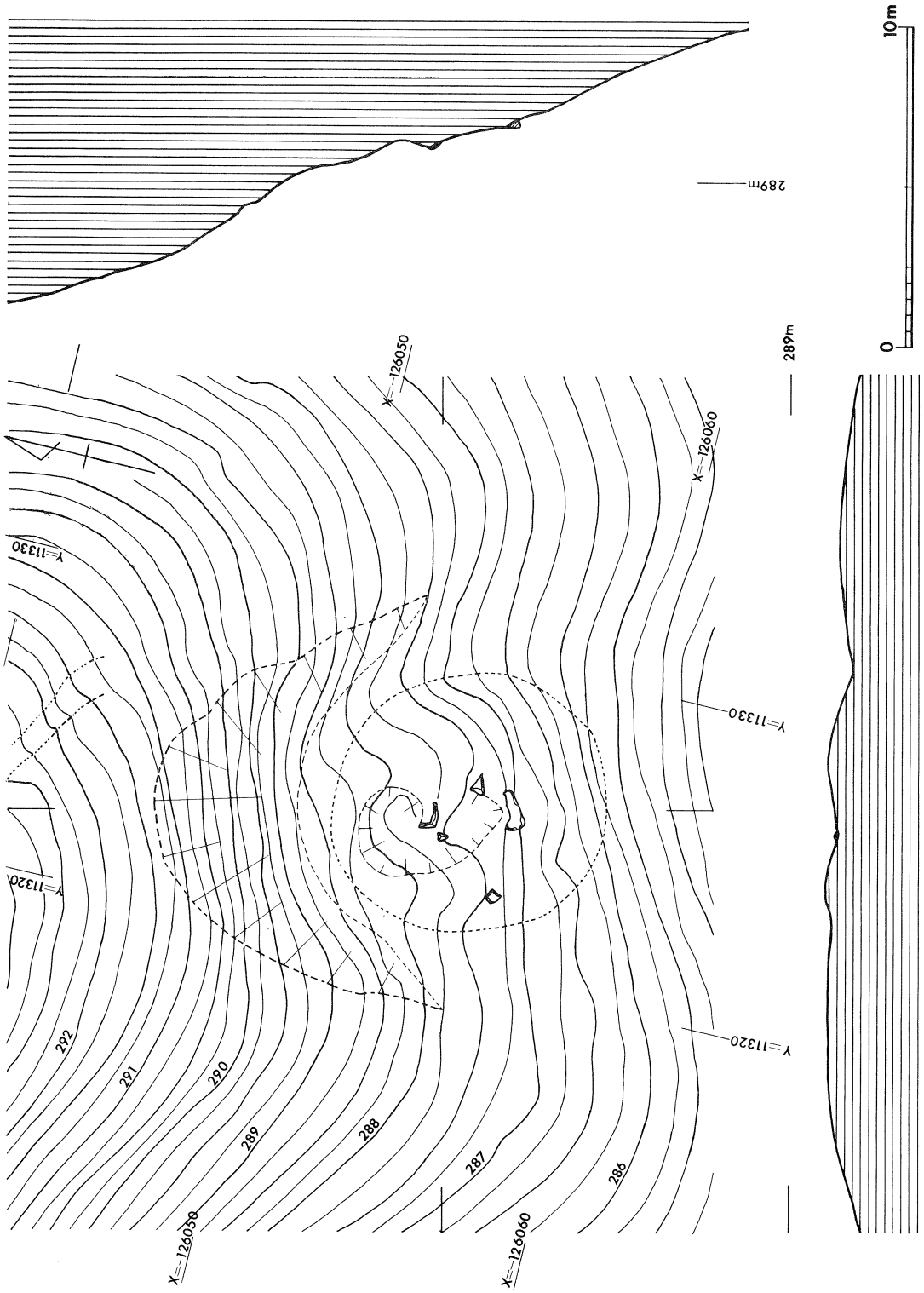
墳丘は一部に地山削り出し部分もみられるが，大半は盛土によって形成されている。墳丘基底部が地山削り出しの部分は西側と北側および東側の一部であり，高さは15～20cmある。その上に暗褐色・黄色土などの盛土が施されている（第12図，図版12）。

石室開口部付近の両側には，石室の主軸に直交するように，東側に２個，西側に３個の石が外護列石状に連続して置かれていた（第11・15・16図，図版16）。

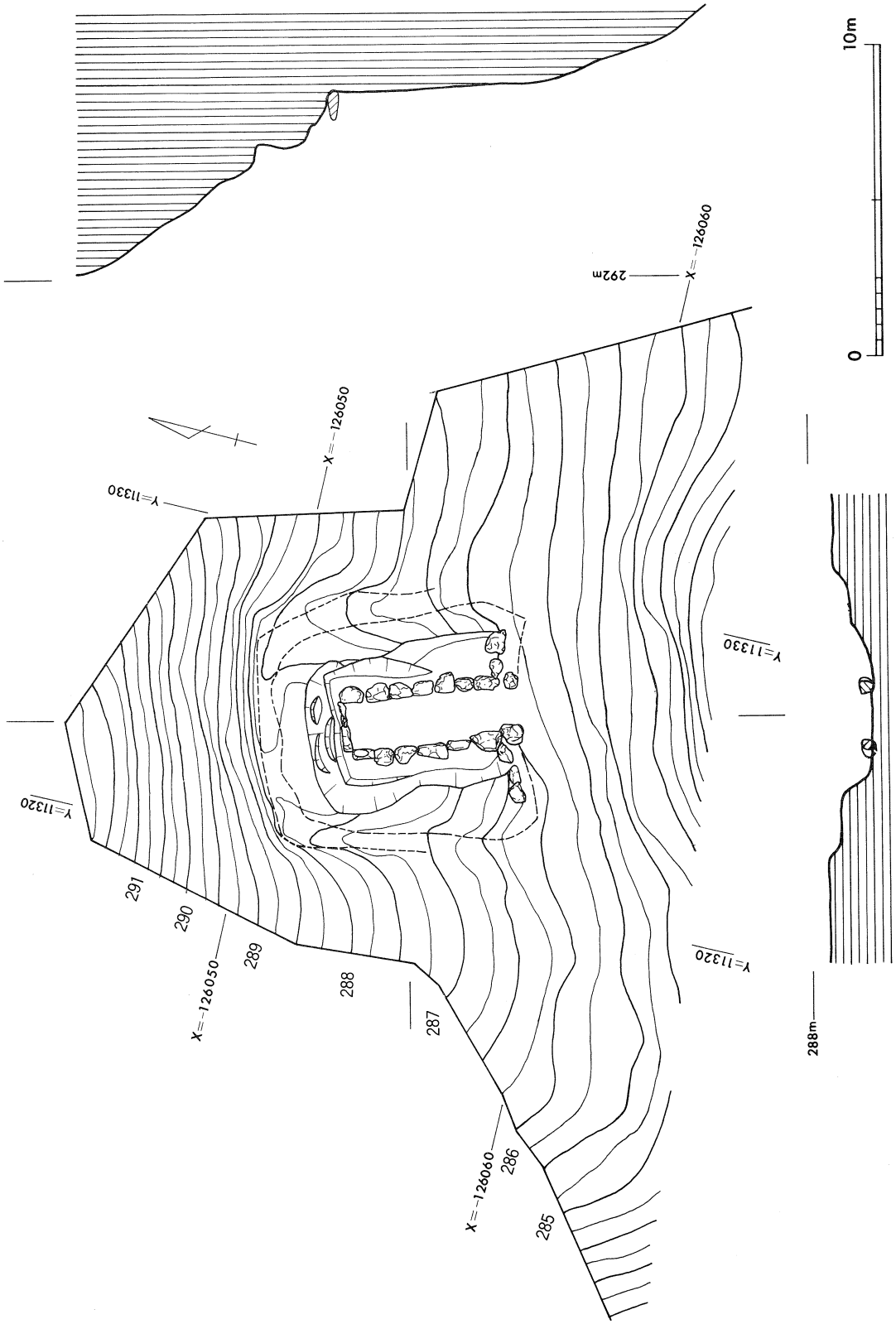
また，石室開口部から南方にかけての土層をみると，地山の上に淡赤褐色土（第12図，８層）が意図的に敷かれており，石室の前庭部を構成していたものと思われる。

(3)　内部構造

南方（谷側）に開口する無袖形の横穴式石室である。墳丘のほぼ中央に位置し，石室主軸はN－19°－Wを示す。石室の規模は以下のとおりである。



第10図　小才１号墳発掘前墳丘実測図



第11図　小才１号墳発掘後墳丘実測図

［石室規模］

全長　約5.5m	玄室推定長約３m	奥壁幅1.45m	前幅1.5m	高さ1.4m
	羨道推定長約2.5m	羨門幅1.15m	高さ1.1m	

石室は石英安山岩質火山砕屑岩，流紋岩質火山砕屑岩を積んで構築している。調査時には天井石が支えを失い，石室内に沈み込んだものがあり，石室内部には土砂が充満していた。そこで，石室の調査にあたっては，まず天井石を取り外してから内部の土砂を除去する方法をとった。

平面形・床面　平面形は無袖形の狭長な石室である。奥壁と東壁・西壁はほぼ直角をなし，床面での平面形は長方形である。明確な玄室・羨道の区別はないが，閉塞石・床面などの状況からすると奥壁から約３mの位置までが玄室として意識されていたものと考えられる。すなわち，床面は奥壁から約３mの間はほぼ水平面（標高約286m）を保ち，閉塞石のある部分から南側にかけてはゆるやかに傾斜している。また，床面の幅も，奥壁部1.45m，推定玄室中央部1.5m，推定玄門部1.5mとほぼ均一であるが，閉塞石の南から次第に狭くなり，最南端（羨門部）では幅1.15mとなる。さらに閉塞石の上にあたる天井石が低く架構されていること，両側壁の積み方も奥壁側と羨門側で若干異なっていることなども玄室，羨道の区別を意識したものとも考えられる（第13・14図，図版10）。

玄室床面には，板状の割石列が２列認められた。石室主軸と直交するかたちに配された石列で，奥壁から約0.5m，さらに約1.4mの位置にあり，両者は平行している。この周辺から鉄釘が集中的に出土したことから板状の割石列は棺台として置かれたものと考えられる（第13図，図版15－１）。

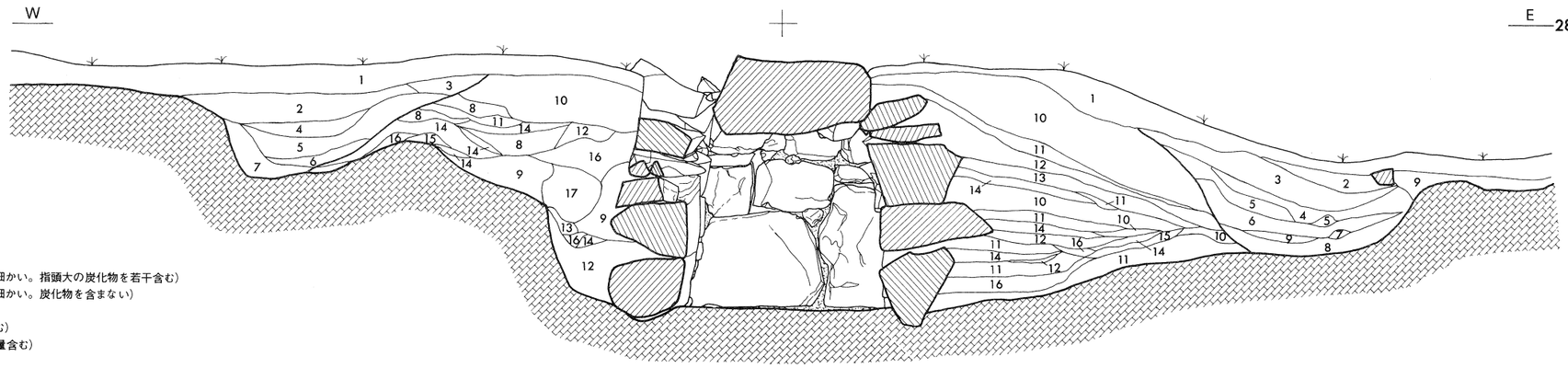
なお，羨門部から南側にかけての床面の断面をみると意図的に敷きつめられたと考えられる淡赤褐色土（第12図，８層）がみられ，墳丘の前面（南側）には若干の平坦面がつくられている。

閉塞施設　閉塞は奥壁から約３mの位置に認められた。15～40cm大の自然石を積み上げたものである。閉塞施設の基底部幅は１m内外で，高さ0.8mほど山形に積み上げ，天井石下端とのすき間は15～20cmであった（第13図，図版14・図版16－１）。

奥壁　奥壁基底部は幅約90cm，高さ約80cmの比較的大形の石を西壁寄りに据え，その東側に幅約45cm，高さ100cmの長方形の石を立てている。この２個の大形の石は床面の地山を約15cm掘り下げて据えている。この上にやや小形の石を小口積状に積み上げ，下から二段目の石の上面レベルをほぼそろえている。その上部の三段目・四段目の石は持ち送り状にややせり出している。各石のすき間には小形の石を詰めて埋めている。奥壁部分の天井石はやや沈んでいるが，奥壁部の最も遺存状態良好なところで高さ約1.4mある。

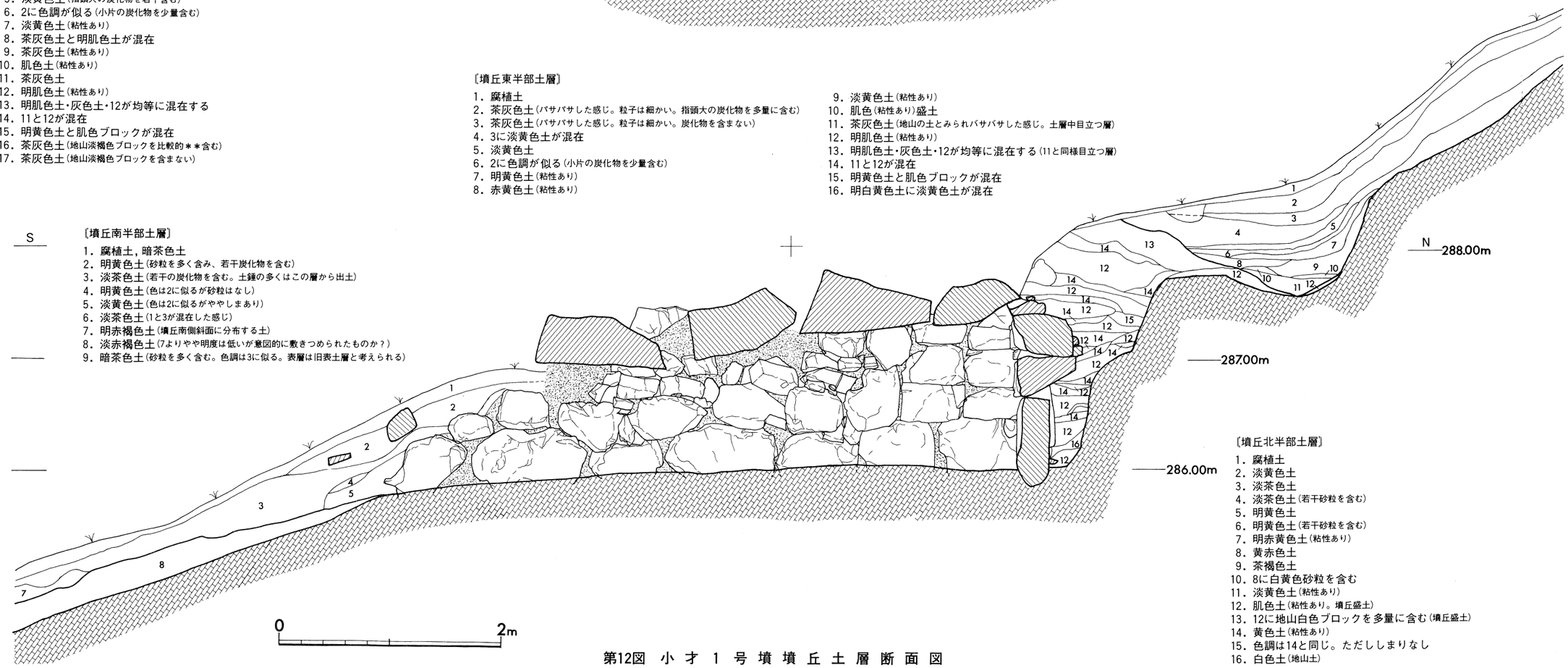
側壁との石組みの関係は，東側では奥壁の石が外に出るように，西側では奥壁の石が側壁の内側に入り込むように構築されている（第14図，図版18）。

東壁　東壁は基底部にやや大形の石を腰石状に据えている。これらは基本的に広い平坦面を内側



〔墳丘西半部土層〕
1．腐植土
2．茶灰色土（パサパサした感じ粒子は細かい。指頭大の炭化物を若干含む）
3．茶灰色土（パサパサした感じ粒子は細かい。炭化物を含まない）
4．3に淡黄色土が混在
5．淡黄色土（指頭大の炭化物を若干含む）
6．2に色調が似る（小片の炭化物を少量含む）
7．淡黄色土（粘性あり）
8．茶灰色土と明肌色土が混在
9．茶灰色土（粘性あり）
10．肌色土（粘性あり）
11．茶灰色土
12．明肌色土（粘性あり）
13．明肌色土・灰色土・12が均等に混在する
14．11と12が混在
15．明黄色土と肌色ブロックが混在
16．茶灰色土（地山淡褐色ブロックを比較的＊＊含む）
17．茶灰色土（地山淡褐色ブロックを含まない）

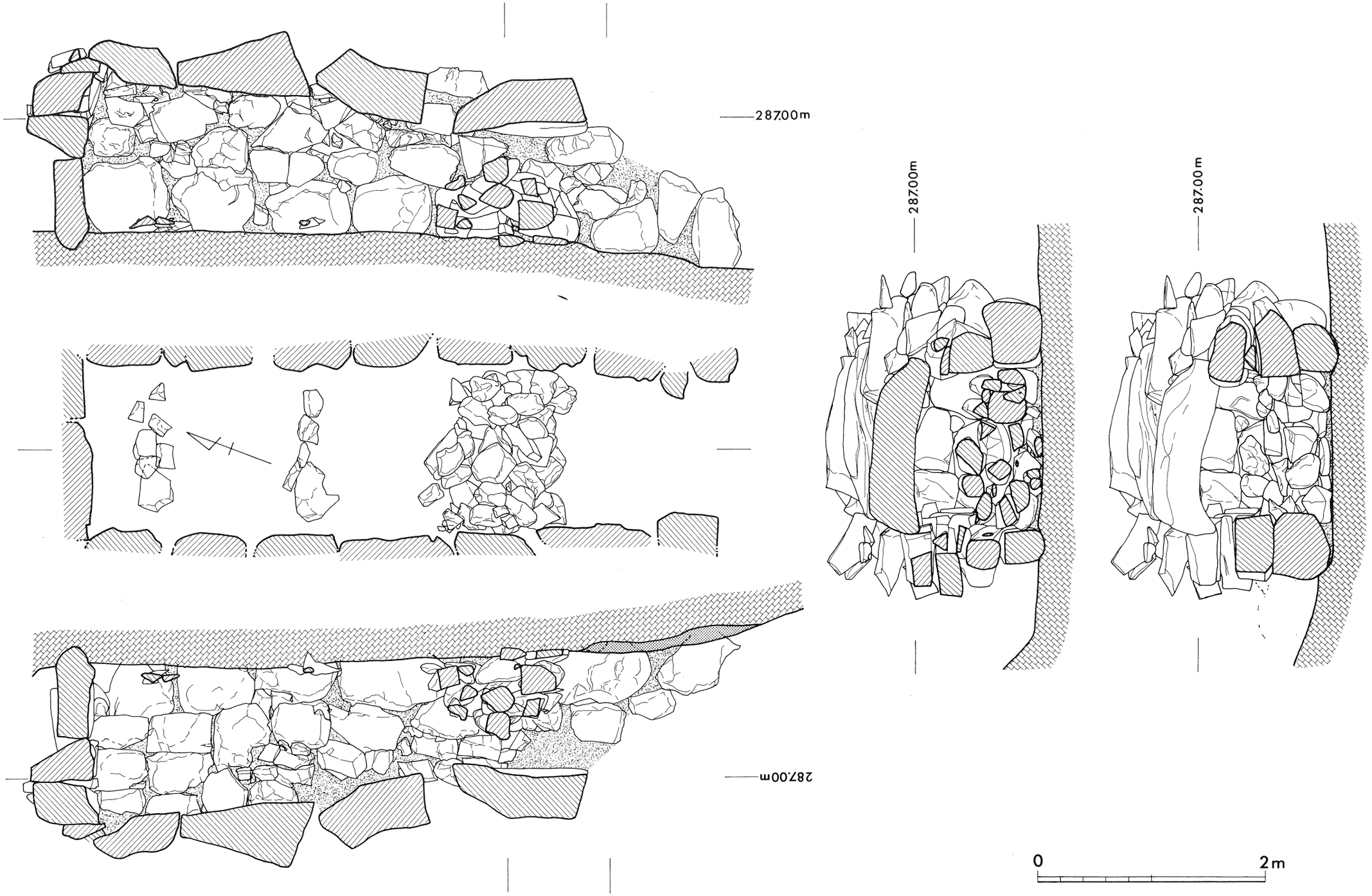
〔墳丘東半部土層〕
1．腐植土
2．茶灰色土（パサパサした感じ。粒子は細かい。指頭大の炭化物を多量に含む）
3．茶灰色土（パサパサした感じ。粒子は細かい。炭化物を含まない）
4．3に淡黄色土が混在
5．淡黄色土
6．2に色調が似る（小片の炭化物を少量含む）
7．明黄色土（粘性あり）
8．赤黄色土（粘性あり）
9．淡黄色土（粘性あり）
10．肌色（粘性あり）盛土
11．茶灰色土（地山の土とみられパサパサした感じ。土層中目立つ層）
12．明肌色土（粘性あり）
13．明肌色土・灰色土・12が均等に混在する（11と同様目立つ層）
14．11と12が混在
15．明黄色土と肌色ブロックが混在
16．明白黄色土に淡黄色土が混在



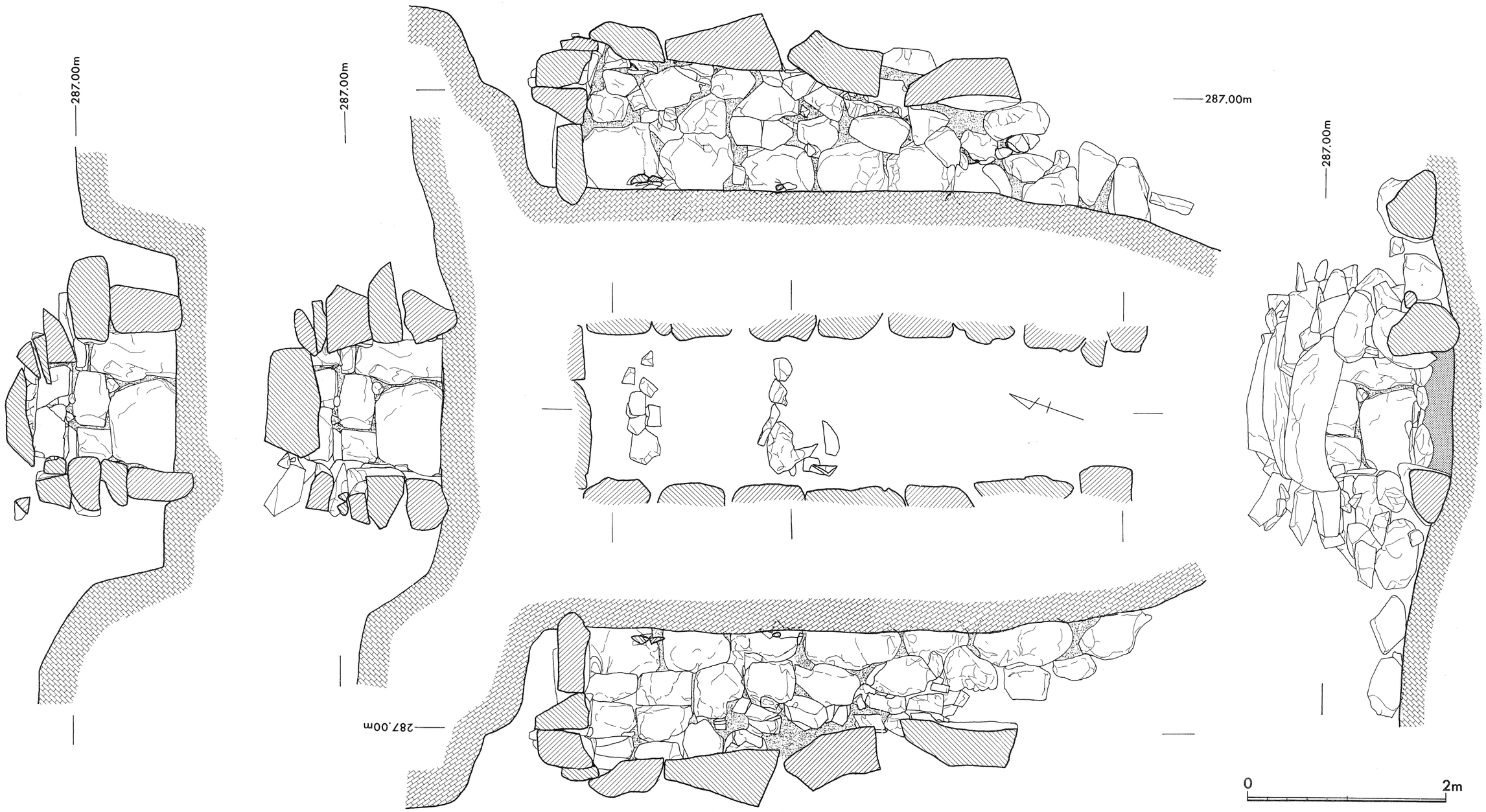
〔墳丘南半部土層〕
1．腐植土，暗茶色土
2．明黄色土（砂粒を多く含み、若干炭化物を含む）
3．淡茶色土（若干の炭化物を含む。土錘の多くはこの層から出土）
4．明黄色土（色は2に似るが砂粒はなし）
5．淡黄色土（色は2に似るがややしまあり）
6．淡茶色土（1と3が混在した感じ）
7．明赤褐色土（墳丘南側斜面に分布する土）
8．淡赤褐色土（7よりやや明度は低いが意図的に敷きつめられたものか？）
9．暗茶色土（砂粒を多く含む。色調は3に似る。表層は旧表土層と考えられる）

〔墳丘北半部土層〕
1．腐植土
2．淡黄色土
3．淡茶色土
4．淡茶色土（若干砂粒を含む）
5．明黄色土
6．明黄色土（若干砂粒を含む）
7．明赤黄色土（粘性あり）
8．黄赤色土
9．茶褐色土
10．8に白黄色砂粒を含む
11．淡黄色土（粘性あり）
12．肌色土（粘性あり。墳丘盛土）
13．12に地山白色ブロックを多量に含む（墳丘盛土）
14．黄色土（粘性あり）
15．色調は14と同じ。ただししまりなし
16．白色土（地山土）

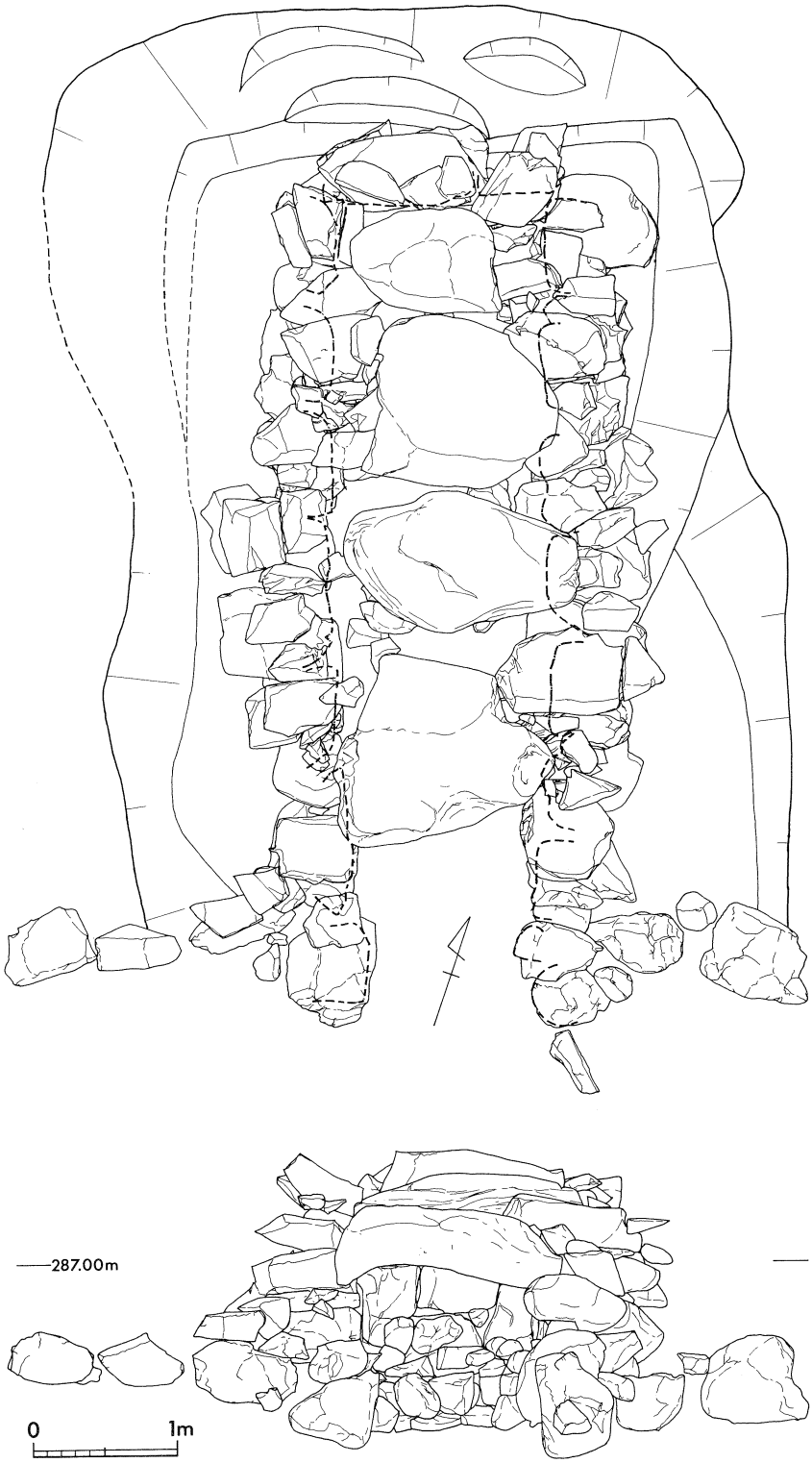
第12図　小 才 1 号 墳 墳 丘 土 層 断 面 図



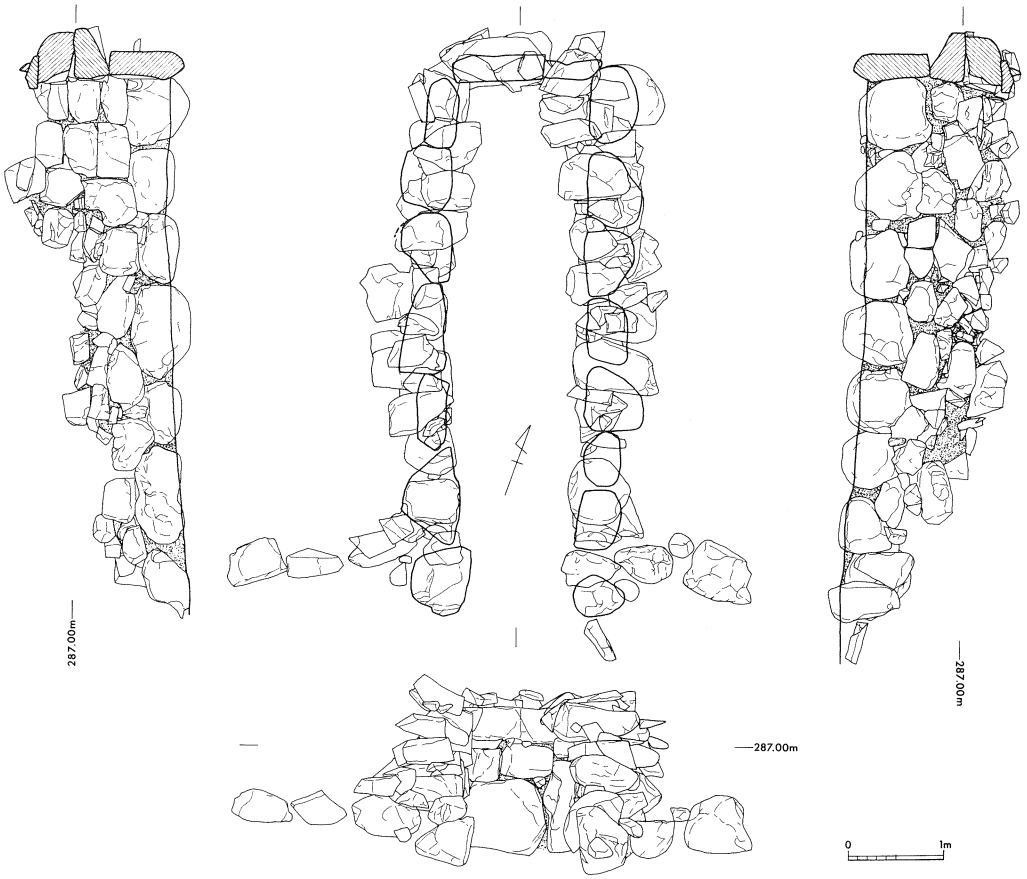
第13図　小 才 1 号 墳 石 室 実 測 図 (1)



第14図　小　才　1　号　墳　石　室　実　測　図 (2)



第15図　小才１号墳石室実測図(3)

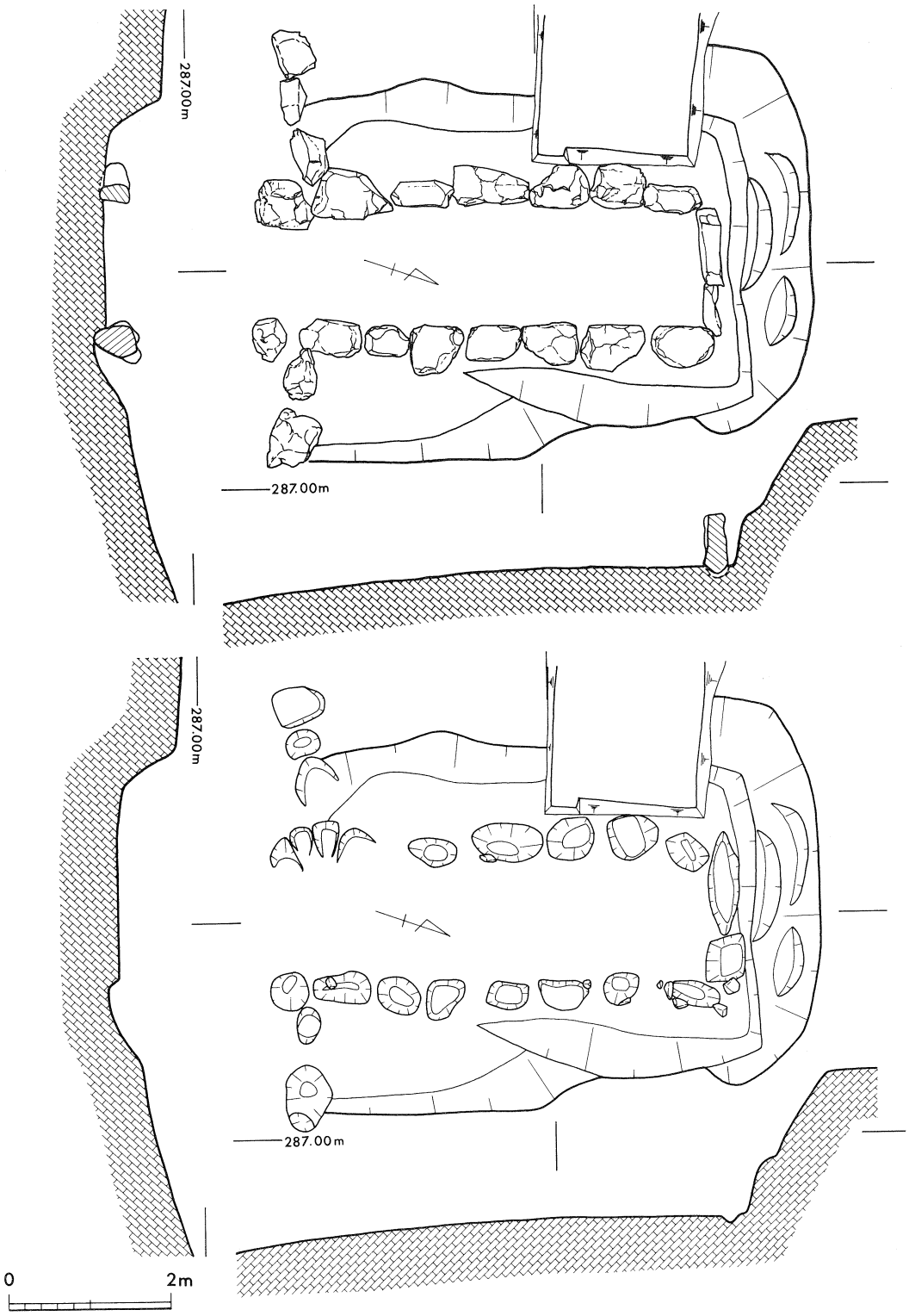


第16図　小才１号墳石室実測図(4)

にそろえるようにして設置されており，その面はほぼ垂直に立ち上がっている。奥壁から４個目の石まではそれぞれ接するように比較的ていねいに据えているが，５個目以南はやや小形の石をすき間をもたせながら並べている。二段目から上は，やや小形の石を小口積にして，煉瓦積状に積み上げている。三段目から上は持ち送り状にややせり出している。石のすき間には小形の石を充塡しているが，裏側の控え積はほとんど行われていない。二段より上の石積は全体にやや雑然としている（第13・14図，図版15－２）。

西壁　西壁も東壁と同様に基底部はやや大形の石を腰石状に据えている。基底部の石は地山を10～20cm掘りくぼめた後に据え付ける。奥壁から４個目の石までは接するように据えているが，５個目以南の石はややすき間がみられ，地山掘り込み部分も浅い。二段目から上は，奥壁から３個目のところまでは比較的大形で面のそろった石を重箱積状に積み上げているが，それより南側はやや小形の石が雑然と積まれている。控え積はほとんど行われていない（第13・14図，図版15－３・図版17）。

天井石　天井石は大形の石が４枚検出された。いずれも原位置を保っているものはなく，わずか



第17図　小才1号墳石室基底部(上)及び掘り方実測図(下)

ずつ動いているものと判断された。奥壁側の石は最も小さく，1.1×0.8m，厚さ約35cmのものである。その南側の石は1.3×1.2m，厚さ55cmの大形の石である。奥壁から３枚目の石は1.6×１m，厚さ40cmの細長い石で，ここまでは元々ほぼ同じ高さに架構されていたものと思われ玄室を示しているものと考えられる。奥壁から４枚目の石は1.5×1.3m，厚さ35cmのやや板状の石で，後世若干くずれてはいるものの，元々先の３枚の天井石より低く架構されていたものと思われる。最も遺存状態の良好な奥壁・側壁の高さから推定すると玄室の高さは1.4m，羨道の高さは1.1mあまりであったと思われる。

掘り方　掘り方は南に開口した「コ」の字形を呈するもので，幅4.7m，長さ6.5mある。奥壁部分が最も深く急角度に掘り込まれている。まず約55度の角度で１m掘り下げたのち75度の急角度で70cmあまり掘り下げられている。西壁は南に行くにしたがって次第に浅くなるものの60度あまりの角度で掘り込まれている。これに対して東壁はゆるやかな角度でかつ浅く掘り込まれている。奥壁部から南へ２m付近まではそれでも約40度の角度で掘り込まれているが，そこから南方にかけては約25度しかなく，掘り込み部の際も不明瞭になっている。このことは地形的に南東側がやや低くなっていることもあるが，主として石室の構築方法に関連していると考えられる（第17図，図版10－３）。

石室構築方法の復元　掘り方の形状や墳丘の土層観察などからすれば，石室構築の方法はおおよそ次のように復元できる。

① 掘り方を「コ」の字形に掘る。この場合東壁の掘り込みはゆるやかにし，石材を搬入し易くしておく。

② 掘り方床面に基底部の石を配置するプランを描く。

③ 西壁の基底部の石を床面を掘りくぼめたり小石をかませたりしながら上面のレベルをそろえるようにして設置する。

④ 奥壁の石を固定する。

⑤ 東壁基底部の石を設置する。

⑥ 東壁裏込めの土をほぼ水平にしながら固くなるように幾層にもわたって盛る。

⑦ 基底部の石の上面まで裏込土を詰めた後，この面を利用して二段目の石を搬入する。

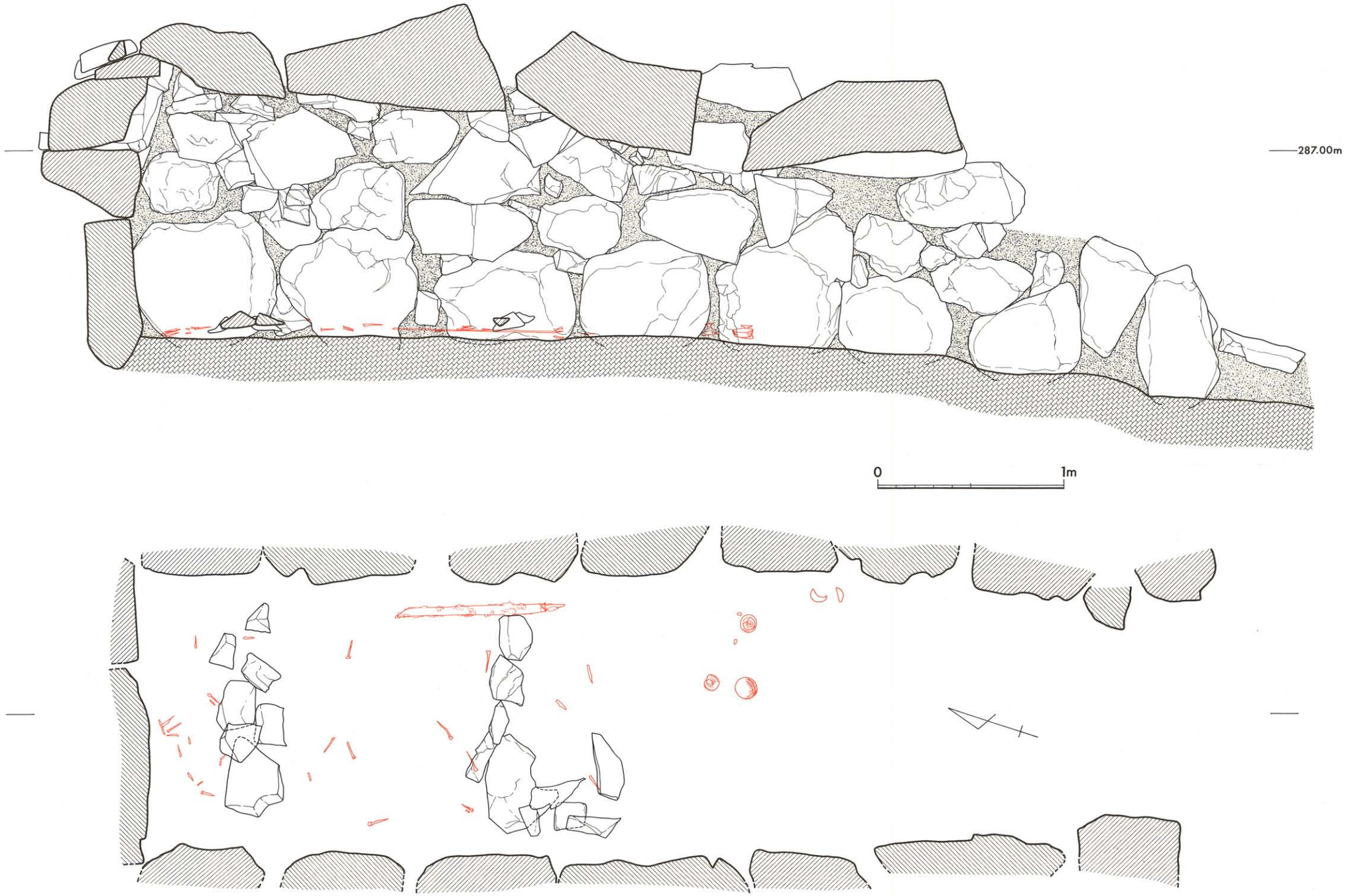
⑧ 以下その繰り返しを行いながら三段目，四段目の石を逐次搬入して石室を構築していく。

⑨ 天井石を架構する面までは幾層にもわたって土を盛り上げ，その段階で作業を一時中止し，墳頂部に若干の平坦面をつくる。

⑩ 最後に大量の土（第12図，第10層）を一気に盛り上げて墳丘を築く。

以上の推測は主に掘り方裏込土および墳丘盛土の土層観察による（第12図，図版12）。

すなわち，墳丘西半部の土層は裏込土が径30～40cm大の塊状に認められたが，東半部では厚さ約10



第18図　小才１号墳石室内遺物出土状況実測図

cmの層が幾重にもほぼ水平に認められるという大きな違いがあった。なお，奥壁部の裏込土は土を少量ずついれてつき固められていたようで，部分的には地山と見紛うほど堅固につくられていた。

(4) 遺物出土状況

出土した遺物は次のとおりである（第18・19図，図版19）。

鉄製大刀　1，　鉄製鎌　1，　鉄釘　34，　土師器坏　1，　須恵器高坏　2，
土錘　184

鉄製大刀　石室内中央の東壁沿から出土した。切先を奥壁側，刃部を東壁側に向け，ほぼ水平な状態で出土しており，原位置を保っているものと考えられた。鍔は鉄刀関部の西側に水平に置かれていた。副葬する際に故意に鍔を抜き取り，刀身の傍に整然と置かれていたものと考えられる。

土師器坏　玄室と羨道の境付近から出土した。石室主軸線よりやや東側に置かれており，口縁部を上にしてほぼ水平な状態であった。土器の上には閉塞石がみられた。

須恵器高坏　2個出土しており，1個は土師器坏の北側10cmの地点，他の1個は東側25cmの地点にあった。いずれも口縁部を下にして倒立した状態で床面に置かれていた。土器の上には閉塞石がみられた。

鎌　閉塞石と石室東壁にはさまれた状態で出土した。床面から25cmばかり高い位置にあることから元々床面に置かれていたものではなく，閉塞石を積上げる途中あるいは閉塞石の上面に置かれていたものが東壁とのすき間にずれ落ちたものと推測される。

鉄釘　33本が玄室内から出土し，1本が石室外から出土した。玄室内のものは，棺台とみられる石の周辺に集中してみられた。出土した範囲は南北2.3m，東西1mで，いずれもほぼ床面に近い高さから出土している。こうした出土状況からすれば，後世に大きな攪乱を受けたとは思われず，鉄釘接合木棺がこの位置に置かれており，自然に朽ちた状態であると判断された。棺台と思われる石の位置と鉄釘出土状況から復元すると，長さ約1.9m，幅約60cmの木棺が石室主軸方向に置かれており，木棺と奥壁・西壁との間隔は25～30cm，東壁との間隔は50cmあまりであったと考えられる。なお，石室外から鉄釘片が1本出土しており（第22図21），追葬の際に掻き出されたものとも考えられる。ただし玄室内の遺物はほとんど動かされた形跡が認められず，明確に追葬があったかどうか判断できなかった。

土錘　184個出土しており，平面的な出土位置により次の4つのグループに分けた（第19図）。Aグループとしたものは石室外，Bグループは羨道部，Cブループは閉塞石のある範囲，Dグループは玄室内である。内訳は，Aグループ67個，Bグループ6個，Cグループ76個，Dグループ26個，出土地点不明9個である。Cグループ（閉塞石部）が最も多く，次に石室外が多い。土錘は全て床面より浮いた状態で出土しているのが特徴で，直刀，土器類の出土状況とは異なっている。ちなみ

第19図　小才１号墳土錘出土状況実測図

に床面からの高さは最も低いもので10cm，最も高いもので65cmある。閉塞石のある部分では積み上げられた石の中からも多数出土したが，全体的にみると概ね閉塞石の断面形に類似した山形に分布していることが注意される。このことは閉塞石を積み上げたのちにこの位置に漁網を置いていたことを示唆するものといえよう。Dグループ（玄室内）やBグループ（羨道部）で散在していた土錘は閉塞部にあったものが長年月のうちに次第に流れ込んだものと解釈される。またAグループ（石室外）でも多くまとまって出土していることからすれば石室開口部付近にも漁網が置かれていた可能性がある。

(5) 出土遺物

鉄製大刀（第20図，図版20）　全長92.2cmを測る平造りの大刀で，鉄製鞘口金具，鎺が残存している。刀身は直刀で長さ82.3cmあり，切先はカマス切先の形態を呈す。刀身は最大幅（鎺元部）が3.2cm，最小幅（切先部）が2.7cmあり，鎺元部の棟の厚さは7㎜を測る。関部は不均等両関で，棟関0.4cm，刃関1.3cmを測る。茎長は関から9.9cmあり，茎幅は1.5cmで，刀身の約3分の1ときわめて細い。茎尻の形態は栗尻である。関から7.8cmのところに径3㎜の目釘穴が1孔ある。鎺は鉄製である。長径3.4，短径2.3cmの倒卵形を呈し，幅は2cmある。鞘口金具の破損した部分の下に鎺をみることができる。

鍔は長径8.9cm，短径7.4cmを測る楕円形の鉄製鍔で，中央に長径3.4cm，短径2.3cmの孔がある。この孔と前述した鉄製大刀の鎺の口径とが一致したことから，両者は一体のものであると判断された。厚さは2㎜しかなく非常に薄い。なお，透孔はみられない。

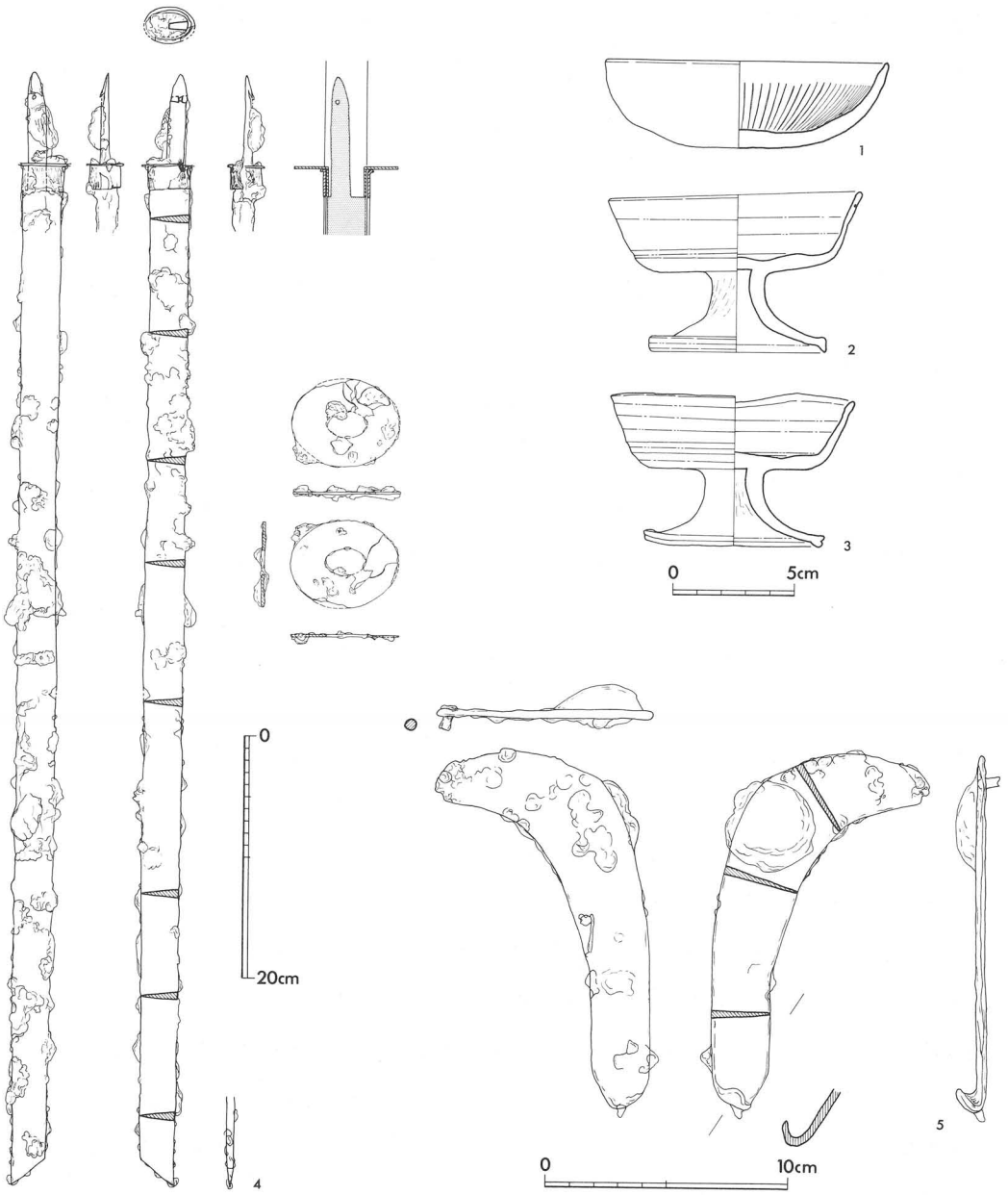
鉄製鎌（第20図5，図版20）　身は現在の鉈鎌に似ているが，茎尻は「U」字形に曲がる形となっている。全長15.5cm，身最大幅3.7cm，棟厚3㎜を測る。身の先端部に径4㎜，長さ6㎜の棒状の鉄製品がみられるが，一体のものであるのか後から付着したものなのか判断できない。

土師器坏（第20図1，図版20）　口径11.5cm，高さ3.6cmある。内面に放射状の暗文があり，見込み部分にラセン文がかすかにみえる。胎土は密で，焼成は良好。色調は淡茶色を呈する。

須恵器高坏（第20図2・3，図版20）　2点出土しており，大きさ，形態ともにほぼ同様なものである。2は口径10.4cm，高さ6.5cm，脚端部径7.3cmある。全体に薄いつくりで，坏部外面に沈線状の浅いくぼみが1条あり，坏部下半に回転ヘラケズリが行われている。脚端部はシャープに尖る。微砂粒をわずかに含み，焼成は良好。色調は青灰色を呈する。

3は口径10cm，高さ6.2cm，脚端部径7.3cmある。坏部外面に浅い沈線状のくぼみが1条あるが，坏部下半に回転ヘラケズリが行われているかどうかは不明。脚端部は丸くおわっており，2とはやや異る。微砂粒をわずかに含み，焼成は良好。色調は青灰色を呈す。

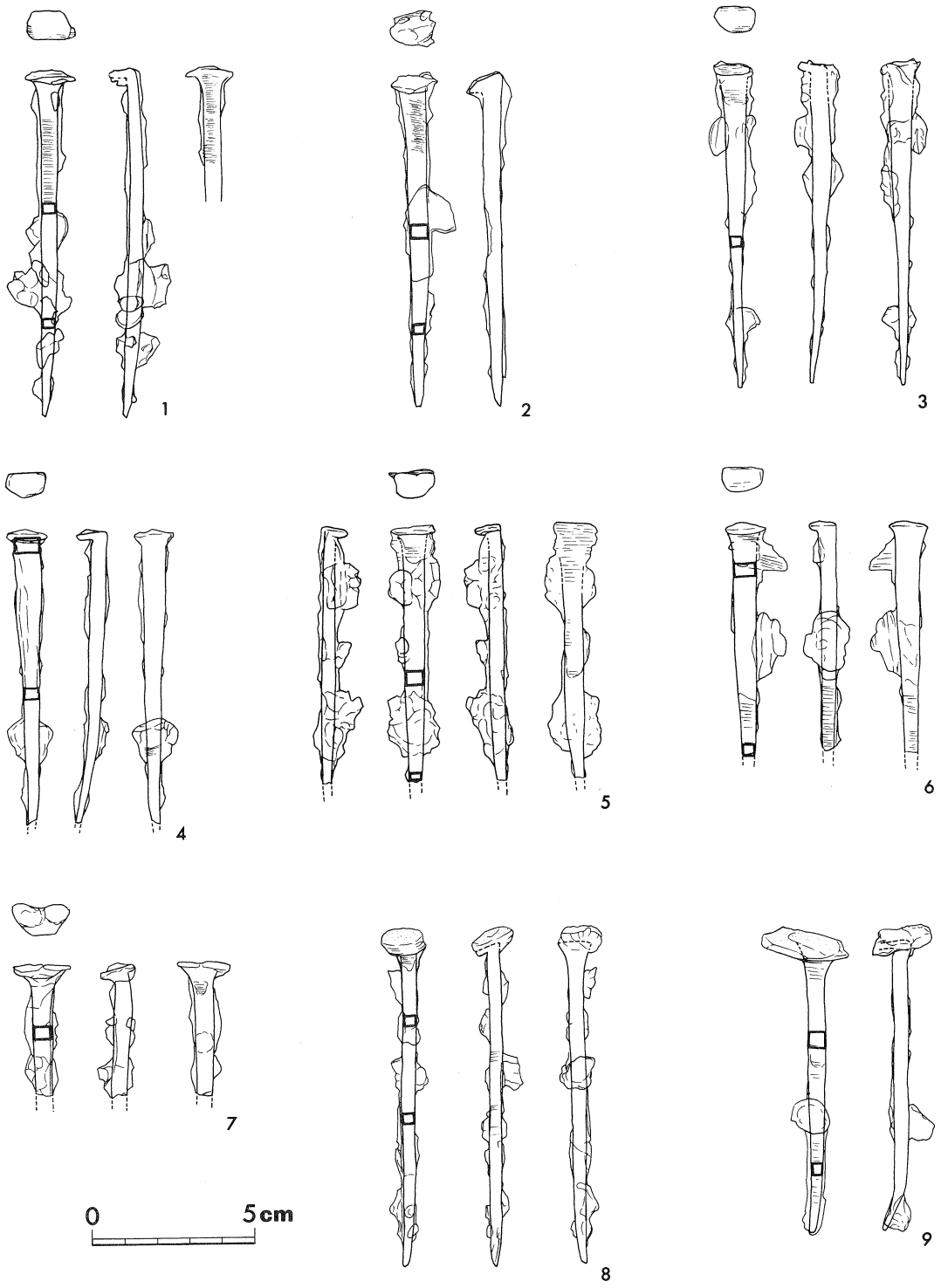
鉄釘　34本出土している（第1表，第21・22・23図，図版21・22）。頭部の形態をみると大まか



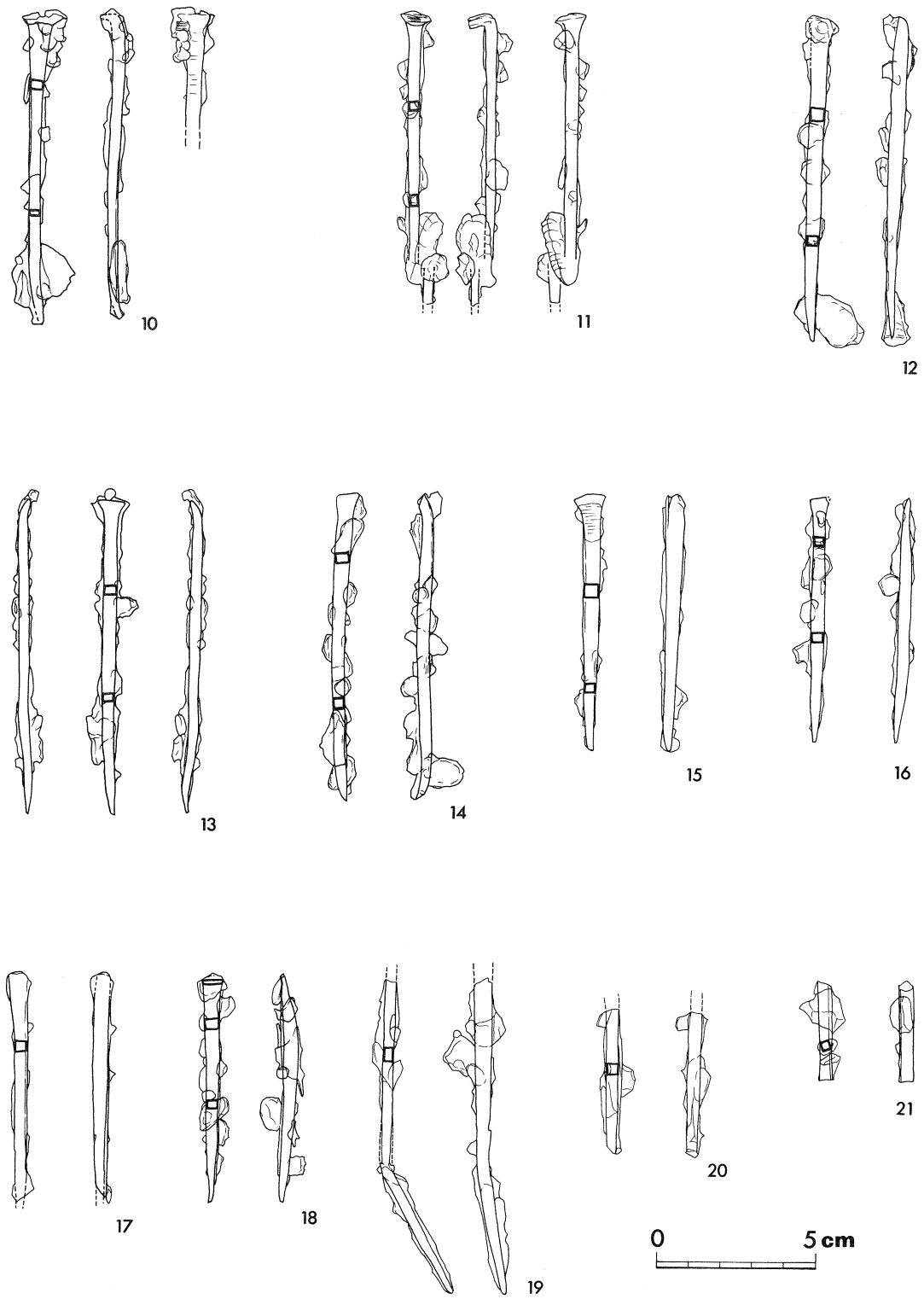
第20図　小才１号墳出土遺物実測図

に二種類のものがある。

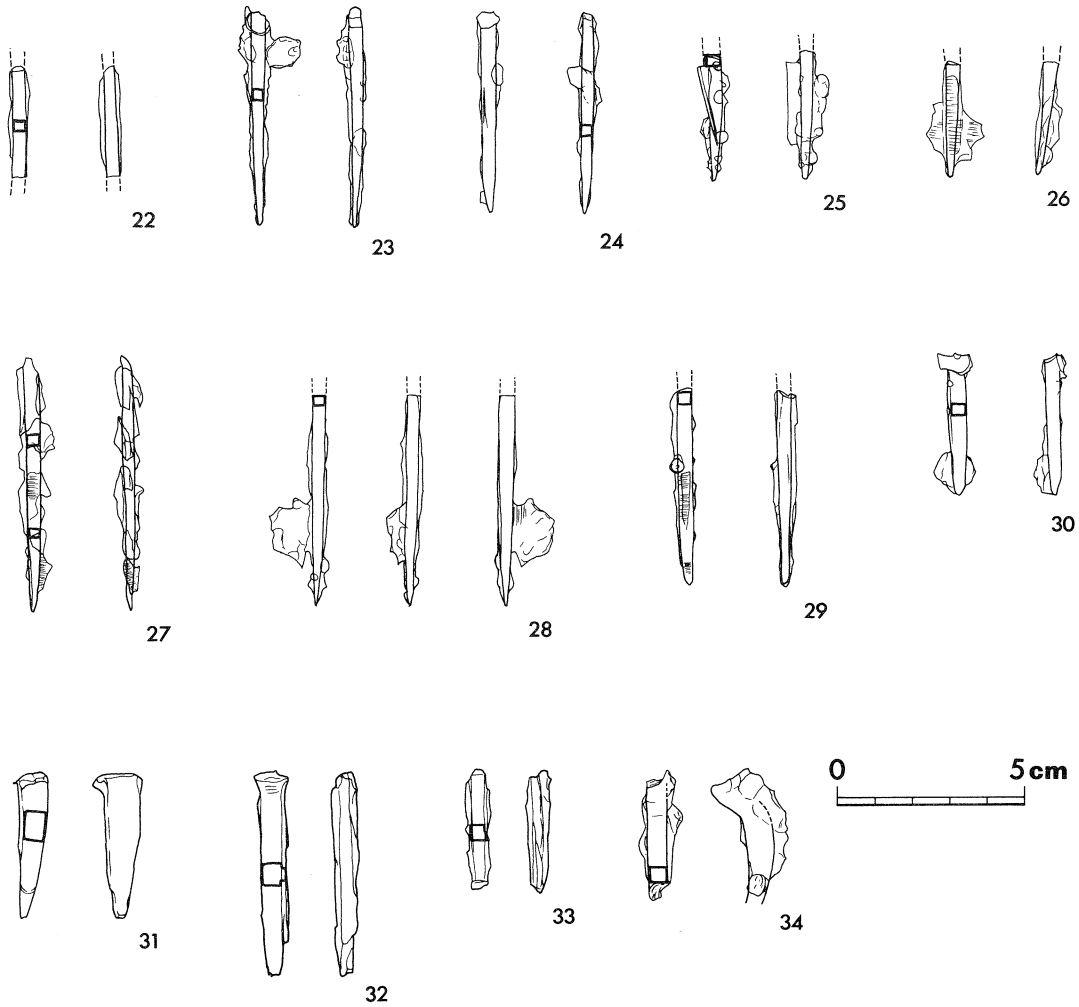
仮にⅠ類としたものは，頭部の一端を薄く圧延した後，一方向に折り曲げているもので，11本ある（１～11)。頭部は上面から見た形状が台形を呈する。これらは一方向に折り曲げて体部との境はくびれ込むのを基本とするが（１～５，８・９・11)，くびれが不明瞭なものもある（６・７・10)。Ⅰ類で完存しているものの長さは10.5～9.8cmであり，欠損品についても10cm前後のものであったと



第21図　小才１号墳出土鉄釘実測図(1)



第22図　小才１号墳出土鉄釘実測図(2)



第23図　小才１号墳出土鉄釘実測図(3)

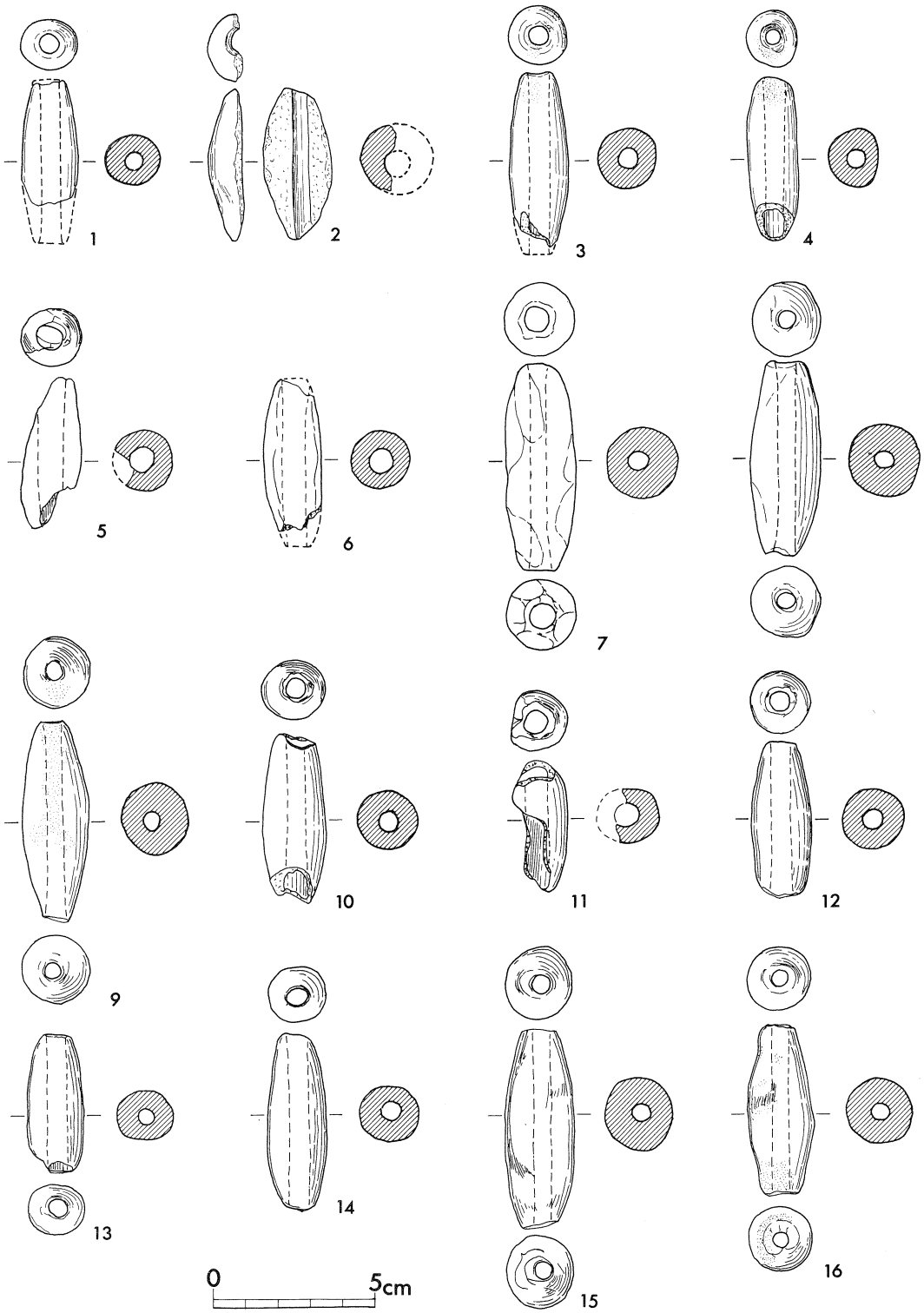
思われる。体部断面は長方形を呈し，頭部から２㎝下の部分での大きさは７×５㎜のものから４×３㎜のものまである。

Ⅱ類としたものは頭部の正面がバチ形，側面がノミ刃形に圧延されるのみで，折り曲げないものである。７本ある（12～18)。全長はⅠ類と同様に10㎝前後のもので，体部断面は４～５㎜を測る。なお，15・17は頭部の側面形が顕著なノミ刃形にならないもので，長さも８㎝あまりの短いものである。

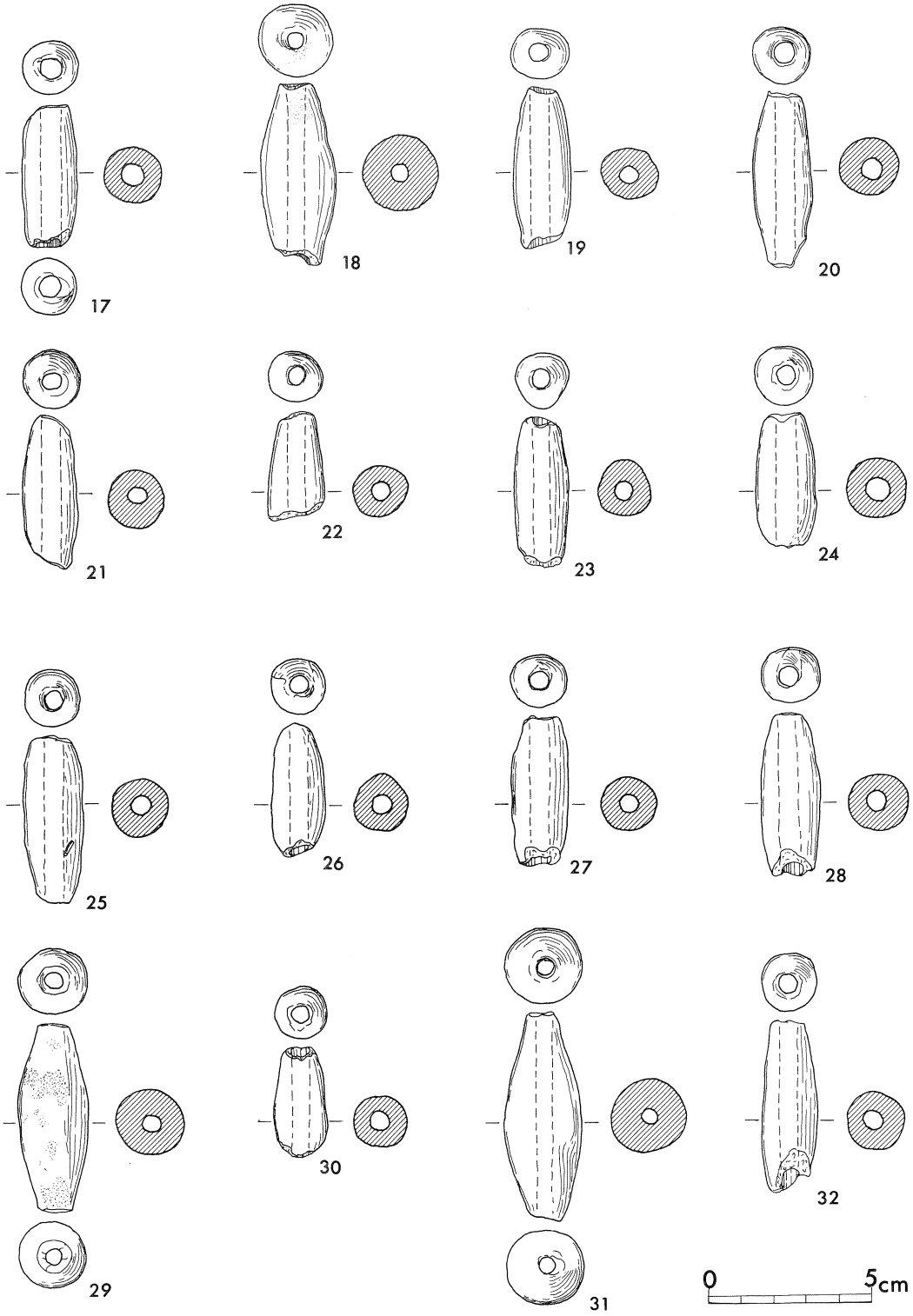
31は完存しているが全長3.9㎝，断面８×６㎜の短くて太いものである。頭部は先端部が厚くわずかに折れ曲がっている。34は体部がゆるく湾曲するものである。19～30，33は体部や先端部のみの欠損品であるが，断面の大きさや形状からするとⅠ類かⅡ類のいずれかになるものであろう。

第１表　小才１号墳出土鉄釘観察表

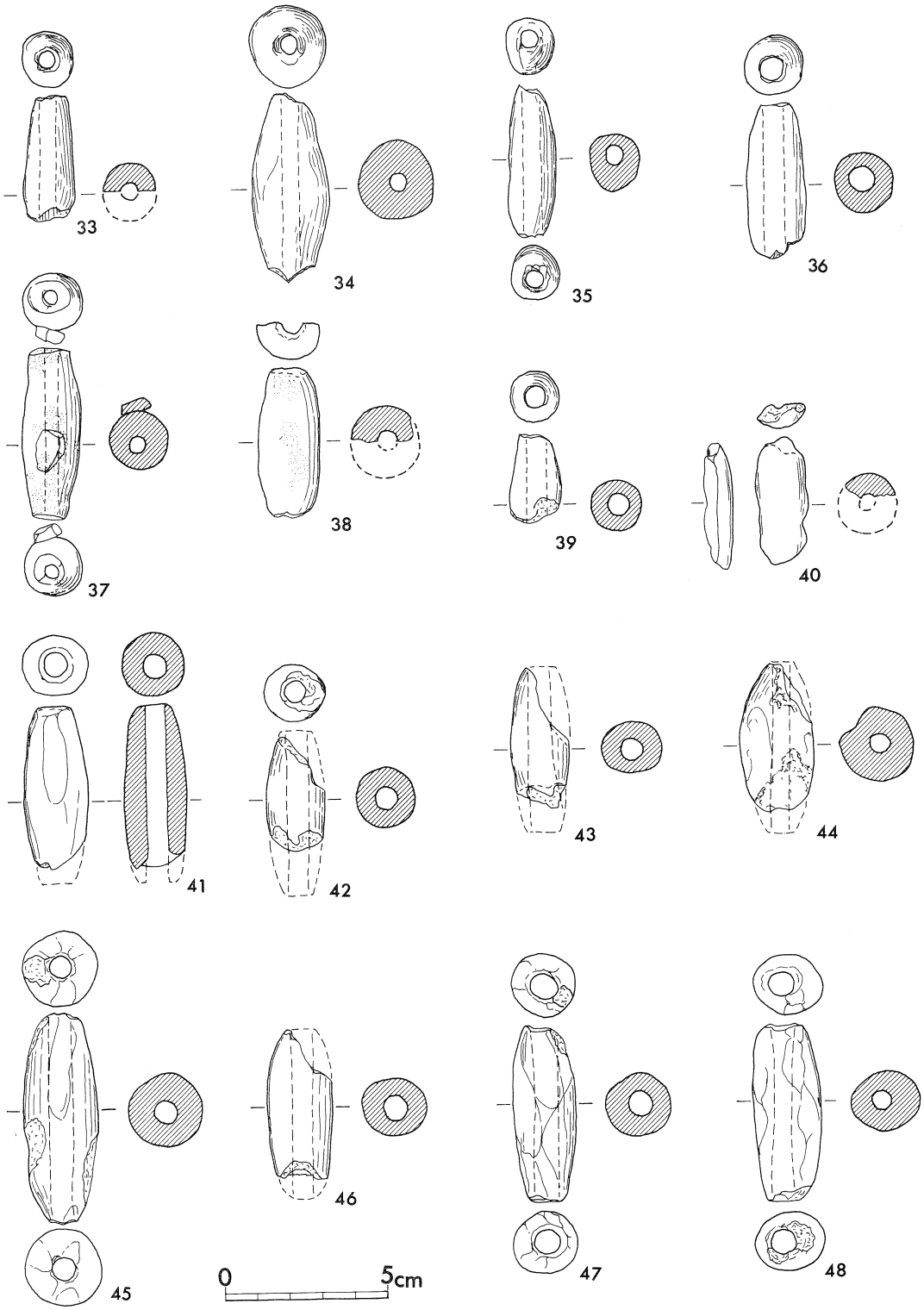
番号	全長(㎜)	体部断面(㎜)	遺存状態	頭部の形態	取上番号
1	105	5×3	完存	一端を薄く圧延した後、一方向に折り曲げて体部との境はくびれ込む	156
2	101	6×5	完存	一端を薄く圧延した後、一方向に折り曲げて体部との境はくびれ込む	154
3	98	6×4	完存	一端を薄く圧延した後、一方向に折り曲げて体部との境はくびれ込む	158
4	90	7×5	先端部を欠く	一端を薄く圧延した後、一方向に折り曲げて体部との境はくびれ込む	160
5	78	6×4	先端部を欠く	一端を薄く圧延した後、一方向に折り曲げて体部との境はくびれ込む	157
6	70	7×5	先端部を欠く	一端を薄く圧延した後、一方向に折り曲げるがくびれは不明瞭	162
7	39	5×4	下半を欠く	一端を薄く圧延した後、一方向に折り曲げるがくびれは不明瞭	148
8	98	4×3	完存	一端を薄く圧延した後、一方向に折り曲げて体部との境はくびれ込む	170
9	89	6×4	完存か	一端を薄く圧延した後、一方向に折り曲げて体部との境はくびれ込む	161
10	95	4×4	先端部を欠く	一端を薄く圧延した後、一方向に折り曲げるがくびれは不明瞭	126
11	85	4×3	先端部を欠く	一端を薄く圧延した後、一方向に折り曲げて体部との境はくびれ込む	171
12	100	4×4	完存	頭部を正面バチ形、側面ノミ刃形に圧延するのみで折り曲げない	172
13	98	4×3	完存	頭部を正面バチ形、側面ノミ刃形に圧延するのみで折り曲げない	159
14	96	5×4	完存	頭部を正面バチ形、側面ノミ刃形に圧延するのみで折り曲げない	151
15	80	4×5	完存か	正面はバチ形に圧延されているが、側面はノミ刃形にならない	165
16	77	4×3	完存	正面バチ形、側面ノミ刃形に圧延するのみで折り曲げない	169
17	71	3×4	先端部を欠く	正面はバチ形に圧延されているが、側面はノミ刃形にならない	153
18	71	5×4	完存	正面バチ形、側面ノミ刃形に圧延するのみで折り曲げない	152
19	104	5×3	頭部を欠く	不明	155
20	45	4×3	頭部・先端部を欠く	不明	123
21	31	4×4	頭部・先端部を欠く	不明	前庭部
22	29	3×3	頭部・先端部を欠く	不明	157
23	57	4×3	上半を欠く	不明	173
24	53	4×3	上半を欠く	不明	玄室内排土
25	34	4×3	先端部のみ遺存、他の釘の一部付着	不明	175
26	31	4×4	先端部のみ遺存	不明	164
27	68	4×3	頭部を欠く	不明	123
28	56	4×4	上半を欠く	不明	166
29	52	4×3	上半を欠く	不明	168
30	37	4×3	先端部のみ遺存	不明	167
31	39	8×6	完存	先端部は厚く、わずかに折れ曲がる	33
32	54	5×4	完存か	先端部はわずかに広がって折れ曲がる	174
33	32	4×4	頭部・先端部を欠く	不明	１６３
34	33	5×7	頭部・先端部を欠く	不明	玄室内



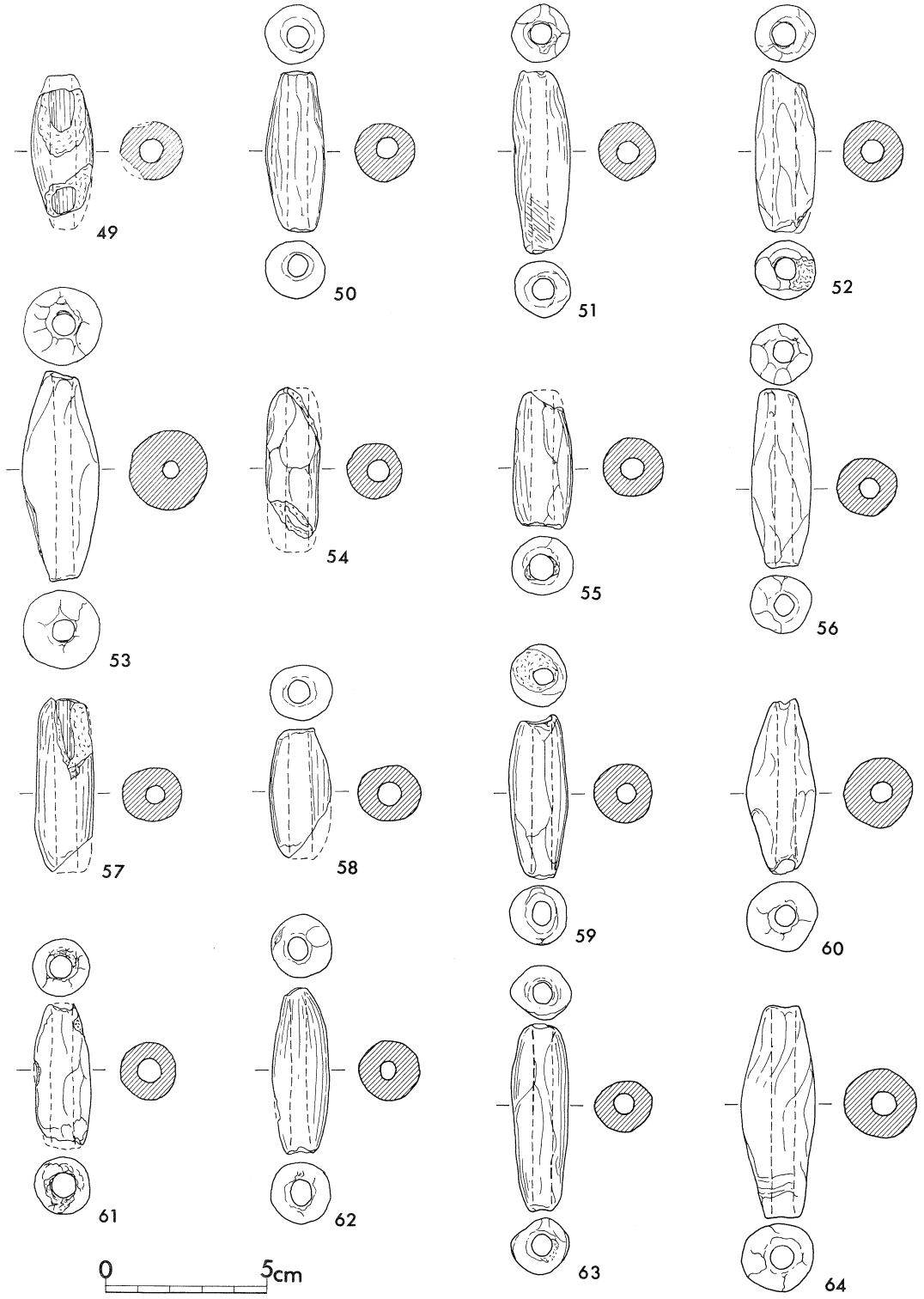
第24図　小才１号墳出土土錘実測図(1)



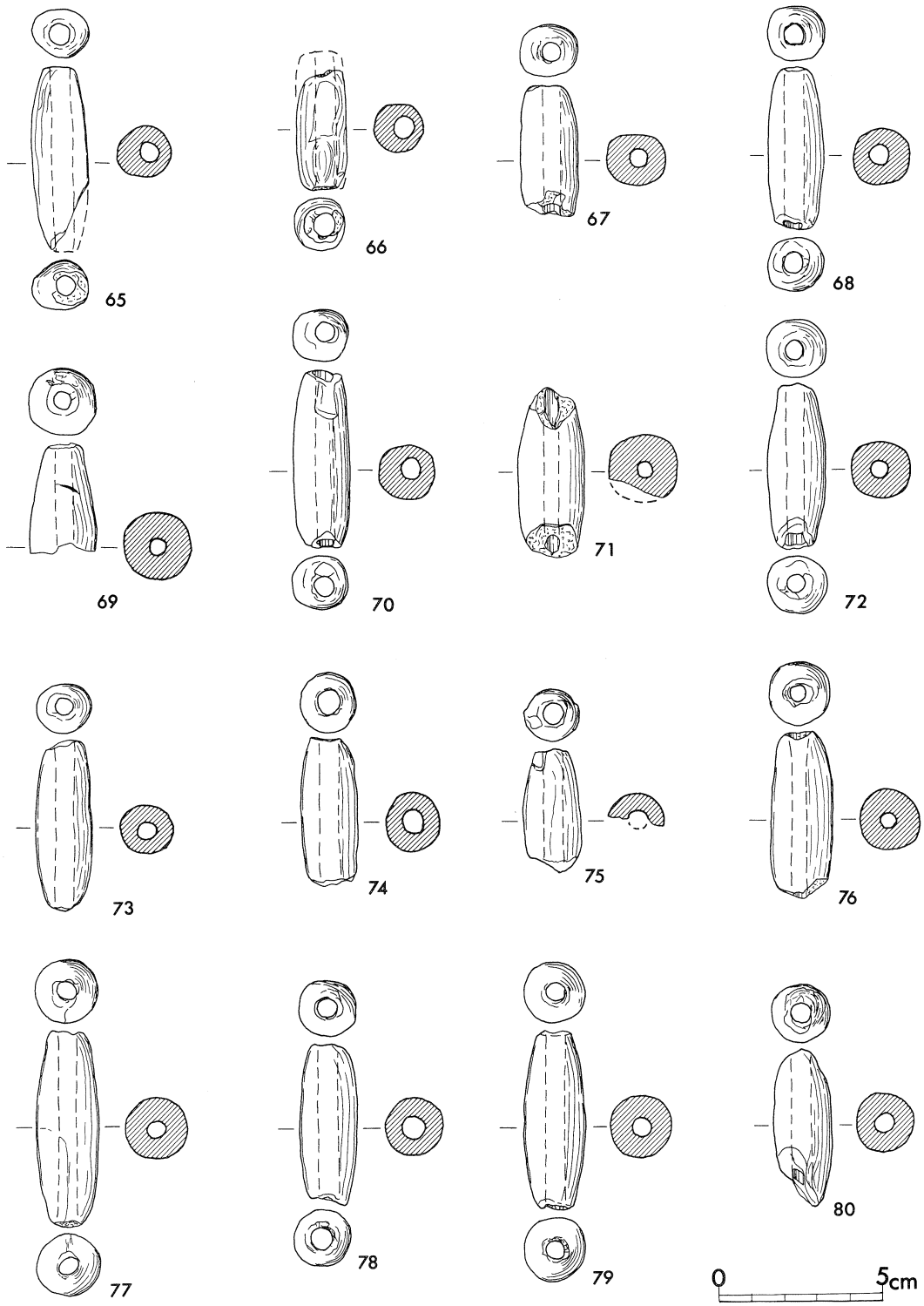
第25図　小才１号墳出土土錘実測図(2)



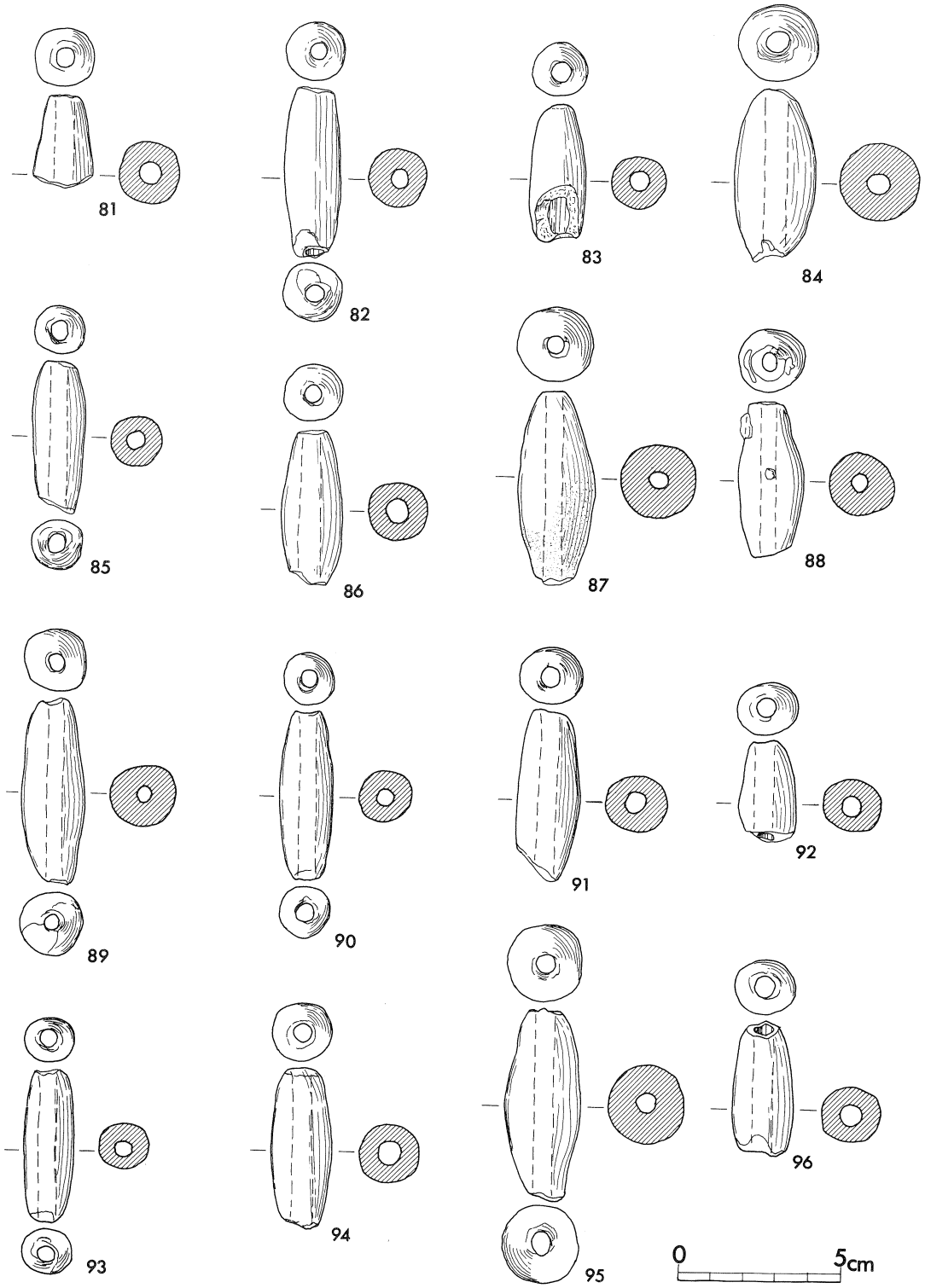
第26図　小才１号墳出土土錘実測図(3)



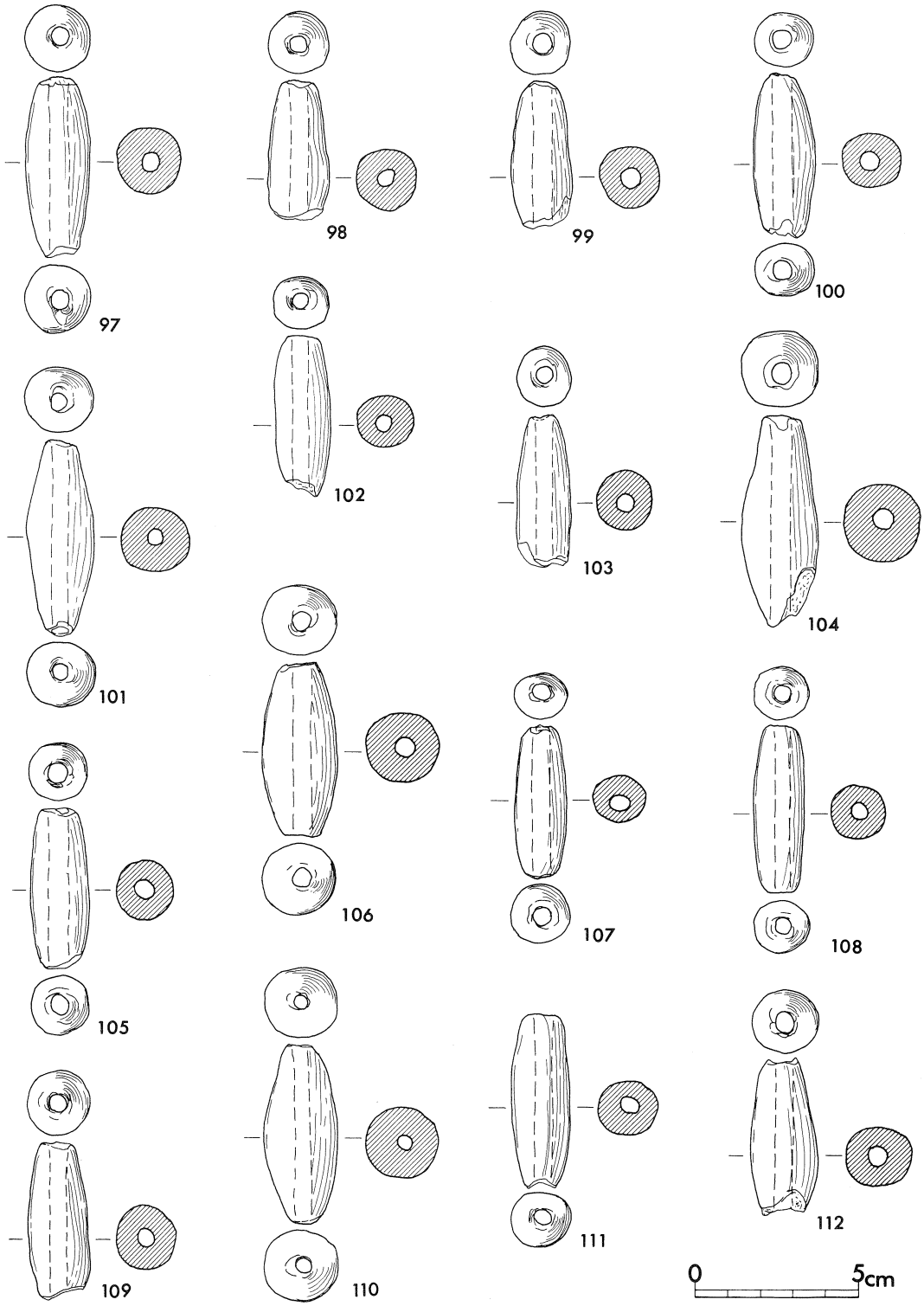
第27図　小才１号墳出土土錘実測図(4)



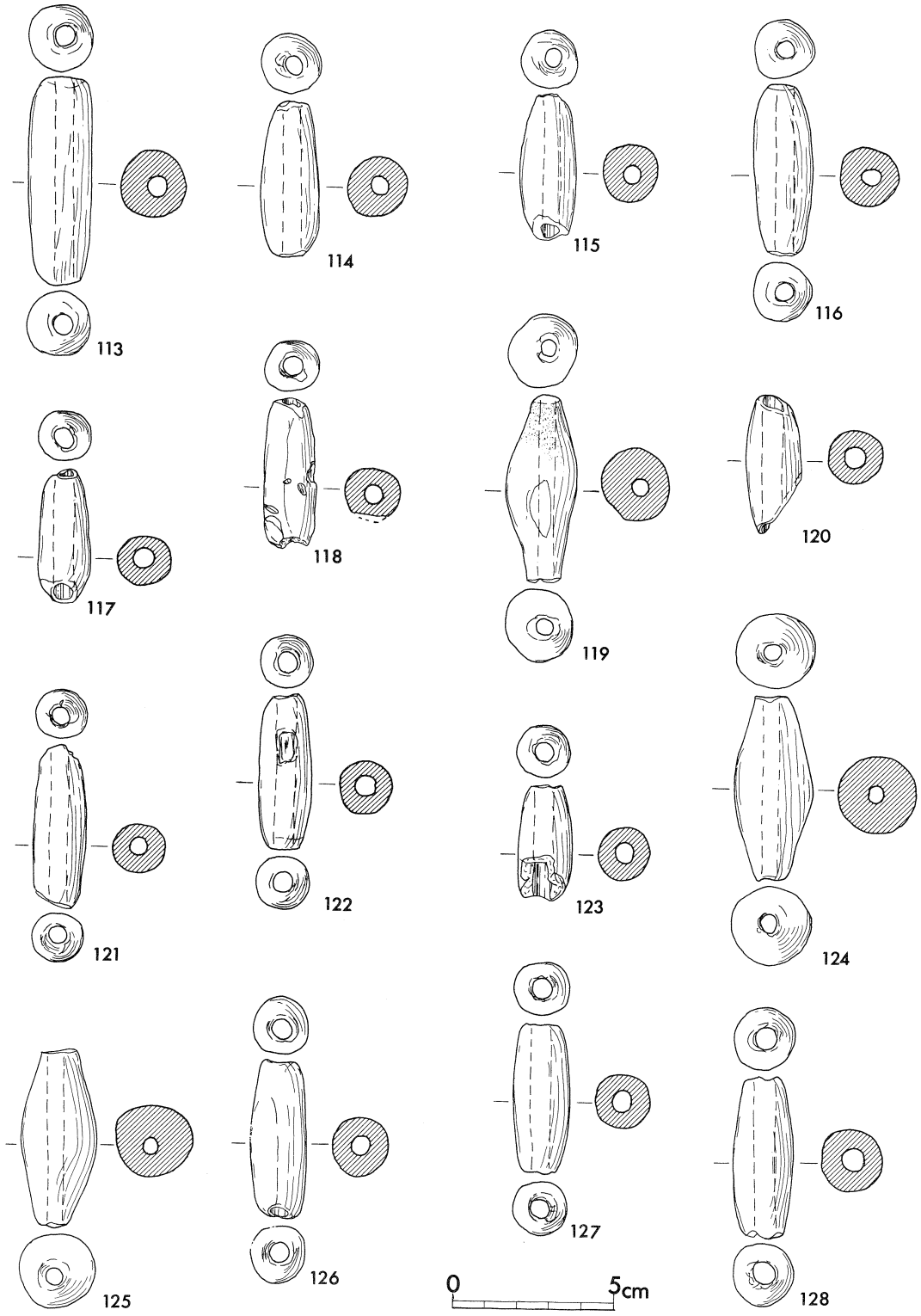
第28図　小才１号墳出土土錘実測図(5)



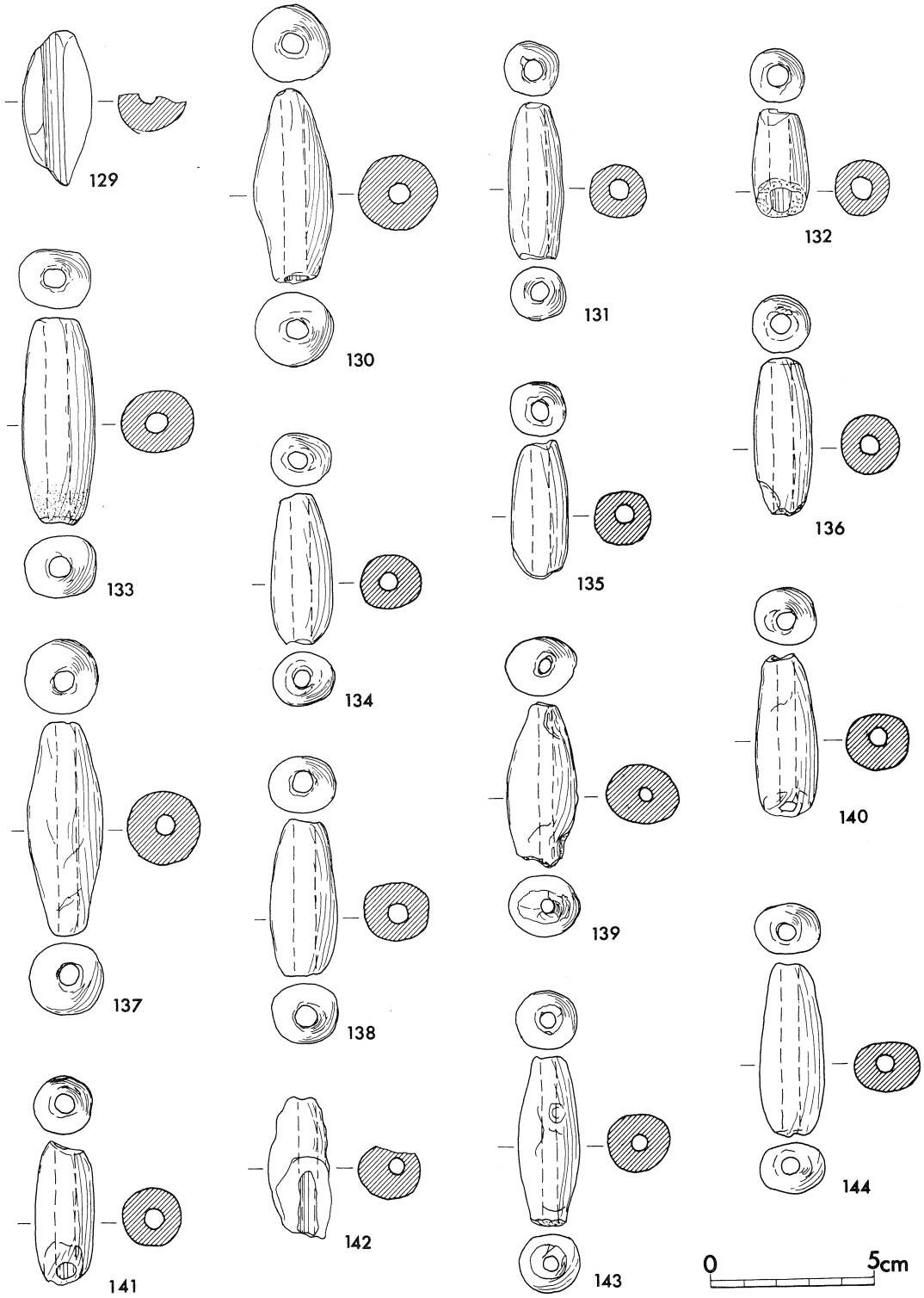
第29図　小才１号墳出土土錘実測図(6)



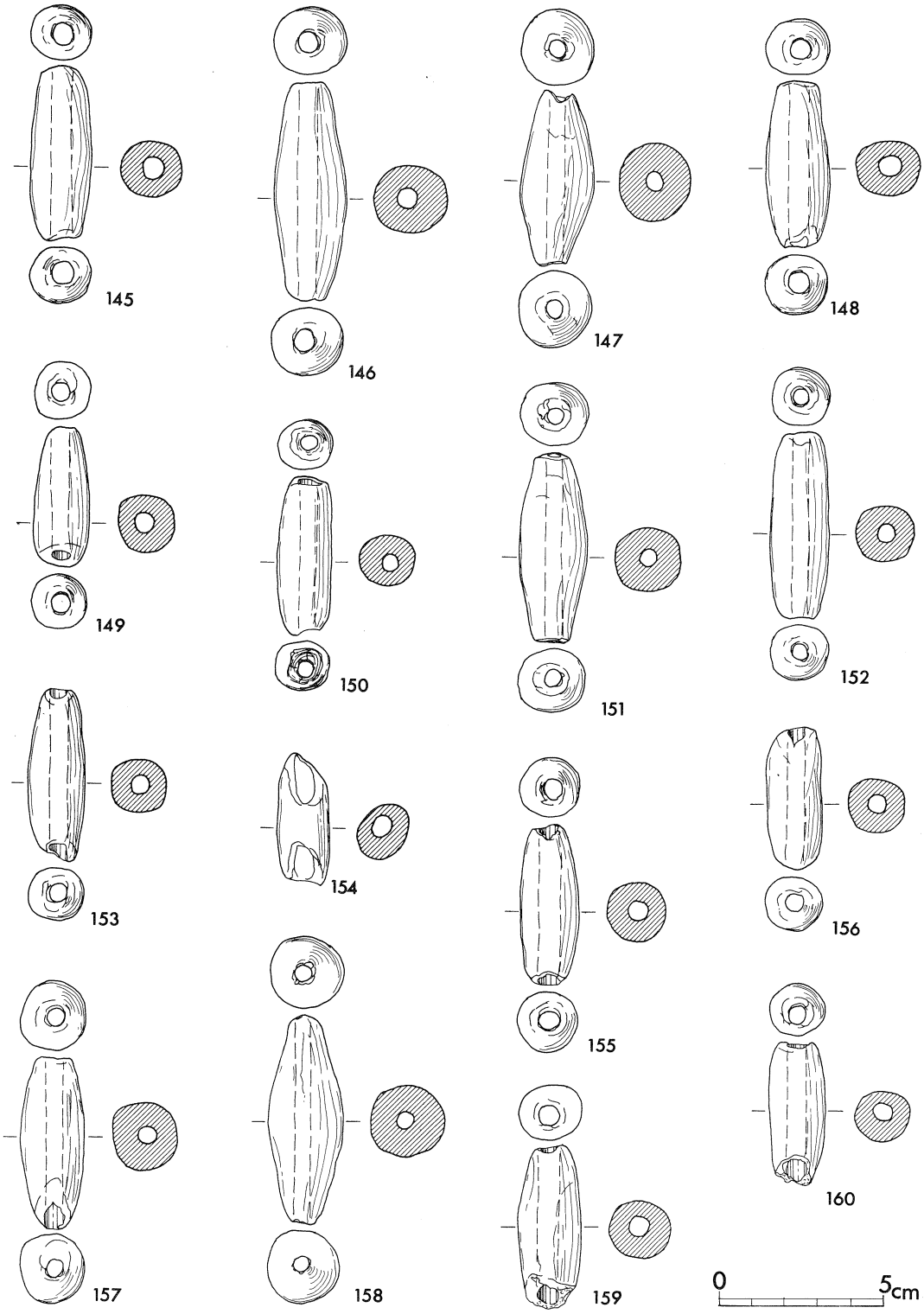
第30図　小才１号墳出土土錘実測図(7)



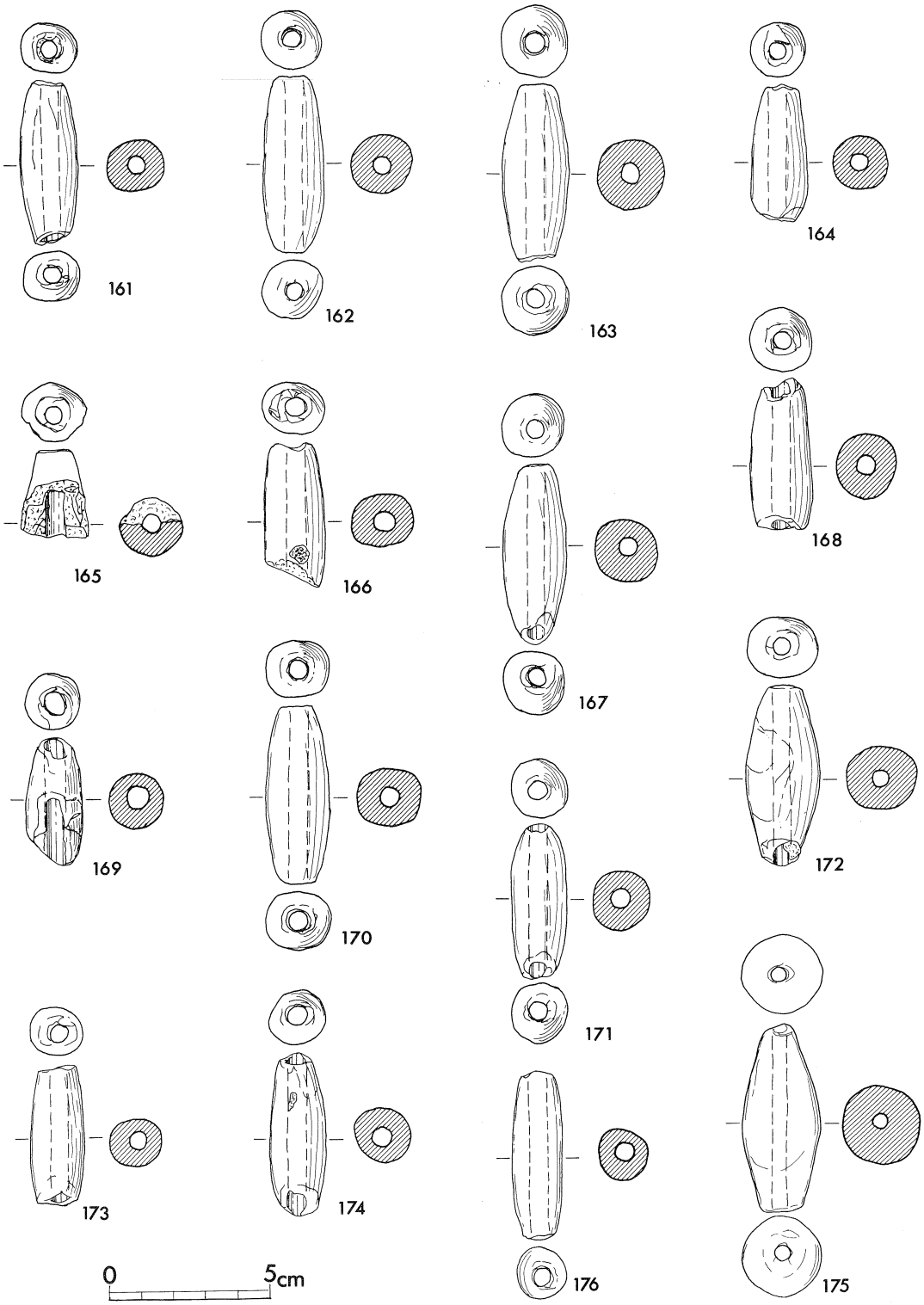
第31図　小才１号墳出土土錘実測図(8)



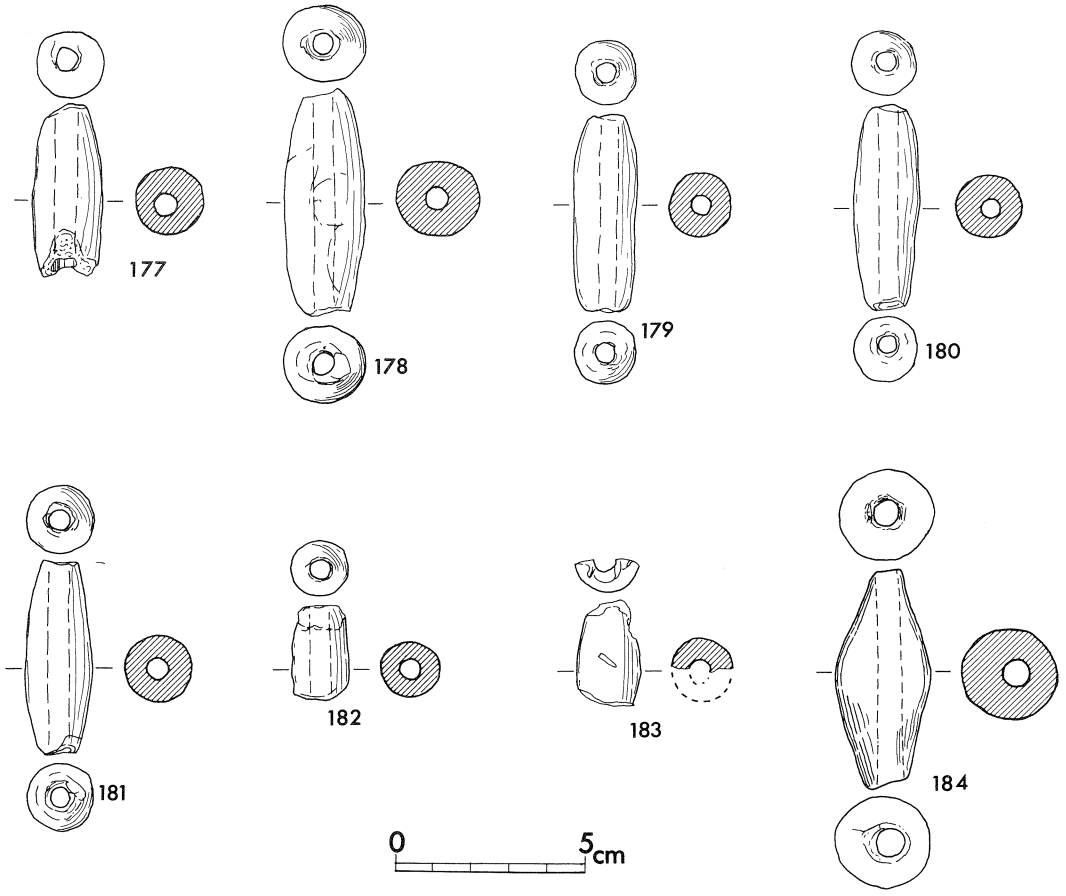
第32図　小才１号墳出土土錘実測図(9)



第33図　小才１号墳出土土錘実測図(10)



第34図　小才１号墳出土土錘実測図(11)



第35図　小才１号墳出土土錘実測図(12)

木目が付着しているものもみられるが，全体に遺存状態が悪く，細かな観察ができない。ただし，14・15・28は木目が頭部より付着し，それ以下先端にかけて縦方向に木目が走っているようにみえる。とすれば木棺材は厚さ3.3cm内外の板が用いられていたものと推測される。5・6・9は木目が頭部より先端に到るまで横方向に走るものである。

土錘（第24～35図，第２表　図版23～26）　184個出土している。形態は中央がふくらみ，両端が細くなるもの（第24図９など）と，円筒形に近い形状のもの（第25図17など）がある。長さは6.6cmから3.35cmのものまであり，平均5.2cmあまりある。最大径は2.95cmから1.25cmまであり，平均1.9cm，孔径は0.8～0.45cmで平均0.57cmある。重量は29.4ｇから7.7ｇのものまであり，平均15.9ｇである。大半が土師質のものであるが，須恵質のものが９点ある。土師質のものは１㎜大の砂粒を含み，淡黄白色～淡橙白色を呈す。須恵質のものは，胎土中にあまり砂粒を含まず，淡灰色を呈する。

（松本岩雄・三宅博士・錦織　弘）

第２表　小才１号墳出土土錘計測値表

（　　）は残存長

挿図No	最大長 cm	最大径 cm	孔径 cm	重量 g	焼　成	色　調	胎　土	取り上げNo	備　考
1	(3.95)	1.7	0.55	9.0	土師質・良好	灰肌色	１㎜大の砂粒含む	1	900426
2	4.7	2.05	0.5	7.7	土師質・良好	白肌色一部灰白色	１㎜以下の微砂粒含む	2	900426
3	5.3	1.85	0.55	14.2	土師質・良好	白肌色	２～４㎜大の砂粒をやや多く含む	3	900426
4	4.95	1.65	0.6	10.4	土師質・良好	白肌色	１㎜大の微砂粒やや含む	4	900426
5	(4.35)	1.85	0.7	8.8	土師質・良好	灰黄白色	２㎜大の砂粒を含む	8	900426
6	4.65	1.85	0.7	12.7	軟弱・土師質	うす橙色	緻密	9	900426
7	6.3	2.25	0.5	28.4	軟弱・土師質	うす橙色	緻密	10	900426
8	5.75	2.5	0.6	23.2	土師質・良好	淡黄茶色	１㎜大の砂粒を含む	29	900426
9	6.0	2.1	0.5	19.7	土師質・良好	黄白色	１～２㎜大の微砂粒含む	30	900426
10	5.28	1.85	0.55	15.0	土師質・良好	黄白色	１㎜以下の微砂粒含む	31	900426
11	(4.0)	1.6	0.65	7.7	土師質・良好	黄白色	２㎜大の砂粒わずかに含む	32	900426
12	4.8	1.9	0.6	13.7	土師質・良好	黄白色	２㎜大の砂粒わずかに含む	34	900508
13	(4.3)	1.6	0.5	9.1	土師質・良好	灰黄白色	１～３㎜大の砂粒をやや多く含む	41	900508
14	5.3	1.8	0.6	14.8	土師質・良好	黄白色	１㎜大の砂粒をやや含む	42	900508
15	6.0	2.2	0.6	24.8	土師質・良好	黄白色	１㎜大の砂粒を含む	43	900508
16	5.1	2.0	0.5	8.5	須恵質・良好	青灰白色	１㎜大の砂粒をやや含む	44	900508
17	4.35	1.7	0.6	10.2	土師質・良好	灰黄白色	１㎜大の砂粒をやや含む	45	900508
18	5.6	2.3	0.6	11.0	土師質・良好	黄白色	１㎜大の砂粒をわずかに含む	46	900508
19	4.9	1.8	0.6	11.4	土師質・やや良好	黄白色	１～２㎜大の砂粒含む	47	900508
20	(5.3)	1.8	0.6	12.4	土師質・良好	黄白色	１㎜大の砂粒を含む	48	900508
21	4.7	1.8	0.55	12.1	土師質・良好	黄白色	１～２㎜大の砂粒やや含む	49	900508
22	(3.35)	1.7	0.5	7.0	土師質・やや良好	黄白色	１～２㎜大の砂粒をやや多く含む	50	900508
23	4.65	1.75	0.55	11.6	土師質・良好	黄白色	１㎜大の砂粒やや多く含む（３㎜大もあり）	51	900508
24	4.15	1.85	0.7	12.4	土師質・良好	黄白色	１㎜未満の微砂粒やや含む	52	900508
25	5.05	1.75	0.55	14.7	土師質・良好	黄白色	１㎜大の砂粒含む	53	900508
26	(4.1)	1.7	0.6	8.8	土師質・良好	黄茶白色	１㎜未満の微砂粒含む（３㎜大のものもわずかに含む）	54	900508
27	4.5	1.8	0.6	12.2	土師質・良好	黄白色	１～３㎜大の砂粒やや多く含む	55	900508

挿図No	最大長 cm	最大径 cm	孔径 cm	重量 g	焼　成	色　　調	胎　　土	取り上げNo	備　考
28	4.9	1.8	0.6	12.8	土師質・良好	黄白灰色	1㎜大の砂粒をやや含む	56	900508
29	5.85	2.1	0.5	24.8	須恵質・良好	青灰白色	1㎜大の砂粒わずかに含む	57	900508
30	(3.35)	1.6	0.6	7.1	土師質・良好	灰黄白色	1～3㎜大の砂粒を含む	58	900509
31	6.5	2.3	0.5	27.0	土師質・良好	黄白色	1～2㎜大の砂粒をやや含む	59	900509
32	5.25	1.8	0.55	13.3	土師質・良好	黄白色	1㎜大の砂粒をやや含む	60	900509
33	(4.0)	1.55	0.6	7.8	土師質・良好	褐灰白色	2～3㎜大の砂粒やや含む	61	900509
34	5.7	2.5	0.5	23.7	土師質・良好	茶黄白色	1㎜大の砂粒やや含む	62	900509
35	4.7	1.7	0.5	11.2	軟弱・土師質	淡黄色	1㎜大の砂粒含む	63	900509
36	4.7	1.9	0.7	13.4	土師質・良好	淡黄色一部淡灰褐色	1㎜大の砂粒わずかに含む	64	900509
37	5.3	2.15	0.5	19.4	須恵質・良好	青灰色	緻密	65	900510
38	4.6	1.85	0.6		土師質・良好	淡灰茶色	緻密	66	900511
39	(2.6)	1.6	0.6		土師質				
40	(3.8)	1.8	0.5		土師質				
41	5.2	1.9	0.5	16.2	軟弱・土師質	うす橙色	緻密	5	900426
42	(3.6)	1.65	0.55	9.6	軟弱・土師質	うす橙色	緻密	6	900426
43	(4.3)	2.8	0.55	9.3	軟弱・土師質	うす橙色	緻密	7	900426
44	4.5	2.3	0.5	17.2	軟弱・土師質	うす橙色	緻密	11	900426
45	6.45	2.35	0.6	29.4	軟弱・土師質	うす橙色	緻密	12	900426
46	(4.7)	1.7	0.6	13.4	軟弱・土師質	うす橙色	緻密	13	900426
47	5.45	2.0	0.7	18.5	軟弱・土師質	うす橙色	緻密	14	900426
48	5.55	2.1	0.65	18.2	軟弱・土師質	うす橙色	緻密	15	900426
49	(3.95)	1.8	0.6	8.5	軟弱・土師質	淡灰茶色	緻密	16	900426
50	5.0	1.7	0.5	13.5	軟弱・土師質	淡灰茶色	1㎜大の砂粒含む	17	900426
51	5.6	1.75	0.55	15.6	軟弱・土師質	一部橙色が残存	緻密	18	900426
52	4.9	1.75	0.5	13.4	軟弱・土師質	淡黄色	緻密	19	900426
53	6.3	2.35	0.55	27.4	軟弱・土師質	一部橙色が残存	緻密	22	900426
54	(4.5)	1.6	0.6	9.0	軟弱・土師質	淡黄色	緻密	20	900426
55	4.2	1.8	0.6	11.7	軟弱・土師質	淡黄色	緻密	21	900426

挿図No	最大長 cm	最大径 cm	孔径 cm	重量 g	焼　成	色　調	胎　土	取り上げNo	備　考
56	5.45	1.8	0.6	14.7	軟弱・土師質	一部に橙色が残存	緻密	23	900426
57	5.35	1.8	0.55	12.7	軟弱・土師質	淡黄色	緻密	24	900426
58	(3.95)	1.85	0.6	10.2	軟弱・土師質	淡黄色	大小の砂粒を含む	25	900426
59	5.1	1.75	0.6	15.2	軟弱・土師質	淡黄色	大小の砂粒を含む	26	900426
60	5.45	2.1	0.65	17.0	軟弱・土師質	淡黄色	緻密	27	900426
61	(4.3)	1.75	0.65	11.0	軟弱・土師質	淡黄色	大小の砂粒を含む	28	900426
62	5.1	1.8	0.6	13.6	軟弱・土師質	淡黄色	緻密	36	900508
63	5.6	1.7	0.6	15.5	軟弱・土師質	淡黄色	緻密	37	900508
64	6.5	2.2	0.6	24.4	比較的良好・土師質	淡黄色	緻密	38	900508
65	5.55	1.7	0.6	13.8	軟弱・土師質	淡黄色	緻密	39	900508
66	(3.75)	1.6	0.63	8.2	軟弱・土師質	淡黄色	緻密	40	900508
67	4.0	1.8	0.6	11.3	土師質・やや良好	淡黄白色，淡灰色	密，1～2㎜大の砂粒をやや含む	67	900511
68	5.0	1.65	0.6	12.9	土師質・やや良好	淡黄白色，淡灰色	密，1～2㎜大の砂粒をやや含む	68	900511
69	3.35	1.95	0.55	13.6	須恵質・良好	淡青灰色	密，1～2㎜大の砂粒をわずかに含む	69	900514
70	5.35	1.6	0.55	14.6	土師質・良好	淡黄白色	密，1～2㎜大の砂粒をやや含む	70	900516
71	(5.05)	1.9	0.55	18.7	土師質・やや良好	濁淡黄白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	71	900516
72	4.95	1.7	0.6	12.8	土師質・やや良好	濁淡黄白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	72	900516
73	5.25	1.7	0.5	11.0	土師質・良好	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	96	900528
74	4.5	1.8	0.6	12.5	土師質・やや良好	淡黄白色	密，1～2㎜大の砂粒をやや含む	97	900528
75	(3.8)	1.75	0.5	6.4	土師質・やや良好	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	98	900528
76	5.07	1.73	0.55	15.4	土師質・良好	黄白色	密，1～3㎜大の砂粒やや含む	99	900528
77	5.83	1.85	0.5	17.0	土師質・良好	黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	100	900528
78	4.95	1.75	0.6	12.3	土師質・良好	淡橙白色，一部褐色	密，1㎜大の砂粒やや含む	102	900528
79	5.5	1.9	0.65	15.5	土師質・良好	黄白色	密，1㎜大の微砂粒わずかに含む	105	900529
80	4.7	1.7	0.55	11.4	土師質・やや良好	淡褐灰色・黄白色	密，1～3㎜大の砂粒やや含む	110	900529
81	(2.8)	1.95	0.65	7.0	土師質・やや良好	淡橙白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	114	900529
82	5.25	1.75	0.5	14.8	土師質・良好	淡黄白色，若干顆料様	1～2㎜大の砂粒含む	130	900605
83	(4.35)	1.75	0.55	10.1	土師質・良好	淡黄白色	密，1～2㎜大の砂粒やや含む	144	900605

挿図No.	最大長 cm	最大径 cm	孔径 cm	重量 g	焼　成	色　調	胎　土	取り上げNo.	備　考
84	5.4	2.5	0.55	15.8	土師質・良好	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	176	900605
85	4.75	1.7	0.6	11.5	土師質・良好	淡褐白色	密，1～3㎜大の砂粒やや含む	177	900605
86	4.8	1.85	0.5	13.3	土師質・良好	黄褐白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	178	900605
87	6.05	2.3	0.5	27.3	土師質・良好	淡黄白色	密，1㎜未満の微砂粒わずかに含む	179	900608
88	4.8	2.1	0.5	20.0	須恵質・良好	青灰色	密	180	900608
89	5.7	2.0	0.55	17.1	土師質・良好	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	181	900608
90	5.15	1.7	0.55	12.9	土師質・良好	淡黄白色	密，1㎜未満の微砂粒含む	182	900608
91	5.35	1.75	0.55	16.9	土師質・良好	淡黄灰色	密，1㎜大の砂粒含む	184	900608
92	(3.15)	1.7	0.6	7.3	土師質・良好	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	185	900608
93	4.8	1.5	0.6	10.4	土師質・良好	淡黄白色，淡灰褐色	密，1㎜未満の微砂粒含む	193	900608
94	4.9	1.8	0.6	14.3	土師質・良好	濁黄白色	密，1～2㎜大の砂粒やや含む	194	900608
95	5.9	2.5	0.6	25.6	土師質・良好	黄白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	195	900608
96	(4.2)	1.8	0.6	10.6	土師質・良好	褐白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	201	900611
97	5.5	2.05	0.55	19.7	土師質・良好	褐白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	202	900611
98	4.25	1.8	0.5	13.9	土師質・良好	黄茶白色・淡青灰色	密，1㎜未満の微砂粒わずかに含む	206	900611
99	4.4	1.9	0.5	12.2	土師質・良好	濁黄白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	207	900611
100	5.1	1.9	0.6	13.9	土師質・良好	淡黄白色・淡灰色	密，1～2㎜大の砂粒やや含む	84	900519
101	6.2	2.2	0.5	20.2	土師質・良好	黄白色	密，1㎜大の砂粒をやや含む	88	900522
102	5.1	1.25	0.5	14.6	土師質・良好	淡褐灰色	密，1～3㎜大の砂粒含む	90	900522
103	4.8	1.8	0.5	12.2	土師質・良好	茶白色	密，1～3㎜大の砂粒やや含む	129	900605
104	6.4	2.4	0.6	25.3	土師質・良好	淡黄白色	密，2㎜大の砂粒わずかに含む	186	900608
105	5.0	2.0	0.6	14.8	土師質・良好	淡黄灰色	密，1～2㎜大の砂粒含む	187	900608
106	5.5	2.35	0.6	21.4	土師質・良好	淡黄褐色	密，1㎜大の砂粒やや含む	188	900608
107	4.8	1.65	0.6	9.5	土師質・良好	淡灰色～淡黄白色	密，1㎜大の砂粒含む	189	900608
108	5.3	1.6	0.6	13.2	土師質・良好	黄白色	密，1～2㎜大の砂粒を含む	190	900608
109	(4.85)	2.95	0.5	16.0	土師質・良好	黄白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む（4㎜大の砂粒もあり）	191	900608
110	5.5	2.3	0.5	20.8	土師質・良好	暗黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	192	900608
111	5.4	1.85	0.5	15.6	土師質・良好	暗黄白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	196	900608

挿図No	最大長cm	最大径cm	孔径cm	重量g	焼　成	色　調	胎　土	取り上げNo	備　考
112	4.8	2.0	0.6	15.3	土師質・良好	暗黄白色	密，1～2㎜大の砂粒やや含む	197	900608
113	6.35	2.1	0.65	25.1	土師質・良好	茶白色	密	198	900608
114	4.8	1.95	0.55	14.4	土師質・良好	黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	199	900608
115	4.5	1.7	0.55	12.6	土師質・良好	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	200	900608
116	5.35	1.8	0.5	16.0	土師質・良好	淡橙黄白色	密，1～3㎜大の砂粒やや含む	203	900611
117	4.15	1.6	0.55	9.0	土師質・やや良好	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	204	900611
118	4.7	1.65	0.68	8.9	土師質・良好	淡黄白色	1㎜大の砂粒をやや含む	73	900519
119	5.88	2.3	0.55	21.8	土師質・良好	黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	74	900519
120	(4.35)	1.8	0.64	9.4	土師質・やや良好	淡黄白色～淡褐白色	密，1～2㎜大の砂粒やや含む	75	900519
121	4.96	1.65	0.5	12.0	土師質・良好	淡黄灰色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	76	900519
122	4.73	1.68	0.6	11.3	土師質・良好	淡橙白色，淡黄灰色	密，1～2㎜大の砂粒やや含む	77	900519
123	(3.65)	1.75	0.61	8.2	土師質・良好	淡黄灰色	密，1～2㎜大の砂粒わずかに含む	78	900519
124	5.67	1.35	0.6	23.1	土師質・良好	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	79	900519
125	5.6	2.48	0.5	22.0	土師質・良好	淡黄白色	密，1～2㎜大の砂粒わずかに含む	80	900519
126	5.0	1.85	0.52	14.1	土師質・良好	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒をやや含む	81	900519
127	4.6	1.7	0.65	11.6	土師質・良好	淡黄灰色，濁黄灰色	密，1～2㎜大の砂粒やや含む	82	900519
128	5.0	1.9	0.7	14.4	土師質・良好	淡黄白色～濁黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	83	900519
129	(4.8)	2.2	0.55	8.2	土師質・良好	淡黄白色～濁灰色	密，1㎜大及び未満の微砂粒わずかに含む	85	900519
130	5.95	2.4	0.6	24.6	土師質・良好	濁黄白色	1㎜大の砂粒やや含む	86	900519
131	5.0	1.7	0.6	12.3	土師質・やや良好	淡灰褐色	密，1～3㎜大の砂粒わずかに含む	87	900519
132	(3.3)	1.65	0.65	7.0	土師質・やや良好	淡灰褐色	密，1㎜大の砂粒含む	89	900522
133	6.5	2.35	0.65	26.2	土師質・良好	淡灰色～淡黄灰色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	103	900529
134	4.7	1.9	0.6	12.9	土師質・やや良好	濁黄白色	密，1㎜未満の微砂粒わずかに含む	111	900529
135	(4.4)	1.8	0.65	11.4	土師質・やや良好	やや濁黄白色	密，1～2㎜大の砂粒わずかに含む	131	900605
136	4.9	1.9	0.65	13.7	土師質・やや良好	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	132	900605
137	6.5	2.35	0.6	27.6	土師質・良好	濁黄白色	密，1㎜未満の微砂粒わずかに含む	133	900605
138	4.85	2.0	0.6	14.1	土師質・良好	淡赤黄白色	密，1㎜未満の微砂粒ごくわずか	134	900605
139	5.2	2.3	0.45	15.1	土師質・不良	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	135	900605

挿図No	最大長 cm	最大径 cm	孔径 cm	重量 g	焼　成	色　　調	胎　　土	取り上げNo	備　考
140	5.15	2.0	0.6	14.4	土師質・良好	淡黄白色，淡茶色，淡灰色	密，1㎜大の砂粒やや含む	136	900605
141	4.6	1.9	0.6	13.4	土師質・良好	淡黄白色	密，1～2㎜大の砂粒やや含む	137	900605
142	(4.5)	1.9	0.6	9.7	土師質・不良	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	138	900605
143	5.3	2.0	0.5	19.1	須恵質・良好	淡灰色	密	139	900605
144	5.45	1.9	0.5	16.7	土師質・良好	濁黄白色	密，1～2㎜大の砂粒わずかに含む	140	900605
145	5.35	1.8	0.8	16.4	土師質・良好	濁黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	141	900605
146	6.6	2.2	0.7	25.8	土師質・良好	淡黄灰白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	142	900605
147	5.3	2.3	0.5	18.4	土師質・良好	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	143	900605
148	5.2	2.0	0.7	15.2	土師質・良好	淡黄白色とやや淡灰色	密，1㎜大の砂粒やや含む	205	900611
149	4.4	1.9	0.6	11.3	土師質・良好	淡茶黄白色	密，1㎜大の砂粒やや多く含む	91	900525
150	4.95	1.7	0.45	11.9	土師質・良好	淡黄白色～淡灰白色	密，1㎜大の砂粒（3㎜のものも含む）	92	900525
151	5.8	2.0	0.5	21.2	須恵質・不良	淡青灰色，淡黄白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	93	900525
152	5.75	1.8	0.55	16.7	土師質・良好	淡茶黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	94	900525
153	5.3	1.8	0.5	13.3	土師質・やや良好	淡黄白色・淡茶黄白色	密，1㎜大の砂粒やや多く含む	95	900525
154	(4.1)	1.75	0.6	7.5	土師質・やや良好	明灰褐色	密，1㎜大の砂粒をやや多く含む	104	900529
155	5.0	1.95	0.6	13.8	土師質・良好	濁黄白色	密，1㎜大の砂粒をわずかに含む	106	900529
156	4.3	1.7	0.5	11.0	土師質・やや良好	淡黄白色	密，1～3㎜大の砂粒やや含む	123	900602
157	5.2	2.0	0.55	16.6	土師質・やや良好，焼成にムラあり	淡黄白色，淡灰色～淡灰白色	1㎜大の砂粒やや含む	124	900602
158	6.3	2.25	0.5	25.2	土師質・良好	淡黄白色・淡褐黄白色	密，1㎜大の砂粒を多く含む	125	900602
159	5.0	1.95	0.6	13.3	土師質・良好	濁黄白色	密，1㎜大の砂粒やや含む，3㎜大の砂粒もあり	127	900602
160	4.4	1.8	0.65	10.0	土師質・良好	淡褐黄白色	密，1㎜大の砂粒をやや含む	145	900605
161	5.0	1.7	0.5	12.0	土師質・良好	淡橙白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	101	900525
162	5.6	2.0	0.55	16.7	土師質・良好	暗黄白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	107	900529
163	5.7	2.25	0.7	20.0	土師質・良好	淡橙白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	108	900529
164	4.3	1.8	0.6	13.1	土師質・やや良好	淡橙白色～淡灰褐色	1㎜大の砂粒わずかに含む	109	900529
165	(2.8)	2.1	0.55	6.5	須恵質・不良	淡青灰色	密，1㎜未満の微砂粒わずかに含む	112	900529
166	4.5	2.0	0.55	10.9	土師質・やや良	淡橙白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	113	900529
167	5.5	2.0	0.55	16.0	土師質・良好	濁淡黄白色	1㎜大の砂粒わずかに含む	115	900529

挿図No	最大長 cm	最大径 mm	孔径 cm	重量 g	焼　成	色　調	胎　土	取り上げNo	備　考
168	4.5	1.85	0.55	14.7	土師質・やや良好	淡橙白色	密，1㎜大の砂粒やや含む	116	900529
169	(3.9)	1.8	0.65	7.2	土師質・良好	淡橙白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	117	900529
170	5.6	2.0	0.6	16.4	土師質・良好	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	118	900529
171	4.9	1.8	0.55	13.3	土師質・やや良好	淡褐色	密，1㎜大の砂粒やや多く含む	119	900530
172	5.65	2.2	0.55	18.8	須恵質・不良・ムラがあり	淡灰白色	密，1㎜大の砂粒わずかに含む	120	900530
173	4.35	1.7	0.55	10.0	土師質・やや不良	淡灰褐色	密，1㎜大の砂粒多く含む，3㎜大の砂粒も含む	121	900530
174	5.0	1.7	0.55	11.6	土師質・やや不良	淡灰褐色	密，1㎜大の砂粒多く含む，3㎜大もわずかに含む	122	900530
175	5.85	2.5	0.6	25.8	土師質・良好	淡黄白色	密，1㎜大の砂粒をやや含む	146	900605
176	5.2	1.6	0.6	10.7	土師質・良好	淡褐色～淡褐黄白色～淡黄白色	密，1㎜大の砂粒やや多く含む	147	900605
177	(4.5)	1.8	0.55	11.1	土師質・良好	淡黄白色	1㎜大の砂粒含む，5㎜大のものもあり	排1	900602
178	6.0	2.15	0.55	23.0	土師質・良好	淡黄白色一部淡茶褐色	緻密，1㎜未満の微砂粒やや含む	排2	900602
179	5.3	1.65	0.55	15.5	土師質・良好	淡黄白色	1㎜大の砂粒やや含む	排3	900508
180	5.4	1.7	0.5	15.2	土師質・やや良好，ムラがある	1/2淡灰褐色，1/2淡黄白色	1㎜大の砂粒やや含む	排4	900508
181	5.1	1.75	0.55	14.3	土師質・良好	淡黄灰褐色	1㎜大の砂粒やや含む	Ⅱ区前底部2	900509
182	(2.5)	1.5	0.55	5.0	土師質・やや良好	淡灰褐白色	1㎜大の砂粒含む	Ⅱ区前底部1	900509
183	(2.8)	1.7	0.6	3.7	土師質・良好	淡黄茶色	1㎜大の砂粒含む	石室前	900411
184	5.8	2.5	0.65	24.7	土師質・良好	淡黄茶色	1㎜大の砂粒含む	35	900508

2．小才2号墳

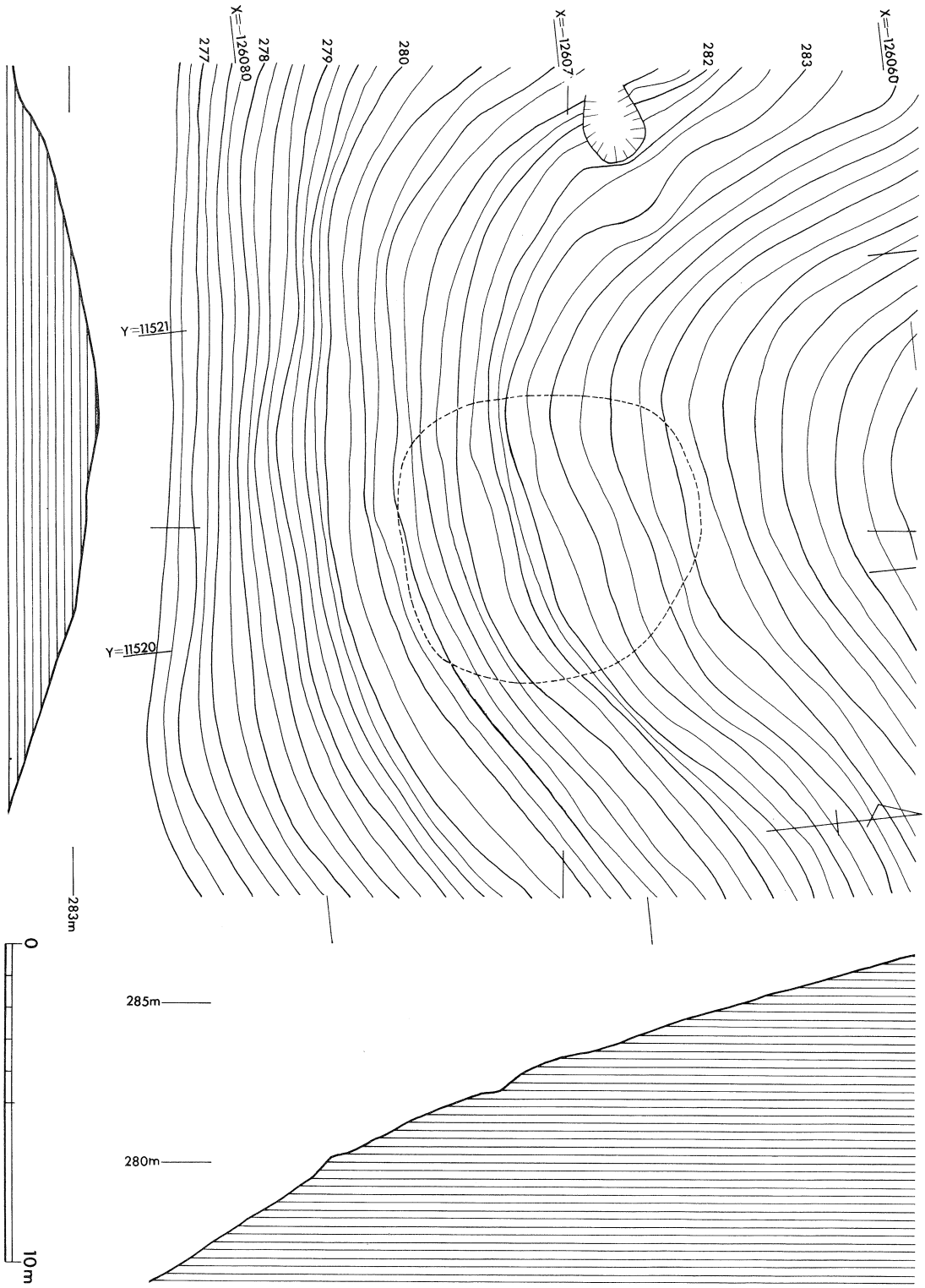
(1) 位　置

1号墳の南西方向約17mの地点に位置する。丘陵の南向斜面に築造されており，その地点は283mあまりである（第8・9図，図版27）。

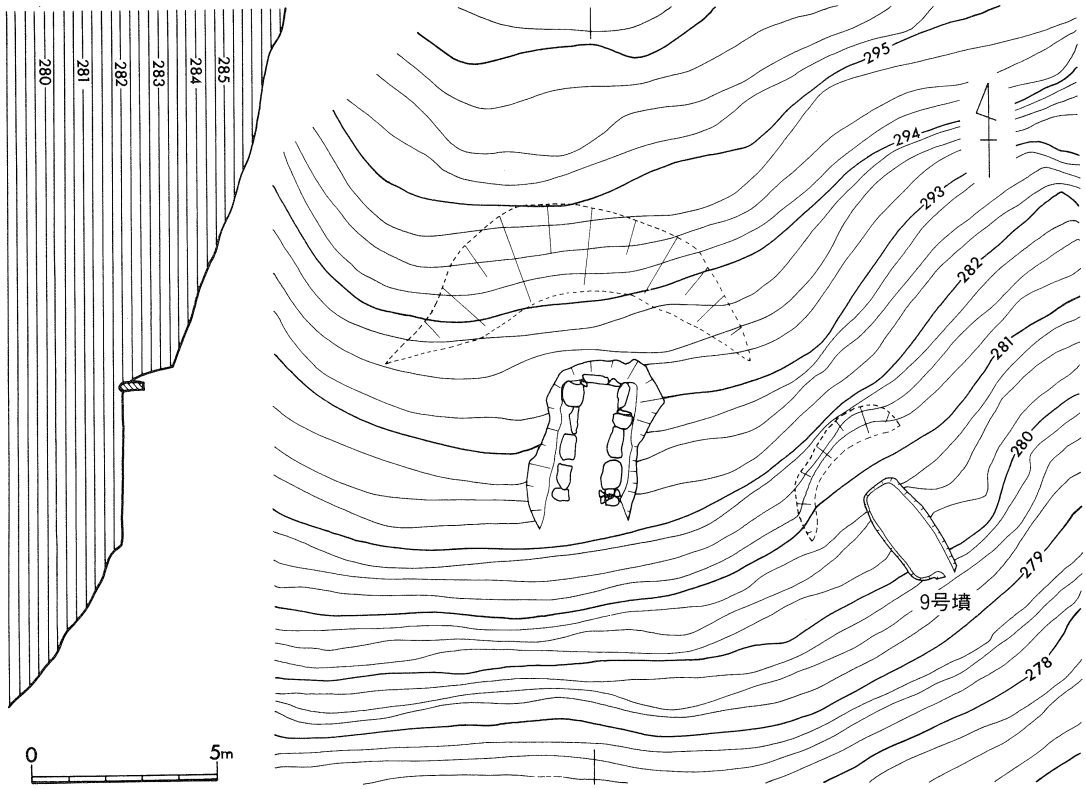
(2) 墳　丘

発掘前の状況は，封土がほとんど失われており，マウンド等を確認することができなかった。地形測量の結果，等高線がわずかに変化するところが観察されたため，径約9mの円墳ではないかと推定された（第36図）。この中心部には石室の天井石と思われる比較的大きな石材の一部が露出していた。

発掘調査の結果，土層の観察においては明確な盛土を確認することができなかった（第38図）。ただし，石室の北側（山側）には深さ20cm，幅約2m，長さ約8mの三日月形の地山切削の痕跡を



第36図　小才２号墳発掘前墳丘実測図



第37図　小才２号墳・９号墳発掘後墳丘実測図

検出した。この痕跡をもとに復元すると，径６～７ｍの円墳であったと思われる（第37・38図）。

(3)　内部構造

南方（谷側）に開口する無袖形の横穴式石室である。墳丘のほぼ中央に位置し，石室主軸はＮ－８°－Ｅを示す。石室の規模は以下のとおりである（第39図）。

［石室規模］

全長約3.2m　玄室推定長2.3m　奥壁幅1.0m　前幅0.9m　高さ1.25m

羨道推定長0.9m　羨門幅0.9m　高さ1.1m

石室は石英安山岩質火山砕屑岩，流紋岩質火山砕屑岩を積んで構築している。調査時には天井石がいずれも支えを失い，石室内に沈み込んでおり，石室内部には土砂が充満していた。そこで，石室の調査にあたっては１号墳と同様にまず天井石を取り外してから内部の土砂を除去する方法をとった。石室内に堆積していた土層の状況からは追葬があったかどうか判断できなかった。なお，遺物出土状況などからすれば追葬はなかったものと思われる。

平面形・床面　平面形は無袖形の狭長な石室である。奥壁と西壁はほぼ直角をなし，西壁の線は

石室主軸線とほぼ平行している。奥壁と東壁はわずかに鋭角を示しており，東壁は羨門にかけて次第に狭くなっている。したがって，平面形は羽子板形に近い形状をなしている。明確な玄室・羨道の区別はないが，閉塞石・床面・東西側壁などの状況からすると，奥壁から約2.3mの位置までが玄室として意識されていたものと考えられる。すなわち，床面は奥壁から約2.3mの間はほぼ水平面（標高約282m）を保ち，そこから南側にかけてはゆるやかに傾斜している。また両側壁の積み方も，基底部の石をみた場合，奥壁から3個目の石までとその南側とでは若干異なっている。

玄室床面には20～25cm大の石が4個置かれていた。奥壁側に2個，そこから約70cm隔てたところに2個置かれていた。配置状況からすると，木棺を安置するための台として使用されていたものと思われる。奥壁側の2個の石の頂部が羨門側の2個の石の頂部のレベルよりやや高くなっており，この上に木棺を置くと羨門側に傾斜した状態になる。なお，石室内からは鉄釘が1本も出土しておらず，1号墳の木棺とは構造が異っていたものと思われる。

閉塞施設　閉塞は奥壁から約2.6mの位置に認められた。20～30cm大の自然石を積み上げたものである。閉塞施設の基底部幅は50cm内外で，2～3段にわたって粗雑に積み上げてあった（第40図，図版28－2）。

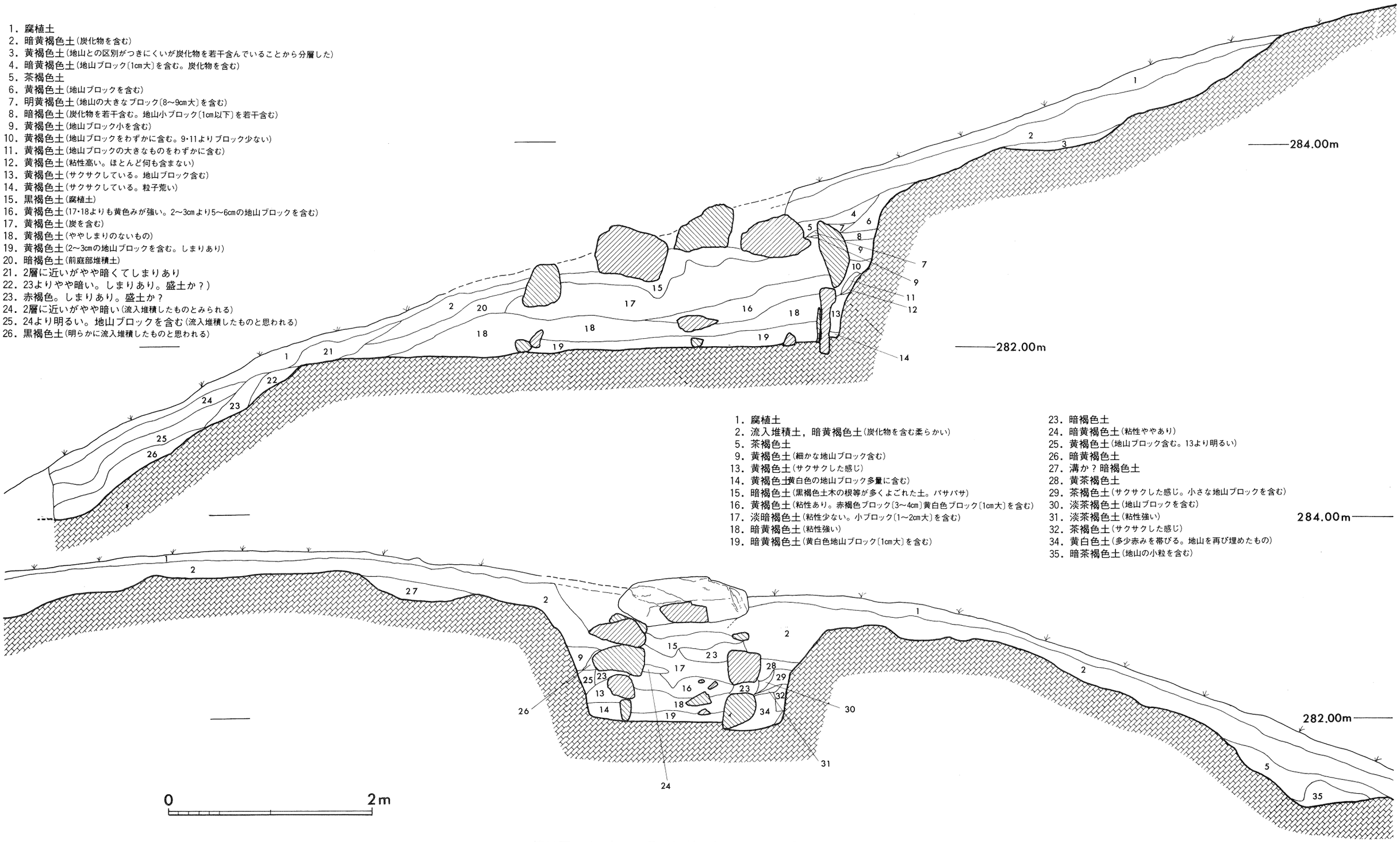
奥壁　奥壁基底部は，幅約70cm，高さ約70cmの比較的大形の石を西壁寄りに据え，その東側に幅約30cm，高さ約70cmの長方形の石を立てている。この2個の石は床面の地山を約10cm，掘りくぼめて据えている。この上に幅90cm，高さ65cmの石を置いて奥壁部を構成している。奥壁部の天井石はずれ落ちているが，奥壁の状況から推定すると，玄室奥壁部の高さは1.25mあまりである。

側壁との石組みの関係は，西側では奥壁の石が外に出るように，東側では奥壁の石が側壁の内側に入り込むように構築されている（第39図，図版31）。

西壁　西壁は基底部にやや大形の石を腰石状に据えている。これらは基本的に広い平坦面を内側にそろえるようにして設置されており，その面はわずかに内傾している。奥壁から3個目の石までは，上部をほぼ同レベルにそろえてそれぞれ接するように据えているが，4個目の石はやや粗雑に置いている。羨門部の石（5個目の石）は門柱状に立てている。二段目から上は，やや小形の石を小口積にしているが，顕著な持ち送りはみられない。石のすき間には小形の石を充塡しているが，裏側の控え積はほとんど行われていない（第39図，図版31－1）。

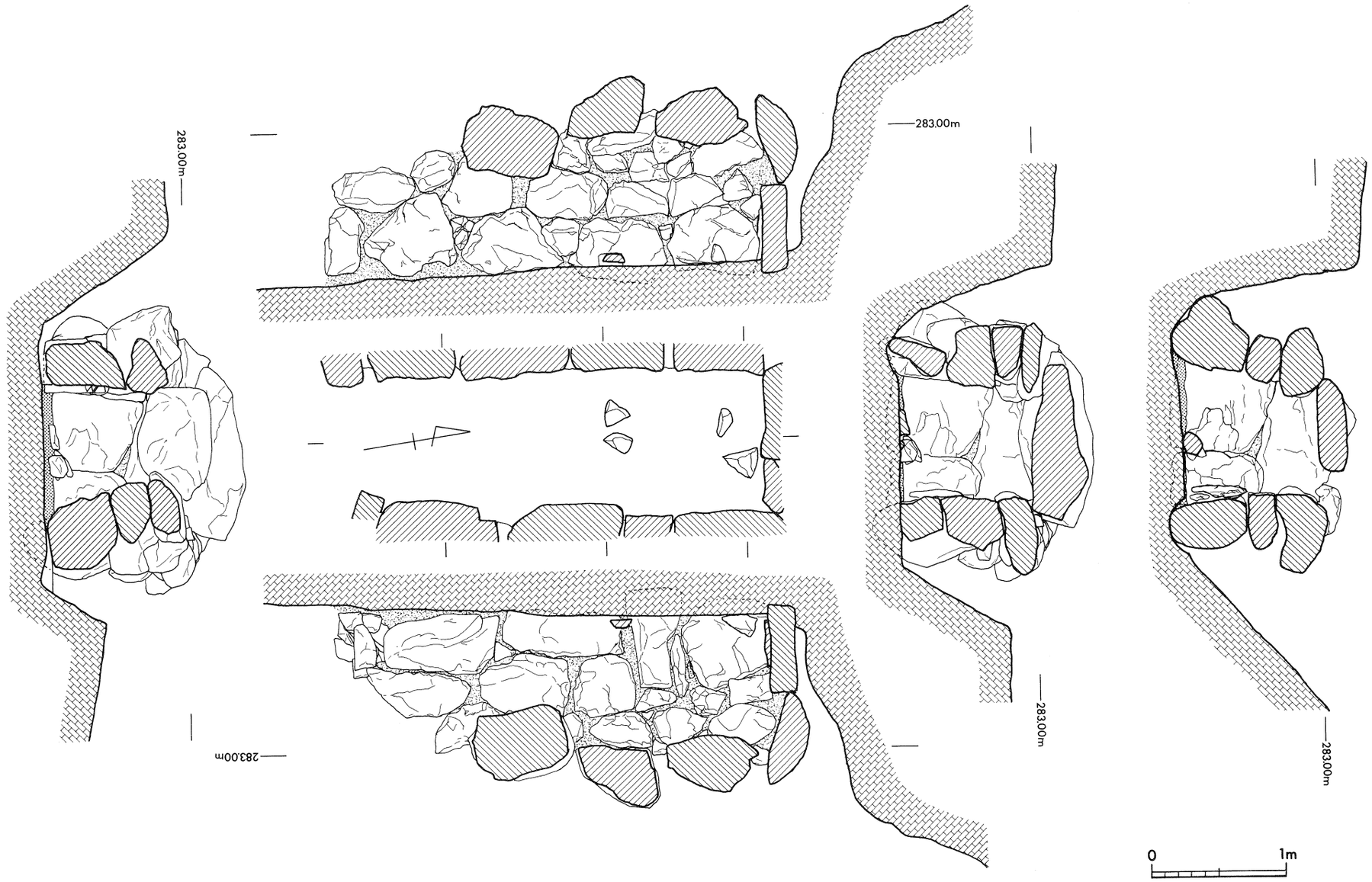
東壁　基本的には基底部にやや大形の石を腰石状に据えているが，西壁に比べるとやや雑然としている。すなわち，奥壁から2個目の石は短辺が天地にくるように立てているうえ，基底部の石の上面のレベルは4個とも異なっている。これらは基本的に広い平坦面を内側にそろえるようにして設置されており，その面はわずかに内傾している。羨門部の石は門柱状に立て，そこから直角に東側に向けて2個の石が外護列石状に置かれている（第40・41図，図版28－2）。

1．腐植土
2．暗黄褐色土（炭化物を含む）
3．黄褐色土（地山との区別がつきにくいが炭化物を若干含んでいることから分層した）
4．暗黄褐色土（地山ブロック〔1cm大〕を含む。炭化物を含む）
5．茶褐色土
6．黄褐色土（地山ブロックを含む）
7．明黄褐色土（地山の大きなブロック〔8～9cm大〕を含む）
8．暗褐色土（炭化物を若干含む。地山小ブロック〔1cm以下〕を若干含む）
9．黄褐色土（地山ブロック小を含む）
10．黄褐色土（地山ブロックをわずかに含む。9･11よりブロック少ない）
11．黄褐色土（地山ブロックの大きなものをわずかに含む）
12．黄褐色土（粘性高い。ほとんど何も含まない）
13．黄褐色土（サクサクしている。地山ブロック含む）
14．黄褐色土（サクサクしている。粒子荒い）
15．黒褐色土（腐植土）
16．黄褐色土（17･18よりも黄色みが強い。2～3cmより5～6cmの地山ブロックを含む）
17．黄褐色土（炭を含む）
18．黄褐色土（ややしまりのないもの）
19．黄褐色土（2～3cmの地山ブロックを含む。しまりあり）
20．暗褐色土（前庭部堆積土）
21．2層に近いがやや暗くてしまりあり
22．23よりやや暗い。しまりあり。盛土か？）
23．赤褐色。しまりあり。盛土か？
24．2層に近いがやや暗い（流入堆積したものとみられる）
25．24より明るい。地山ブロックを含む（流入堆積したものと思われる）
26．黒褐色土（明らかに流入堆積したものと思われる）

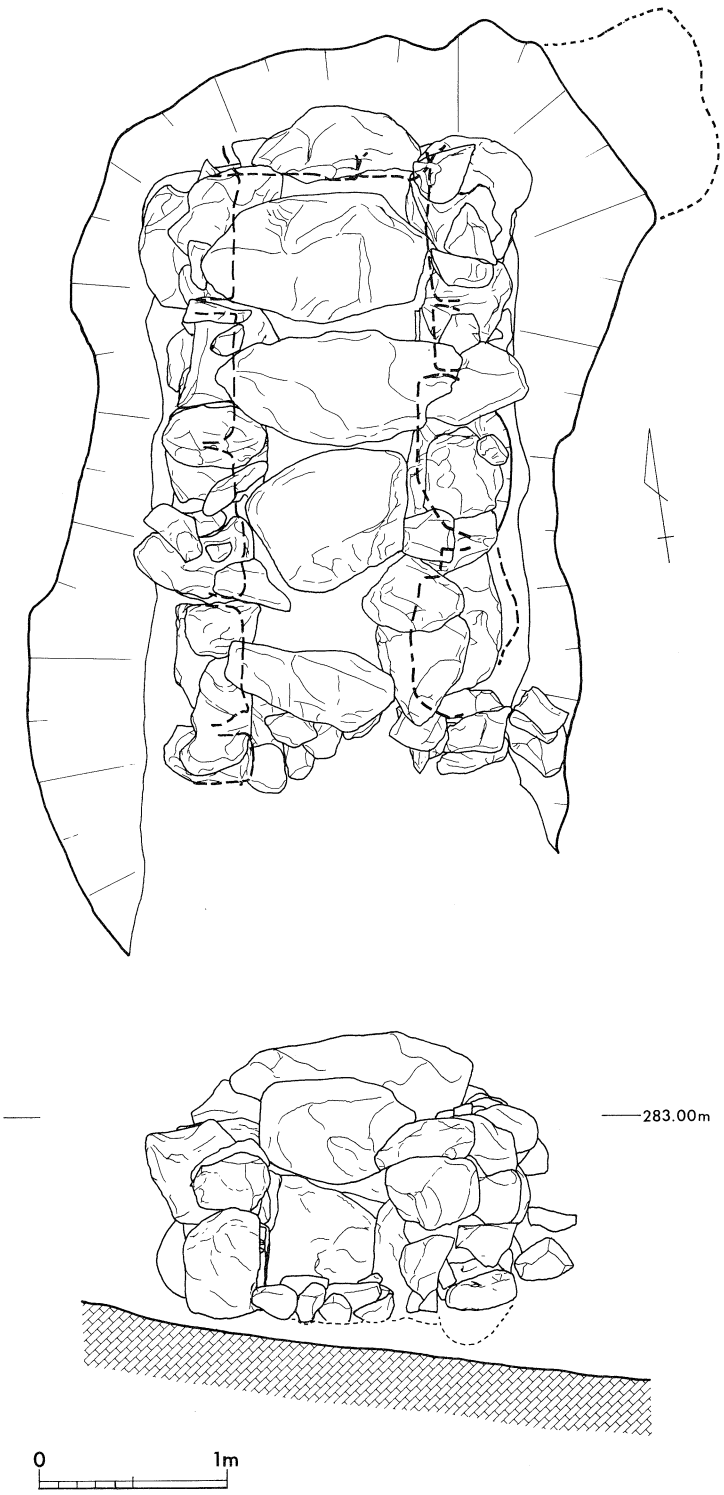


1．腐植土
2．流入堆積土，暗黄褐色土（炭化物を含む柔らかい）
5．茶褐色土
9．黄褐色土（細かな地山ブロック含む）
13．黄褐色土（サクサクした感じ）
14．黄褐色土（黄白色の地山ブロック多量に含む）
15．暗褐色土（黒褐色土木の根等が多くよごれた土。パサパサ）
16．黄褐色土（粘性あり。赤褐色ブロック〔3～4cm〕黄白色ブロック〔1cm大〕を含む）
17．淡暗褐色土（粘性少ない。小ブロック〔1～2cm大〕を含む）
18．暗黄褐色土（粘性強い）
19．暗黄褐色土（黄白色地山ブロック〔1cm大〕を含む）
23．暗褐色土
24．暗黄褐色土（粘性ややあり）
25．黄褐色土（地山ブロック含む。13より明るい）
26．暗黄褐色土
27．溝か？暗褐色土
28．黄茶褐色土
29．茶褐色土（サクサクした感じ。小さな地山ブロックを含む）
30．淡茶褐色土（地山ブロックを含む）
31．淡茶褐色土（粘性強い）
32．茶褐色土（サクサクした感じ）
34．黄白色土（多少赤みを帯びる。地山を再び埋めたもの）
35．暗茶褐色土（地山の小粒を含む）

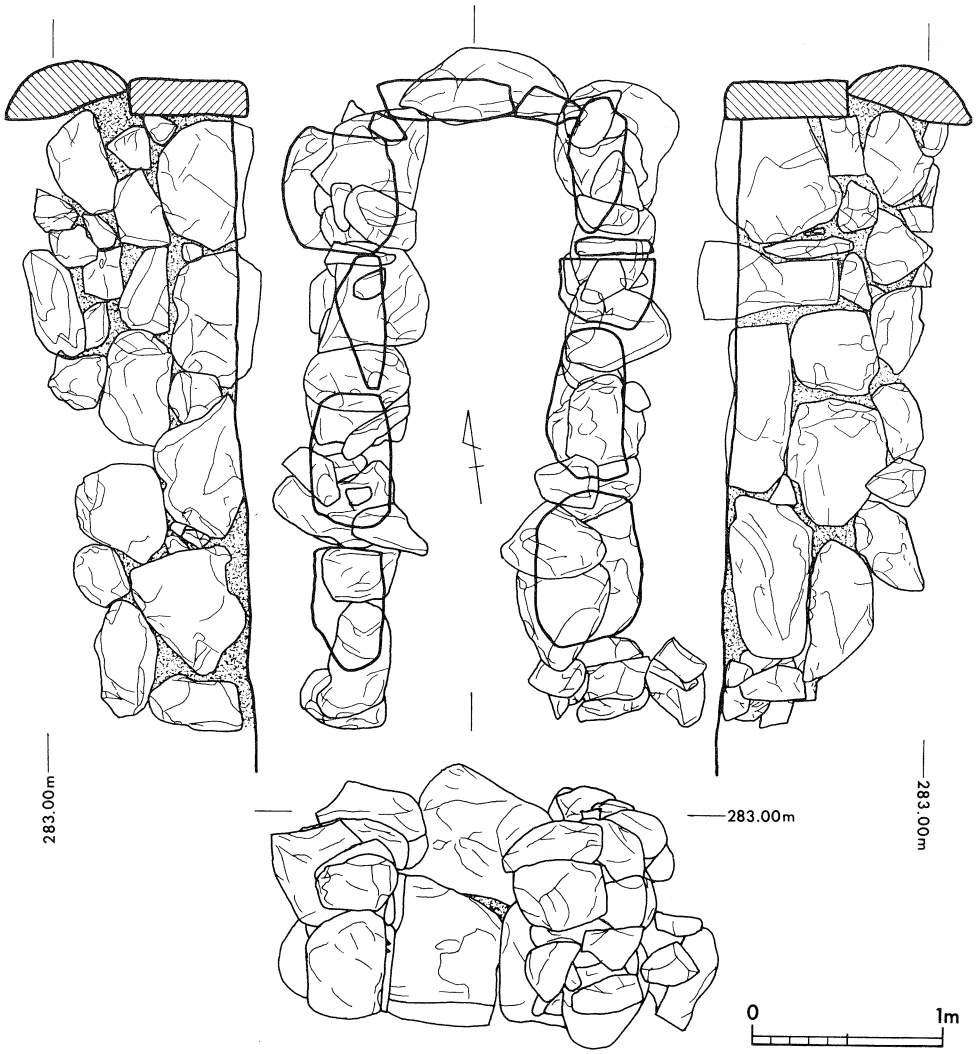
第38図　小才2号墳墳丘・石室内土層断面図



第39図　小 才 2 号 墳 石 室 実 測 図 (1)



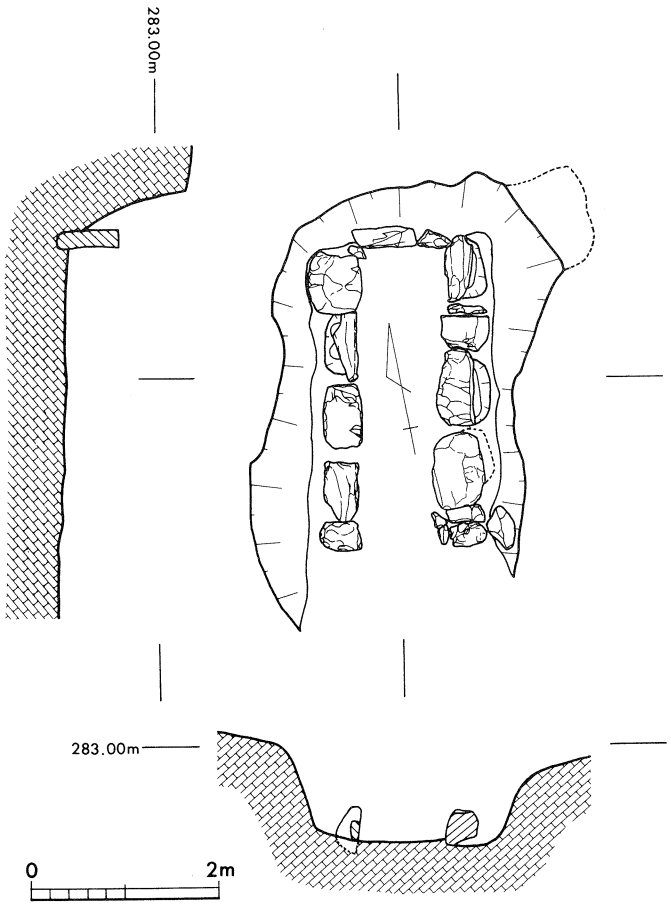
第40図　小才２号墳石室実測図(2)



第41図　小才２号墳石室実測図(3)

二段目から上は，やや小形の石を小口積みにし，すき間には小石を充塡している。控え積はほとんど行われていない。

天井石　大形の石が３枚，小形の石が１枚認められた。大形石（長さ130～90cm，幅75～60cm，厚さ50～40cm）は玄室に架けられたものであるが，いずれも原位置を保っているものはなく，わずかずつ動いているものと判断された。小形の石（長さ100cm，幅35cm，厚さ40cm）は羨道の天井石と考えられるもので，西側は完全に石室内へ落ち込んでいた。最も遺存状態の良好な奥壁・側壁の高さから推定すると玄室の高さは1.25m，羨道の高さは1.1mあまりであったと思われる（第39・40図，図版28－１，図版31－３）。



第42図　小才２号墳石室実測図(4)

掘り方　南に開口した「コ」の字形を呈するもので，幅３m，長さ4.7mある。地山に掘り込んだもので奥壁部分が最も深く急角度（約75度）に掘り込まれている。東壁，西壁ともに南に行くにしたがって浅くなる。１号墳ほど顕著ではないが，東壁中央部から南側にかけては西壁より低くなっており，石室を構築する際に主にこのあたりから石材を搬入したものと思われる。掘り方床面には，石室基底部の石を設置するための掘り込みが認められた（第43図，図版32－３）。

石室構築方法の復元　掘り方の形状や石室裏込め土などの観察からすれば，石室構築の方法はおおよそ次のように復元できる。

① 掘り方を「コ」の字形に掘る。この場合東壁の高さは低くしておき，石材を搬入し易くしておく。

② 掘り方床面に基底部の石を配置するプランを描く。

③ 奥壁基底部の石を設置する。

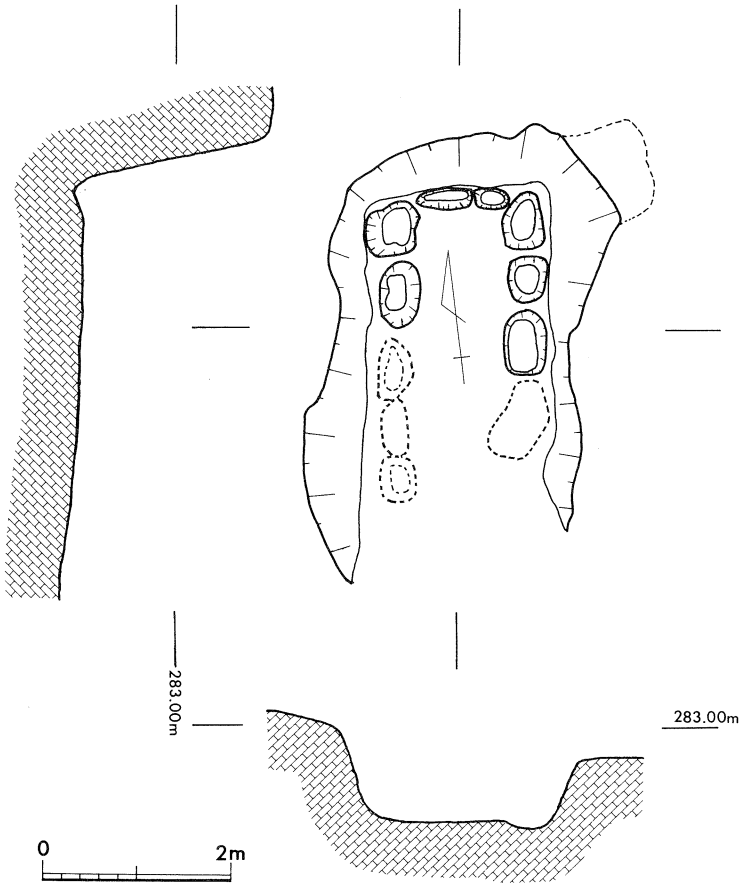
④ 西壁の基底部の石を上面の高さをそろえるようにして設置する。

⑤ 東壁基底部の石を設置する。

⑥ 基底部の石の上面まで裏込土（地山を掘り返した土とみられる黄褐色土，茶褐色土などを互層状に入れる）を詰めた後，二段目の石を搬入して積み上げる。

⑦ 以下，その繰り返しを行いながら三段目，四段目の石を逐次搬入して石室を構築していく。

⑧ 天井石を架構するまでは幾層にもわたって土を詰め込む（第38図，図版33）。



第43図　小才２号墳石室掘り方実測図

⑨　天井石架構後は大量の土（第38図，第２層）を一気に入れるとともに墳丘に盛土を行う。

(4)　遺物出土状況

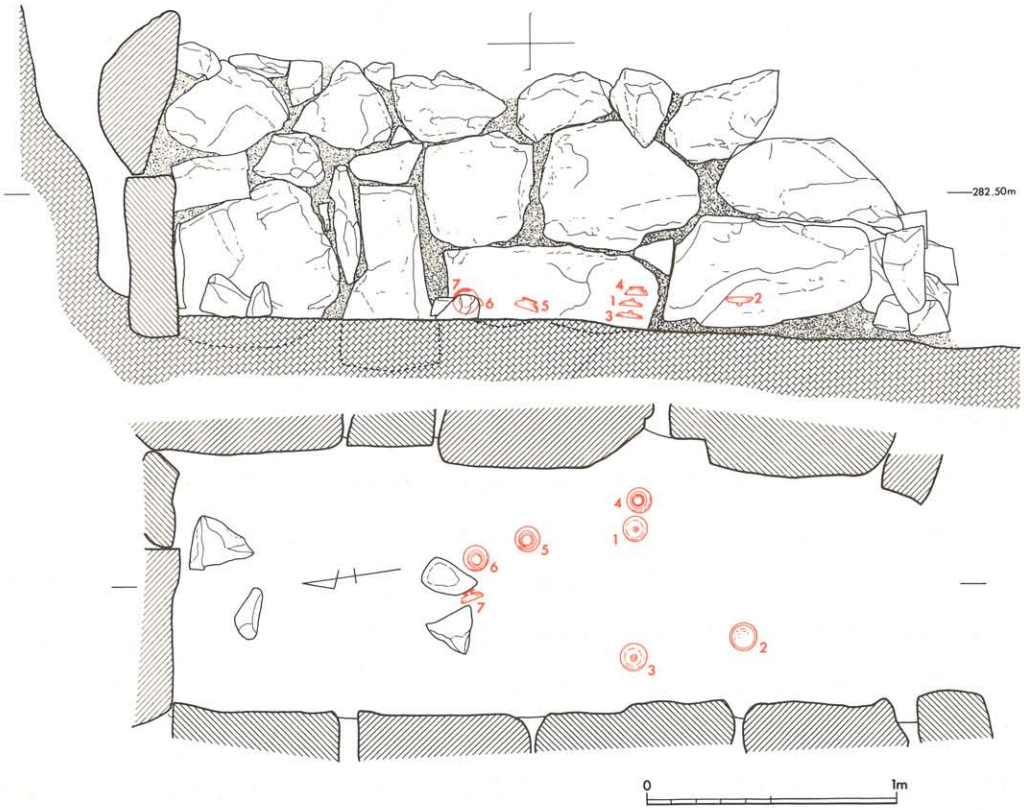
出土した遺物は，須恵器蓋３，須恵器坏４であり鉄製品等はなかった。これらはいずれも石室内から出土した（第44図，図版30）。

７点の須恵器は玄室内の南半にあり，棺台と推定した４個の石の位置に木棺が安置されていたとすれば，いずれも棺外に置かれていたものと推測される。№４（第45図）の坏と№２の蓋は床面から10cmあまり浮いているが，その他は２～５cm浮いた状態であり，原位置に近いものと思われる。坏は３個（４・５・６）が天地を逆にして置かれた状態で出土し，１個（７）のみ棺台石の間に挟まれた状態で横になっていた。№７の坏のみは元々棺内にあったものが下方に落ち込んだ可能性もある。蓋は№１，№３が正位置の状態であったが，№２は天地逆の状態であった。

(5)　出土遺物（第45図，図版34）

１は，宝珠形のつまみを有する須恵器蓋である。口径10.3cm，高さ3.6cmあり，内面にはかえりがある。このかえりは２号墳出土品中最も顕著なものである。外面天井部には回転ヘラケズリが行われており，その他は回転ナデがみられる。胎土は密で，焼成は良好である。色調は外面が淡灰色～青灰色，内面が青灰色である。なお，外面天井部には若干の自然釉が付着している。

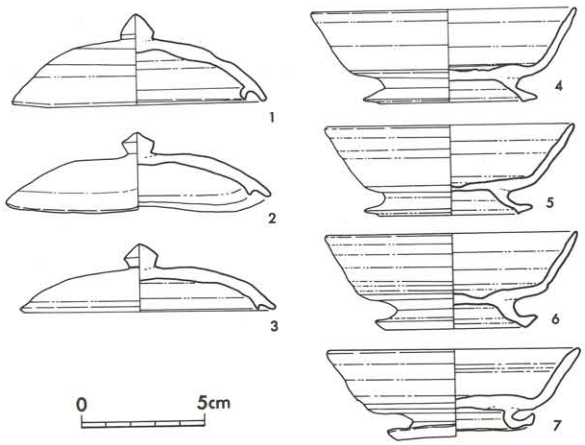
２は，宝珠形のつまみを有する須恵器蓋である。つまみの形態は１とはやや異り，つまみの上半部に最大径があり，蓋天井部との接合部は細くくびれている。焼成の際にひずみを生じており計測しにくいが，口径10.7cm，高さ3.1cmあまりあり，１よりもやや扁平な形態である。内面にはかえ



第44図　小才２号墳遺物出土状況実測図

りがあるが１ほど顕著なものではなく，突帯状になっている。外面天井部には全体に自然釉が付着していて観察しにくいが，回転ヘラケズリが施されているようである。口縁部外面および内面全体には回転ナデの痕跡がみられる。内面天井部は回転ナデのあと静止ナデが行われている。胎土は密で焼成は良好である。色調は青灰色を呈する。

３も宝珠形のつまみを有する須恵器蓋で，全体の形状，つまみの形態，かえりの形態ともに２に類似している。口径10.4cm，高さ2.7cmある。天井部は回転ヘラケズリが行われ，口縁部外面および内面全体には回転ナデが施されている。なお，内面天井部は回転ナデのあと静止ナデが行われている。胎土は密で，焼成



第45図　小才２号墳出土遺物実測図

は良好。色調は青灰色を呈する。

4は高台付の須恵器坏である。口径10.6cm，高さ3.7cmある。坏部は外傾してほぼ直線的に立ちあがり，端部は丸くおわる。高台部は長くて，「ハ」の字状に強くふんばる形態のものである。高台端部が相当に厚くなるのが特徴的である。内外面ともに回転ナデがみられるが，坏部の外面底部は回転ヘラケズリが行われている。坏部は内面の底部は回転ナデのあと静ナデが行われているが，やや滑らかになっており，使用痕かとも思われる。胎土は密で焼成は良好。色調は青灰色を呈する。

5は高台付の須恵器坏で，4とほぼ同形態のものである。口径10cm，高さ3.6cmある。内外面ともに回転ナデがみられるが，坏部の外面底部は回転ヘラケズリが行われている。なお，坏部外面の上半は回転ヘラケズリのあと回転ナデが行われているようである。坏部内面は回転ナデのあと静止ナデが行われており，使用痕はない。胎土中に1㎜以下の微砂粒を若干含む。焼成は良好であるが，欠損部の断面をみると器表は青灰色であるが断面中央部は茶褐色を呈している。

6は高台付の須恵器坏で，4・5とほぼ同形態のものである。口径10.1cm，高さ3.8cmある。内外面ともに回転ナデがみられるが，坏部の外面底部は回転ヘラケズリが行われている。胎土中に1㎜以下の微砂粒をわずかに含む。焼成は良好で，青灰色を呈す。

7も高台付の須恵器で，4・5・6とほぼ同形態のものであるが，焼成時にひずみを生じている。口径10.1cm，高さ3.5cmある。4・5・6に比して器肉はやや厚い。すなわち坏部中ほどで比較してみると4・5・6は3㎜前後の厚さであるが7は4㎜ある。内外面ともに回転ナデがみられるが，坏部の外面底部は回転ヘラケズリが行われている。坏部内面は回転ナデのあと静止ナデが行われている。胎土は密で焼成は良好。青灰色を呈する。　（松本岩雄）

3．小才5号墳

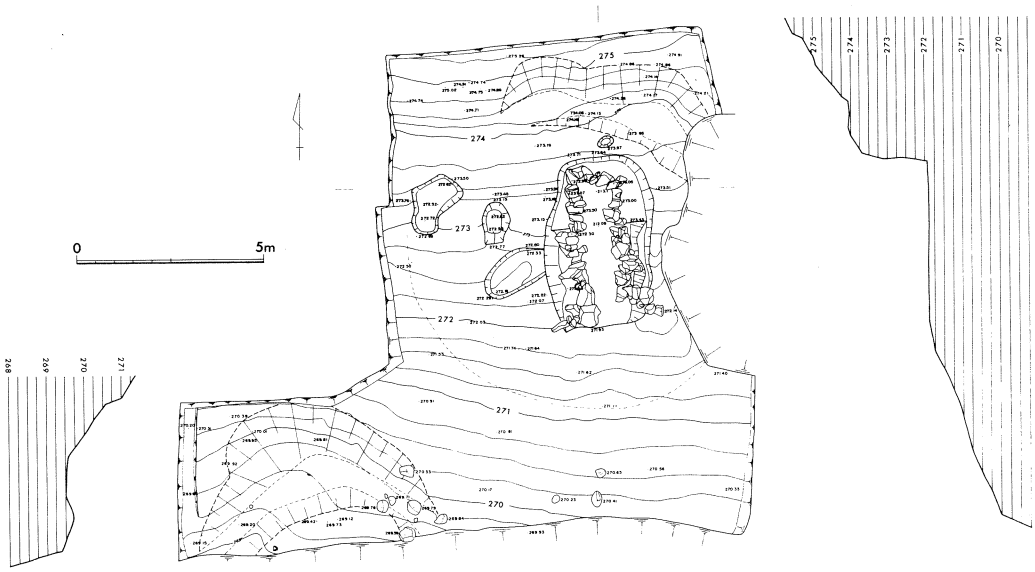
(1) 位　置

Ⅱ区の中では最も南東側に位置する。南向の丘陵緩斜面の裾あたりにあり，標高は270～275mある（第8図）。

(2) 墳　丘

発掘調査前の地形を観察したところでは，墳丘等はまったく認められなかった。表土層を除去した段階で，石室の天井石と思われる大形の石材があらわれたため，はじめて古墳の存在することが判明した。この石室の東側は明治・大正期に民家が建っていたところであり，そのために大規模な削平が行われていた。

発掘調査の結果，石室の北側丘陵斜面において弧状にめぐる溝状の地山加工痕が確認された。溝状の加工痕は検出部分では断面が浅い「U」字形を呈し，上端幅約2m，下端幅約0.6mある。こ



第46図　小才５号墳・６号墳発掘後墳丘実測図

の溝状の加工痕と石室周辺のわずかに残存していた盛土の状況から判断すると，直径約８ｍ，溝部分も含めると約10ｍの円墳状を呈している（第46・47図）。高さは南側の墳裾と推定される地点から計測すると現状で約2.5ｍある。

(3)　内部構造

南方（谷側）に開口する無袖形の横穴式石室である。墳丘のほぼ中央に位置し，石室主軸はＮ－４°－Ｗを示す。石室の規模は以下のとおりである。

［石室規模］

全長　約3.9ｍ　　玄室推定長 約2.9ｍ　　奥壁幅 0.95ｍ　　前幅 1.15ｍ　　高さ 1.05ｍ

羨道推定長 約 1 ｍ　　羨門幅 1.05ｍ　　高さ 0.9 ｍ

石室は二種類の溶結性凝灰岩（後期中生代古第三紀流紋岩質火山砕屑岩と同じく安山岩質火山砕屑岩）を積んで構築している。天井石が支えを失い，石室内に沈み込んだものがあり，石室内部には土砂が充満していた。そこで，石室の調査にあたっては，まず天井石を取り外してから内部の土砂を除去する方法をとった。

平面形・床面　無袖形の狭長な石室である。奥壁部幅0.95ｍ，中央部幅1.2ｍ，羨道部幅1.05ｍとなっており，床面での平面形は長方形胴張り形となっている。明確な玄室・羨道の区別はないが，閉塞石・床面の状況などからすると奥壁から約2.9ｍの位置までが玄室として意識されていたものと考えられる。すなわち，床面は奥壁から2.9ｍの間はほぼ水平面（標高272.1ｍ）を保ち，そこか

らゆるやかに傾斜するとともに閉塞石が置かれている。また東側壁の積み方も奥壁側と羨門側で若干異なっていることも玄室，羨道の区別を意識したものと思われる（第48図，図版37－３）。

玄室の西壁寄りと東壁寄りの床面に径15cmあまりの小石が各１個あった。２個しかないため２号墳のような棺台としての施設であったかどうか不明。

なお，羨門から南側は「ハ」の字状に広がる外護列石状の石列が認められる（第53図，図版39－２）。

閉塞施設　奥壁から2.9～3.8mの位置にある。床面には15～20cmの小形の石を置き，その上に40～50cm大の自然石を積んだものである。

奥壁　奥壁基底部は幅50cm，高さ70cmあまりの石を東側に据え，その西側に幅35cm，高さ70cmの長方形の石を立てている。この上に小形の石を小口積状に三～四段積み上げている。奥壁部分の天井石はやや沈んでいるが，奥壁部の最も遺存状態良好なところで高さ1.05mある。

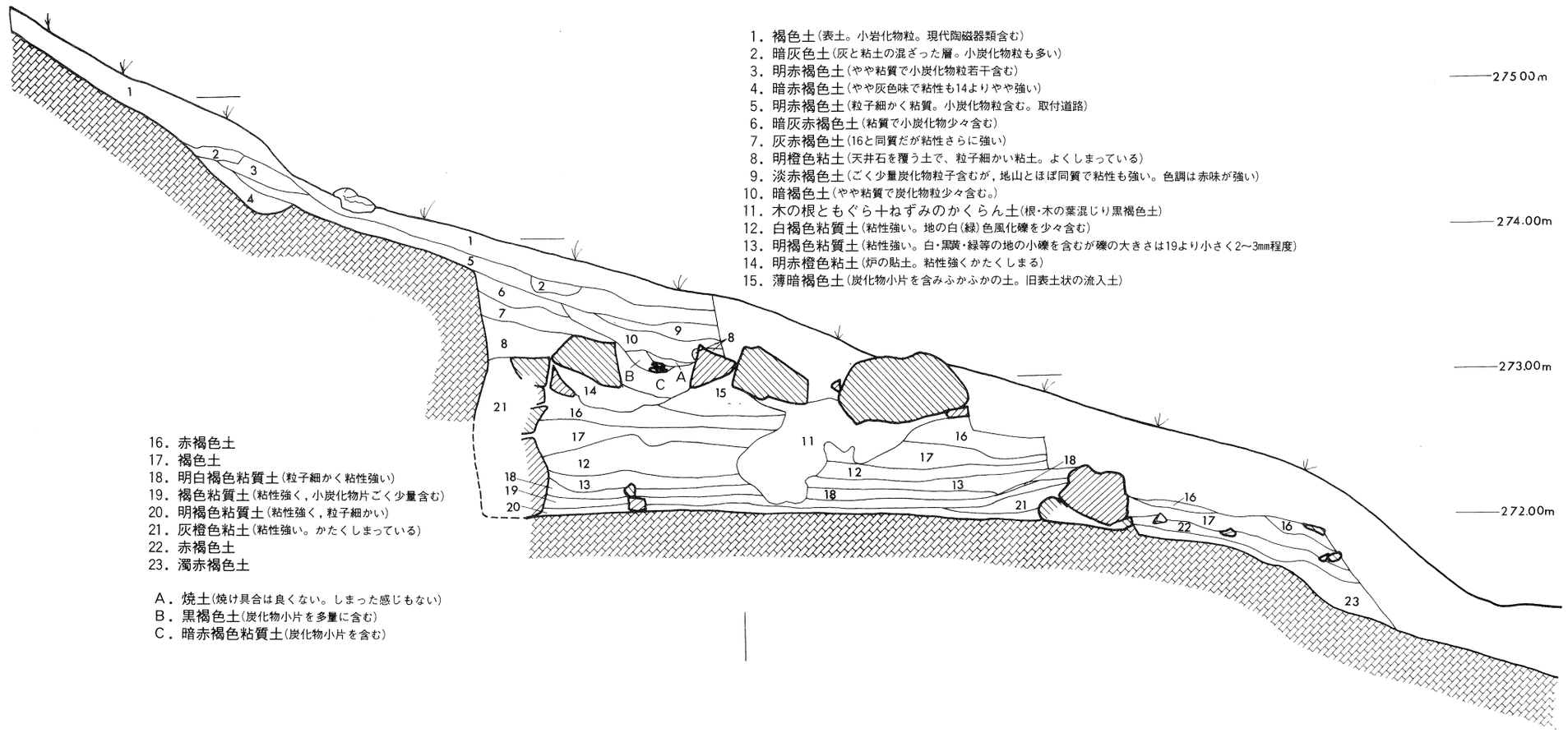
側壁との石組みの関係は，両側壁ともに奥壁を挟み込むように構築されている（第48図，図版38－２）。

東壁　基底部にやや大形の石を腰石状に横に据えている。これらは基本的に広い平坦面を内側にそろえるようにして設置されており，その面はほぼ垂直に立ち上がっている。またこの腰石状に置かれた石の上面のレベルはほぼそろっている。二段目から上は，やや小形の石を小口積にして徐々に内側に持ち送りながら三～四段積み上げる。石のすき間には小石を充塡しているが，裏側の控え積はほとんど行われていない（第48図，図版39－３）。羨門から南側は中軸線から約55度の角度で開く外護列石状の石列がある。20～30cm大の丸石を用いて１mあまり連なっている（第53図，図版39－２）。

西壁　基底部にはやや大形の石を腰石状に据えているが，東壁とはやや異なった様相を呈している。すなわち東壁はいずれも横長になるように据えているが，西壁は縦長に置かれている。またこれらの石の上面レベルは，奥壁から３個目の石までと４・５・６個目の石では高さが異っている。二段目から上は小形の石を小口積にしている（第48図，図版36－３）。羨門から南側は直角に開く外護列石状のものがある。

天井　大形の石が４個残っているが，当初は６個あったものと考えられる。奥壁部から二番目の石は後世意識的に引き抜かれ，そのすき間を炉として利用されていた。すなわち天井石と天井石の間に粘土（第47図Ｃ層）を貼り，その上部には板状の石と炭化物を多量に含んだ黒褐色土（Ｂ層）と焼土（Ａ層）が認められた（第55図左上）。時期は不明である。

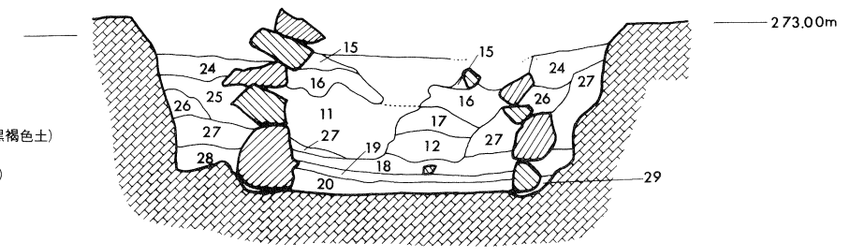
残存していた４個の天井石は，いずれも原位置を保っているものはなく，わずかずつ動いているものと判断された。奥壁側から長さ１～1.3m，幅40～50cmの細長い石を架構しているが，羨道部



1．褐色土(表土。小岩化物粒。現代陶磁器類含む)
2．暗灰色土(灰と粘土の混ざった層。小炭化物粒も多い)
3．明赤褐色土(やや粘質で小炭化物粒若干含む)
4．暗赤褐色土(やや灰色味で粘性も14よりやや強い)
5．明赤褐色土(粒子細かく粘質。小炭化物粒含む。取付道路)
6．暗灰赤褐色土(粘質で小炭化物少々含む)
7．灰赤褐色土(16と同質だが粘性さらに強い)
8．明橙色粘土(天井石を覆う土で、粒子細かい粘土。よくしまっている)
9．淡赤褐色土(ごく少量炭化物粒子含むが，地山とほぼ同質で粘性も強い。色調は赤味が強い)
10．暗褐色土(やや粘質で炭化物粒少々含む。)
11．木の根ともぐら十ねずみのかくらん土(根・木の葉混じり黒褐色土)
12．白褐色粘質土(粘性強い。地の白(緑)色風化礫を少々含む)
13．明褐色粘質土(粘性強い。白・黒黄・緑等の地の小礫を含むが礫の大きさは19より小さく2～3mm程度)
14．明赤橙色粘土(炉の貼土。粘性強くかたくしまる)
15．薄暗褐色土(炭化物小片を含みふかふかの土。旧表土状の流入土)

16．赤褐色土
17．褐色土
18．明白褐色粘質土(粒子細かく粘性強い)
19．褐色粘質土(粘性強く，小炭化物片ごく少量含む)
20．明褐色粘質土(粘性強く，粒子細かい)
21．灰橙色粘土(粘性強い。かたくしまっている)
22．赤褐色土
23．濁赤褐色土

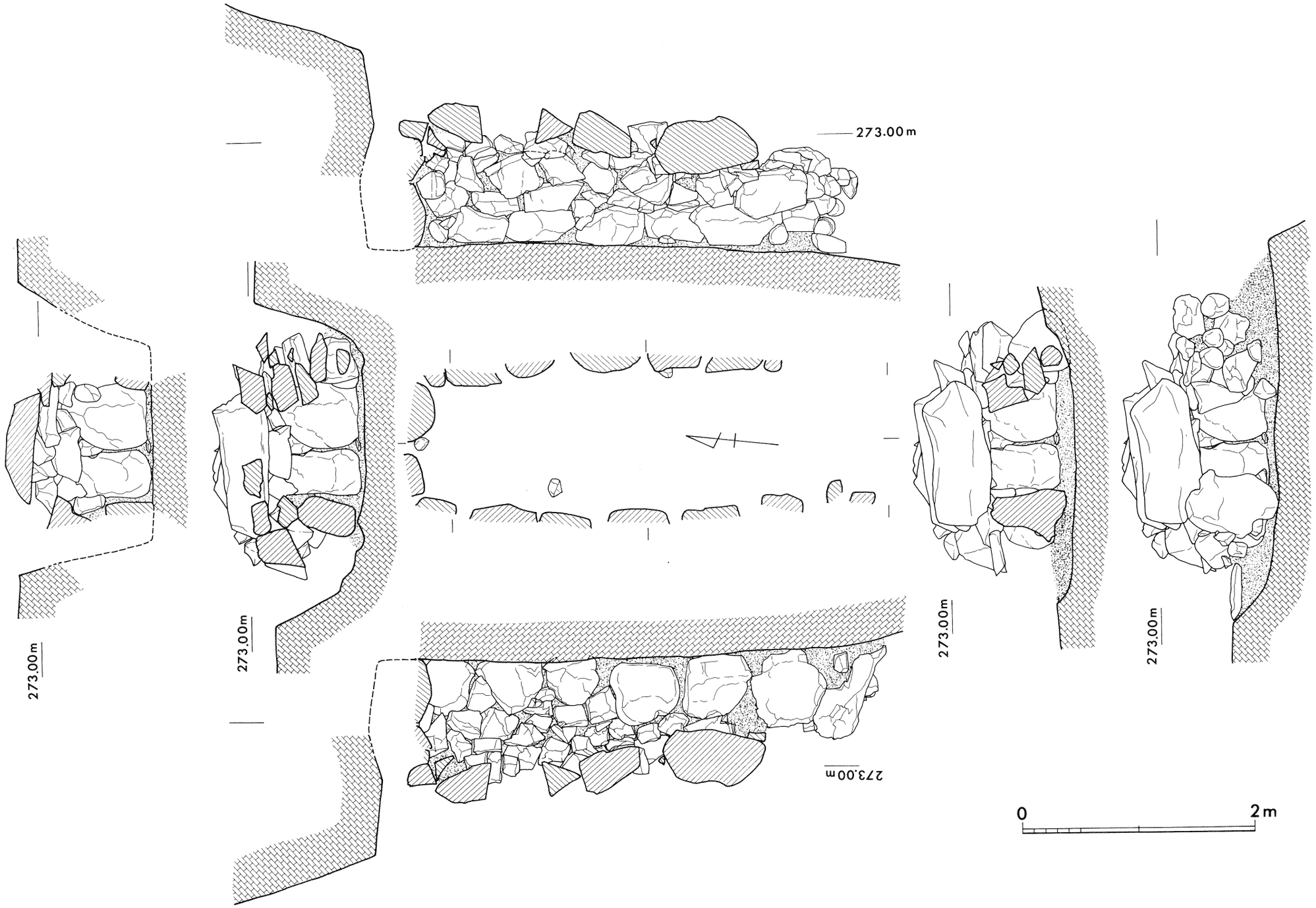
A．焼土(焼け具合は良くない。しまった感じもない)
B．黒褐色土(炭化物小片を多量に含む)
C．暗赤褐色粘質土(炭化物小片を含む)



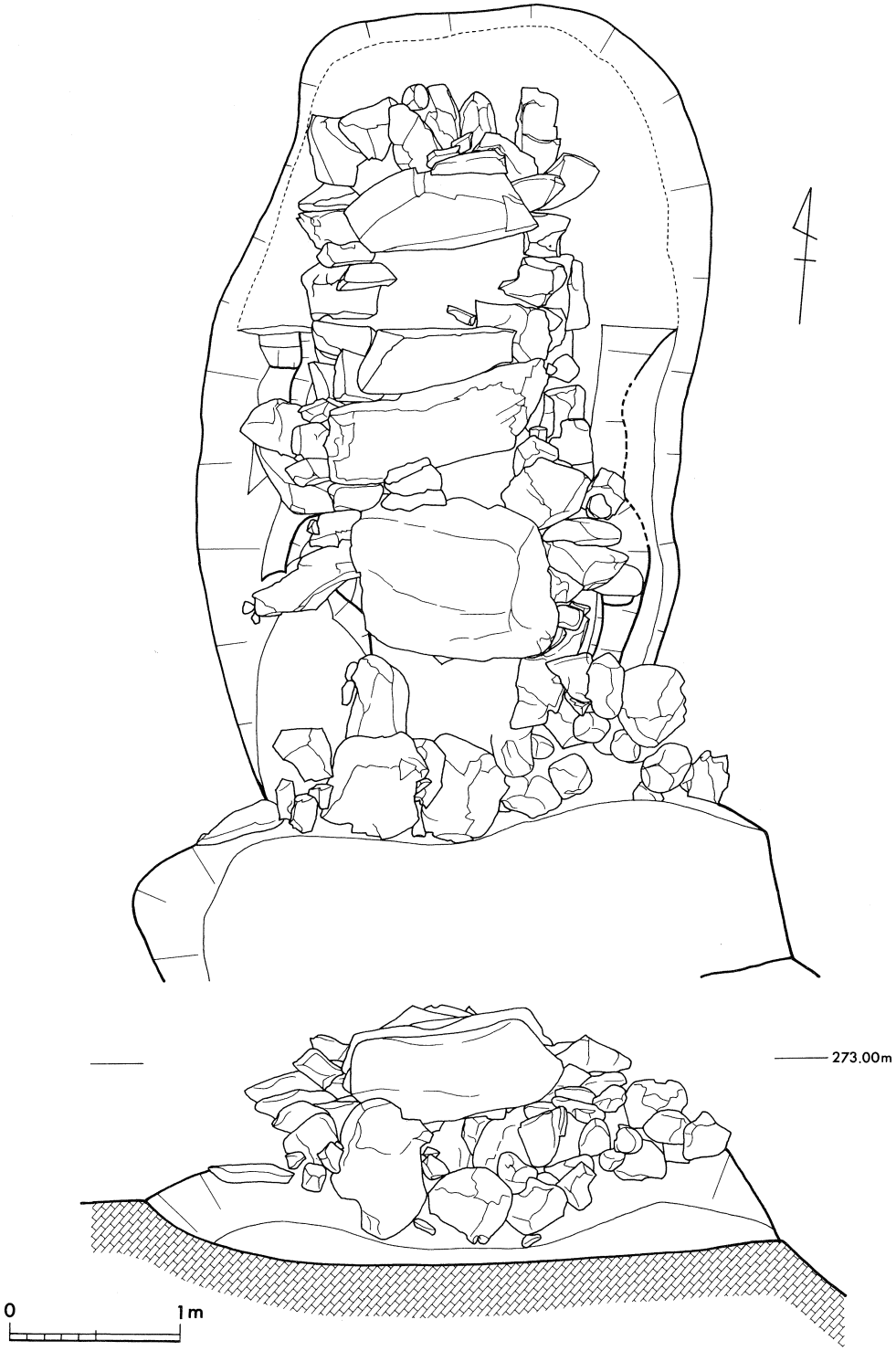
11．木の根ともぐら十ねずみのかくらん土(根・木の葉混じり黒褐色土)
12．白褐色土(粘性強い。地の白(緑)色風化礫を少々含む)
15．薄暗褐色土(炭化物小片を含むふかふかの土。旧表土状の流入土)
16．赤褐色土
17．褐色土
18．濁赤褐色土
19．褐色粘質土(粘性強い。小炭化物片ごく少量含む)
20．明褐色粘質土(粘性強く粒子細かい)
24．明褐色土(粒子細かく，かたくしまる)
25．褐色土(粒子弱く，ふかふか木の根によるものか？)
26．明灰褐色土(やや粘性で粒子細かい)
27．淡赤褐色土(灰白色，黄白色の風化礫含む)
28．赤褐色土(粘性やや強い)
29．灰褐色土(地山礫の風化礫したような土でやや砂質)

0　2m

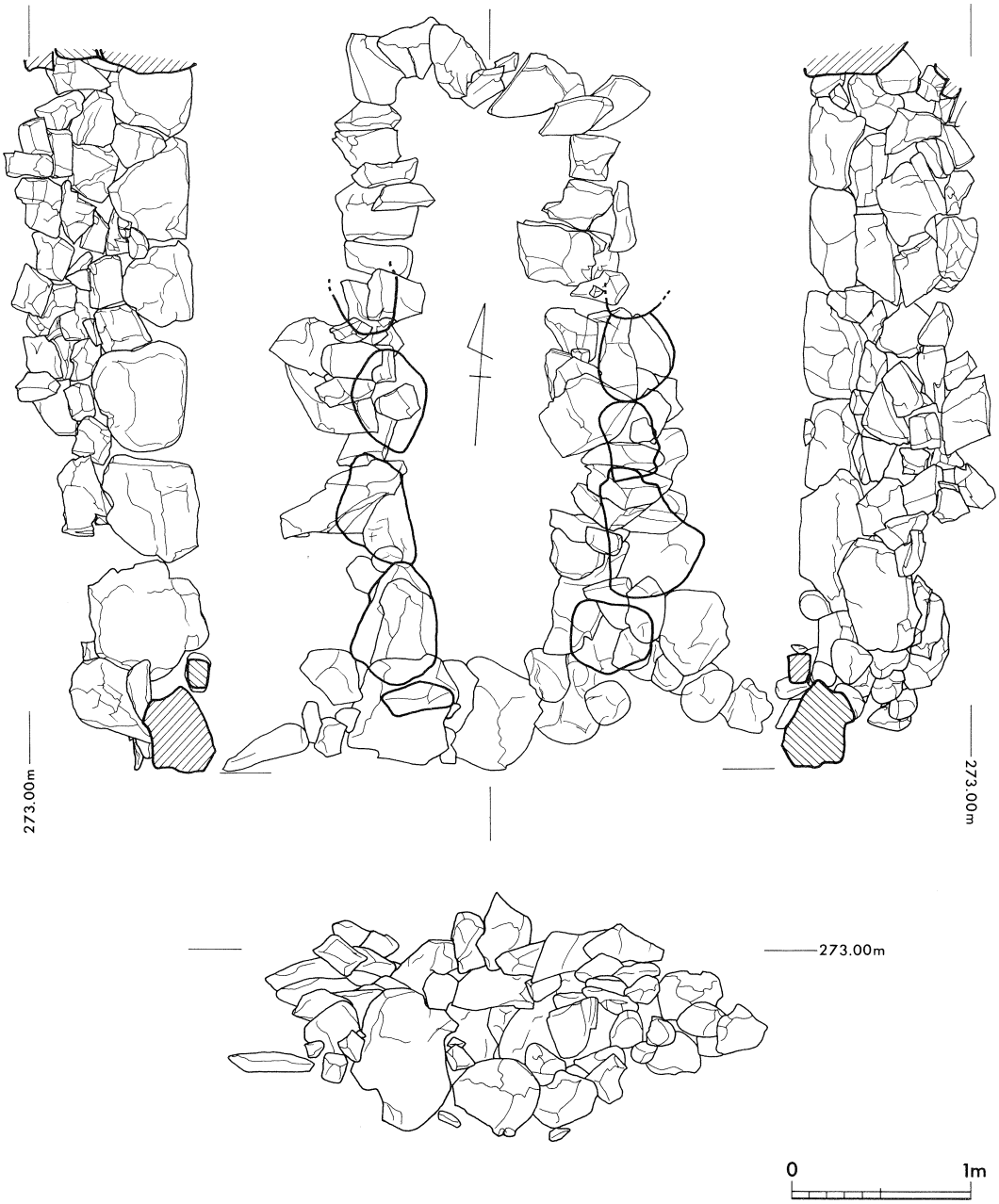
第47図　小 才 5 号 墳 墳 丘 土 層 断 面 図



第48図　小　才　5　号　墳　石　室　実　測　図（1）



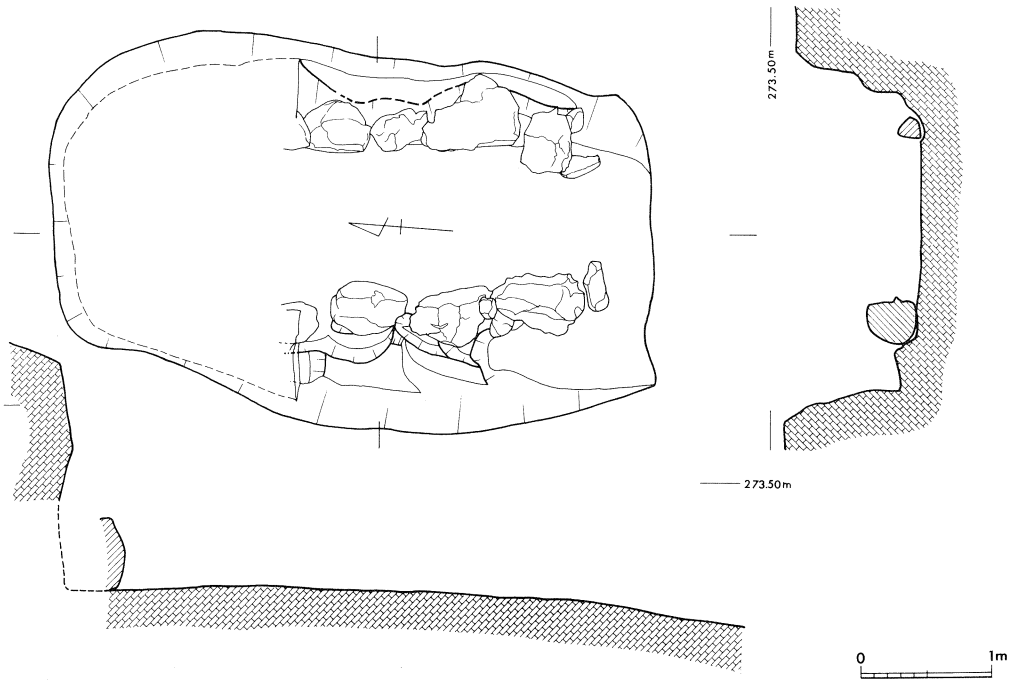
第49図　小才５号墳石室実測図(2)



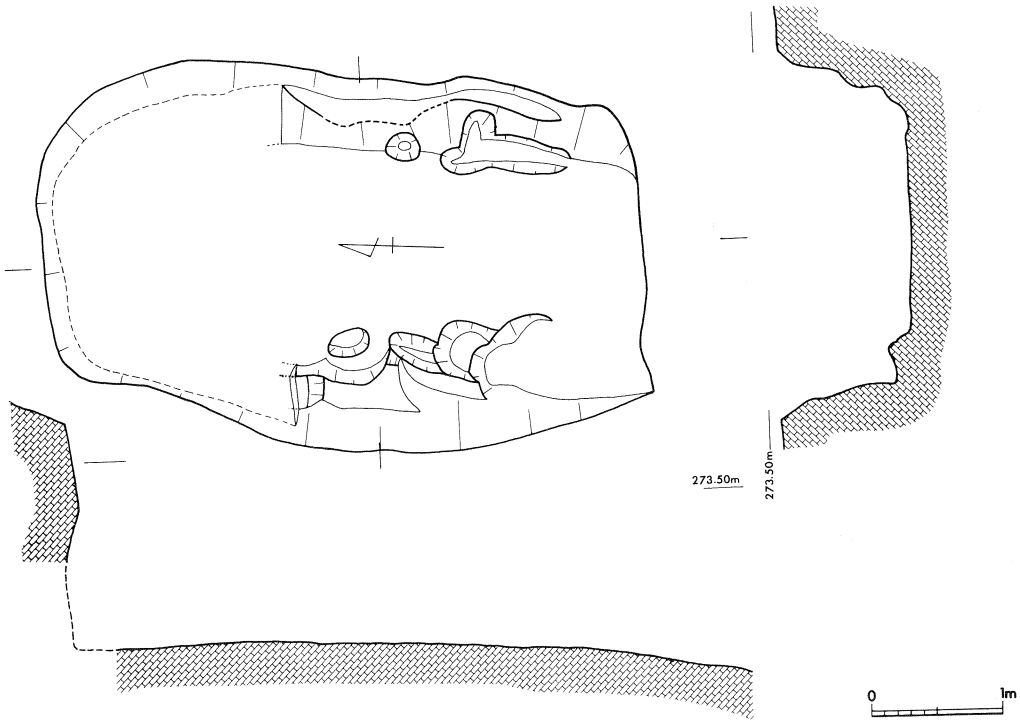
第50図　小才５号墳石室実測図(3)

寄りのものは長さ1.2m，幅１mの最大の石を用いている。

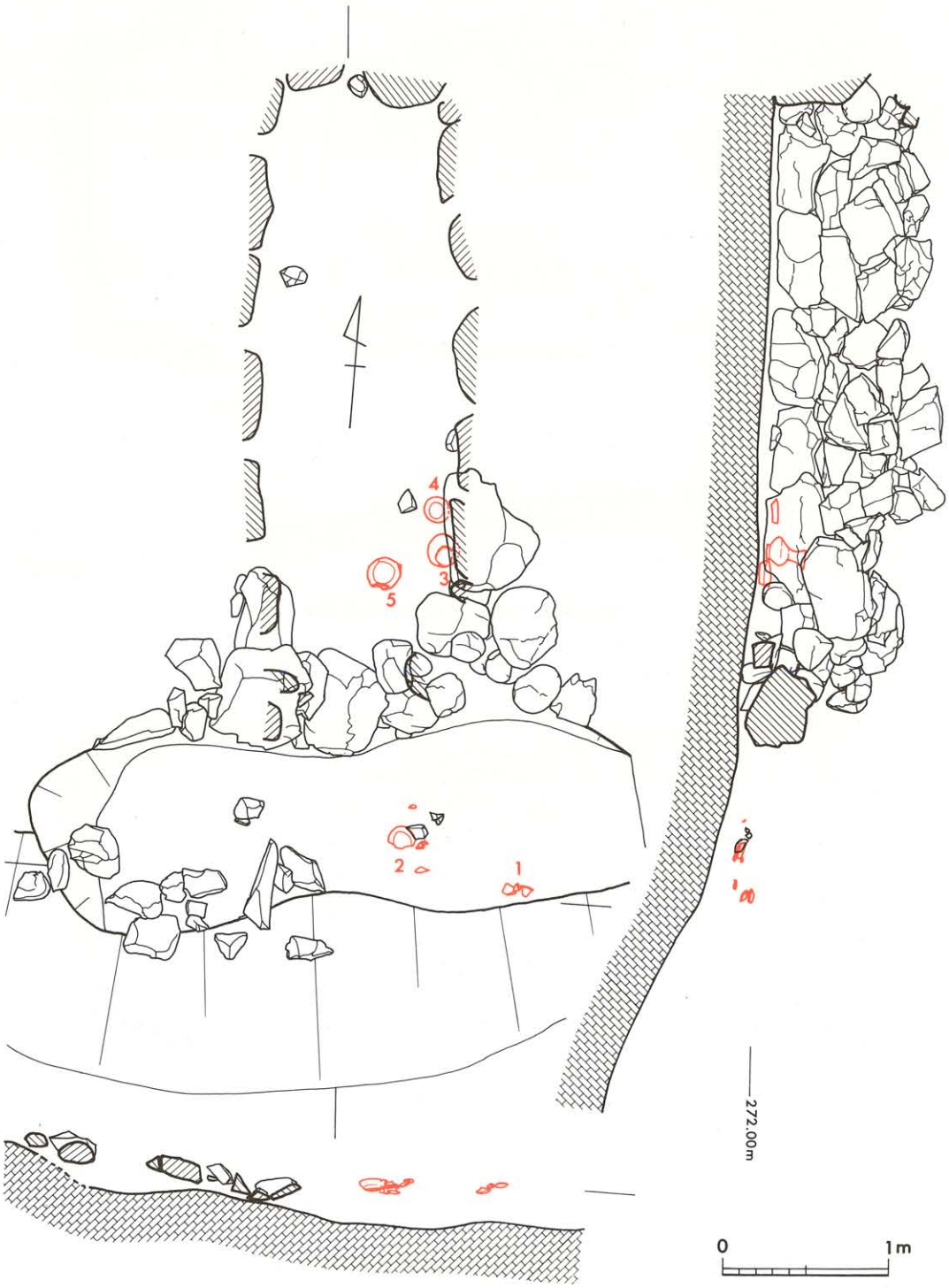
掘り方　南に開口した「コ」の字形を呈するもので，幅2.8m，長さ4.5mある。北半（奥壁部）は未調査のため不明確であるが，ほぼ垂直に近く掘り込まれており，深さは約1.7mある。中央部では東壁・西壁ともに約70度の角度で１m掘り込まれている（第52図）。



第51図　小才５号墳石室実測図(4)



第52図　小才５号墳石室掘り方実測図



第53図　小才５号墳遺物出土状況実測図

なお，この掘り方の南側には東西約3.3m，南北約１mの平坦面（前庭部）がある（第53図）。

石室内の土層　石室内には天井まで土砂が堆積していた。上半の14層～18層は古墳への埋葬が終了して以降の流入土と考えられふかふかでしまっていない。下半の19層～21層は古墳への埋葬を継続している段階の堆積層と考えられ，石室内に均等な厚さで堆積している。追葬の際に石室内に流入していた土を平坦にならした可能性が強く，少なくとも２回程度の追葬があったことが推定される（第47図，図版40－２・３）。

(4)　遺物出土状況

出土した遺物は，須恵器蓋１，須恵器坏１，須恵器長頸壺１，土師器坏２である（第53図，図版39）。

須恵器蓋と須恵器坏は石室南側の平坦面（前庭部）から出土した。いずれも地山面より10～15cm浮いた状態であった。

土師器坏２個と須恵器長頸壺は玄室内から出土した。土師器坏のうち大形のものは玄室南端のほぼ中央で正位置に置かれた状態で床面から出土した。やや小形の坏は玄室南寄りの西壁際から出土した。正位置の状態ではあったが床面より４～５cm浮いていた。須恵器長頸壺は玄室南寄りの西壁際で正位置の状態で出土した。

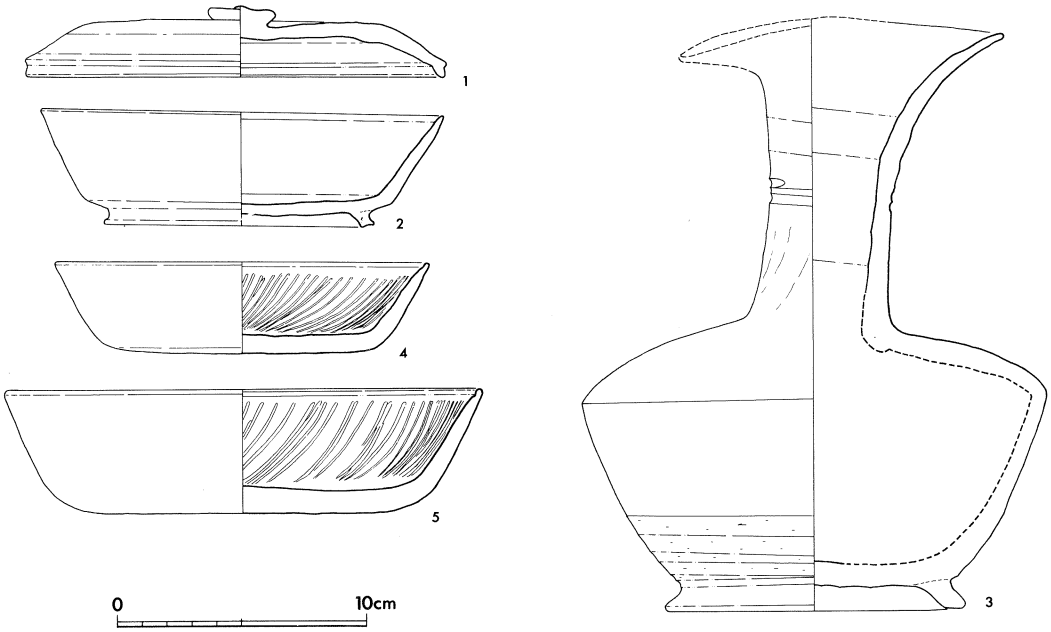
(5)　出土遺物

須恵器蓋（第54図１，図版42）　扁平な宝珠形のつまみを有する蓋で，内面にかえりはない。口径16.8cm，高さ2.8cmあり，内外面ともに回転ナデがみられる。胎土中に１～２mmの黒い砂粒を含む。焼き上りはやや軟質で，色調は内外面ともに青灰色を呈する。

須恵器坏（第54図２）　高台付坏である。高台は「ハ」の字形に短かく開く。焼きひずみがあり，口縁部は径17.2×15.6cmである。底径は10.8cmで高さは4.6cmある。体部は内外面ともに回転ナデ，底部内面は静止ナデが施されている。底部外面には糸切の痕跡は確認できない。胎土中に白・黒の微砂粒を含む。焼成は良好で青灰色を呈する。

須恵器長頸壺（第54図３）　口縁部はややひずんでいるが，口径約13cm，底径12cm，高さ約23.3cmの高台付長頸壺である。頸部には２条の浅い沈線をめぐらす。胴部最大径部分は明瞭な稜線をもっている。胴部下方に回転ヘラケズリがみられるが，それ以外は内外面ともに回転ナデが施されている。底部外面はヘラケズリのあと中央部に押圧痕，周縁部にナデ痕がみられる。胎土中に３～４mmの砂粒を若干含み，１mm以下の微砂粒を多く含む。焼成は良好で青味をおびた灰色を呈する。口頸部から肩部にかけて灰釉がかかっている。

土師器坏（第54図４・５）　２個出土している。やや小形のもの（４）は，口径15.1cm，高さ3.7cmある。丹塗りの土器で，内面には暗文が放射状に施されている。口縁端部内面は沈線状にくぼんでいる。外面は底部，体部ともにヘラミガキがなされている。胎土は微砂粒を含むが緻密である。



第54図　小才５号墳出土遺物実測図

焼成は良好で，薄い灰褐色を呈している。

やや大形のもの（５）は，口径19.2cm，高さ５cmある。丹塗りの土器で，内面にはヨコナデ調整のあと暗文が放射状に施されている。口縁端部内面は沈線状にくぼんでいる。外面は底部・体部ともにヘラミガキがなされている。胎土中には１mm以下の微砂粒を多く含む。焼成は良好で，白っぽい灰褐色を呈す。

(6)　その他の遺構

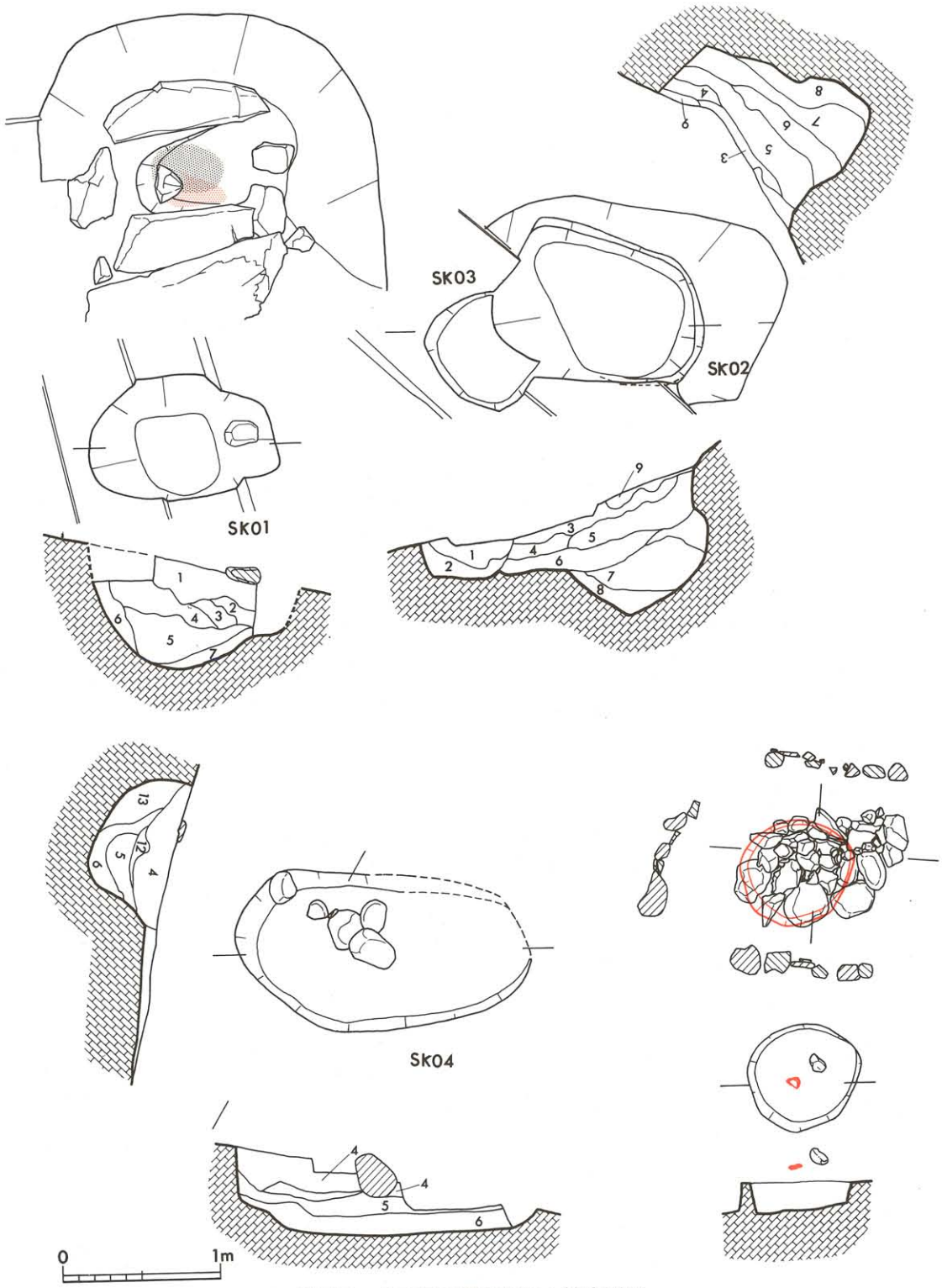
石室上面（天井石部分）に上述したように炉跡を１基検出したほか，北側の溝状加工痕部分で集石遺構を，また石室西側の地山面から土壙４基を検出した。

集石遺構　石室北側の溝状加工痕内に堆積した埋土の上面で，半円形に並んだ集石を確認した。

集石は北側が一直線になり，南側をやや大きめの円礫で半円状に囲ってその内側に小礫を詰めたものである。礫は一層のみで，集石の下には直径約70cm，深さ約17cmの円形の土壙があった。集石や土壙内からは遺物は出土しなかったが，集石真下から磁器碗と石見焼甕片が出土している（第55図右下）。

SK01～04　いずれも５号墳盛土の上から掘り込まれたもので，SK03は平面円形，その他は長楕円形を呈する。底面はいずれも丸みがあり，SK02は壁面も底面も複雑である。埋土はふかふかしてしまっておらず炭化物粒を多く含む。性格，時期ともに不明である。

（松本岩雄・足立克己・錦織　弘）



第55図　小才５号墳周辺の土坑実測図

4．小才6号墳

(1) 位　置

Ⅱ区の中では最も南側に位置する。南向の丘陵斜面の裾付近にあたり，標高は270mである。小才5号墳の南西3m隔てたところに位置し，墳丘中心部間の推定距離は11mあまりある（第9図，第46図）。

(2) 墳　丘

発掘調査前の地形を観察したところでは，墳丘等はまったく認められなかった。調査の結果，若干の盛土と山側（北側）に掘り込まれた溝が検出された。墳丘のごく一部と溝が残存しているのみで，南半はすでに掘削されていたため内部構造等については不明だが，地元の古老の話では，掘削される以前には大きな石がいくつか並んでいたということなので，横穴式石室があった可能性が高い。

溝は丘陵斜面の山側に弧状に掘り込まれていた。検出面での上端最大幅は約3m，下端幅は0.7m，深さは0.2～1mある。この溝は北側は地山を切削加工し，南側は盛土によって形成されている。溝内には炭化物を含む茶褐色土・暗茶褐色土や褐色粘質土が堆積していた（第56図，第57図，図版44）。

盛土は基本的には地山を削平した上に明褐色粘質土，暗赤褐色土，淡褐色粘質土などを盛り上げているが，墳裾付近では旧表土（第56図14層）の上に直接盛った部分もみられる。

以上のようにわずかに残存していた溝と盛土から推定復元すると，小才6号墳は径5～6mの円墳であったと思われる。

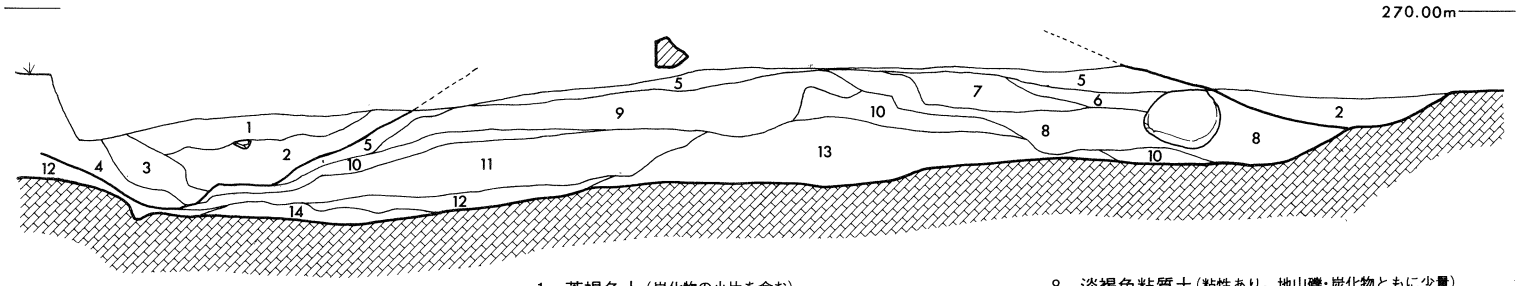
(3) 遺物出土状況

出土した遺物は，須恵器短頸壺1，須恵器高坏1，須恵器坏2である。これらはいずれも溝内から一箇所にほぼまとまった状態で出土した。短頸壺と坏のうち1個は正位置で，高坏と坏1個は逆転した状態であった。いずれも溝底にあり，その出土状況は元々置かれた状態に近いものと判断された（第57図，図版45－1・2）。

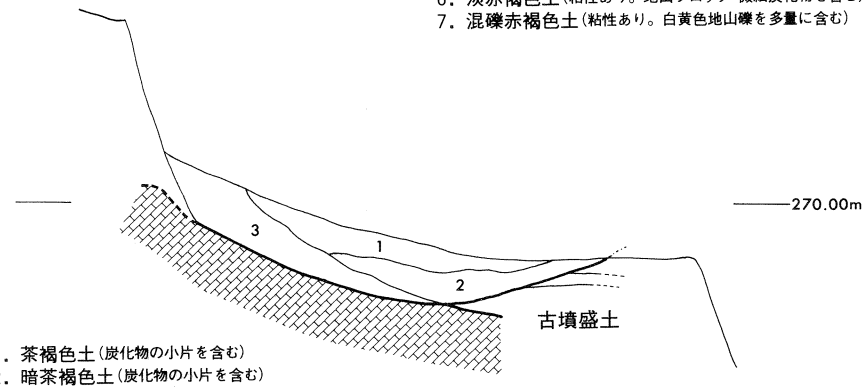
(4) 出土遺物

須恵器短頸壺（第58図1）　口径6.8cm，胴部最大径11.8cm高さ7.5cmある。胴部下半から底部は静止ヘラケズリが行われている。なお，底部にはカキ目状の痕跡がわずかにみえる。その他は内外面ともに回転ナデが施されている。胎土中に1～3mmの黒い砂粒を含む。焼成はやや甘い焼き上りで，灰白色を呈する。

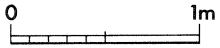
須恵器高坏（第58図2）　脚部下半が欠失している。坏部の口縁部を1箇所くぼませて片口状に仕上げている。したがって口径は長径14.6cm，短径12.8cmとなっている。坏部の底部付近は回転ヘラケズリのあと回転ナデが施されている。坏部内面の底部に静止ナデがみられるが，その他は内外



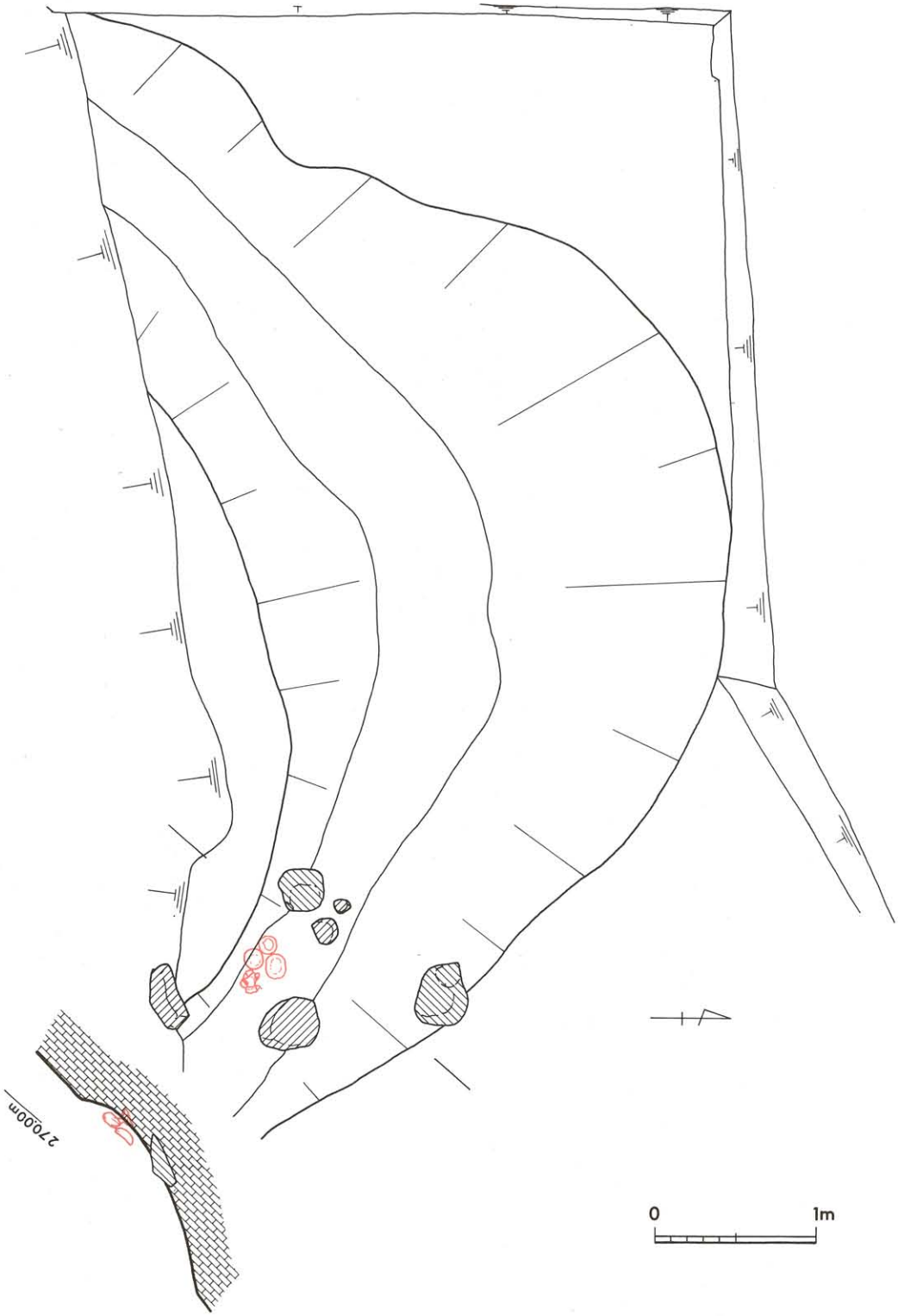
1．茶褐色土（炭化物の小片を含む）
2．暗茶褐色土（炭化物の小片を含む。須恵器片を含む）
3．褐色粘質土（粘性やや強い）
4．淡褐色粘質土（地山風化礫を多く含む）
5．黄味明褐色粘質土（粘性強い。地山礫・微細炭化物片を含む）
6．淡赤褐色土（粘性あり。地山ブロック・微細炭化物を含む）
7．混礫赤褐色土（粘性あり。白黄色地山礫を多量に含む）
8．淡褐色粘質土（粘性あり。地山礫・炭化物ともに少量）
9．暗赤褐色土（粘性よわい。地山礫・炭化物をやや多く含む）
10．明褐色粘質土（粘性強い）
11．暗褐色粘質土（粘性強い。地山小礫・炭化物を含む）
12．暗灰褐色粘質土（粘性強い。地山礫・炭化物を多く含む）
13．淡褐色土（粘性はよわいがかたくしまる）
14．淡黒褐色土（旧表土と考えられる）



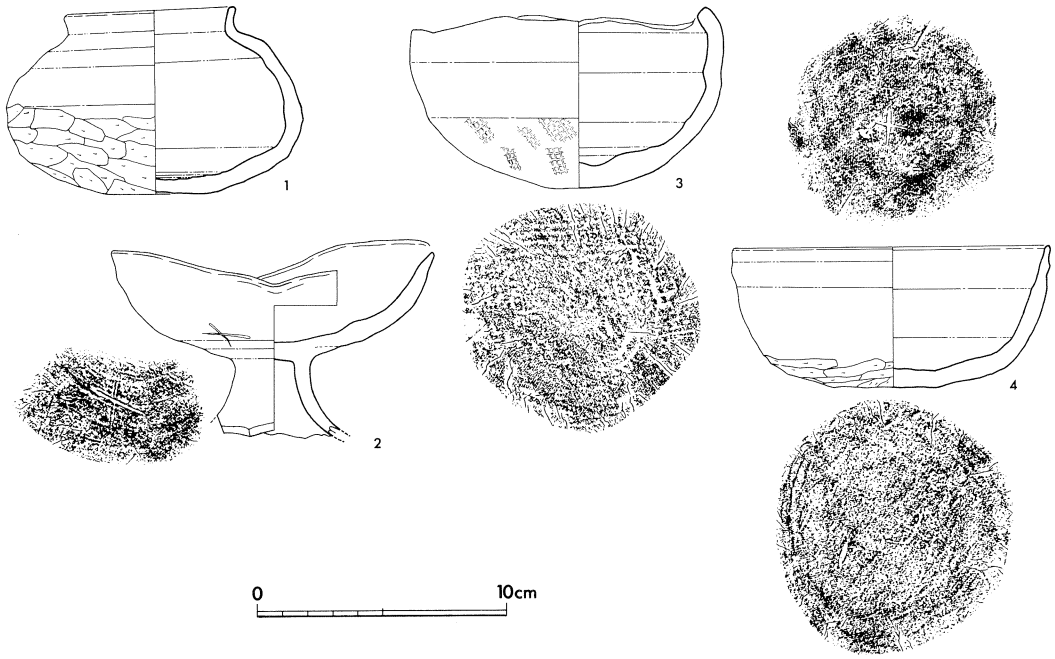
1．茶褐色土（炭化物の小片を含む）
2．暗茶褐色土（炭化物の小片を含む）
3．褐色粘質土（粘質やや強い）



第56図　小才6号墳墳丘土層断面図



第57図　小才６号墳遺物出土状況実測図



第58図　小才６号墳出土遺物実測図

面ともに転回ナデ調整である。坏部外面にはヘラで「×」印が１箇所描かれている。胎土中に１～２㎜の砂粒を若干含む。焼成は良好で青灰色を呈する。

須恵器坏（第58図３・４）　３は口径12㎝，高さ6.7㎝のボール形のものである。口縁部がぶ厚く波状を呈しており，端部が意識的に削られているようであり，壺の底部を打ち欠いて作られたものと思われる。底部外面はヘラケズリが行われているが，格子叩きの痕跡が残っている。胎土中に１～２㎜の砂粒を含む。焼成は良好で明灰白色を呈する。

４は口縁部の１箇所をくぼませて片口状につくられた坏である。口径は長径14.5㎝，短径12.9㎝で，高さは5.7㎝ある。口縁部・体部は内外面ともに回転ナデ調整。底部は内面静止ナデ，外面静止ヘラケズリが行われている。底部内面には「×」印，外面には「巾」印のヘラ記号が描かれている。胎土中に白い微砂粒を含む。焼成は良好で青灰色を呈する。

（松本岩雄・足立克己・錦織　弘）

５．小才７号墳

(1)　位　置

Ⅱ区丘陵斜面の下半にあり，丘陵の麓に近いところに位置する。小才８号墳石室中央部との距離は９ｍ，11号墳石室中央部との距離は７ｍある。標高は271～272ｍのところで付近の水田からの比

高は約５ｍである（第９図，第65図）。

(2) 墳　丘

調査前の地形を観察したところではマウンド等は全く認められず，やや大きな石の一部（調査を進める過程でこの石が天井石であることが判明した）が露出しているにすぎなかった。

調査の結果，南向きの横穴石室が検出され，石室の山寄りに墳丘を画するための地山加工痕が確認された。この加工痕は長さ約4.5ｍで弧状にめぐっており，検出部分での最大高は50cmあまりであった。加工痕と石室掘り方との位置関係などから７号墳は径５ｍあまりの円墳であったものと推定される（第65図）。遺物は出土しなかった。

(3) 内部構造

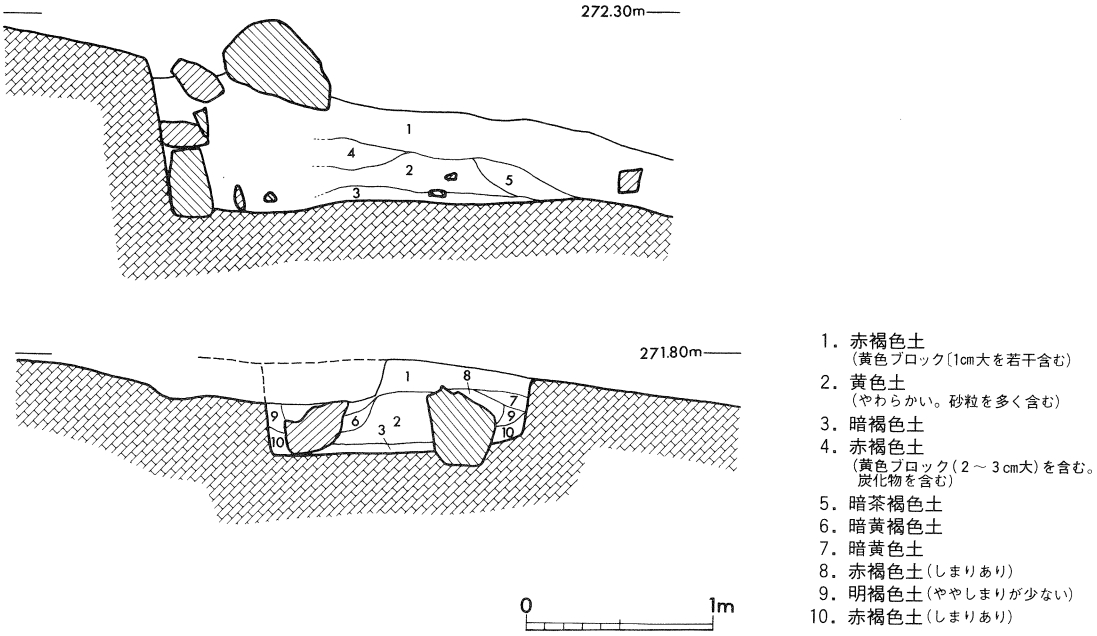
南方（谷側）に開口する無袖形の横穴式石室である。天井石は１個のみ遺存し，両側壁も相当破壊されていたが，基底部の石はほぼ完全に残っていた。石室主軸はＮ－16°－Ｅを示す。石室の規模は以下のとおりである。

［石室規模］

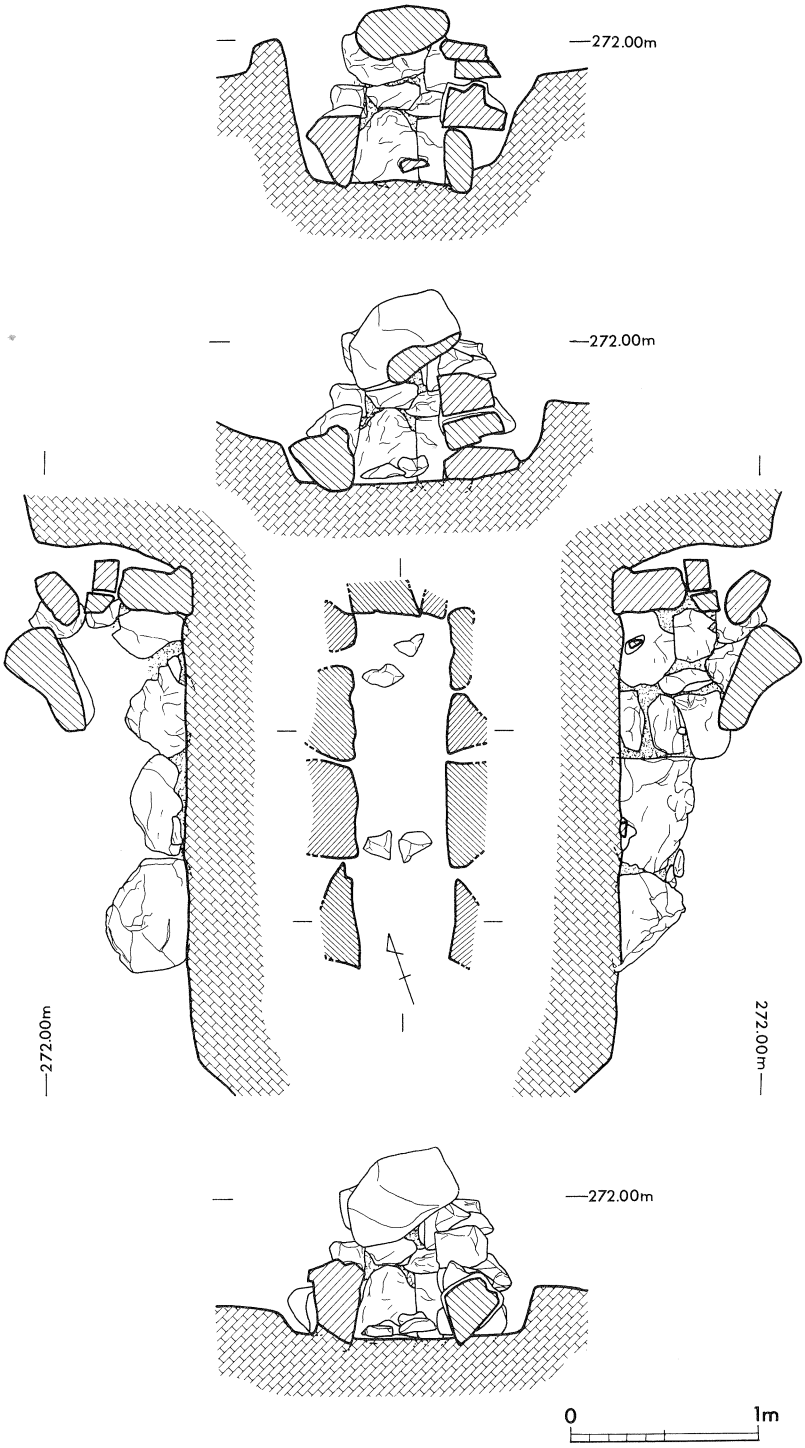
全長　1.88m　　奥 壁 幅　　0.5m　　石室中央部幅　0.48m　　羨 門 幅　0.47m

奥壁部高さ　約0.7m

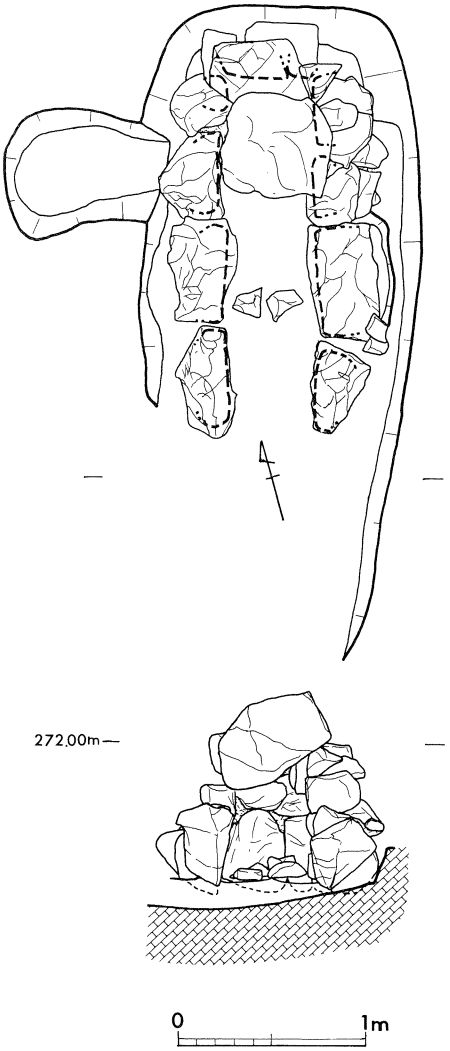
石室は石英安山岩質火山砕屑岩，流紋岩質火山砕屑岩を積んで構築している。玄室と羨道の境界



第59図　小才７号墳石室土層断面図



第60図　小才７号墳石室実測図(1)



第61図　小才７号墳石室実測図(2)

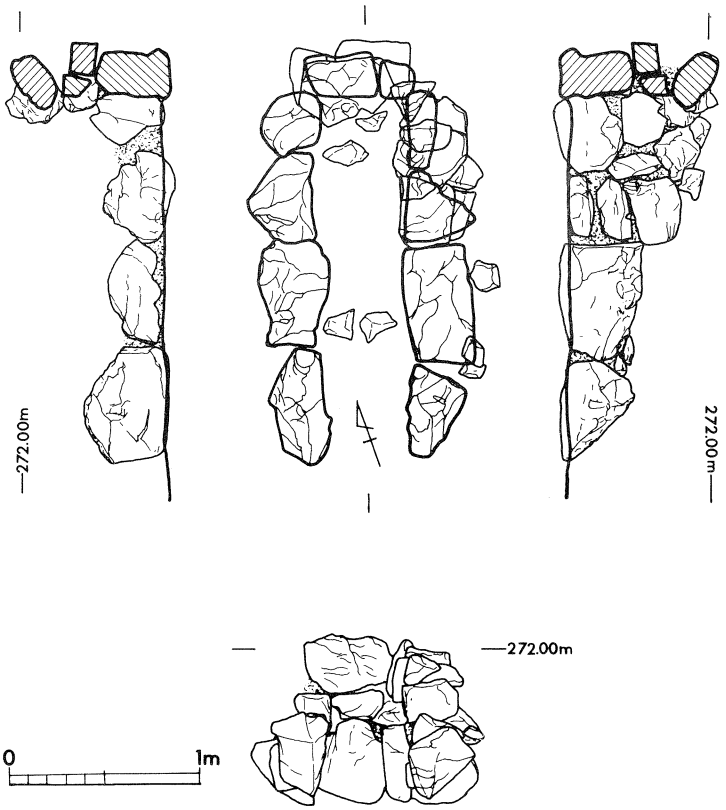
は不明である（第60図，図版48・49）。

平面形・床面　平面形は無袖形の狭長な石室である。奥壁と東壁・西壁はほぼ直角をなし，床面での平面形は長方形である。やや厳密にみれば，西壁は直角であるが東壁はわずかに鋭角になっている。したがって奥壁幅は50cmであるが羨門部にかけて次第に幅が狭くなり，羨門幅は47cmになっている。床面は奥壁から約1.8mの間はほぼ水平面（標高約271.25m）を保ち，そこから南側にかけてはゆるやかに傾斜している。床面は地山の上にしまりのある均一な暗褐色土（第59図３層）が敷かれていた。その上層は砂粒や地山ブロックを含む層（１・２・４層）であり，石室内に流入したものと考えられる。

石室内の床面には15～25cm大の石が４個置かれていた。奥壁側に２個，そこから約75cm隔てたところに２個置かれていた。配置状況からすると，木棺を安置するための台として使用されていたものと思われる。奥壁側の２個の石の頂部が羨門側の２個の石の頂部のレベルよりやや高くなっており，この上に木棺を置くと羨門側に傾斜した状態になる。なお，石室内からは２号墳と同様に鉄釘が１本も出土していない。

明確な玄室と羨道の区別は認められなかった。ただし，掘り方の東壁がこれまで羨門部として記述してきた石よりも南側にのびていることや，石室床面のレベルが奥壁から1.8mの間は水平であるがそこから南側はわずかに傾斜していることなどから調査で確認された石室部分は玄室としてとらえることも可能であろう。またこれまで羨門部として記述してきた石から南へ約25cmのところに15×25cm大の石が１個あったが，これは閉塞石の可能性も考慮される（図版49－１，図版50－１）。仮にこのように考えるとすれば石室全長約2.4m，玄室長約1.8mということになろう。

奥壁　奥壁基底部は幅35cm，高さ40cm，厚さ23cmの比較的大形の石を西壁寄りに据え，その東側に幅13cm，高さ40cm，厚さ10cmの細長い石を立てている。この２個の石は床面の地山を約５cm掘り



第62図　小才７号墳石室実測図(3)

くぼめて据えている。この上に石を二段積み上げて奥壁を構成している。

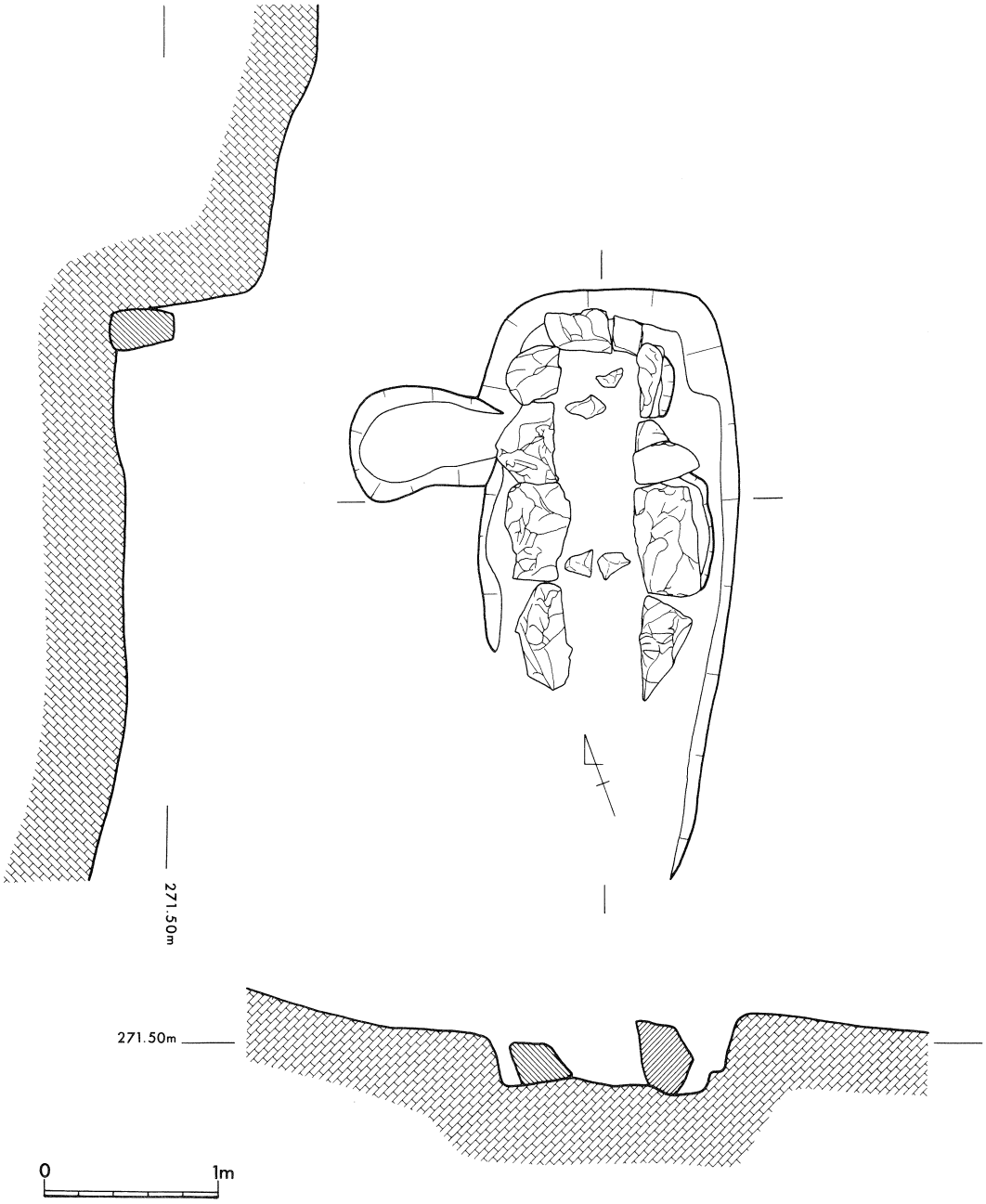
奥壁基底石と側壁基底石の組み合せ関係は，西側では奥壁の石が外に出るように，東側では奥壁の石が側壁の内側に入り込むように構築されている。なお，北東コーナー最上段の石は，奥壁と東壁の相方にかかるように積まれている（第60・62図，図版48－２・３）。

東壁　基底部にやや大形の石を腰石状に据えている。これらは基本的に広い平坦面を内側にそろえるようにして設置されており，その面は内傾している。ただし，奥壁から２番目の石のみは小形の石の小口を壁面として重箱積状に積んでいる。これらの基底石の上にやや小形の石を二段小口積みにして側壁を構築している。石のすき間には小石を充填しているが，裏側の控え積はほとんど行われていない（第60・62・63図，図版48－２，図版49－１）。

西壁　基底部の石が４個残存しているのみである。東壁と同様に，やや大形の石を腰石状に据えている。基本的に広い平坦面を内側にそろえるようにして設置されており，その面はわずかに内傾している。したがって，石室中央部で推定復元すると床面幅48cm，天井部幅40cmとなる（第60・62図）。

天井石　65×60cm，厚さ30cmの石が１枚残っていたのみである。石室最奥部に架けられていたものが，南方へ傾いた状態であった。最も遺存状態の良好な奥壁・東壁の高さから推定すると玄室の高さは0.7mあまりであったと思われる（第60・61図，図版47－１・２）。

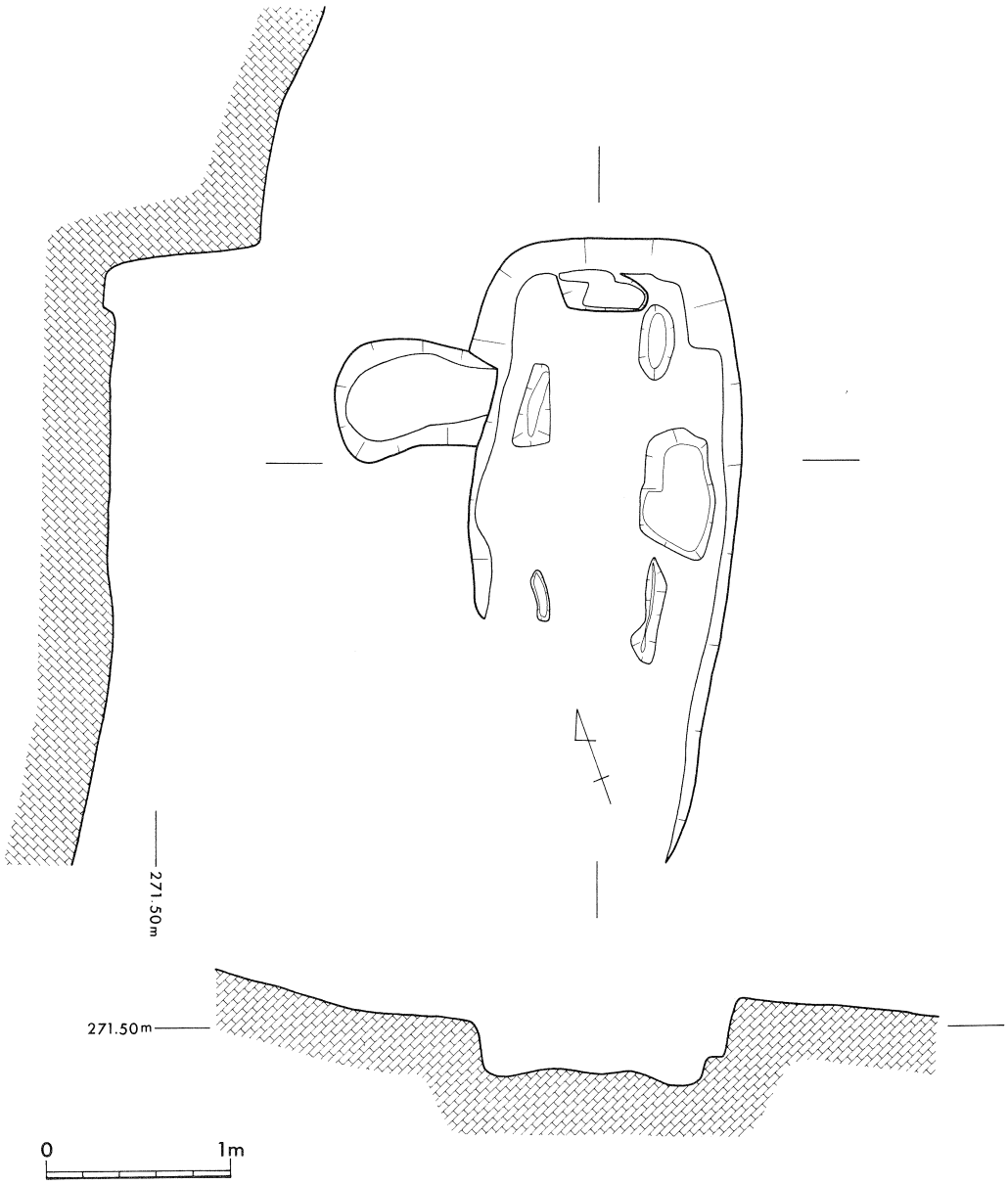
掘り方　南に開口した「コ」の字形を呈するもので，幅1.5m，長さ3.3mある。地山に掘り込んだもので，奥壁部分が最も深く急角度（約80度）に掘り込まれている。東壁・西壁ともに南に行く



第63図　小才７号墳石室実測図(4)

にしたがって浅くなるが，西壁の南半は第１次調査のトレンチによって消滅していた。西壁側には90×60cm，深さ35cmの落ち込みが検出されたが，どのような意味をもつものか不明。掘り方床面には，石室基底部の石を設置するための掘り込みが認められた（第64図，図版49－３，図版50－３）。

（松本岩雄）



第64図　小才７号墳石室掘り方実測図

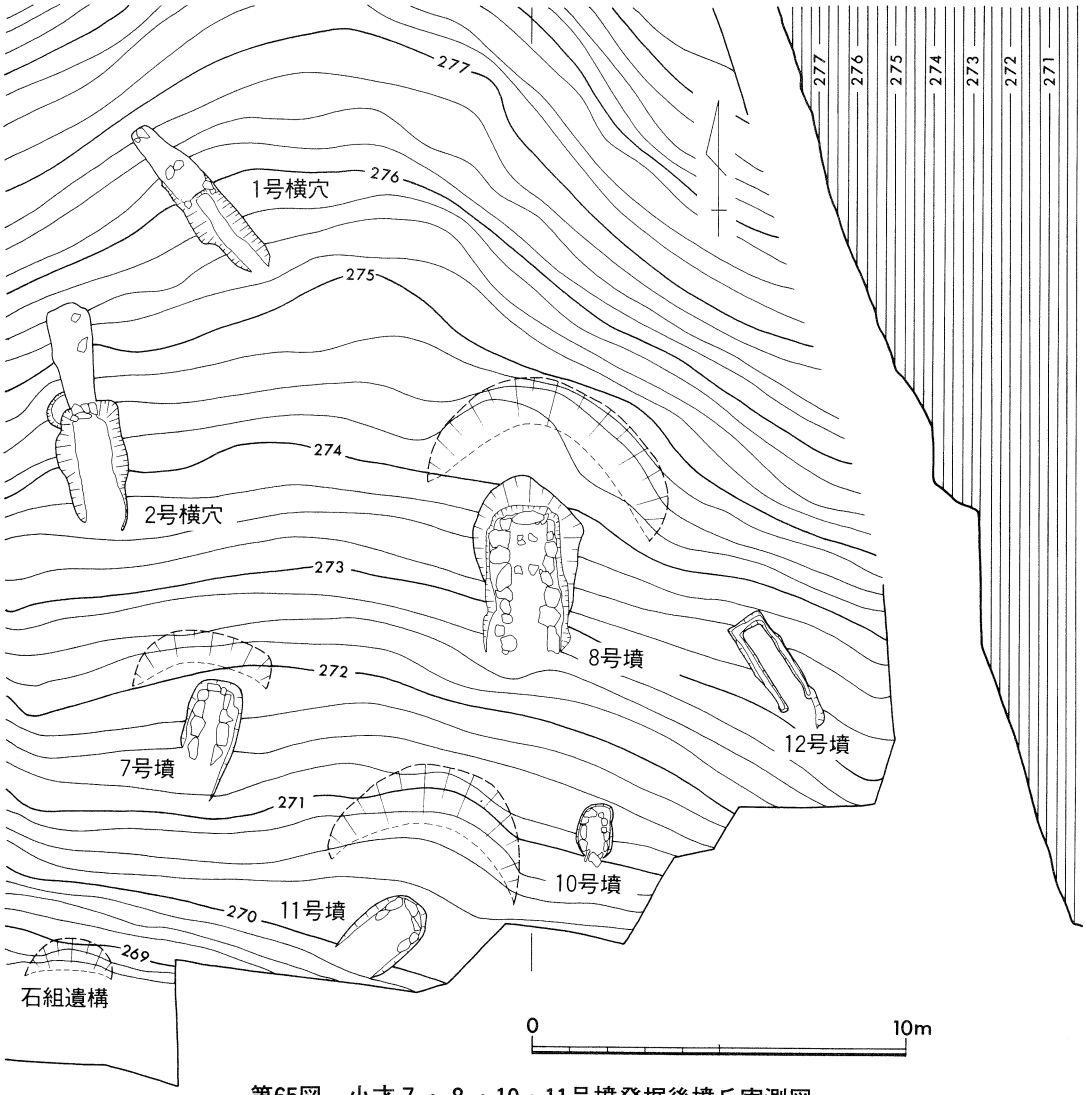
６．小才８号墳

(1)　位　置

７号墳の北東約５ｍの地点に位置する。標高273～275ｍの南向きの斜面にあたる。

(2)　墳　丘

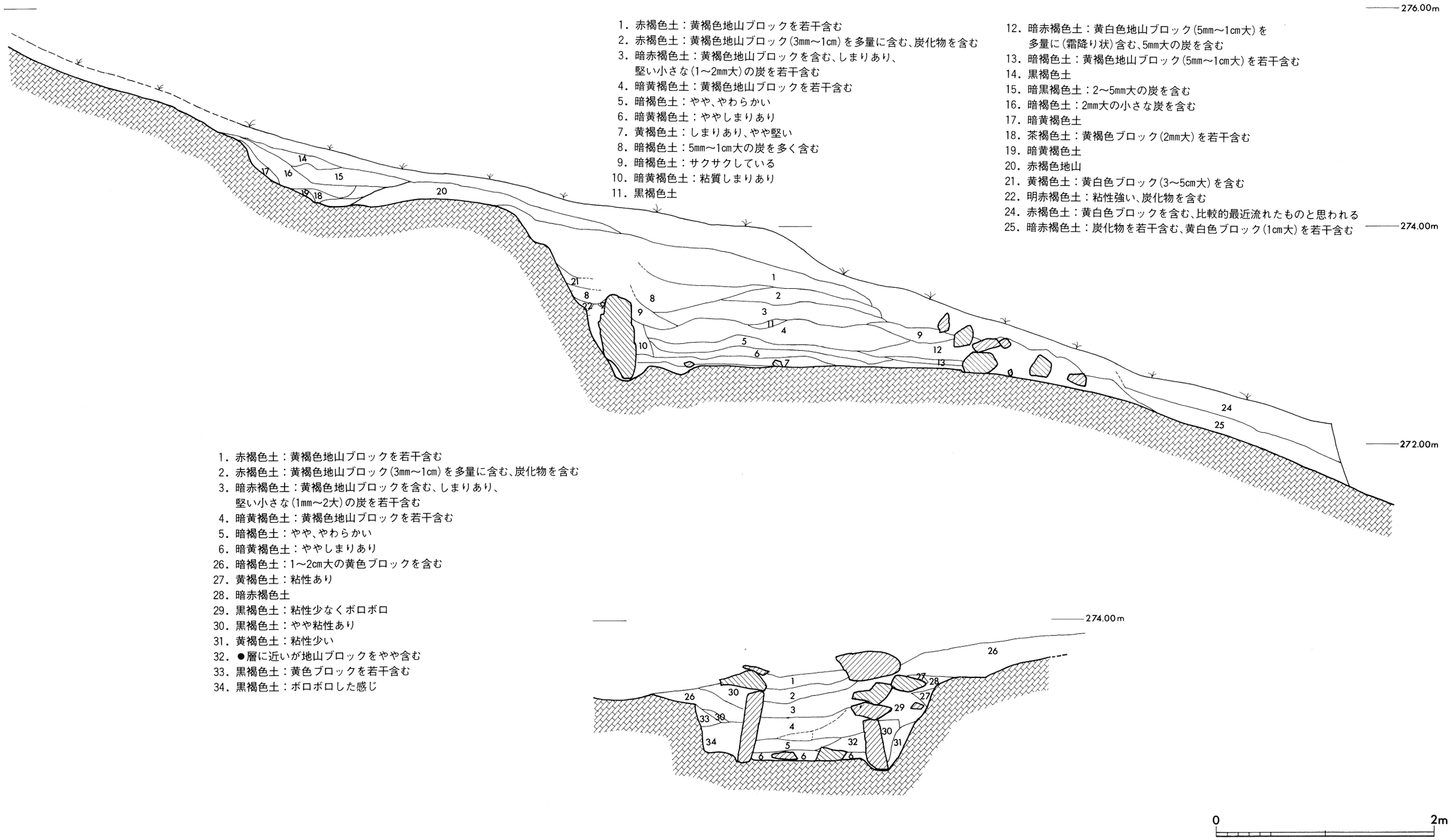
封土は失われており，調査前の地形観察ではマウンドを確認することができなかった。調査の結



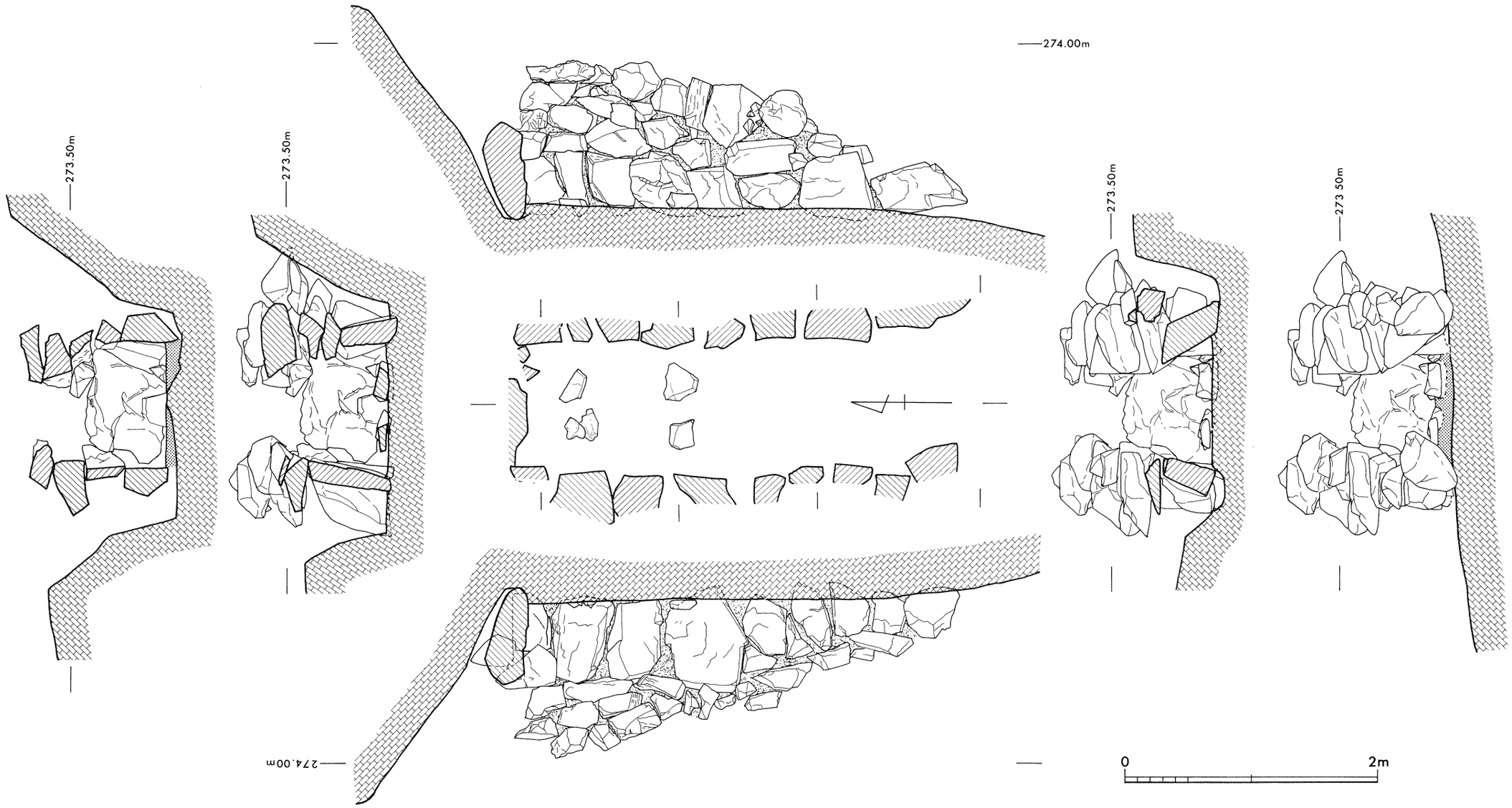
第65図　小才７・８・10・11号墳発掘後墳丘実測図

果，斜面北側（山側）で溝が確認され，土層断面の観察によれば若干の盛土が遺存していることも判明した。溝は上端幅1.5m，下端幅0.9m，深さ45cmあまりのもので，長さ約６mにわたって弧状に掘り込まれている。溝内には炭を含む暗褐色土・暗黒褐色土や黒褐色土が堆積していた。溝の南側では地山の上に５～10cm大の黄白色ブロックを含む暗赤褐色土（20層）が観察され，盛土と判断された（第66図，図版52－１）。

溝の大きさと石室の位置関係などから考えると径５mあまりの円墳であったと思われる。



第66図　小　才　8　号　墳　土　層　断　面　図



第67図　小 才 8 号 墳 石 室 実 測 図 (1)

(3)　内部構造

南方（谷側）に開口する無袖形の横穴式石室である。天井石はすべて失われていたが，奥壁基底部および両側壁はほぼ良好な状態で遺存していた。石室は流紋岩質火山砕屑岩，石英安山岩質火山砕屑岩を積んで構築しており，主軸方向は南北を示す。石室の規模は以下のとおりである（第67図）。

［石室規模］

全長　約3.5m　　玄室推定長 約2.7m　　奥壁幅 0.97m　　前幅 0.98m　　推定高 1.2m

羨道推定長 約0.8m　　羨門幅 0.93m　　高さ 不明

平面形・床面　平面形は無袖形の狭長な石室である。奥壁と東壁・西壁はほぼ直角をなし，床面での平面形は長方形である。玄室・羨道の明確な区別はないが，閉塞石・床面などの状況からすると奥壁から約2.7mの位置までが玄室として意識されていたものと考えられる。すなわち，床面は奥壁から約2.7mの間はほぼ水平面（標高272.7m）を保ち，閉塞石のある部分から南側にかけてはゆるやかに傾斜している。

玄室床面には20～30cm大の石が4箇所に置かれていた。奥壁側に2箇所，そこから50～60cm隔てたところに2個置かれていた。配置状況からすると，木棺を安置するための台として使用されていたものと思われる。ただし，奥壁側の2箇所の石の頂部が羨門側の2個の石の頂部のレベルより3～4cm低くなっており，2号墳・7号墳の状況とやや異っている。なお，石室内から鉄釘をはじめその他の遺物も1点も出土しなかった（第67図）。

閉塞施設　閉塞は奥壁から約2.7mの位置に認められた。15～40cm大の自然石を積み上げたものである。玄室側はほぼ直線に並べ三段ほど（高さ40～50cm）積み上げられているが，南側（谷側）は若干崩れ落ちたような状況を呈している（第68・69図，図版51－1）。

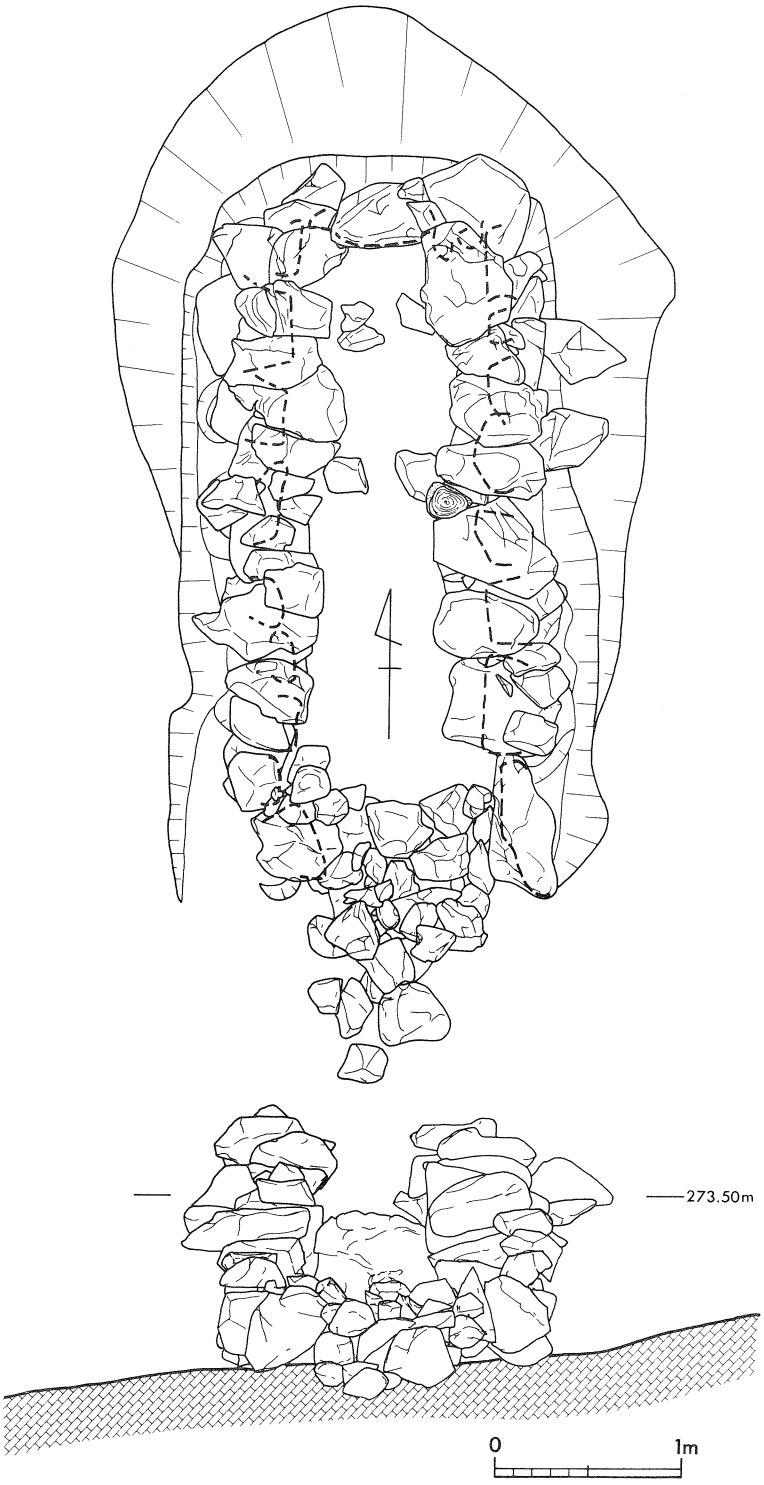
奥壁　西側の上半部が失われていた。基底部は幅70cm，高さ75cm，厚さ30cmの大形の石を西壁寄りに据え，その東側に幅20cm，高さ60cmの細長い石を立てている。この2個の石は床面の地山を10～15cm掘りくぼめて据えている。この上に小形の石を小口積状に三段積み上げて奥壁部を構成している。

側壁との石組みの関係は，東壁・西壁ともに奥壁の外側に接するように構築されている（第67図，図版53－1）。

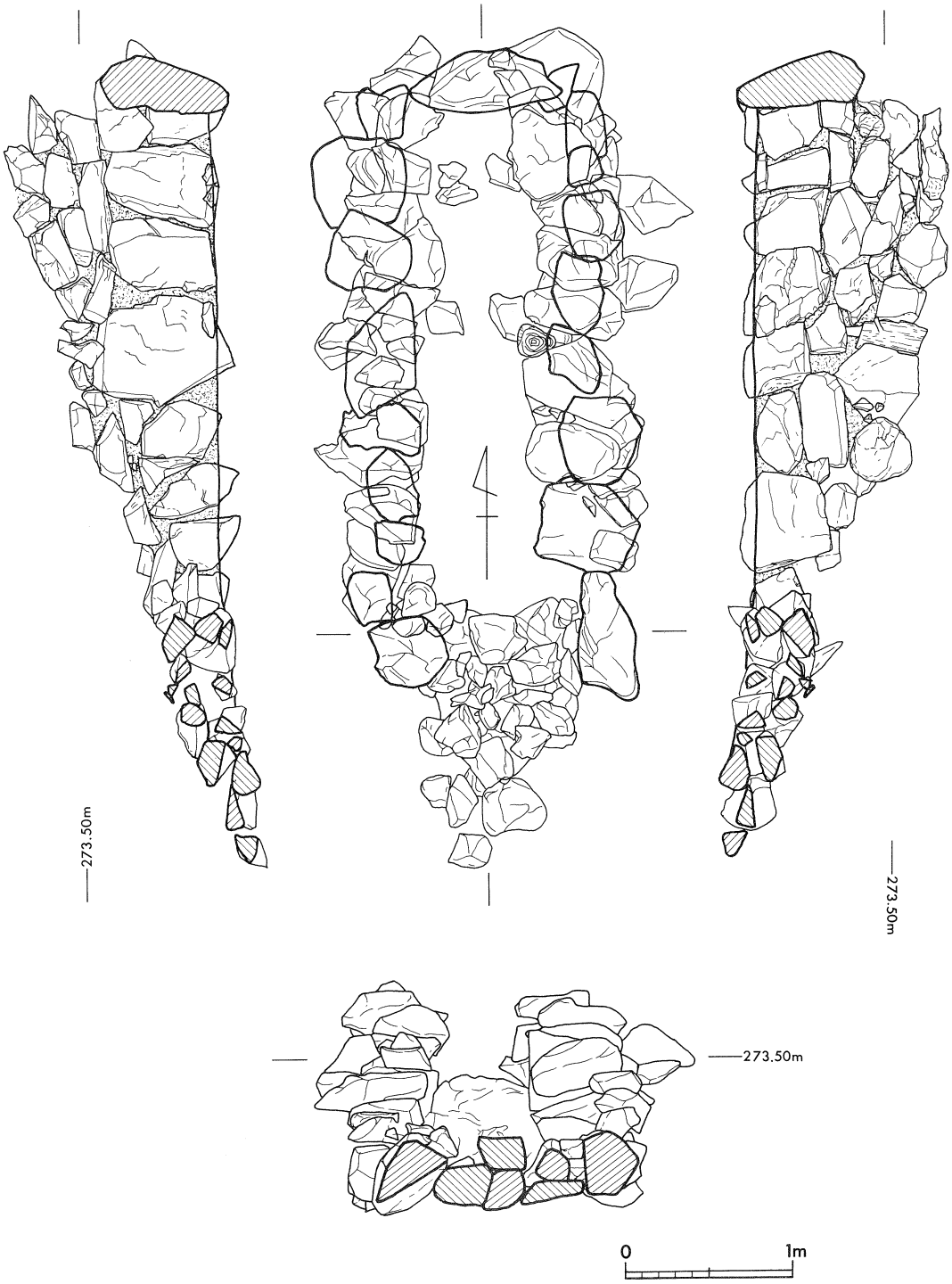
東壁　基底部にやや大形の石を腰石状に据えている。これらは基本的に広い平坦面を内側にそろえるようにして設置されており，その面は内傾している。奥壁部から5個目の石までは縦長になるように据え，6・7・8番目の石は横長に据えられている。基底石上面のレベルは不ぞろいである。これらの基底石の上にやや小形の石を三～四段小口積みにして側壁を構築している。奥壁とのコーナーは，基底石の上の段からは奥壁と東壁の両方にかかるように積み上げられている。石のすき間には小石を充塡しているが，裏側の控え積はほとんど行われていない（第67図，図版53－3）。

西壁　基底部にやや大形の石を腰石状に縦長になるように据えている。これらは基本的に広い平坦面を内側にそろえるようにして設置されており，その面は奥壁付近では垂直に近いが，中ほどより南側では内傾している。奥壁部から４番目の石までは大きな石を使用して，上面のレベルを床面から約70cmの高さにそろえている。５番目から南側はやや小形の石を使用して，上面のレベルを床面から30～40cmの高さにそろえている。これらの基底石の上に小形の石を三段あまり小口積にして側壁を構築している。控え積はほとんど行われていない（第67図，図版53－２）。

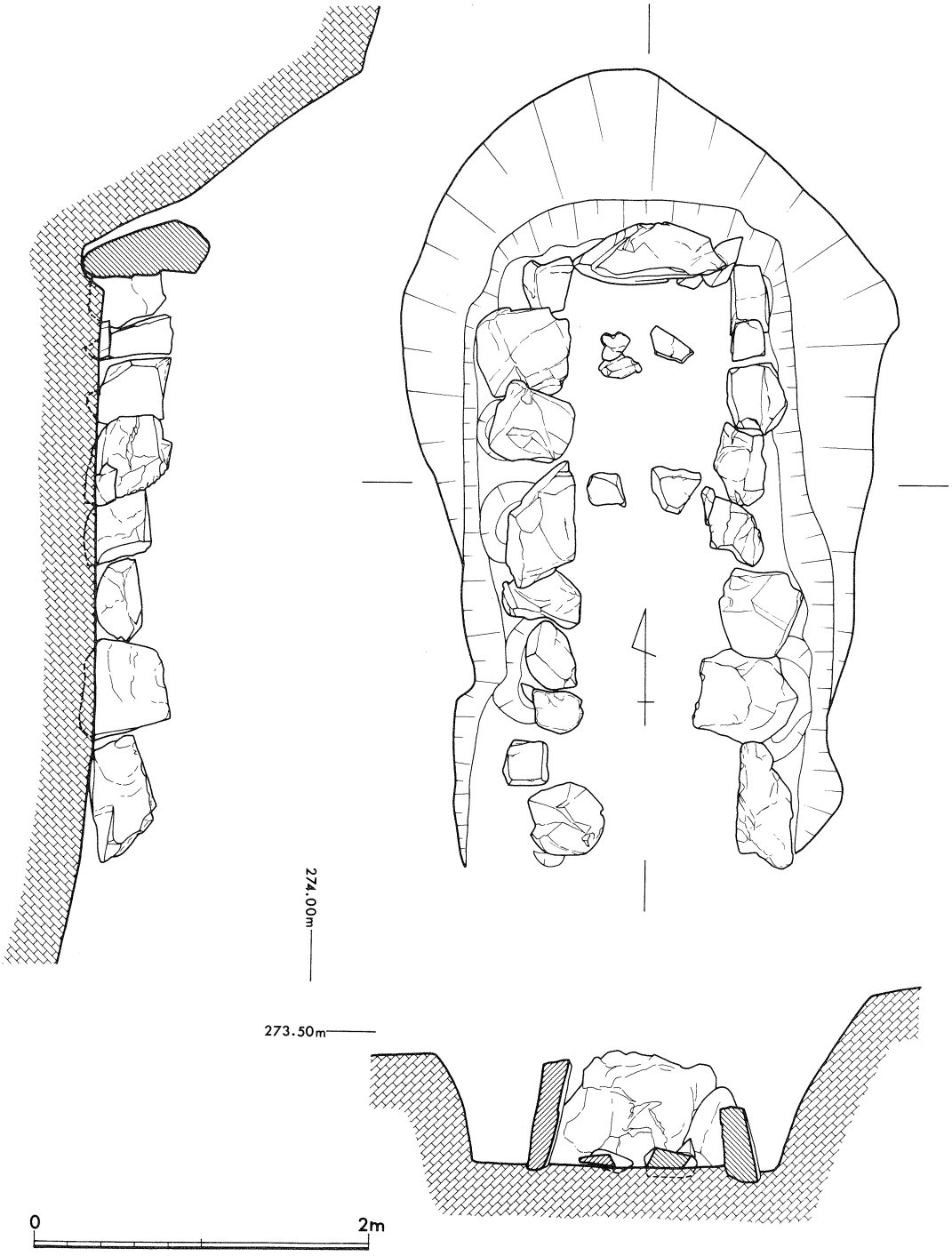
掘り方　南に開口した「コ」の字形を呈するもので，幅３ｍ，長さ4.8ｍある。奥壁部が最も深く急角度に掘り込まれている。まず約55度の角度で1.1ｍ掘り下げたのち65度の急角度で50cmあま



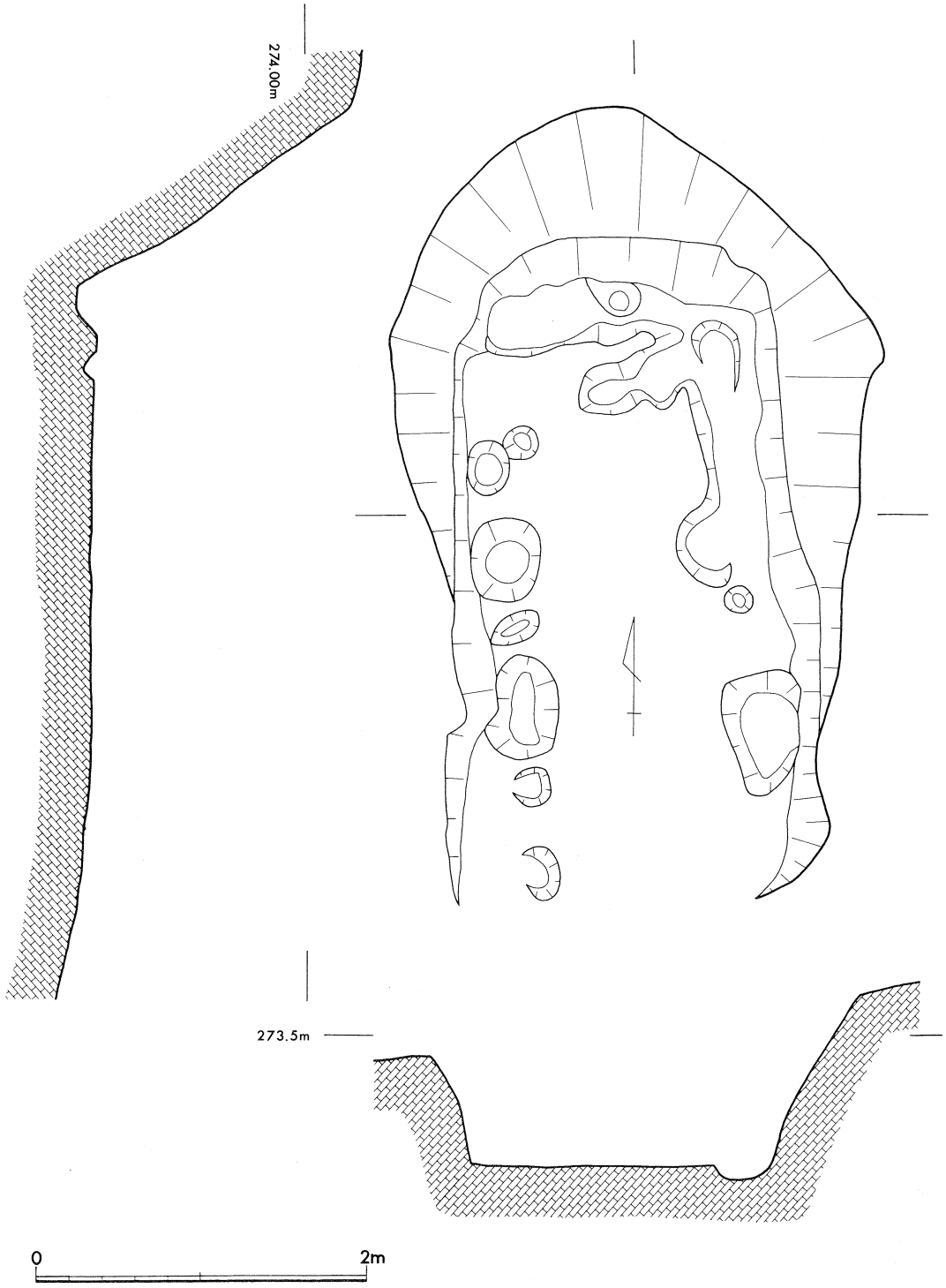
第68図　小才８号墳石室実測図(2)



第69図　小才 8 号墳石室実測図(3)



第70図　小才８号墳石室実測図(4)



第71図　小才８号墳石室掘り方実測図

り掘り下げられている。東壁・西壁ともに南に行くにしたがって次第に浅くなる。壁の高さは全体的に東壁が高く西壁が低い（第71図，図版55－３）。

石室内の土層　石室内には黄褐色地山ブロックを含む暗赤褐色土・暗黄褐色土・赤褐色土や黄褐色土・暗黄褐色土などが水平に近い状態で堆積しており，土層観察では木棺の痕跡等を確認することができなかった（第66図，図版54－１）。　（松本岩雄）

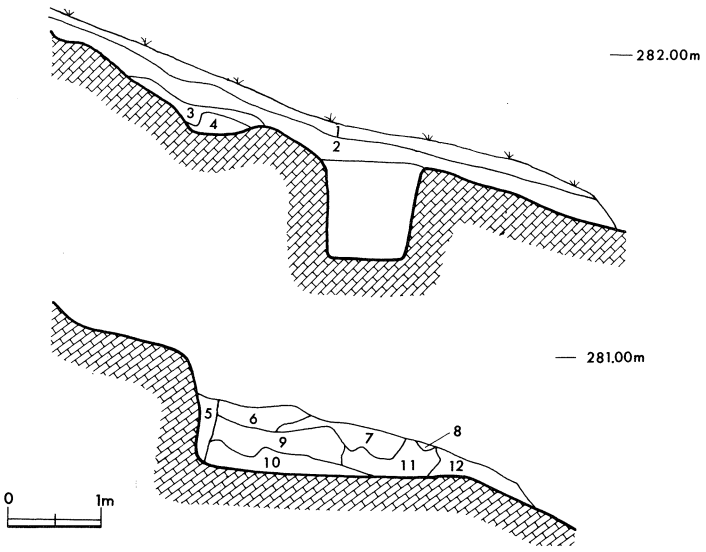
7．小才９号墳

(1)　位　置

小才２号墳の南東側に接するような位置にあたる。２号墳と９号墳の埋葬施設中心間の距離は約９ｍである。標高279.5～282ｍの南東向きの丘陵斜面に立地している（第９・37図）。

(2)　墳　丘

調査前に地形を観察したところではマウンド等は認められなかった。調査の結果，山側に三日月形の地山加工痕が検出され，わずかばかりの墳丘をつくり出していたことが明らかになった。地山加工痕は長さ４ｍ，深さ0.5ｍあまりのもので，埋葬施設との位置関係などから考えると元は径５ｍあまりの円墳を意識して築造されたものと推測された（第72・73図，図版56－１・２）。

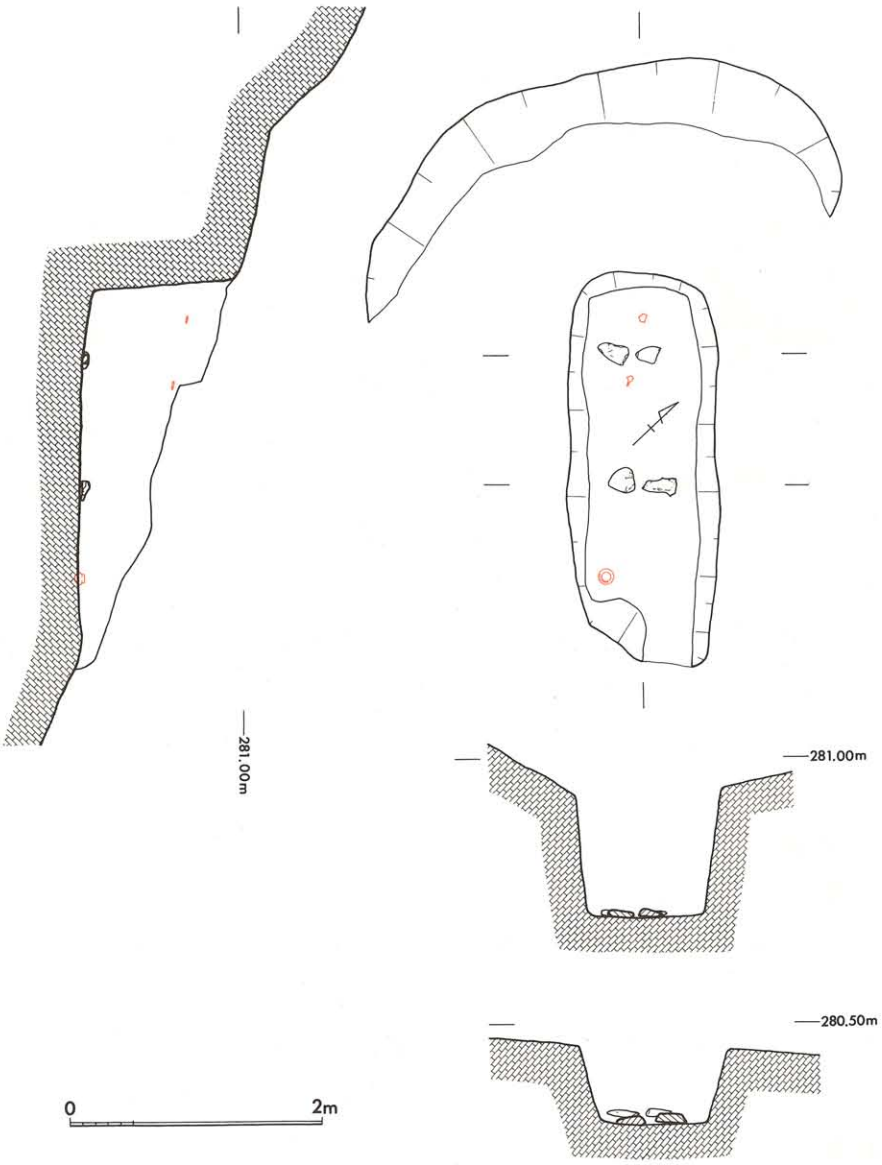


1．表土
2．暗黄褐色土（炭化物を含む。柔らかい）
3．茶褐色土
4．暗茶褐色土（地山の小ブロックを含む）
5．黒褐色土（炭化物を含みサクサクした感じ）
6．黒褐色土（ややしまりがあり若干の粘性あり）
7．明赤色土（白色砂粒を含む。粘性あり）
8．明赤黄色土
9．黒褐色土と明赤色土が混在
10．明赤色土（径3cm大の地山ブロックを多量に含む）
11．明黄色土（サクサクした感じ）
12．黒褐色土

第72図　小才９号墳土層断面図

(3)　内部構造

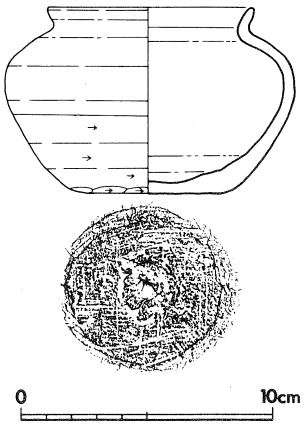
表土直下の暗黄褐色土を削平している段階で長方形の落ち込みを検出したので，当初は土壙ではないかと判断して調査を進めた。ところが，南東方向に開口する掘り方が検出され，床面には木棺をのせたと推定される石が４個配置されていた。したがって，木室状の施設の内部に木棺を安置し



第73図　小才９号墳遺物出土状況及び遺構実測図

た構造をもつものと考えるに至った。掘り方上端は長方形を呈し，長さ3.1m，幅１～1.1m，深さ1.1mある。下端のプランは片袖状を呈し，木棺安置部（玄室）は長さ2.5m，幅0.9m，開口部（羨道部）は長さ0.5m，幅0.4mある。掘り方主軸方位はN－47°－Wである。

掘り方内の土層は，残念ながら主軸方向のみしか図化しなかった。土層の観察によって木棺と木室の明確な痕跡を確認することができなかった。ただし，北西壁（奥壁）際にのみ縦方向に走る黒褐色土層（第72図５層）が存在することから，掘り方の壁際に据えられた木壁（木室）の痕跡であ



第74図　小才９号墳出土遺物実測図

る可能性もある。

床面には20～25cm，厚さ３～８cmの板状石が４個置かれていた。奥壁から約40cmの位置に２個，そこから約80cm離れた位置に２個配置されていた。板状石上面のレベルは奥壁寄りの２個が２～３cm高くなっている。床面はほぼ水平（標高約279.7m）になっているが，掘り方開口部（羨道部）にかけてわずかずつ低くなっている（第73図，図版57－２）。

(4)　出土遺物

玄室内南東の木棺外と考えられる地点で須恵器短頸壺が１個出土した（第73図，図版56－３）。このほか掘り方上面付近の堆積土中より須恵器小片が２点出土した（第73図）。

須恵器短頸壺（第74図－１）は，口径8.2cm，高さ7.4cmある。底部にはヘラによる切り離し痕と不整方向に走る筋状の痕跡がみられる。胴部外面下半は回転ヘラケズリ，胴部と底部の境界は静止ヘラケズリが行われている。内面および外面の上半には回転ナデ痕がみられる。胎土中には１mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で青灰色を呈す。　（松本岩雄）

８．小才10号墳

(1)　位　置

８号墳の南東約４mのところに位置する。標高約271mの南向きの丘陵斜面に立地している（第65図）。

(2)　墳　丘

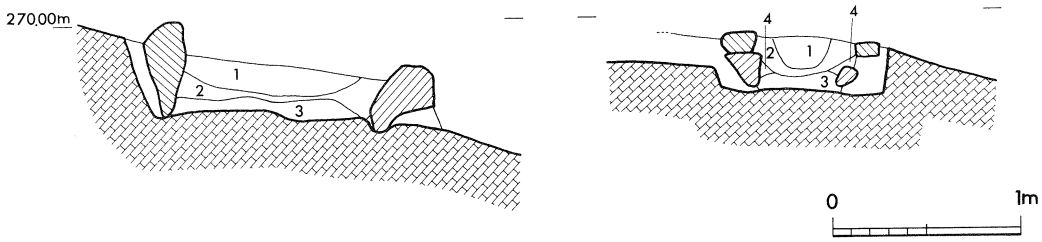
封土は失われており，墳形・墳丘規模等について確認することができなかった。小規模な埋葬施設であることから，もともと顕著な封土は施されていなかったものと推測される。

(3)　内部構造

南北方向に主軸をとる小形の石室である。石室北側の小口部はきちんと組まれているが南側の小口部はややすき間があり，一見小型の横穴式石室のようにもみえる。ただし，南側小口部に使用されている石材が側壁基底部の石とほぼ同じ大きさであることや，掘り方床面に掘り込みを入れたのちに置かれていることなどから，閉塞石とは考え難い。四壁が囲まれた小型の構築物であることから石棺ともみられるが，壁面構築法などは石室と同様であるので，ここでは便宜上小石室として扱うことにする。天井石は１個も遺存していなかった。また，石室内から遺物は出土しなかった。

石室の規模は，長さ1.05m，幅40cm，残存部最大高45cmある（第76図，図版58・59）。

平面形・床面　平面形は長方形を呈するが，中央部がやや幅広くなっている。床面は北側が高く，



1．暗赤褐色土（黄褐色地山ブロック〔1～2cm大〕を含む。炭化物を若干含む）
2．黒褐色土
3．暗褐色土（地山ブロック〔1cm大〕を若干含む）
4．暗褐色土（1～2cm大の黄褐色地山ブロックを多く含む）

第75図　小才10号墳土層断面図

南側に行くにしたがってゆるやかに傾斜している。ちなみに，北側の標高は271.03m，南側の標高は270.96mである。

北壁　比較的大形の石を縦長に2枚並べて置き，東側の石の上には1個の自然石をのせている。北壁はほぼ完全に遺存しているようである。

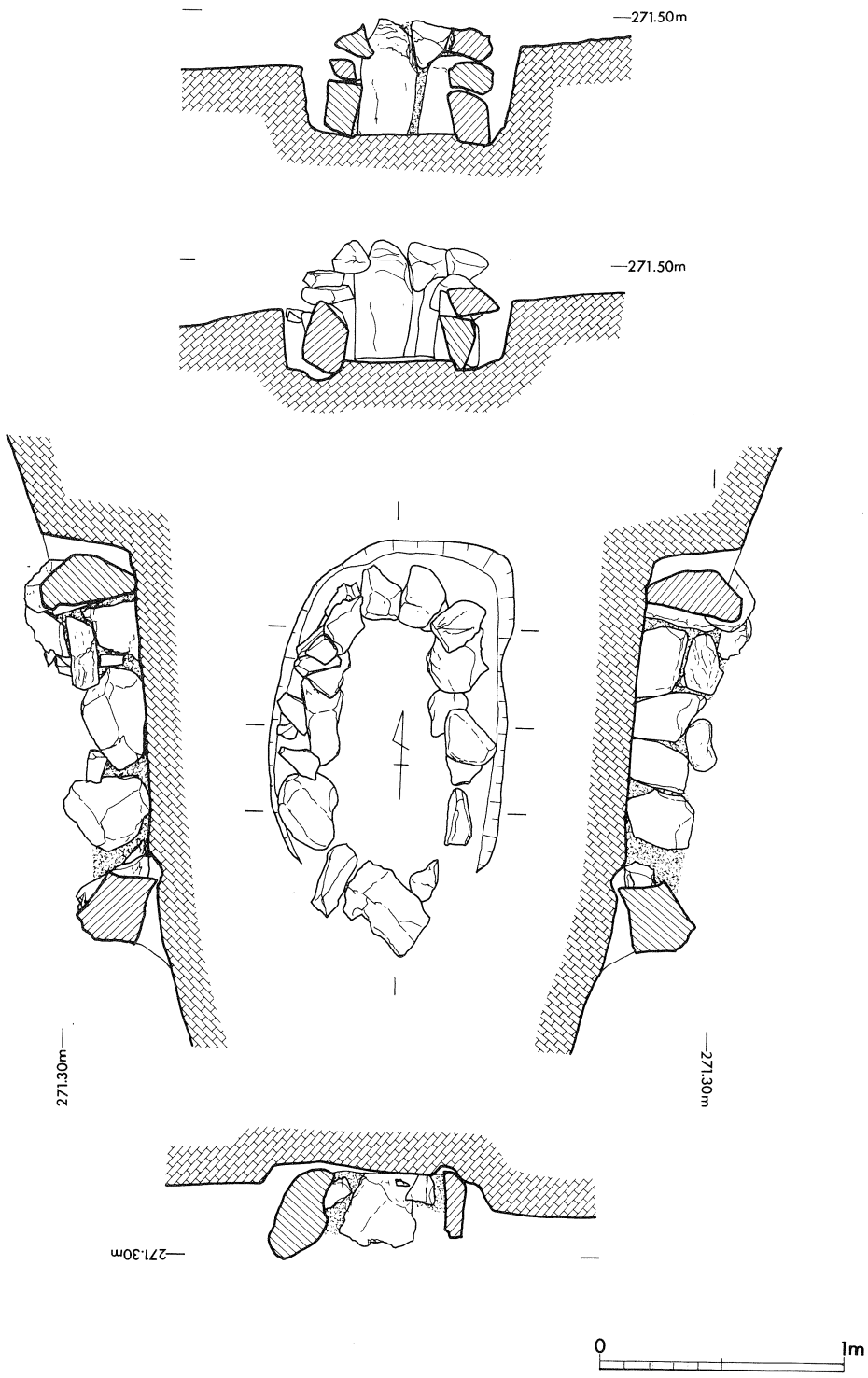
側壁との石組みの関係は，東壁・西壁ともに北壁の内側に入り込むように構築されている。なお，コーナー最上段の石は北壁と東・西壁にかかるように置かれており，三角持送り状になっている。

東壁　基底部にやや大形の石を腰石状に据えている。これらは基本的に広い平坦面を内側にそろえるようにして設置されており，その面はわずかに内傾して立ち上っている。北壁よりの1個は横長に据え，南側の3個は縦長に置かれている。二段目・三段目は，やや小形の石を小口積にしている。控え積は行われていない。

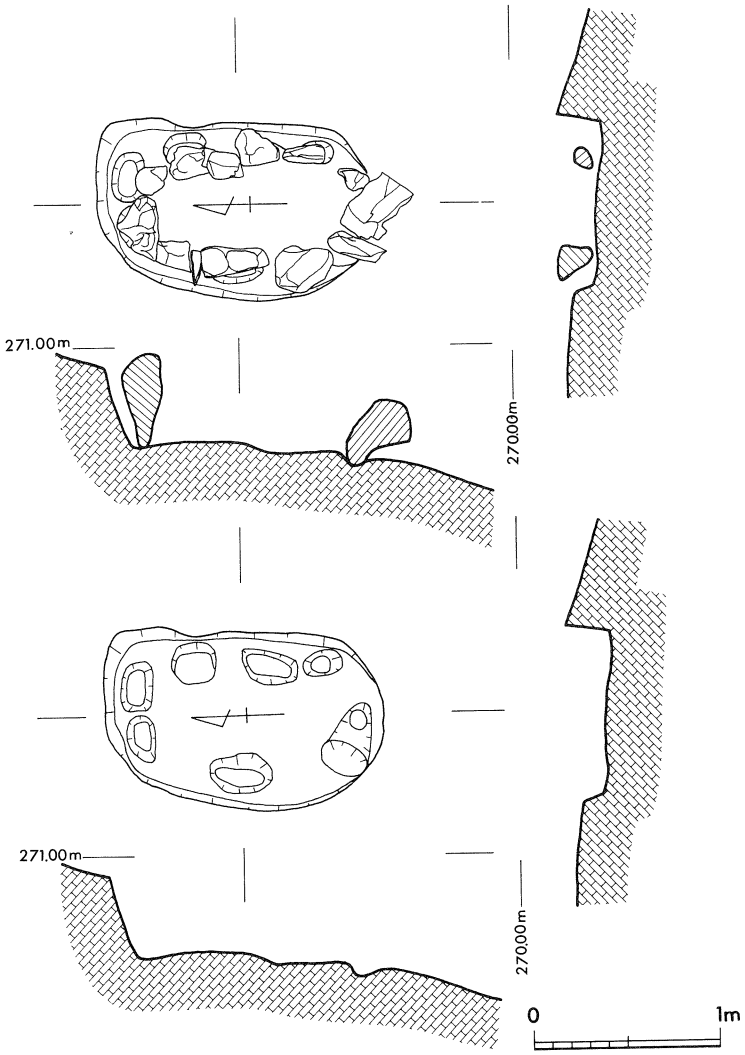
西壁　東壁と同様に基底部は大形の石を腰石状に据えている。東壁よりやや粗雑な設置の仕方である。二段目・三段目は小形の石を小口積にしている。控え積は行われていない。

南壁　中央に大形の石を据え，両脇に小形の石を置いている。斜面に位置するため，南方へやや傾いているが，もともとはきちんと立てられていたものと思われる。側壁との石組み関係については確認できなかった。

掘り方　現状では南に開口した「コ」の字形を呈するもので，幅0.95m，長さ1.5mある。南側は斜面のため壁が残存していなかったが，もとは隅丸長方形～楕円形の掘り方であったと思われる。壁は北側は最も高く，約35cmある。　（松本岩雄）



第76図　小才10号墳石室実測図(1)



第77図　小才10号墳石室実測図(2)

9．小才11号墳

(1)　位　置

8号墳の南西約3mの地点に位置する。また東方約2mには10号墳，西方約3mには7号墳がありこのあたりは小規模な古墳が近接して造られている。標高270～271mの南向きの丘陵斜面にあたる（第65図）。

(2)　墳　丘

封土は失われており，調査前の地形観察ではマウンドを確認することができなかった。

調査の結果，斜面北側（山側）で地山を切削加工した痕跡がみつかり，おおよその墳丘を推測することが可能となった。地山加工痕跡は三日月形を呈しており，長さ約4.8m，検出面からの深さ88cmを測る。この大きさや形状からすると，この古墳は径6mあまりの円墳であったと思われる。地山加工痕内には炭化物を含む黒褐色土が堆積しており多くの須恵器片と若干の土師器片が出土した（第83・84図，図版63－1，図版64）。

(3)　内部構造

石室の一部しか遺存していなかったが，南西方向に開口する横穴式石室と考えられる。石室奥壁部幅80cm，高さ75cmあり，残存全長は80cmあまりしかない。石室主軸方向はN－54°－Eである。天井石は遺存していなかった。閉塞施設等についてもまったく不明である。

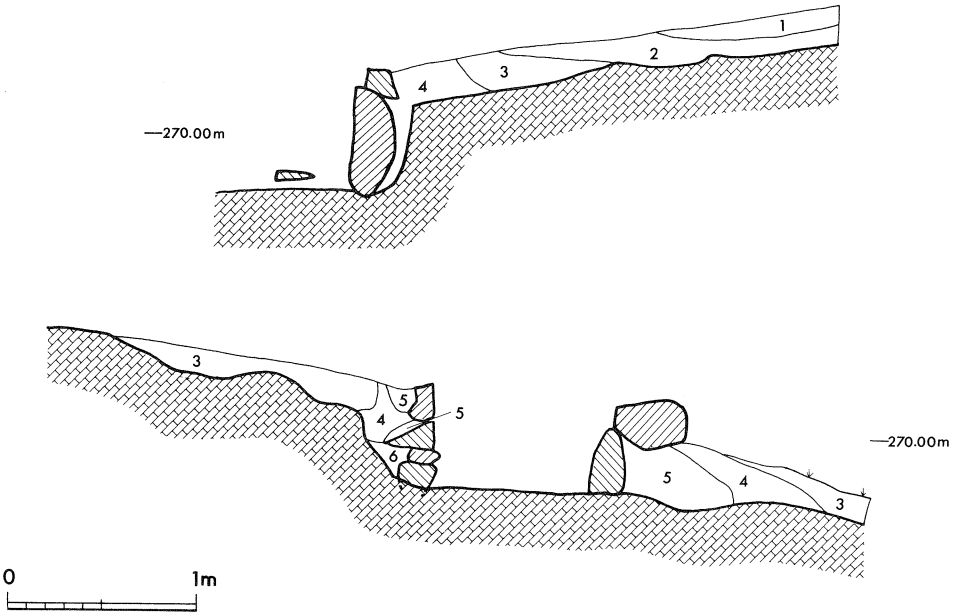
平面形・床面　一部しか遺存していないため不明であるが，側壁基底石抜取痕の状況などからす

ると石室全長は少なくとも1.7m以上あったものと考えられる。したがって，平面形は概ね長方形を呈していたことがわかる。ただし，奥壁と側壁の角度が直角でないことが大きな特徴といえる。すなわち，奥壁と北西壁の角度は約75度，奥壁と南東壁の角度は約110度となっており，本遺跡で検出した他の石室とは趣を異にしている。

床面はほぼ水平で，標高は269.72mある。奥壁から20cm隔てたところに棺台と思われる偏平な石が２個置かれていた。この石は一辺20～30cm，厚さ３～４cmのもので，２個が接するように置かれていた（第79・80図）。

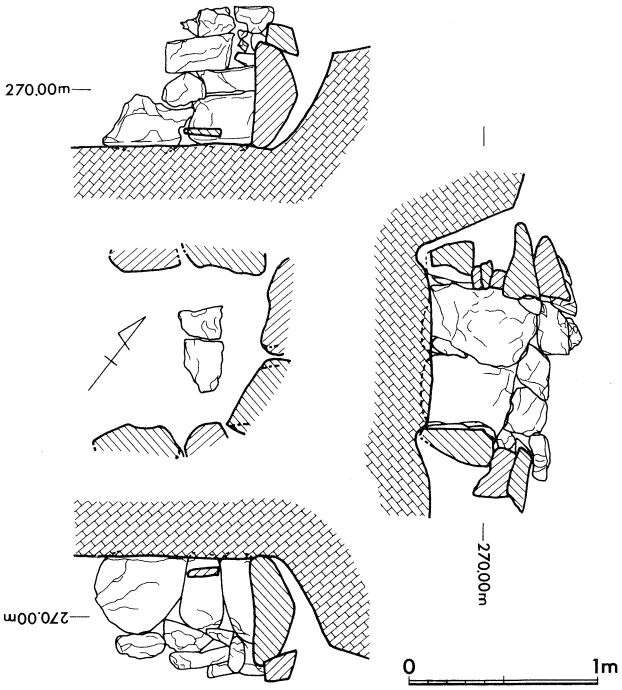
奥壁　比較的大形の石を縦長に２枚並べて置き，その上に小さな石を１～２段小口積とする。基底部の石は地山を７cmあまり掘り下げて，床面に対してほぼ垂直になるように据えている（第79図，図版62－１）。

側壁との石組の関係は，北西側壁の外側に奥壁の石が出るように組まれているが，南東側壁とは石のコーナーが接する形となっており，きちんと組まれていない（図版61－２）。控え積みはみら

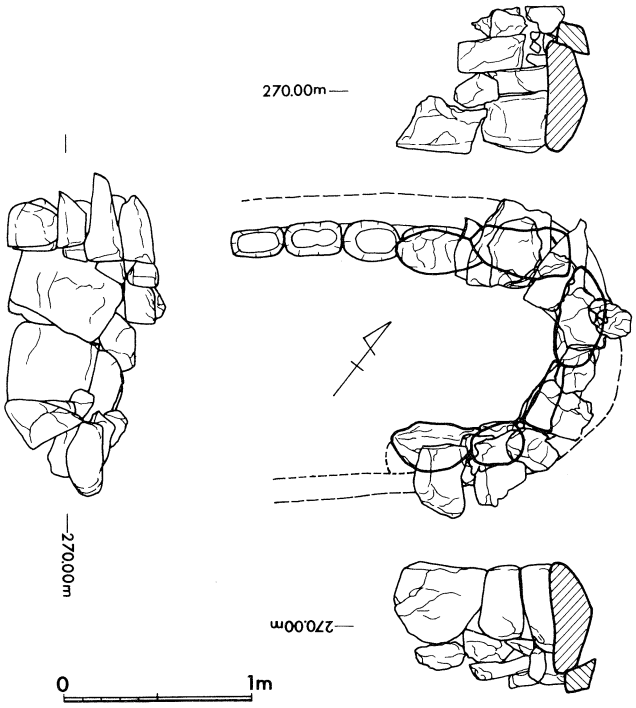


1．赤褐色土（後世，この谷の東側丘頂部を切削した際に流れた土）
2．暗褐色土（炭化物を若干含む）
3．黒褐色土（炭化物を多く含む。周溝状に山側をぬぐる）
4．暗褐色土（炭化物を若干含む。石室の詰土兼盛土状のものと思われる）
5．明褐色土（しまりあり）
6．黒褐色土（やや柔らかく粘性が強い）

第78図　小才11号墳土層断面図



第79図　小才11号墳石室実測図(1)



第80図　小才11号墳石室実測図(2)

れなかった。

南東壁　基底部にやや大形の石を腰石状に据え，その上に小形の石を小口積にしている。コーナーの二段目から上は，奥壁と側壁の両方にかかるように積み上げられている。控え積みはみられなかった。

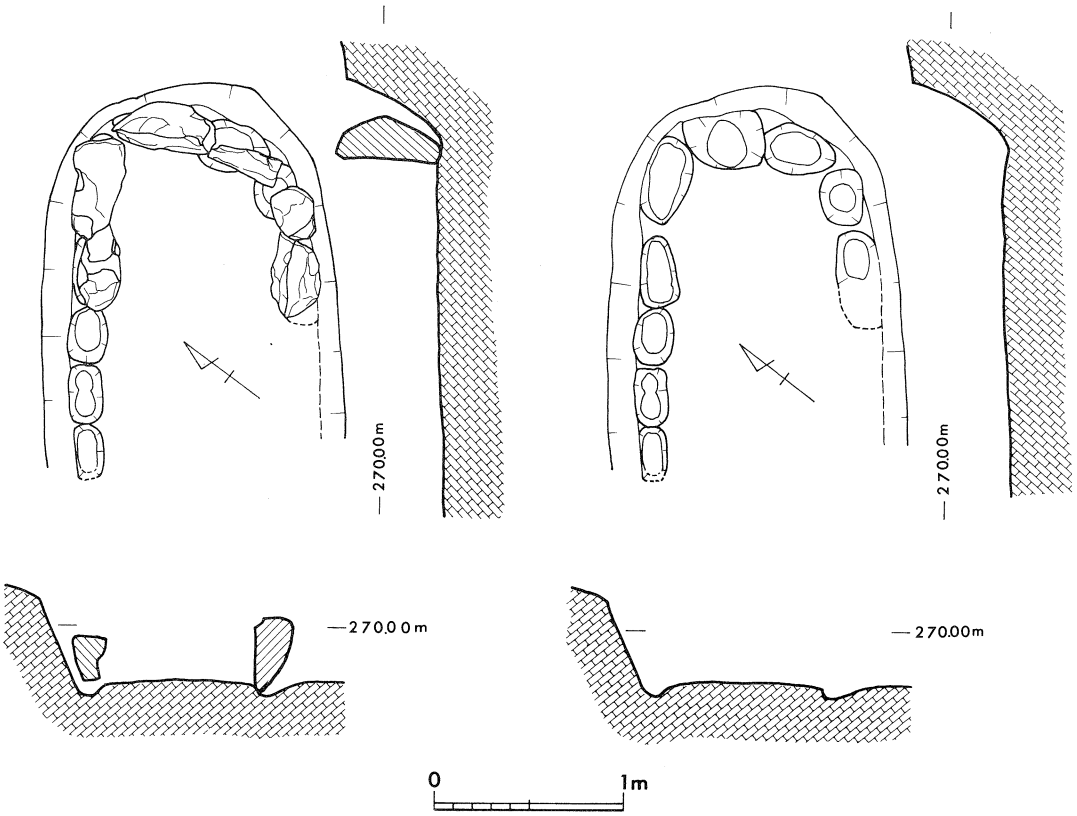
北西壁　ほぼ同じ大きさの石を4段ばかり小口積にしており，高さは約75cmある。やや内傾（約75度）しながら煉瓦積状に構築されている。コーナーの三段目から上は，奥壁と側壁の両方にかかるように積み上げられている。控え積みはみられず，掘り方とのすき間には暗褐色土，明褐色土（しまりあり），黒褐色土などが詰められていた（第78図）。

掘り方　掘り方は南西に開口した「コ」の字形を呈するもので，幅1.6m，残存長2.1mある。奥壁部が最も深く掘り込まれている。60度の角度で約30cm掘り込まれている（第81図，図版60－3）。

(4)　出土遺物

遺物は，石室内から土師器坏1個が出土したほか，石室の北側（地山加工痕跡内を中心とした地域）で須恵器片と土師器片が出土した。

土師器坏（第82図，図版64）　石室内から出土したものであるが，床面より約12cm浮いた状態であった。

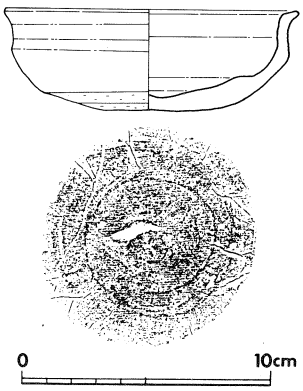


第81図　小才11号墳石室実測図(3)及び掘り方実測図

これとほぼ同じレベルから上部にかけては石室内に多数の小石が入り込んでおり，土師器もこれらの石とともに後世に入り込んだ可能性がある。坏は口径11.8cm，高さ4cmあり，底部に回転ヘラケズリが施されている。全体に厚手のつくりで，口縁端部上面がフラットになっているのが特徴である。胎土は密で，1～2mm大の砂粒を若干含む。焼成は良好で，内面淡橙色，外面黒褐色を呈する。

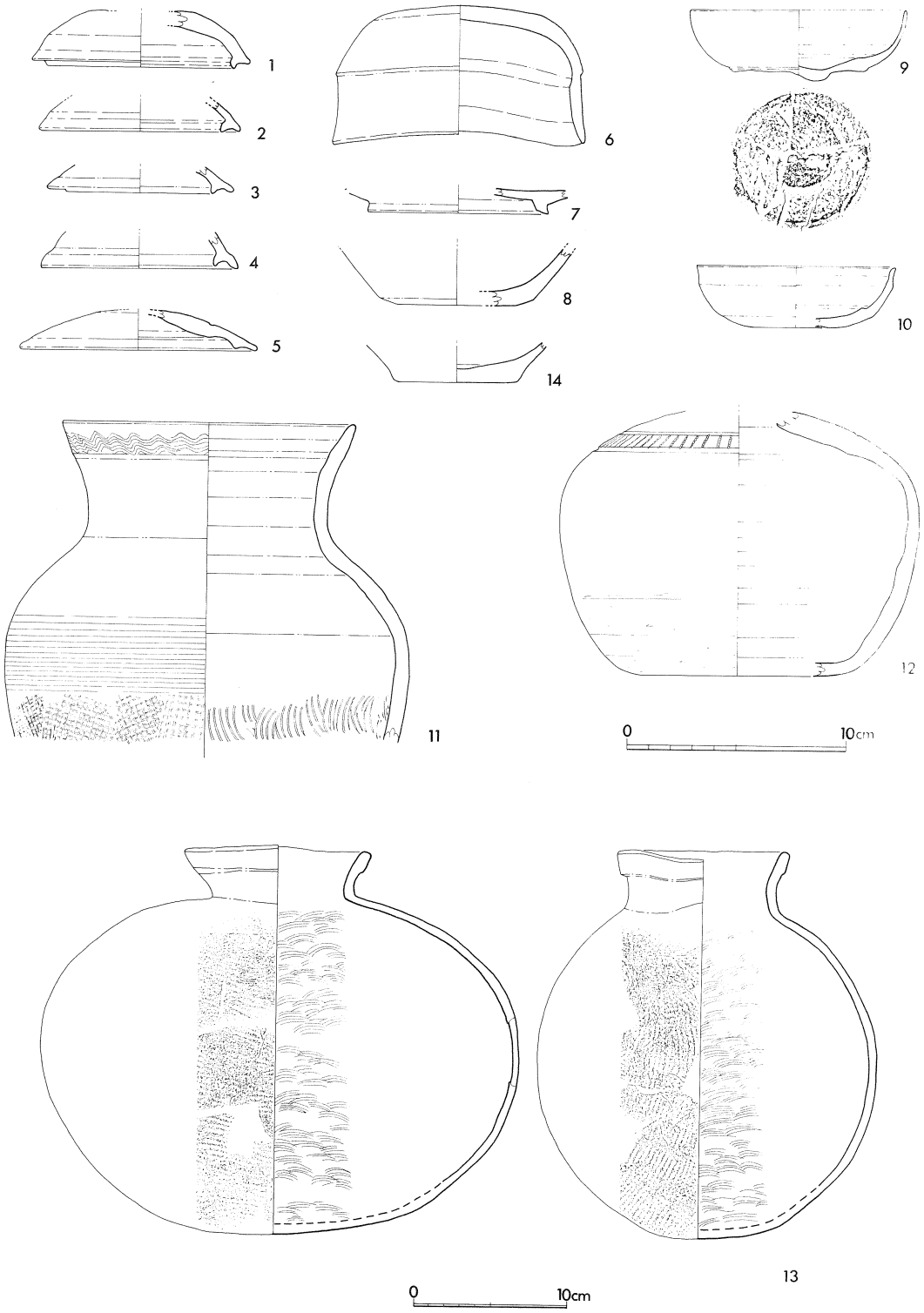
11号墳周辺から出土した遺物のうち図示したのは，須恵器12点，土師器1点である（第84図，図版64）。

須恵器蓋（第84図1～6）　1～5はいずれも内面にかえりを有する蓋である。小片のため，つまみの形状については不明。口径10cm前後の小形品である。6は蓋として図示したが，坏になる可能性もある。焼けひずみが著しく，口径13×11.5cm，高さ約6cmある。天井部外面はヘラ切りの後ナデが施されているが，カキ目状の痕跡が不整方向に残っている。



第82図　小才11号墳出土遺物実測図

第83図　小才11号墳遺物出土分布図（● 土器、△ 石片）



第84図　小才11号墳周辺出土遺物実測図

胎土は密で，１㎜大の砂粒（長石など）を若干含む。焼成は良好で，淡青灰色を呈す。

須恵器坏（第84図７～10）　７は高台付の坏である。８は底部に回転ヘラケズリが施されており，小形壺の底部になる可能性もある。９は底部にヘラ切りの痕跡を顕著に残したものである。10は底部がていねいにナデ消されており，切離しの手法は確認できない。胎土は密で，明青灰色を呈する。

須恵器壺（第84図11・12）　11は広口の壺で，口縁部に波状文を施す。胴部上半はカキ目，下半には格子叩き目がみられる。胎土は密で１㎜以下の微砂粒（長石など）を若干含む。焼成は良好で青灰褐色を呈す。12は肩部に２条の沈線を施し，その間に刺突文をめぐらしている。胴部下半から底部は回転ヘラケズリが行われている。胎土はきわめて密であり，他の須恵器と若干趣が異なる。焼成は良好で淡灰褐色を呈す。

須恵器横瓶（第84図13）　口径12㎝，高さ25㎝，胴部最大径31㎝，胴部最少径22㎝ある。胎土は密である。焼成は良好で青灰色を呈する。

土師器坏（第84図14）　内面はナデが施されているが，外面は風化が著しく調整は不明。胎土中に１～２㎜大の砂粒を多く含む。焼成はやや悪く，淡黄色を呈す。　（松本岩雄）

10．小才12号墳

(1)　位　置

８号墳の南東約４ｍの丘陵斜面に位置する。標高は273～274ｍあり，この地点の斜面は南西方向に傾斜している（第９・65図）。昭和63年度のトレンチ調査によって確認したものであり，平成２年度調査時において遺構内の土層をすべて観察することができなかった。

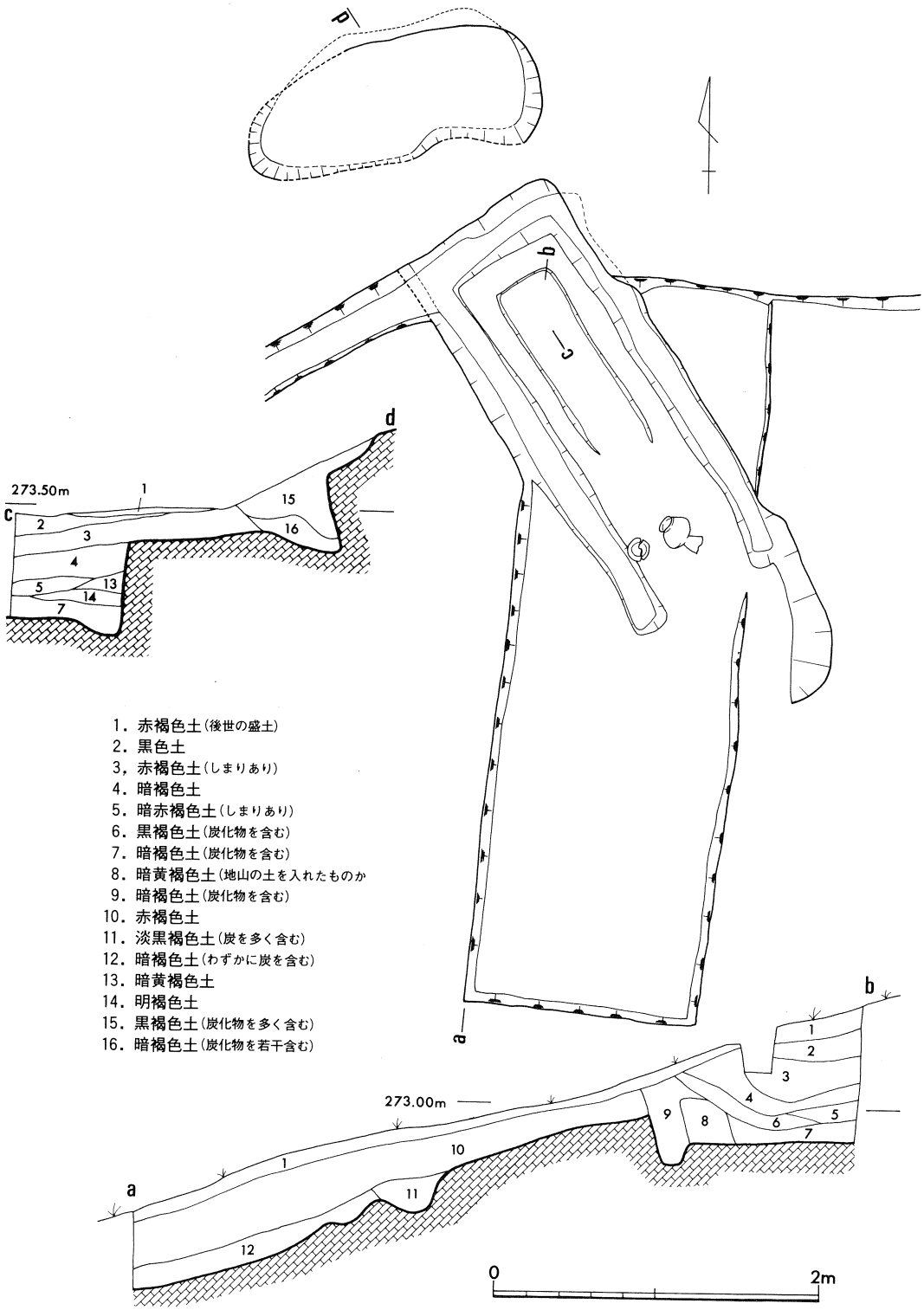
(2)　墳　丘

主体部の周囲を精査したが，墳丘に関する痕跡は確認することができなかった。ただし，９号墳と類似の埋葬施設を有することからここでは12号墳として記述することにした。

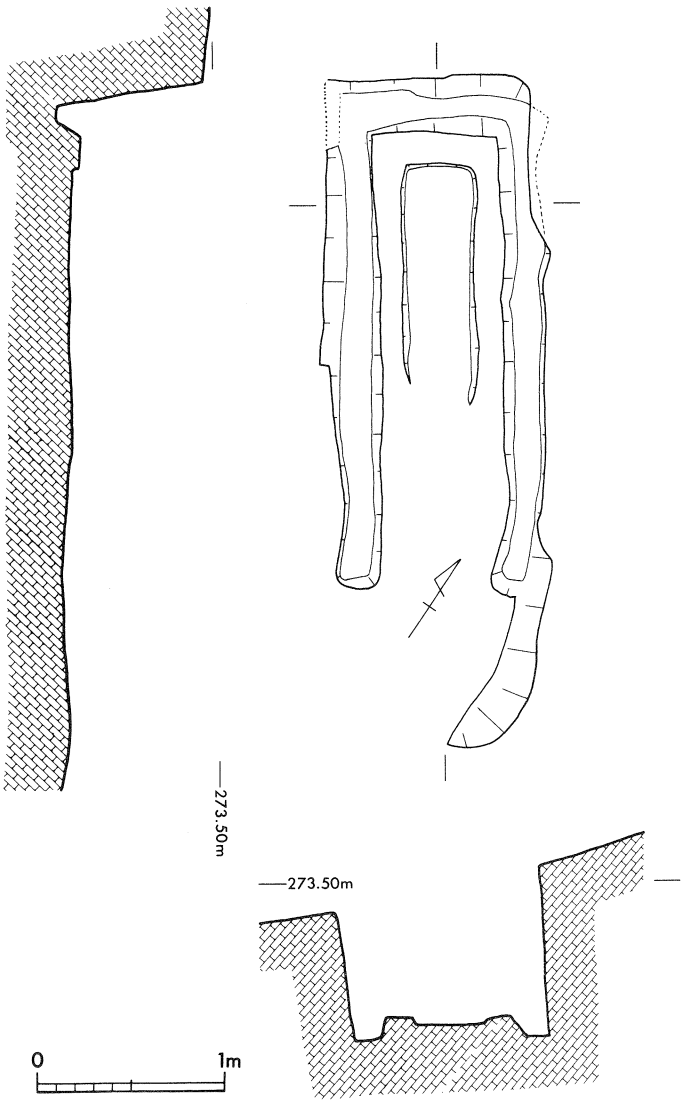
(3)　内部構造

埋葬施設は丘陵斜面に「コ」の字形の掘り込みを施し，組合わせの木室状の施設の中に木棺を納めたと推定されるものである（第85・86図，図版65・66）。「コ」の字形の掘り込みは，長さ3.5ｍ，幅1.2ｍ，深さ0.8ｍあり，南東方向に開口している。主軸方位はＮ－34°－Ｗを示すが，東北壁の谷側は南方向にゆるくカーブしている。

山側の小口部と両側壁部床面には幅15㎝，深さ12㎝あまりの溝が掘り込まれていた。南北方向の土層を観察したところ，南西側壁の溝上には炭化物を含む暗褐色土（第９層）が溝の幅で垂直に認められたことから組合わせの木室状の施設があったものと推定した。このように考えると，第６層（炭化物を含む黒褐色土）は木室の天井，第７層（炭化物を含む暗褐色土）は木棺，第８層（暗黄



第85図　小才12号墳遺物出土状況・土層断面図



第86図　小才12号墳実測図

褐色土）は木棺と木室側壁の間に詰めた土，第4・5層は木棺・木室の腐食により上部から崩落した層と推測されよう（第85図，図版65－2）。なお，山側小口部の溝の上には垂直に立ち上る土層を確認することができなかった。

床面はほぼ水平で，標高は272.73mある。床面には長さ1.3m，幅0.4m，深さ3.5cmの「コ」の字形の掘り込みが確認された。掘り込んであることから木棺を安置する施設としてはやや違和感があるが，この部分から鉄釘が出土した（図版65－1）ことから木棺が納められていたものと思われる。

木室・木棺規模の復元　上記のような掘り込み痕跡や土層観察の結果から木室・木棺規模を推定復元すると概ね次のようになろう。

［木室規模（内法）］

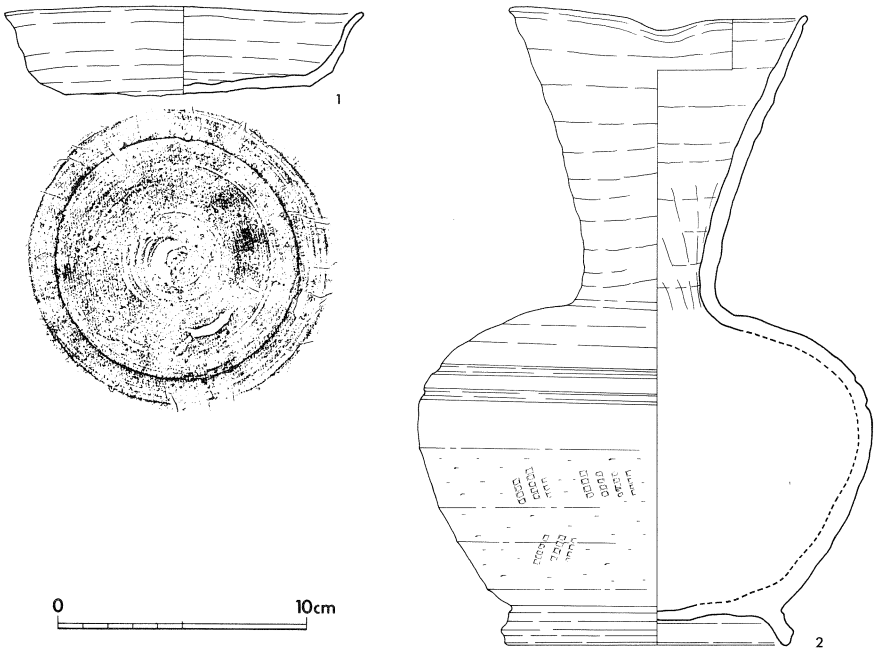
全長 約2.5m　　幅 約80cm　　高さ 70cm以上

閉塞施設の構造等については不明。

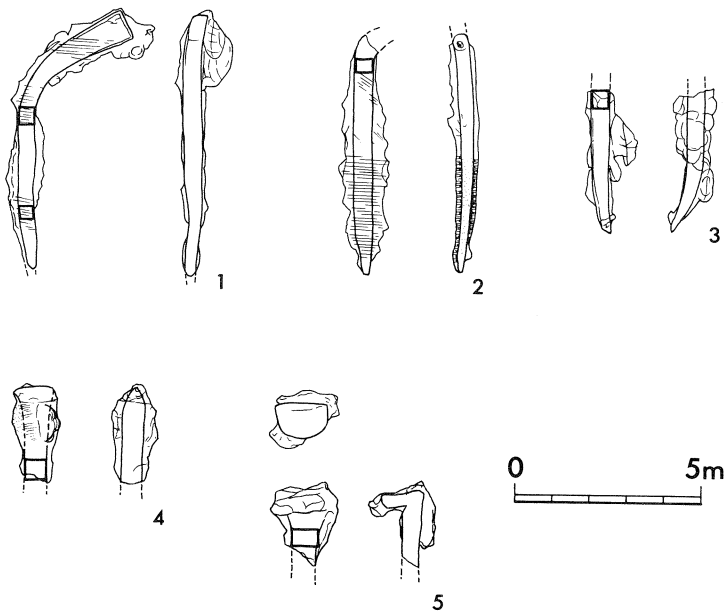
［木 棺 規 模］

全長　1.3m以上　　幅 約40cm　　高さ　不明

なお，この埋葬施設の北西側で1.9m×0.7m，深さ0.4mの土坑状の落ち込みが検出された（第85図）。埋葬施設の上部に堆積していた第3層（赤褐色土）を切り込んで掘られたもので，内部には



第87図　小才12号墳出土土器実測図



第88図　小才12号墳出土鉄釘実測図

炭化物を含む黒褐色土・暗褐色土（第15・16層）がみられた。12号墳の埋葬施設との関連については確認することができなかった。

(4)　遺物出土状況

遺物は，須恵器坏１，須恵器長頸壺１，鉄釘５が出土した（第85図，図版66）。

須恵器長頸壺は木室入口付近のほぼ中央部床面で横転した状態で出土した。須恵器坏は長頸壺の西側の床面に正位置で置かれた状態で出土した。鉄釘は木棺が安置されていたと思われる床面から出土した。

(5)　出土遺物

須恵器坏（第87図－１，図版67）　口径14.3cm，高さ3.5cmあり，器肉は全体に薄い。底部には顕著な回転ヘラケズリがみられる。その他の部分は内外面ともに回転ナデが施されている。胎土中に長石・石英等を多く含む。焼成は良好で青灰色を呈する。

須恵器長頸壺（第87図－２，図版67）　口径12cm，高さ25cmの高台付長頸壺である。口縁部は片口状に一部くぼんでいる。胴部上半に浅い沈線が２条施されている。胴部下半は叩きののちヘラケズリが行われ，最後に回転ナデが施されている。高台は「ハ」の字形に張り出すもので，底部は回転ナデが行われている。頸部と胴部外面に灰釉薄くかかっている。胎土中に砂粒を若干含む。焼成は良好で青灰色を呈する。

鉄釘（第88図，図版67，第３表）　５点出土しているがいずれも欠損品である。頭部は一端を薄く圧延した後一方向に折り曲げたもの（５）とそのままのもの（１）がある。１・２は上半部が折曲している。　（松本岩雄）

第３表　小才12号墳出土鉄釘観察表

番号	全長(mm)	体部断面(mm)	遺存状態	頭部・体部の形態	取上番号
1	68	5×4	先端を欠く	体部は中ほどでゆるく湾曲し、頭部は折れ曲がらず長方形となる	881025
2	64	5×4	頭部を欠く	体部は頭部付近で折曲する	No 9
3	38	5×5	上半を欠く	先端部がゆるく湾曲する	No 8
4	25	6×5	頭部のみ遺存	頭部の正面はバチ形に圧延され、断面形は山形になる	881025
5	20	6×4	頭部のみ遺存	頭部は一端を薄く圧延した後、一方向に折り曲げて、体部との境はくびれ込む	No10

11. 小才1号横穴墓

(1) 位　置

9号墳の南東約6mの地点に位置する。標高275～277mの南東向きの丘陵斜面にあたる（第9図，第65図）。土質も堅固でなく，ゆるやかな斜面（約20度）に穿たれており，横穴墓の立地としてはやや奇異な感を与える。

(2) 構　造

南東方向に開口する横穴であるが，天井部の大半が崩壊しており，遺存状態は良くない。主軸方位はN－41°－Wを示す。羨道，玄室といった明確な区分はなされていない（第91図，図版68・69）。

床面は奥壁から約2.5mのところまでほぼ水平（標高275.3m）を保ち，そこから南東側は10cmあまり低くなっている。また，床面の高さが変化するところの両側には2個の石が置かれていた。この石は20～40cm大の石で，閉塞施設に関連するものと思われた。閉塞施設とすれば，板状のものを立て掛け，それを固定するための石ではなかったかと推測される。このように考えるならば，石が置かれていたところが羨門で，それより南東側が前庭部，北西側（奥部）が羨道・玄室ということになろう。

前庭　床面の形態は長方形である。検出長2.3m，幅35～40cmあり，狭長な墓道状をなしている。床は約7度の傾斜で羨道に向って徐々に高くなっている。横断面形は，浅い「U」字形を呈し，検出面上端幅は1.2mある。

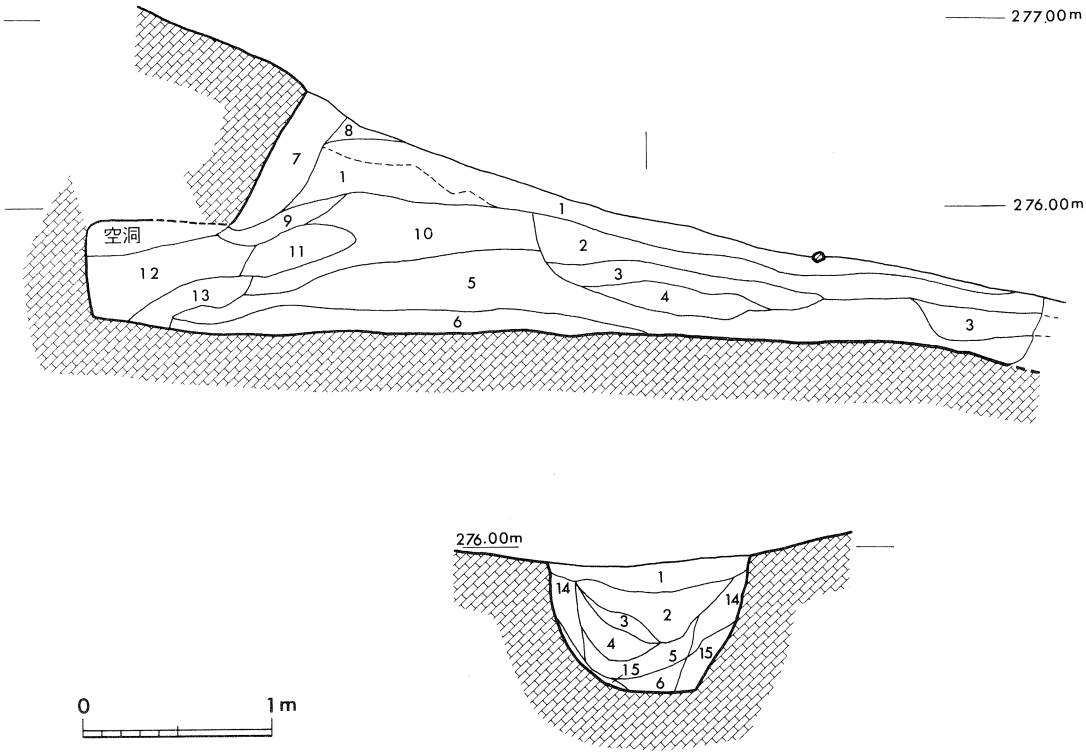
羨道・玄室　羨道と玄室の明確な区別は認められない。床面は羨門から玄室奥壁にかけて次第に狭くなるもので，長さ2.5m，羨門部幅85cm，奥壁部幅45cmとなっている。天井は奥部の一部が残存しているのみであった。玄室奥部は非常に狭くなっており（幅60cm，高さ60cm），横断面形は隅丸方形を呈している。奥壁から約1.5mの地点の両壁はゆるやかに内湾しており，このカーブをもとに復元すれば断面は蒲鉾形になろう。

床面には扁平な石が4個置かれていた。奥壁部に2個，奥壁から約1.5mの地点に2個配置されており，棺台と推定される。仮にこの石の上に長さ1.8m，幅40cmあまりの木棺を安置したとすれば，玄室長は約2m，羨道長は約50cmということになろう。

(3) 出土遺物

遺物は3点出土した。いずれも床面より15～30cm浮いた層から出土しており，原位置を保っているものはなかった（第90図，図版69－3）。

第90図1は羨門部近くから出土した高台付の須恵器坏である。口径13.2cm，高さ4.3cmあまりのもので，体部は斜めにほぼ直線的にのびている。内外面ともに回転ナデ調整がみられ，底部に糸切痕を確認することができない。焼成は良好で，灰褐色を呈するが，外面には自然釉が多くかかって



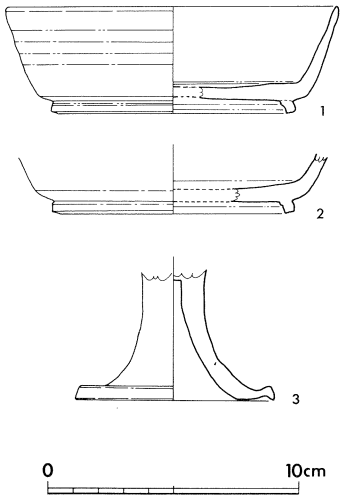
1．暗黄褐色土、砂粒を含みサクサク
2．黒褐色土、炭を多く含む
3．暗褐色土、小さな炭を含む
4．黒褐色土
5．暗黄褐色土、炭を若干含む
6．暗茶褐色土、黄白色ブロックを含む
7．暗黄褐色土、黄褐色地山ブロックを含む
8．黄褐色土、砂粒・炭を含む
9．暗褐色土
10．暗黄褐色土、しまりあり、岸を含む
11．黄褐色土、堅い、天井が落ちたものか
12．暗褐色土、サクサク
13．黄褐色土、堅い、天井が落ちたものか
14．暗黄褐色土
15．黄褐色土

第89図　小才１号横穴土層断面図

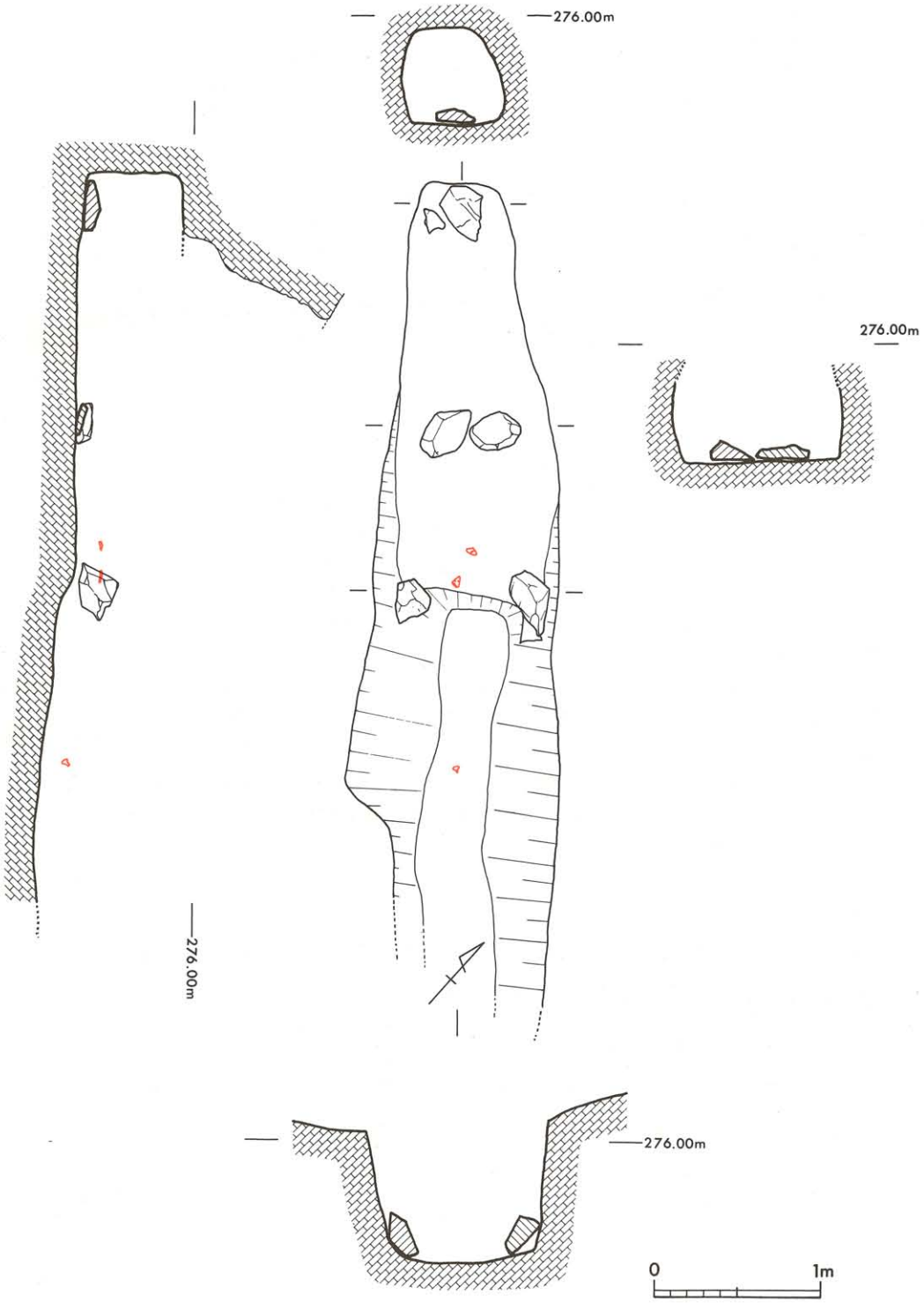
いる。

第90図２も羨門部近くから出土した高台付の須恵器坏である。内外面ともに回転ナデ調整がみられ，底部に糸切痕を確認することができない。高台端部はわずかにくぼんでいる。

第90図３は前庭部から出土した須恵器高坏である。脚部のみ遺存しており，端部は嘴状に尖る。透孔はなく，内外面ともに回転ナデ調整が施されている。焼成は良好で淡青灰色を呈する。　（松本岩雄）



第90図　小才1号横穴出土遺物実測図



第91図　小才１号横穴実測図

12. 小才２号横穴墓

(1) 位　置

１号横穴墓の南西約４ｍの地点に位置する。標高273～275ｍの南向きの丘陵斜面にあたる（第９図，第65図）。１号横穴墓同様にゆるやかな斜面に穿たれている。床面から側壁中ほどにかけては赤褐色～黄褐色の比較的堅い地山であるが，側壁上半から天井部にかけては黄白色のもろい地山である。

(2) 構　造

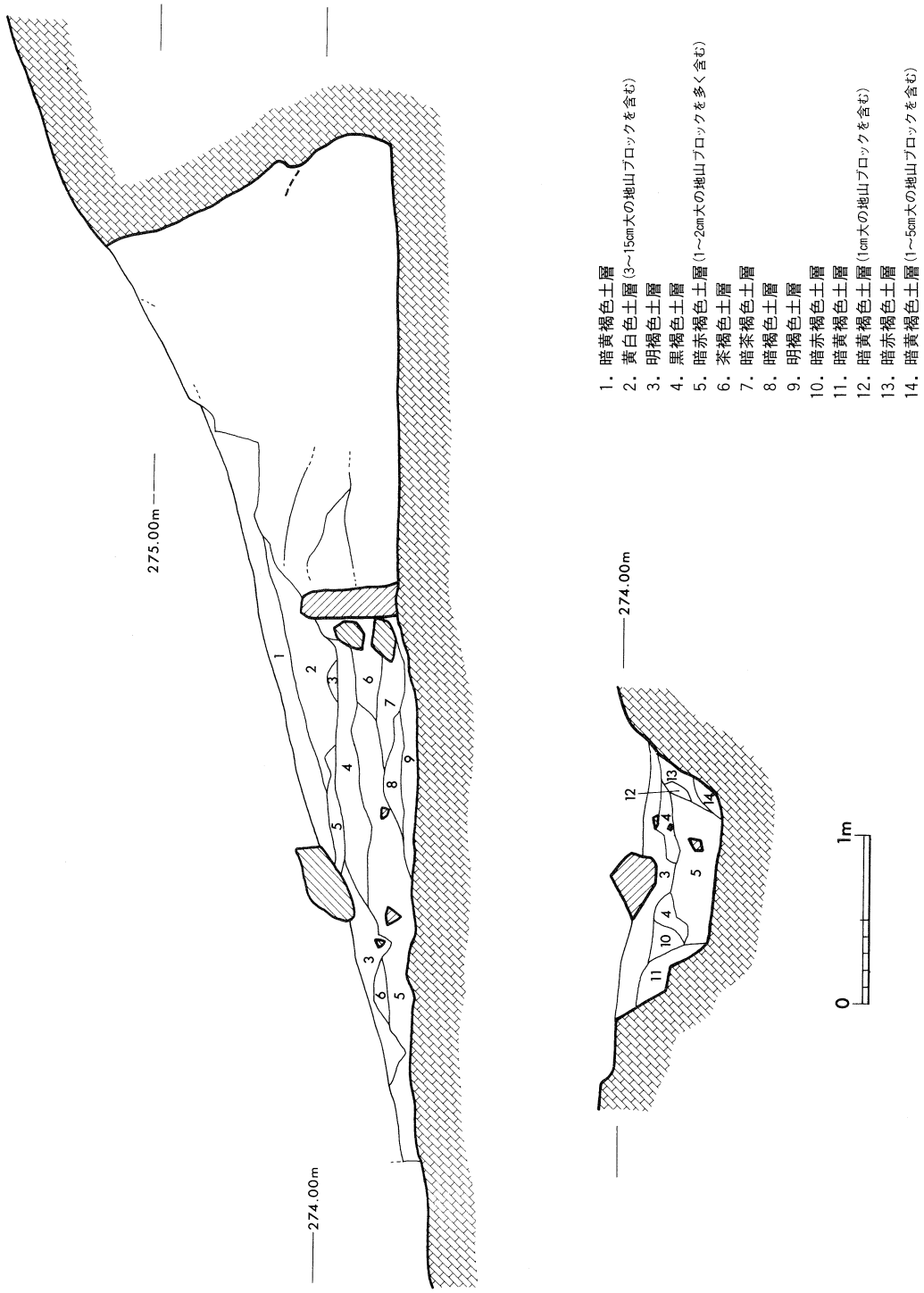
南方向に開口する横穴で，主軸方位はＮ－10°－Ｗを示す。遺存状態は悪く，わずかに残っていた天井部は調査中に崩壊してしまった。羨道，玄室といった明確な区分はないが，閉塞石と考えられる石があることから，それより南側が前庭部，北側（奥部）が羨道・玄室ということになろう（第93図，図版70・71）。

閉塞は羨道側に高さ60cm，幅40cm，厚さ20cmの大きな石（流紋岩質火山砕屑岩）を立て，前庭側に20cmあまりの角礫を数個積んで倒壊を防いでいる。

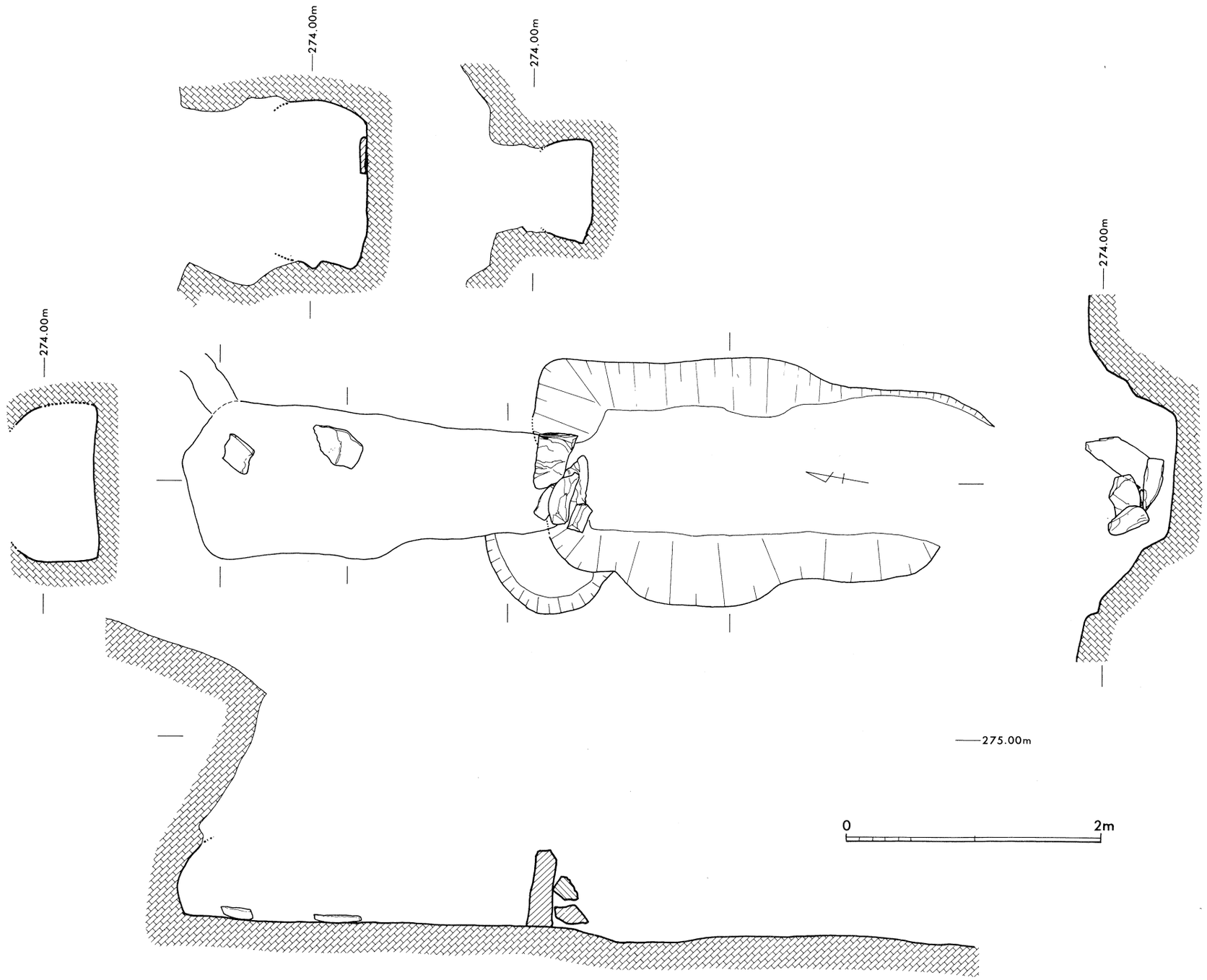
前庭　床面の形態は長方形で，羨道部より約10cm低くなっている。検出長3.1ｍ，幅約1.0ｍあり，狭長な墓道状をなしている。１号横墓では羨道幅より前庭幅が狭くなっていたが，この２号横穴墓は羨道幅より前庭幅の方が広くなっている。床面はほぼ水平であるが，羨道に向けてわずかばかり高くなっている。横断面形は浅い「Ｕ」字形を呈し，検出面上端幅は約1.9ｍある。前庭部には明褐色土，暗褐色土，茶褐色土などがみられたが，このうち特に３～９層はほぼ水平にみられた。そしてその上（床面から40～50cm）の前庭部ほぼ中央に50×40cmあまりの石が検出された（第92図，図版70－１）。この石は後世に転落したものともみられるが，閉塞石と同質のものであり，出土位置などからすれば一見墓標のようにもみえる。仮にこの石が横穴墓に関連するものとすれば，前庭部を故意に埋めたのちほぼ最終段階にこの石が置かれた可能性がある。

羨道・玄室　羨道と玄室の明確な区別は認められない。床面は羨道から玄室奥壁にかけて次第に広くなるもので，長さ2.7ｍ，羨門部幅75cm，奥壁部幅1.2ｍとなっている。床面の標高は273.60ｍあまりである。天井部は崩壊してしまったが，側壁はゆるく内湾しており，このカーブをもとに復元すれば断面は蒲鉾形になろう。このように考えると，高さは羨門付近で50cm，奥部で80cmあまりに復元できる。

床面の東壁寄りには扁平な石が２個置かれていた。奥壁から30cmのところに１個，奥壁から１ｍの地点に１個配置されており，棺台であったものと推定される。側壁は西壁のほぼ中央部でやや広くなっているところがあることからこの部分までを玄室とすれば，玄室長1.7ｍ，羨道長１ｍということになる。東壁のわずかに屈曲するラインを重視すれば玄室長２ｍ，羨道長0.7ｍということ



第92図　小才２号横穴土層断面図



第93図　小　才　2　号　横　穴　実　測　図

になろう。いずれにしても，玄室・羨道の明確な区分がなされていないことの方がこの横穴墓の大きな特色といえる。

なお，玄室の床面上約30cmのところで炭と焼土が検出され，その上に１枚の扁平な石（30×20cm）が検出された（図版71－２）。天井部が崩壊するなど危険な状態であったため土層を確認することができず，どのような意味をもつものなのか明らかにし得なかった。

２号横穴墓からは１点の遺物も出土しなかった。　（松本岩雄）

13．石組遺構

(1)　位　置

７号墳の南西約４ｍの地点に位置する。標高268～269ｍの南向きの斜面にあたる。このあたりは調査前には山道となっていたところであり，南側は後世の掘削を受けて崖面となっていた。したがって遺構の南半はすでに破壊されていた。

(2)　構　造

丘陵斜面にさしわたし約2.5ｍ，深さ約１ｍの半円形の土坑を掘り込み，石組施設を構築したものである。土坑の底面に長さ30～40cm，厚さ10cmの板石を敷きつめ，その西側から北側にかけて略円形にめぐる石積がみられる。この石積は西側から北側にかけては古墳の石室状に２～３段積み上げているが細かくみると上段に行くほど外側に開いており，天井石をのせるような構造にはなっていない。北東側では板状石を土坑の壁に貼り付けている（第95図，図版72・73）。石材は玄武岩のほか安山岩質火山砕屑岩，流紋岩質火山砕屑岩などがある。

この石組の内部には，敷石の上部に暗黄褐色土（厚さ５cm），炭を多く含む層（厚さ５cm），明褐色土層（厚さ約15cm）があり，その上に10～20cm大の角礫・円礫があり，最上部には３～５cm大の小円礫が多数認められた（第94図，図版73－１）。

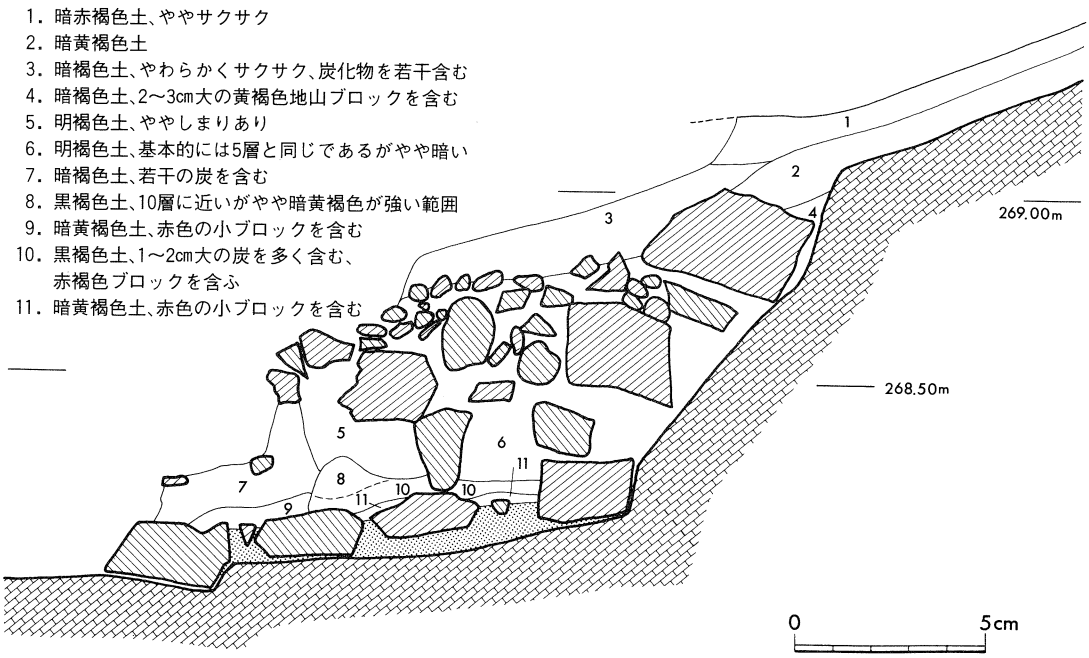
遺物は出土しなかったが，この遺跡で多数検出された古墳とは全く異質の構造をもつものであり，古墳時代以降のものたとえば中・近世ごろのものではないかとも思われる。ただし，年代・性格等を判断できる材料は現在のところ皆無といってよい。　（松本岩雄）

14．遺構に伴わない遺物

小才Ⅱ区と称している区域では，上記のほかに，遺構に伴わない遺物がいくつか出土している。これらの遺物には須恵器，磁器，陶器などがある。

(1)　須恵器（第96図，図版75）

１は６号墳周溝第２層から出土したものである。６号墳に関係するものとも思われるが溝底より



第94図　小才石組遺構土層断面図

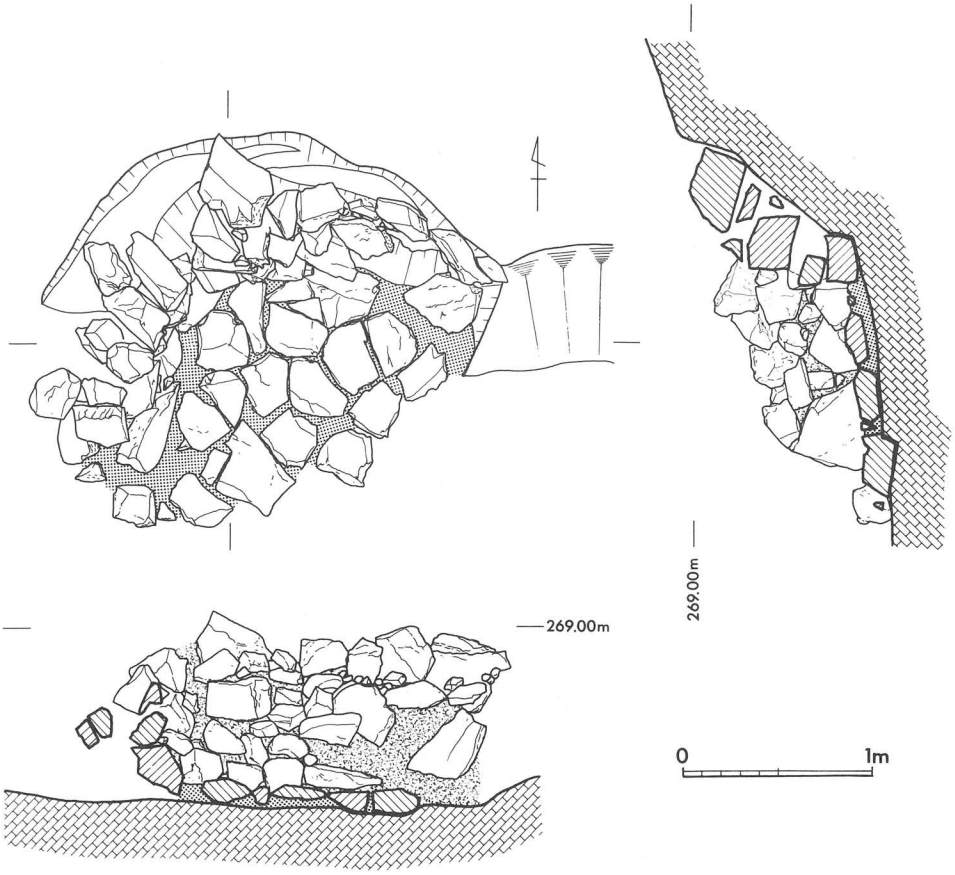
かなり浮いた状態であり，上方から流入した可能性もあるので，ここで取り上げることにした。須恵器直口壺の口縁部と思われる小片である。口縁端部は鋭く尖り，暗緑色の自然釉が厚くかかっている。

2は6号墳周溝や12号墳周辺から出土したものが接合したものである。須恵器高台付皿の上部に須恵器甕底部片が溶着したものである。皿は口径13cm，高さ2.3cm，高台径6cmあり，高台内面に段を有する。甕は内面に同心円文がみられる。皿・甕いずれも青灰色を呈し，暗緑色の自然釉が多量にかかっている。

3は昭和63年度調査時に第6トレンチ内の茶褐色土中から出土したものである。第6トレンチは1号墳の南東側に設置したものである。須恵器壺底部片と思われるもので，内外面ともに回転ナデ調整がみられる。焼成はやや悪く，明灰肌色を呈する。

4はⅡ区表採資料であり，出土地点は不明。須恵器壺あるいは甕の頸部片である。焼成は不良で明灰色を呈する。

5は6号墳周溝内黒褐色土中から出土したものと12号墳周辺から出土したものが接合したものである。須恵器壺の底部と考えられるもので，高台がついている。外面下半は回転ヘラケズリ，上半は回転ナデ調整がみられる。内面は回転ナデ，底部外面には指による押圧痕（指紋もみられる）や



第95図　小才石組遺構実測図

爪の痕跡がみられる。焼成は良好で，青灰色を呈する。

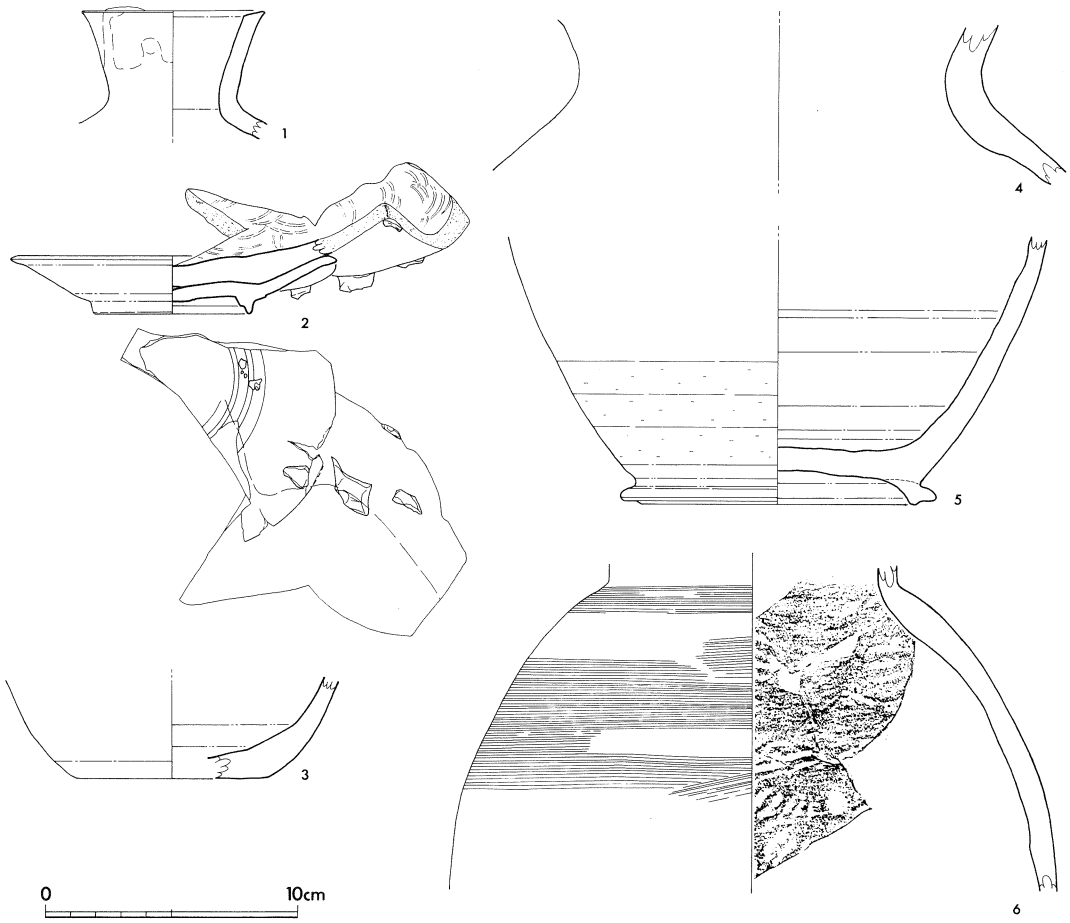
6は8号墳の周溝付近から出土したものと5号墳裾の明褐色粘質土層から出土したものが接合した資料である。須恵器壺の胴部片と考えられる。外面は上半にカキ目，下半に平行タタキ目がみられる。外面には自然釉がかかっているが，頸部にはまったく付着していないことから蓋をして焼成されたものと思われる。焼成は良好で青灰色を呈する。

(2)　陶磁器類

陶磁器類は大半が5号墳の裾から南側にかけての緩斜面で出土した。遺構に伴うものは1点のみである。第99－3の陶器が5号墳の墳丘上で検出した集石の下から出土したものである。

陶磁器類は肥前系磁器類と在地窯系陶磁器類などがあり，近世末を中心とした時期のものである。

肥前系白磁染付類と思われるものは，第97図－3・5・6・14などである。3は端反り形碗で外面に梵字文がみられる。5は丸形碗で外面に二重網目文がある。6も端反り形碗であるが，外面に竹



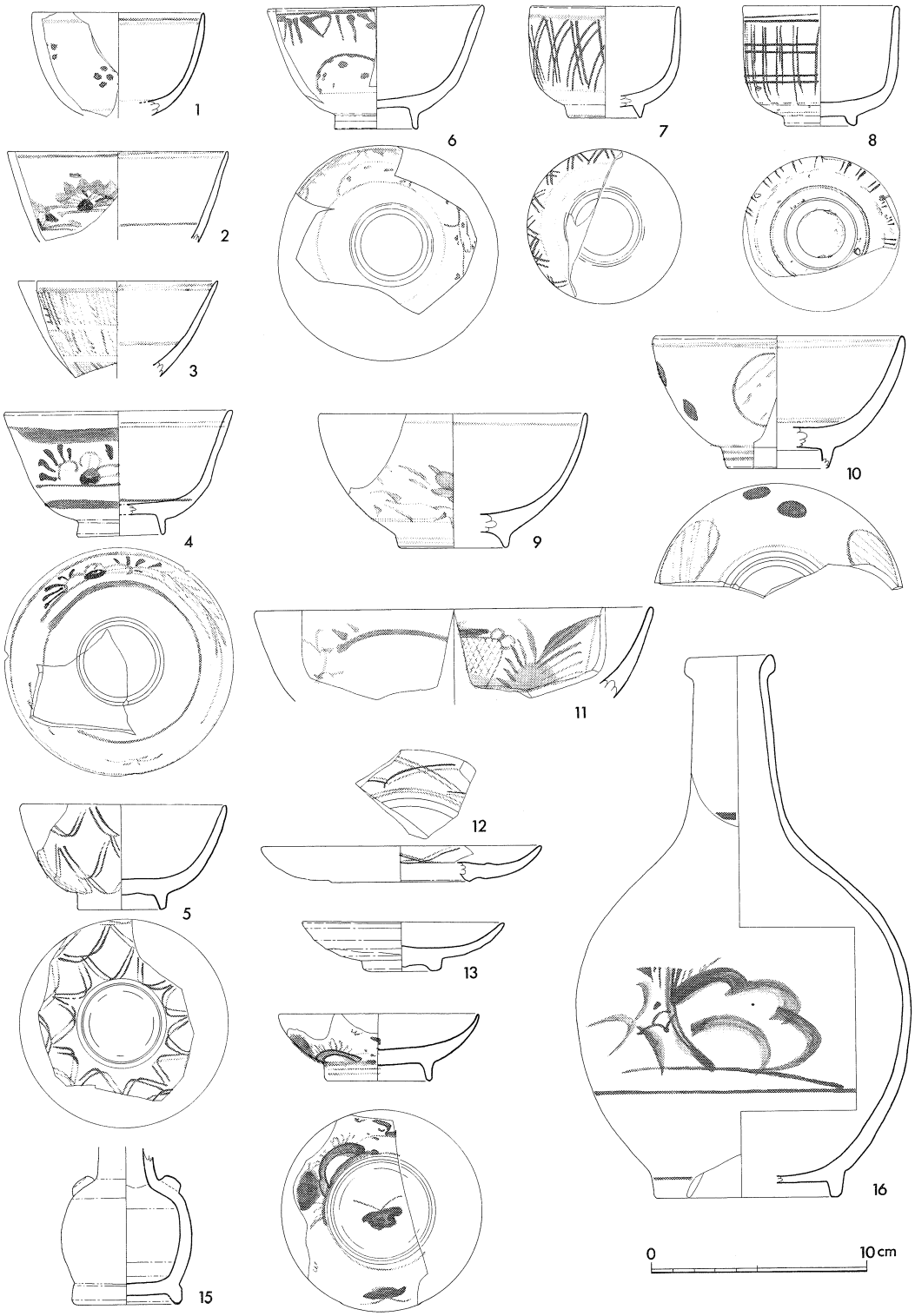
第96図　小才Ⅱ区出土須恵器実測図

文がみられる。14は端反り形碗の蓋と思われるもので，外面及びツマミの内面に草花文が入れられている。

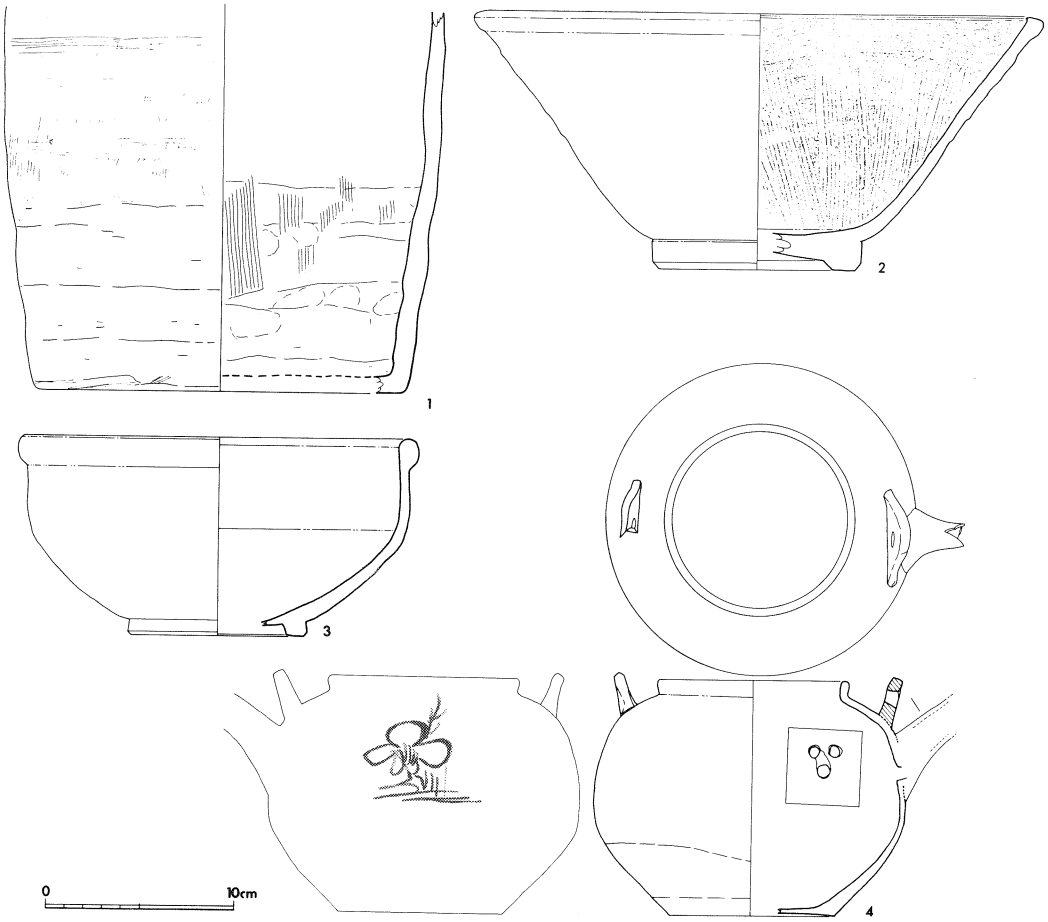
在地系染付類と思われるものは，第97図－4・7・8・9・10など発色の悪いものである。4は端反り形碗で，外面に草花文がある。7・8は湯呑で，外面に格子文がみられる。9・10は碗で，前者には草花文・後者には丸に斜線の入った文様などが施されている。この他のものとしては，青磁の仏花瓶（第97図－15），草花文のある徳利（第97図－16）がある。

在地系陶器類，とくに石見系と思われるものには，第98図－2・3・4　第99図－1がある。第98図－2は摺鉢である。同図－3は片口を失なっているが，片口鉢と思われる。同図－4は土瓶で，外面に鉄絵の草花文が施されている。第99図－1は，香炉である。

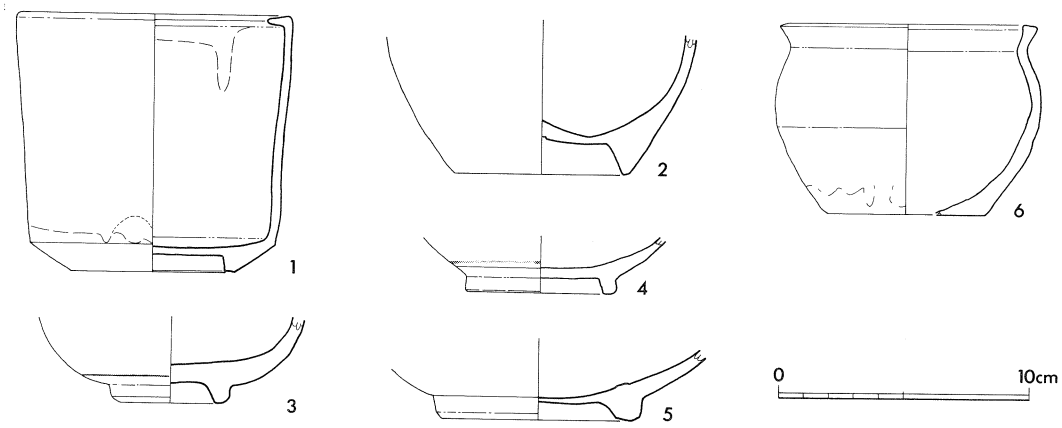
この他のものでは，第98図－1は平底の壺の下半部であるが，備前系の焼きである。



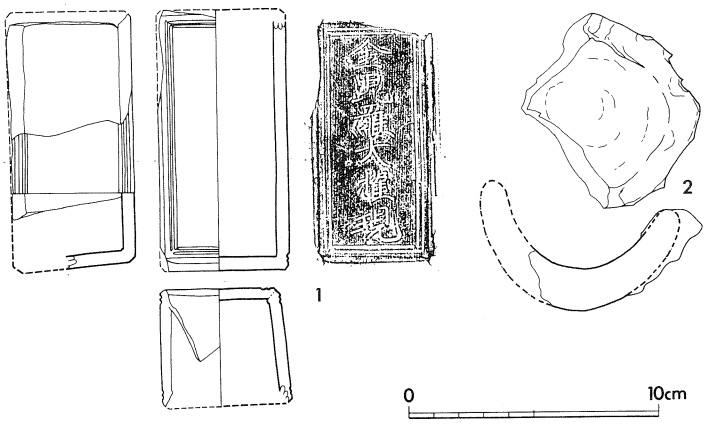
第97図　小才Ⅱ区出土磁器実測図



第98図　小才Ⅱ区出土陶器実測図(1)



第99図　小才Ⅱ区出土陶器実測図(2)



第100図　小才Ⅱ区出土遺物実測図

(3)　その他の遺物（第100図，図版77）

薬入れとみられるもの（第100図１）や，るつぼ状のもの（第100図２）がある。これらは陶磁器類とともに５号墳周辺から出土した。

第100図－１は高さ10.5㎝，幅：厚さ約５㎝の箱形の陶製品である。一面には二重の沈線の中に「金毘羅大権現」とヘラ描されている。胎土は緻密で茶色を呈する。第100図－２は，口径７㎝，高さ４㎝の碗形のもので容着物が多量にみられる。　（松本岩雄・角田徳幸）

第４節　小才Ⅲ区の調査

Ⅲ区は，Ⅱ区の西側で標高280～300ｍの丘陵斜面に位置する。この地区は便宜上須恵器が若干採集されていた東側斜面をⅢ－１区，４号墳が確認された西側斜面をⅢ－２区として調査を実施した（第２図，図版３）。

１．Ⅲ－１区

調査前に須恵器片が採集されたことから，集落跡等の存在が予想されたため，丘陵緩斜面を中心に約475㎡にわたって調査を実施した。地表下30～40㎝で地山となり顕著な遺構はみられなかった。ただし，斜面の上方で表土下20㎝のところから炭を含む黒褐色土層のひろがりが確認でき，この中から須恵器小片若干が出土した。ほかに浅いピット状のくぼみが２ヶ所確認されたが性格等については判断することができなかった（第101図，図版78）。

２．小才４号墳〔Ⅲ－２区〕

(1)　位　置

４号墳は古墳群が密集しているⅡ区からは小谷と丘陵を介した西側に位置しており，１基のみ単独で存在している。したがって，４号墳から他の古墳を見ることはできない。標高294～299ｍの南

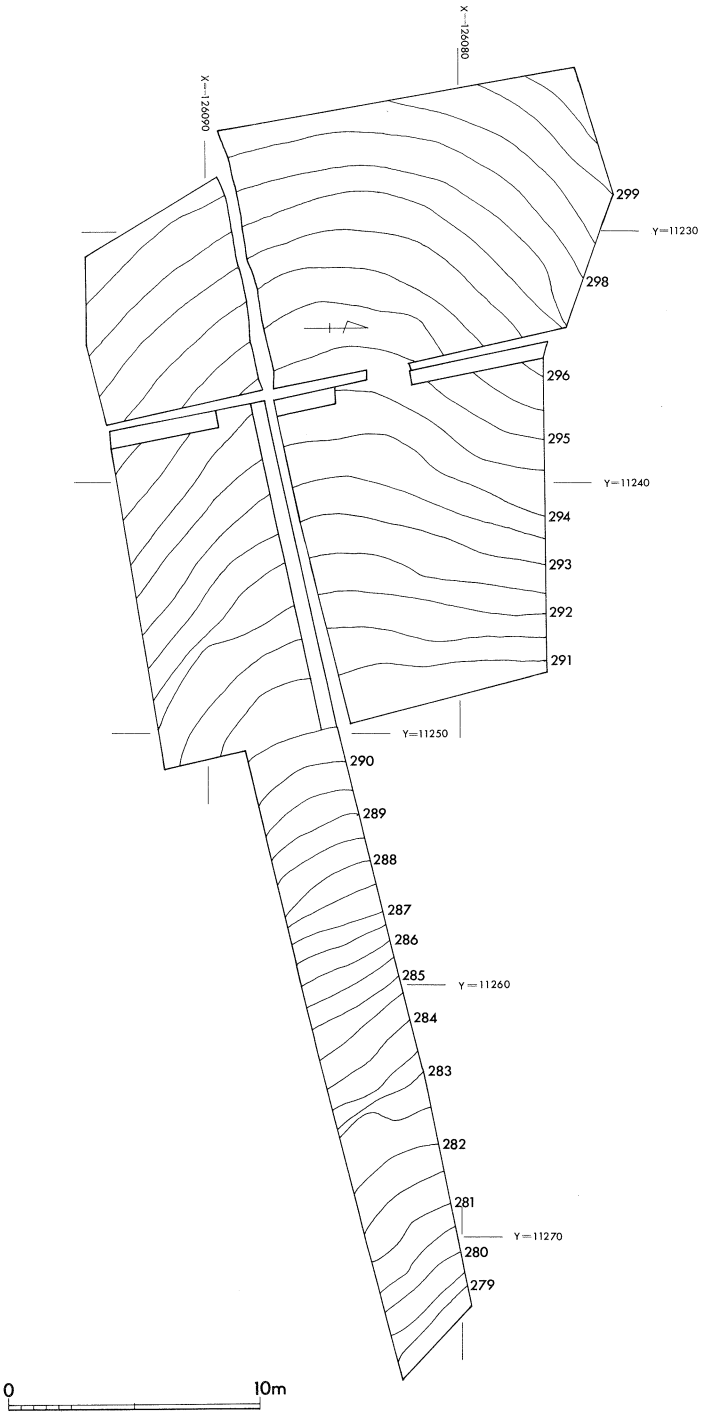
向きの丘陵斜面に立地している（第８図，図版３）。

(2) 墳　丘

発掘前の地形を観察したところ，丘陵斜面に大きな切削加工痕がみとめられ，その南側にわずかばかりの平坦面が確認された。こうした地形の変化からここに古墳の存在することが予想されたため昭和63年にトレンチ調査を行ったところ，石室石材が確認され明確なものとなった。

したがって，現状では明確なマウンドが認められなかったが，平坦部の状況と調査前の地形測量の結果，径５ｍあまりの円墳ではないかと推定された。墳丘北側の切削部は三日月形を呈しており，最大幅10ｍ，最大高1.8ｍあり，墳丘との間に掘削された溝の幅は１ｍあまりと観察された（第102図，図版79－１）。

発掘調査の結果，丘陵斜面を切削加工して平坦面をつくったのち，石室掘り方を設け，これに南東に開口する横穴式石室を構築したものであることが明らかになった（第103図）。すなわち，まず丘陵斜面の地山を切削して平坦面を造成し，その土を丘陵下方の斜面に盛土することによって平坦面を広



第101図　小才Ⅲ-1区発掘後地形図

くつくっている。このことは南北方向の土層断面によって端的に知ることができる（第104図，図版79－３）。第８層は旧表土と考えられる暗灰褐色土層で，その上に黄褐色土層（第５層）と茶褐色土層（第７層）が盛られ，上面は水平に整地されている。こうしてつくられた平坦面は現状で南北約2.2mみとめられる。東西方向の土層断面をみると石室の周囲に墳丘盛土とみられる淡黄褐色土層（第３層），褐色土層（第４層），黄褐色土層（第５層）があり，その外側に流入土とみられる暗黄褐色土層（第２層）や茶褐色土層（第７層）などが観察された。

こうした土層の状況などから，４号墳は径４ｍあまりの円墳ではなかったかと推察された。

(3)　内部構造

南方（谷側）に開口する無袖形の横穴式石室である。墳丘のほぼ中央に位置し，石室主軸はN－13°－Wを示す。石室は，天井部及び側壁の一部が既に破壊されていたが，規模は概ね以下のとおりである（第105図）。

〔石室規模〕

全長	約2.9m	玄室推定長	約2.3m	奥壁幅	0.8m	前幅	0.65m	高さ	不明
		羨道推定長	約0.6m	羨門幅	0.6m	高さ	不明		

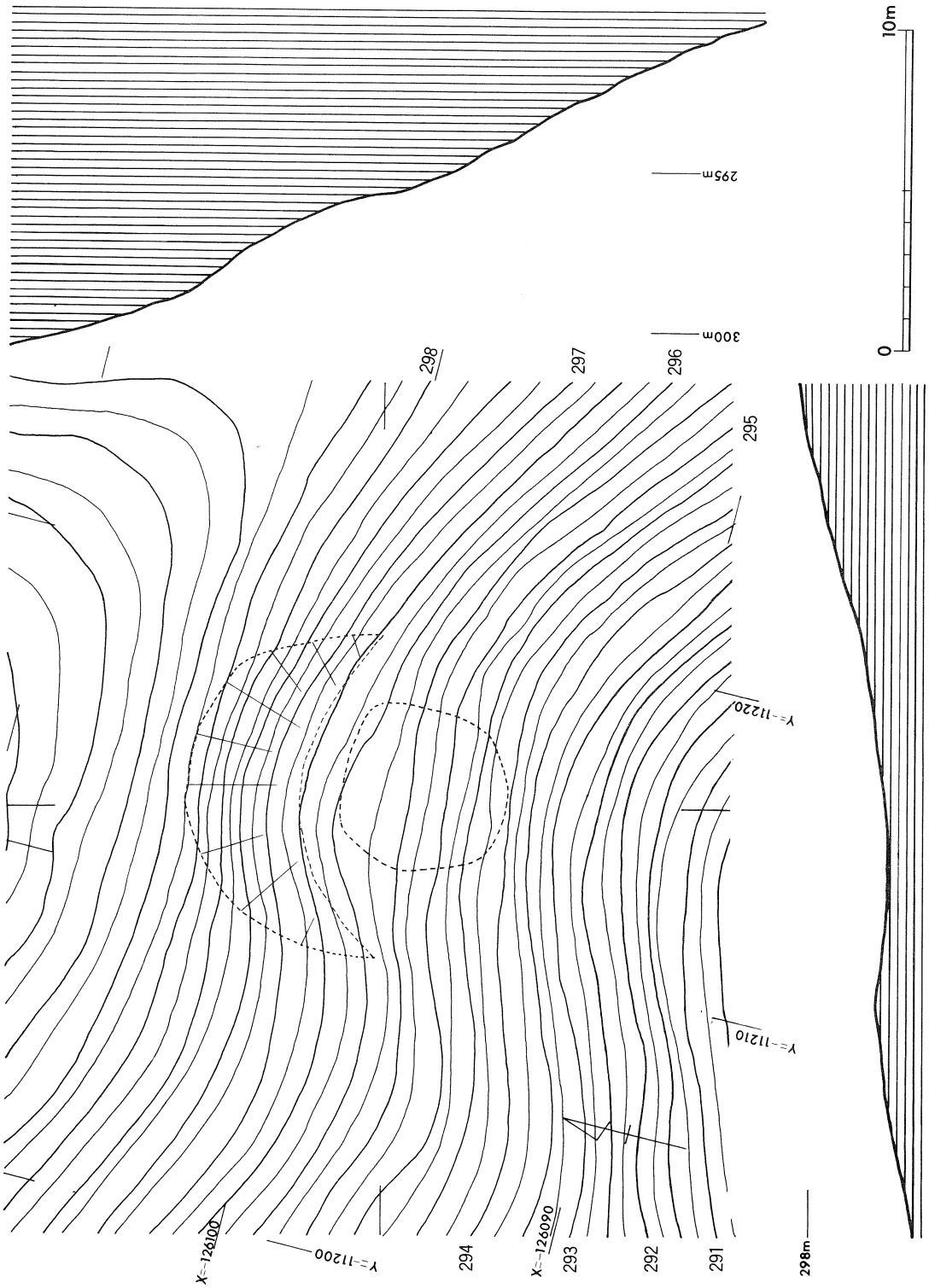
石室は流紋岩質火山砕屑岩を積んで構築している。

平面形・床面　平面形は無袖形の狭長な石室である。奥壁と東壁はやや鈍角（93度）をなし，奥壁と西壁はやや鋭角（82度）をなしている。床面での平面形は概ね長方形である。ただし，やや子細にみれば東壁・西壁ともにわずかに湾曲しており，奥壁から約１ｍの間は幅80cmあまりであるが，その辺りから次第に狭くなり，奥壁から1.8mのところでは幅65cmあまりとなっている。また，平面形では区別できないが，石室開口部から0.6mのところに閉塞施設がみられるので，これより南側が羨道，北側が玄室に相当するものと思われる。床面は奥壁から約2.4mの間はほぼ水平面（標高約295.05m）を保ち，そこから南側にかけてはゆるやかに傾斜している。奥壁から1.6mあたりまでは地山を削って床面としているが，そこから開口部の間は盛土を施して水平になるように整地している。

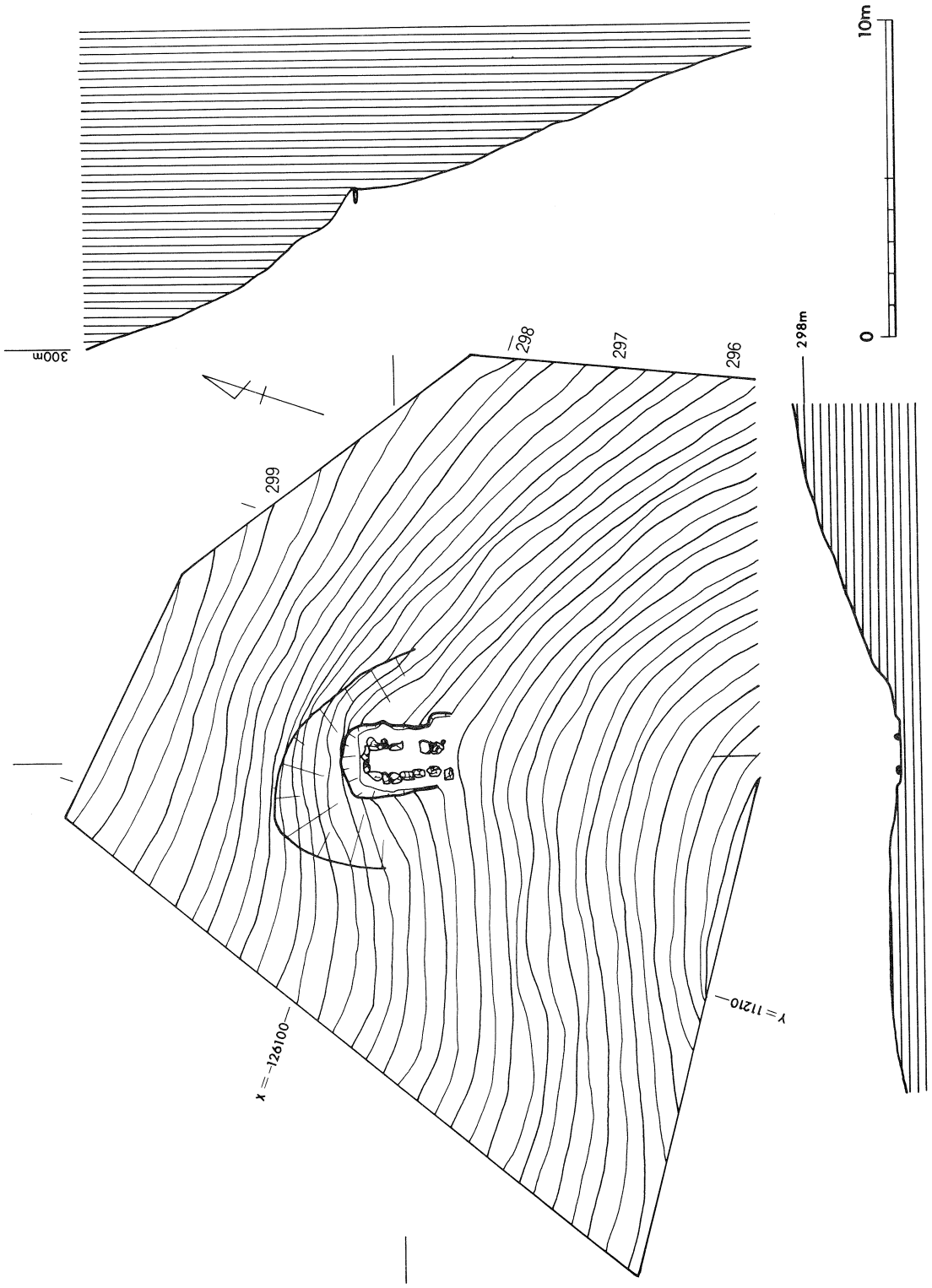
なお，奥壁から1.4mの床面上に扁平な石が１個認められたが，棺台としての機能を有していたものかどうか判断できなかった（第109図，図版82－１）。

閉塞施設　閉塞は奥壁から約2.3mの位置に認められた。床面に30×15cm大の割石２枚を框石状に石室主軸に直交するように並べ，この上に主軸に平行するように２段程度積み上げた状態で残存していた（第106図，図版80－３，図版81－１・２）。

奥壁　上部が失われており，基底部のみ残存していた。基底部は幅55cm，高さ60cm，厚さ10～25cmの方形の石を東壁寄りにやや内傾（約85度）して据え，その西側に幅40cm，高さ50cm，厚さ20cm



第102図　小才４号墳発掘前墳丘実測図



第103図　小才４号墳発掘後墳丘実測図

あまりの石を置いている。この２個の石は床面の地山を10cmあまり掘り下げて据えられている（第105図，図版82－３）。

側壁との組み合せの関係は，東側では，奥壁の石が外に出るように，西側では奥壁の石が側壁の内側に入り込むように構築されている。

東壁　破壊が著しく，基底石も一部抜かれているところがあった。基底部の石は基本的にやや広い平坦面を内側にそろえるようにして設置されており，その面はわずかに内傾（約80度）して立ち上がっている。基底石は現在５個残存しているが，石材抜き取り痕よりみると，もとは６個あったものと推測される。東壁で最も良く遺存している部分は，奥壁寄りのところであるが，二段目までしかみられない。ここでは，基底石の上にやや小形の石を小口積状に載せている。裏側の控え積はほとんど行われていない（第105図）。

西壁　西壁は東壁よりやや遺存状態が良好である。東壁と同様に基底部はやや大形の石を腰石状に据えている。ただし，奥壁から３個目の石は，良い石材がなかったためか小形の石を二段横積みにして他の基底石の高さにそろえられている。二段目から上はやや小形の石を小口積状に積み上げている。なお，二段目から三段目の石の上面で一坦目地をそろえているようにみられる。西壁で最も遺存状態が良い部分は奥壁付近のところで，四段目まで残存している。現存高は80cmで，やや内傾（約80度）して立ち上っている。控え積はほとんど行われていない（第105図，図版82－２）。

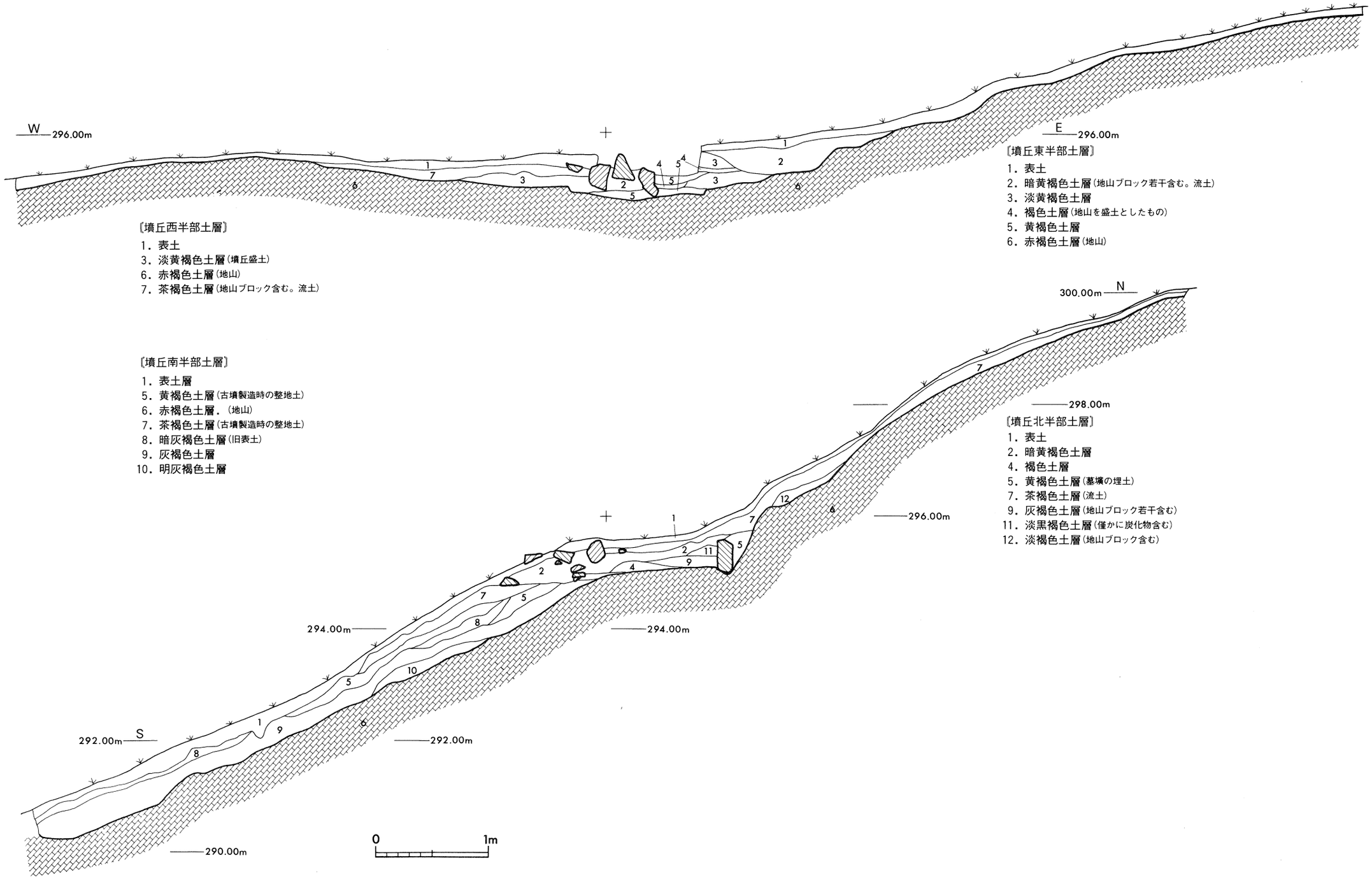
天井石　すべて失われていた。ただし，石室開口部から南へ約70cmのところに85×40cm，厚さ20cmあまりの大きな石があり，これが天井石の１枚であった可能性が高い（第109図，図版83－２）。

掘り方　掘り方は南に開口した「コ」の字形を呈するもので，幅2.3m，長さ3.1mある。奥壁部分が最も深く掘り下げられており，掘り込み角度は約55度ある。東壁・西壁ともに南に行くにしたがって次第に浅くなる。床面は，先に記したように山側は地山であるが谷側（南側）は盛土が施されて水平面を保つようにつくられている（第107図，図版81－３）。掘り方床面には，石室基底部の石を設置するための掘り込みが認められた。

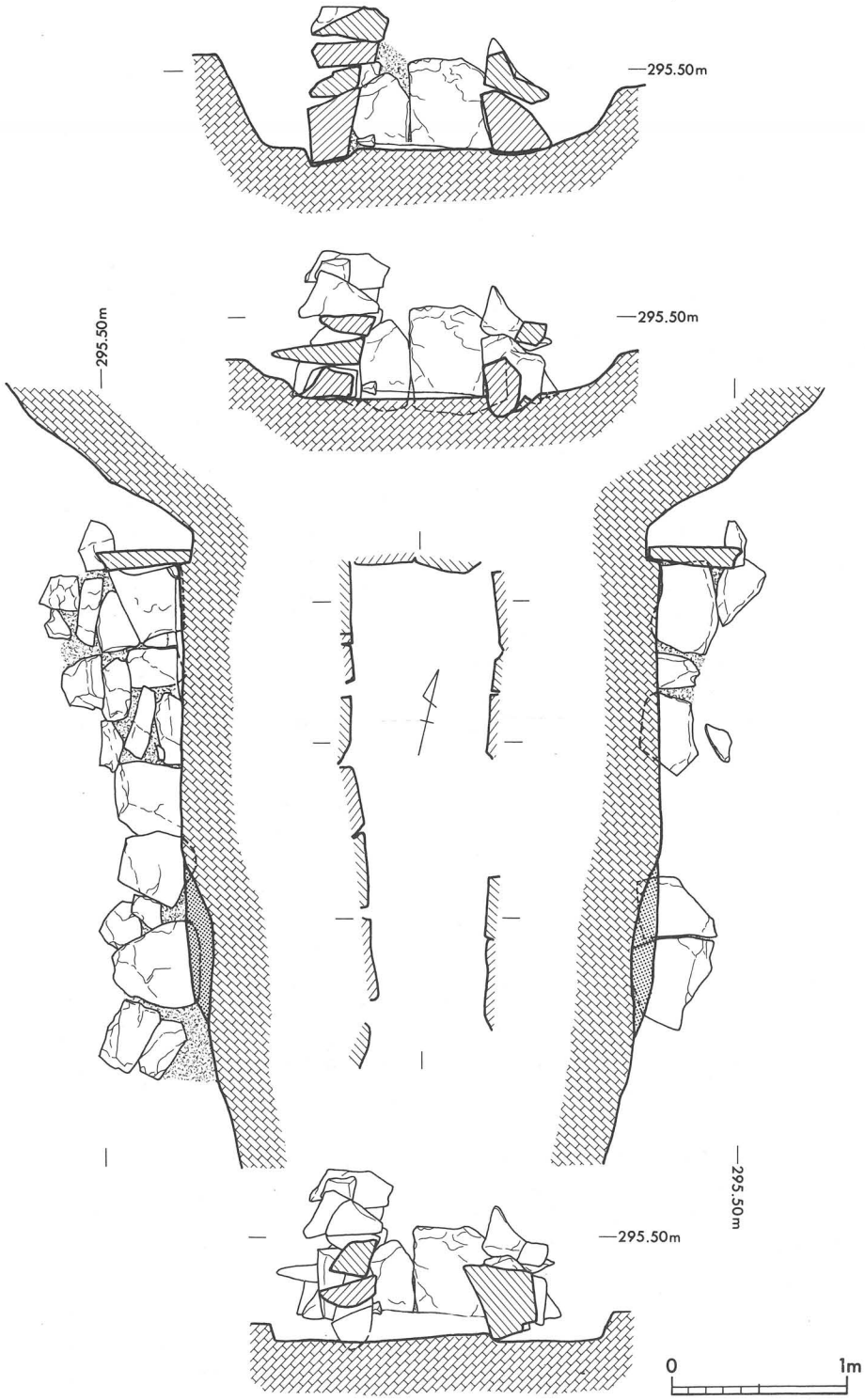
(4)　遺物出土状況

出土した遺物は，須恵器蓋２，須恵器坏３，須恵器長頸壺２，須恵器甕１である。これらの須恵器は石室内，石室開口部南側，墳丘上から出土した（第108・109図；図版83・84）。

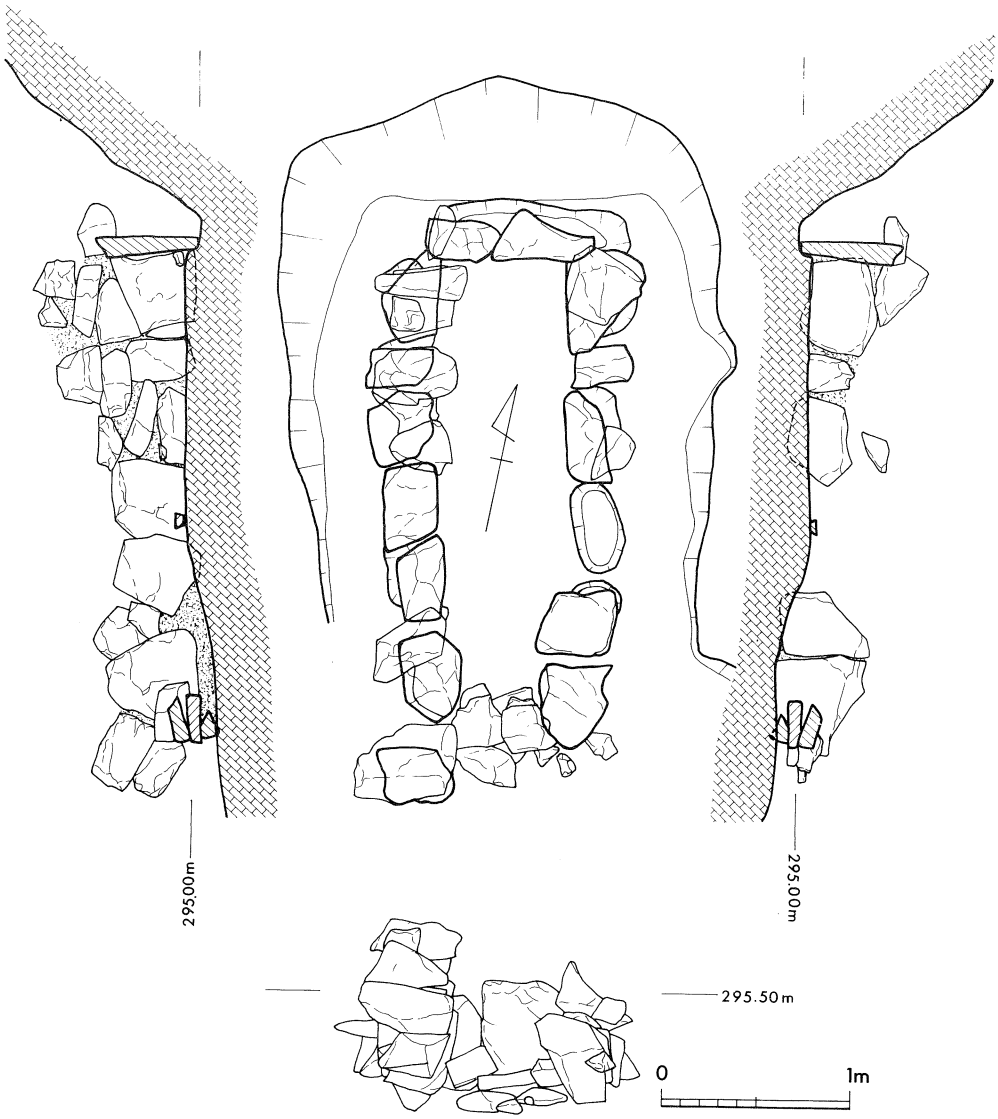
石室内から出土したものは第110図２・３・５・６である。２（蓋）・３（坏）は閉塞石の下から出土したもので，西壁寄りの床面にあった（図版84－３）。坏は正位置の状態であったが，蓋は天地逆の状態であった。この２個の須恵器は接して出土したことや大きさなどからセットになるものと思われる。５（高台付坏）も閉塞石の下から出土したもので，東壁に接した位置に正位置の状態で置かれていた（図版84－１）。６（長頸壺）は奥壁から1.6～2.3mのところから出土したもので破



第104図　小 才 4 号 墳 墳 丘 土 層 断 面 図



第105図　小才４号墳石室実測図(1)

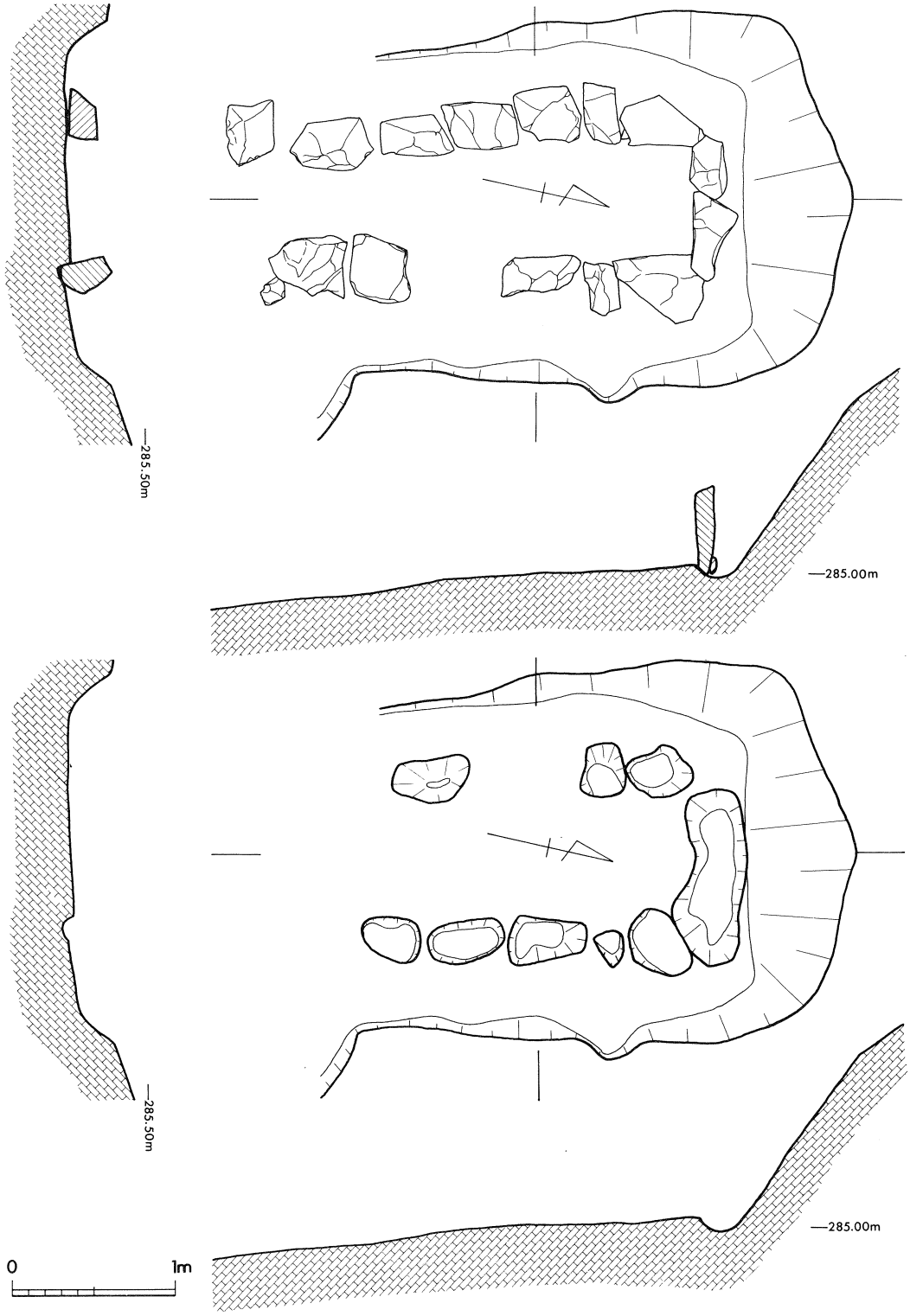


第106図　小才４号墳石室実測図(2)

片の状態であった（図版83－３）。同一個体の破片が玄室内の３箇所から分れて出土した。東壁寄りでは底部と体部片があり，中央やや西寄りに口頸部片，西壁寄りに体部片が散在していた。

石室開口部南側から出土したものは第110図１・４・７である。１（蓋）は石室開口部より南方70cmの位置から天地逆の状態で出土した（図版83－２）。４（坏）は石室開口部より南方約90cmの位置からほぼ正位置の状態で出土した。７（長頸壺）は小片になっており閉塞石下部から出土したもの，石室開口部より南方１ｍあまりの位置から出土したものなどがある。

墳丘上からは第110図８の甕が出土した。石室掘り方の西側において２×１ｍの範囲に破片の状



第107図　小才４号墳石室実測図(3)

第108図　小才４号墳墳丘遺物出土状況実測図

態で散乱していた（第108図，図版83－１）。

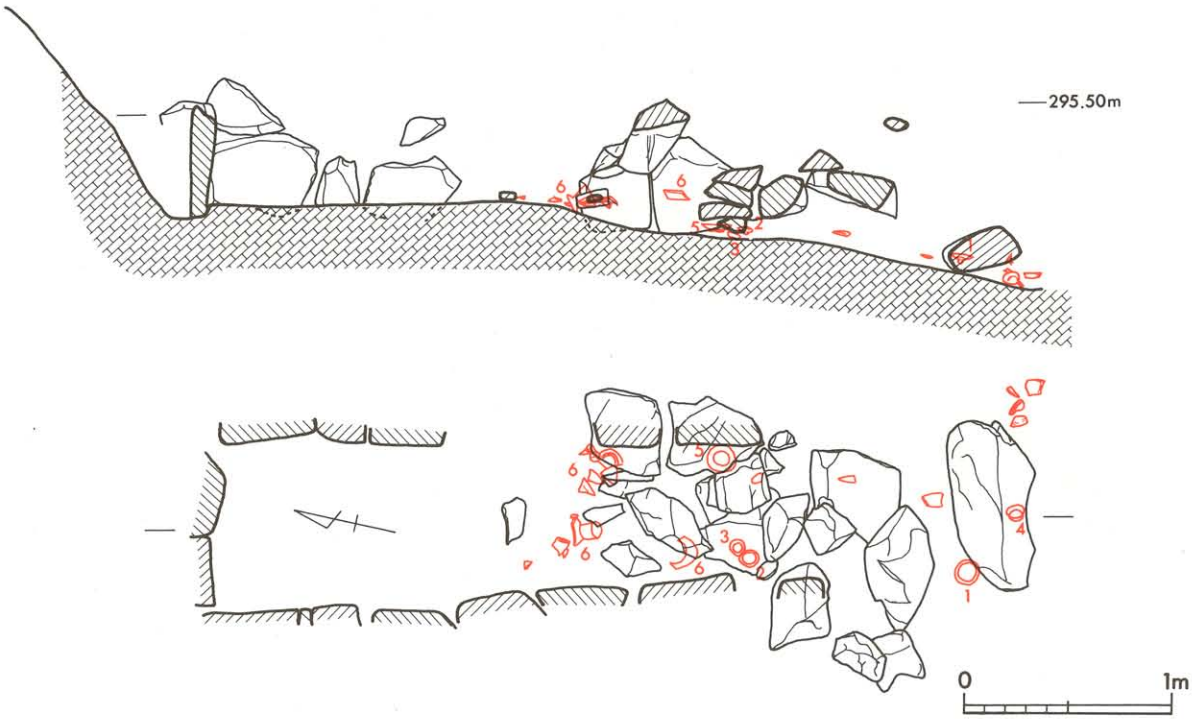
(5)　出土遺物（第110図，図版85・86）

１は，乳頭形のつまみを有する須恵器蓋である。口径11cm，高さ2.6cmあり，内面にはかえりがある。外面天井部には回転ヘラケズリが行われており，その他は回転ナデがみられる。胎土は密で，焼成は良好である。色調は青灰色を呈する。

２は乳頭形のつまみを有する須恵器蓋である。口径9.6cm，高さ3.1cmあり，器肉が厚い。内面にかえりがあるが，１よりも短い。外面天井部には回転ヘラケズリが行われており，その他は回転ナデがみられる。胎土は小砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は青灰色を呈する。

３は，口径8.8cm，高さ3.3cmの須恵器坏である。底部は回転ヘラ切のあとナデ調整が行われているが，板状圧痕も認められる。内面および外面体部は回転ナデが行われている。胎土中に長石・石英等の小砂粒を若干含む。焼成はやや悪い部分もあり，灰黄色～青灰色を呈する。

４は，口径8.7cm，高さ3.5cmの須恵器坏である。底部は回転ヘラ切のあとナデ調整が行われており，３と同様に板状圧痕もみられる。体部外面および内面は回転ナデ調整。胎土中にやや粗い砂粒を含む。焼成は良好であるがわずかに焼けひずみがある。色調は淡青灰色を呈する。



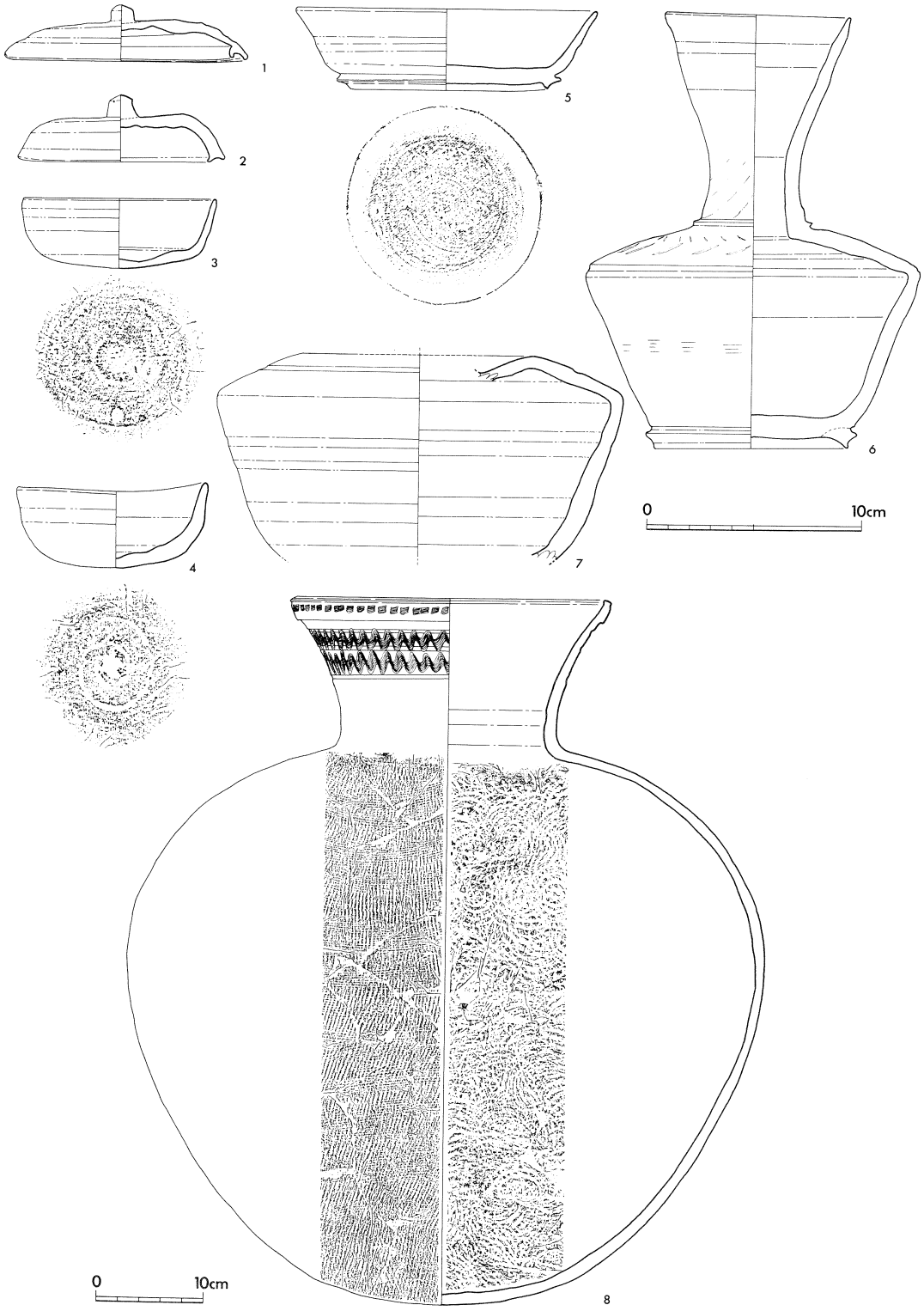
第109図　小才４号墳石室遺物出土状況実測図

５は，高台が付く須恵器坏である。口径13.8cm，高さ3.8cmあり，内外面ともに回転ナデが施されている。底部は拓本では糸切痕のようにみえるがていねいな回転ナデであり，ヘラ記号がある。底部内面はなめらかになっており，ある程度使用されていた可能性がある。胎土は密で焼成は良好。色調は青灰色を呈する。

６は，高台付の須恵器長頸壺で，口径8.5cm，胴部最大径15.5cm，高さ20cmある。頸部と肩部の境に一条の突帯をめぐらし，肩部にヘラ描列点文，胴部最大径部分に一条の浅い沈線を施している。内外面ともに回転ナデ調整が行われている。底部は回転ナデのあとナデ調整がなされており，指紋も観察できる。口頸部の内外面，肩部外面，底部内面には薄く自然釉がかかっている。胎土は密で，焼成は良好。色調は青灰色を呈する。

７は，須恵器片であるが，長頸壺と考えられる。胴部最大径は復元すると19cmあまりになる。外面胴部下半に回転ヘラケズリがみられるが，その他は内外面ともに回転ナデ調整が行われている。肩部には一条の沈線が施されており，多量の自然釉がかかっている。胎土は密で，焼成は良好。色調は青灰色を呈する。

８は須恵器大甕である。口径29.5cm，胴部最大径59cm，高さ65cmある。口縁部は長方形に肥厚させ，外面に櫛状工具による列点文を施す。口頸部には三条の沈線をめぐらし，その間を波状文で飾っている。体部外面には平行叩きのあとカキ目調整，内面には同心円叩きがみられる。胎土中に１㎜



第110図　小才４号墳出土遺物実測図

前後の砂粒を含む。焼成はやや悪く，色調は全体に青灰色ではあるが，明褐色の部分もみられる。

（松本岩雄・角田徳幸・寺尾　令）

第5節　結　　語

小才遺跡は，島根県教育委員会発行の『島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）』（1988年）などにも掲載されていない未知のものであった。ところが，昭和63年度に実施した分布調査によって2基の古墳を確認し，その後平成元年度，平成2年度と発掘調査を行ったところ多数の遺構を検出した。

調査の結果，第Ⅰ区では斜面をL字形に削って造成した加工段1と土坑3，ピット3，溝状遺構1のほか炭の集積3箇所を検出した。第Ⅱ区では，石室を有する古墳7基，周溝のみ遺存していた古墳1基，木室墳とでも称すべきもの2基，横穴墓2基，石組遺構1が検出された。第Ⅲ区では石室を有する古墳1基を確認した。

これらの遺構のうち，第Ⅱ・Ⅲ区で検出した古墳を中心に若干の所見を述べて報告の結びにかえたい。

1．遺物と築造時期

小才遺跡から出土した遺物には，須恵器，土師器，陶磁器類，鉄製品，土製品などがある。このうち陶磁器類は，大半が5号墳の裾から南側にかけての緩斜面において出土したもので，肥前系磁器類と在地窯系陶磁器類などがあり，近世末を中心とした時期のものである。ここでは須恵器・土師器の検討を行うことによって各古墳の築造時期等について考えてみたい。

第Ⅱ・Ⅲ区から出土した須恵器・土師器は量的にあまり多くないため十分な比較検討を行うには困難な状況である。また，当地域の土器編年も確立されていないので詳細な点については不確定といわざるを得ないが，山本清氏の土器編年[(1)]に照らせば，小才遺跡においては少なくとも3期に入るものは皆無であり，すべて4期以降の範ちゅうに含まれる。4期はさらに3つに区分されているが[(2)]，小才遺跡では古式須恵器の流れをくむ蓋坏がみられないことから山本編年4期の③以降に相当するものといえよう。浜田市日脚遺跡における須恵器編年[(3)]に対比してみるとⅠ期～Ⅳ期のものは皆無であり，Ⅴ期～Ⅶ期に含まれることになろう。ここでは，こうした当地域における編年研究をふまえながら，ある程度の年代推定を行うために便宜上畿内における型式との対比を行ってみることにしたい。

小才遺跡から出土した須恵器の器種としては，坏蓋，坏，椀，皿，高坏，短頸壺，長頸壺，広口壺，甕，横瓶などがある。

第４表　小才遺跡古墳・横穴墓一覧表

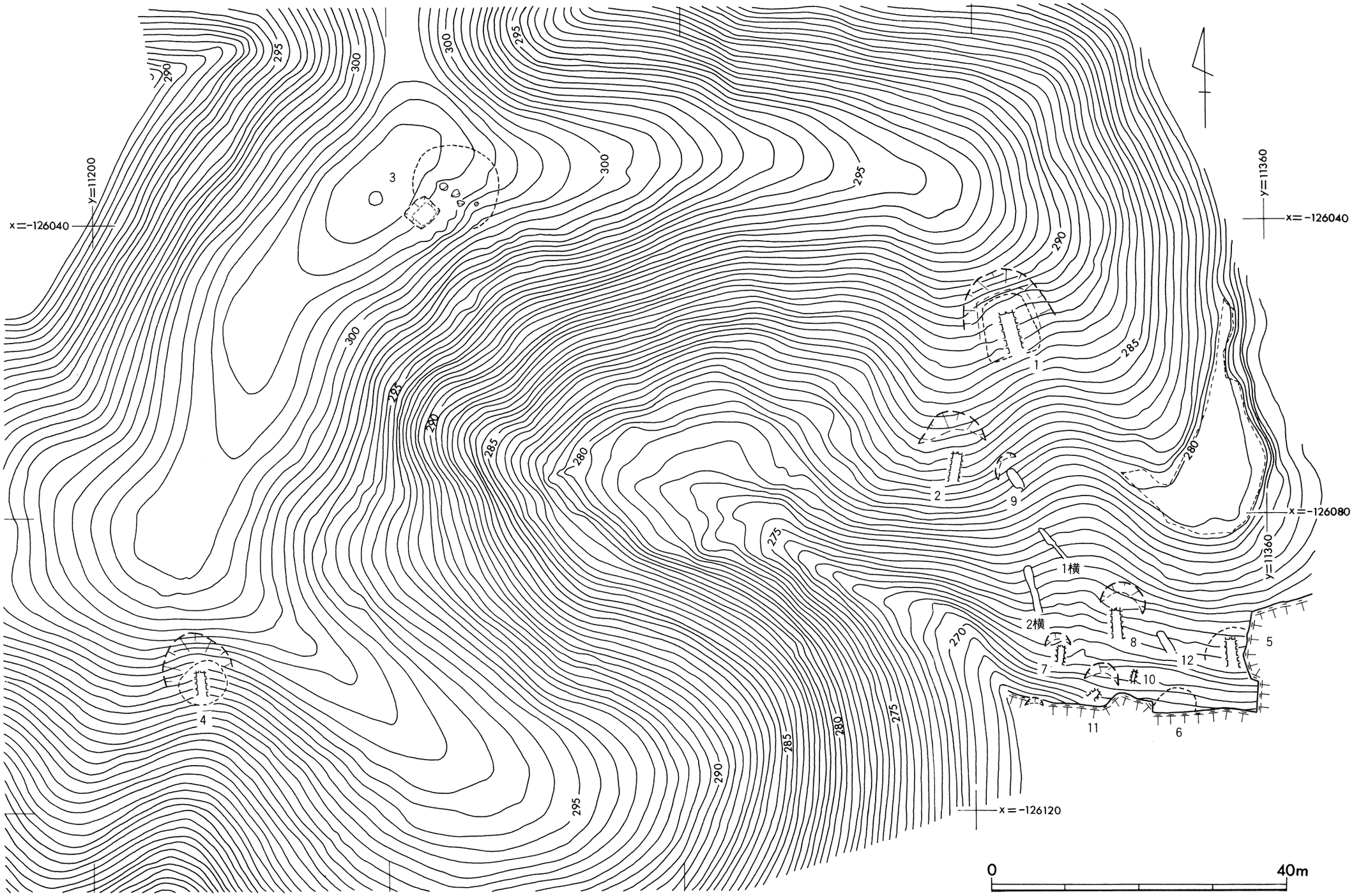
名　称	墳　形	墳丘規模（m）		内部構造（主軸方向）	内部構造規模（m）			遺　物	備　考
		径・一辺	高		全長	奥幅	奥高		
１号墳	方　墳	7.8×6.9	2.45	横穴式石室（N－19°－W）	5.5	1.45	1.4	鉄製大刀１，鉄製鎌１，鉄釘34，土師器杯１，須恵器高杯２，土錘184	外護列石？ 棺台とみられる石列
２号墳	円　墳	8	2.6	横穴式石室（N－8°－E）	3.2	1.0	1.25	須恵器蓋３，須恵器杯４	棺台とみられる石が４個 外護列石？
３号墳	円墳？	不明	横穴	式石室（不明）				不明	
４号墳	円　墳	4	1.7	横穴式石室（N－13°－W）	2.9	0.8	不明	須恵器蓋２，須恵器坏３，須恵器長頸蓋２，須恵器甕１	
５号墳	円　墳	8	2.5	横穴式石室（N－4°－W）	3.9	0.95	1.05	須恵器蓋１，須恵器坏１，須恵器長頸壺１，土師器坏２	外護列石？
６号墳	円墳部	5～6	不明	不明				須恵器短頸壺１，須恵器高坏１，須恵器椀２	
７号墳	円　墳	4	1.2	横穴式石室（N－16°－E）	1.88	0.5	0.7	なし	棺台とみられる石が４個
８号墳	円　墳	7.3	1.7	横穴式石室（N－0°）	3.5	0.97	1.2	なし	棺台とみられる石が４個
９号墳	円　墳	5	2	木室？（N－47°－W）	3.1	1.1	1.1	須恵器短頸壺１	棺台とみられる石が４個
10号墳	不　明	不明	不明	小石室（N－1°－W）	1.05	0.4	0.45	なし	
11号墳	円　墳	6	不明	横穴式石室（N－45°－E）	不明	0.8	0.75	土師器坏１，須恵器片，土師器片	棺台とみられる石が２個
12号墳	不　明	不明	不明	木室？（N－34°－W）	2.5	0.8	0.7	須恵器長頸壺１，須恵器皿１，鉄釘５	
１号横穴	羨道・玄室長2.5，幅0.85，高0.6　前庭長2.3，幅0.35～0.4（N－41°－W）							須恵器坏２，須恵器高坏１	棺台とみられる石が４個
２号横穴	羨道・玄室長2.7，幅1.2～0.75，高0.8～0.5　前庭長3.1，幅1.0（N－10°－W）							なし	棺台とみられる石が２個

坏蓋は11個体ある。このうち５号墳から出土した１個体（第54図１）以外はすべて内面にかえりをもつものである。かえりを有するものは口径８～10cm，高さ2.6～3.6cmのもので，畿内地域の土器に対比すれば概ね坏Ｇと称されるものの蓋にあたる。(4)

かえりは比較的長いもの（第45図１，第84図４，第110図１）や，相当短くなったもの（第45図２・３，第84図５など）がある。つまみは乳頭形のもの（第110図１・２）と宝珠形のもの（第45図１～３）がある。これらを飛鳥・藤原宮の土器型式に対比すれば，おおよそ飛鳥Ⅱ・Ⅲ期に該当するものと思われる。５号墳出土の坏蓋（第54図１）は，いわゆる坏Ｂとされるものの蓋で，内面のかえりが消失しており，飛鳥Ⅴ期に相当するものと思われる。

坏としたもののうちには高台が付くものと付かないものがある。高台のないものは４個体あり（第84図９・10，第110図３・４），いずれも口径９cm，高さ3.5cm前後のもので，坏Ｇとされるものである。底部はすべて回転ヘラ切未調整である。これらは飛鳥Ⅱ・Ⅲ期の特徴をもつものといえよう。

高台付坏には坏Ｂと称されているもの（第54図２，第90図１・２，第110図５）と，畿内ではあまりみかけないもの（第45図４～７）がある。坏Ｂのうち第54図２と第110図５は飛鳥Ⅴ期，第90図１・２は平城宮Ⅱ期にあたるものと思われる。(5) 第45図４～７は対比できる良好な資料はないが，高台



第111図　小 才 遺 跡 調 査 後 全 体 図

は長く「ハ」の字状に開くものであり，２号墳石室内から飛鳥Ⅱ～Ⅲ期の蓋とともに出土したことから飛鳥Ⅱ期あるいはⅢ期に比定することが可能であろう。

椀（第58図３・４）や皿（第87図１）としたものは不明な点が多い。皿について強いて対応させるとすれば飛鳥Ⅴ～平城宮Ⅱ期であろうか。

高坏は４個体出土している（第20図２・３，第58図２，第90図３）。高坏も対比できる良好な資料は少ないが，第58図２はやや古い形態を留めており，飛鳥Ⅱ期ごろのものであろうか。第20図２・３は，口径10cm，高さ６cmあまりの同形，同大のもので，飛鳥Ⅲ期に相当するものと思われる。第90図３は脚部片であるが端部の形態などから平城宮Ⅱ期ごろのものであろう。

短頸壺は２個体出土している（第58図１，第74図１）。不明確であるが，器形や胴下半部の調整などからすると第58図は飛鳥Ⅲ期，第74図１は飛鳥Ⅴ期にあたるものであろうか。

長頸壺は４個体出土している（第54図３，第87図２，第110図６・７）。長頸壺も対比できる資料が少ないが，第54図３は飛鳥Ⅲ～Ⅳ期の特徴をもつものといえ，第87図２や第110図６は飛鳥Ⅴ期～平城宮Ⅱ期ごろのものと推測される。

その他の器種については不明な点が多いが第110図８の甕は，飛鳥Ⅱ・Ⅲ期に相当するものと思われる。

土師器は３個体出土している（第20図１，第54図４・５）。第20図１は，坏Ｃと称されているもので，内面に放射状の暗文があり，見込み部分にラセン文がかすかにみえる。飛鳥Ⅲ期の特徴をもつものである。器形・製作技法などから畿内産のものとみられ，胎土は奈良盆地南部のものに類似しているということである[(6)]。第54図４・５は坏Ａと称されているものである。いずれも内面に放射状の暗文が一段あり，体部は浅くて直線的に外傾している。こうしたことから飛鳥Ⅳ期に該当するものといわれる。製作技法や胎土からすると畿内産そのものではないということである[(6)]。

第Ⅰ区から出土した須恵器（第７図）のうち，高台付の坏はいずれも底部糸切りのあとわずかばかりの高台を付したものである。これに類似したものが，大田市白坏遺跡[(7)]の自然流路上層から「延喜九年」の木簡とともに出土した土器群中にみられることから，10世紀ごろのものと推定しておきたい。

以上の土器の検討結果をもとに古墳の築造時期を推測すると概ね第112図のようになる。図中で白ぬきのものは遺物が出土していないが，埋葬施設の構造などから類推して表示したものである。このようにみてくると，小才古墳群は７世紀中葉ごろから後葉にかけて多数の造墓が行われ，一部８世紀前葉まで築造されていたものと推測される。なお，この土器の検討は，現状では石見地域の土器編年が確立されていないため，土師器坏・須恵器蓋など一部の資料をもとにあえて畿内編年に対比してみたものであり，対応関係の理解のうえで多くの誤りがあるかもしれない。今後，当地域

で詳細な土器編年を実施し，逐次改訂すべきものといえる。

2．墳丘について

小才遺跡で確認された古墳のうちある程度墳形が判断できるものは10基であった。1号墳以外は墳丘の遺存状態が非常に悪く，わずかばかりの盛土や周溝の一部を確認し，その状況から墳形を推測したものである。したがって不明確な点も多いが，小才遺跡では方墳1基，円墳9基ということになる。1号墳は方墳であるが，正確にいえば台形を呈するのが大きな特徴である。

墳丘規模は4～5m大のものから10m前後のものまであり，全体的に小規模なものといえる。おおまかにみると4～6m大のもの（4・6・7・9・11号墳）と8m前後のもの（1・2・5・8号墳）に大別できる。

外部施設として葺石・埴輪といったものは皆無であった。ただし，1・2・5号墳では石室の南端の開口部から東西に向かって外護列石状の石列がみとめられた。

墳丘の築成方法は基本的には丘陵斜面の山側を切削加工して谷側に平坦面を造り，埋葬施設を構築したのち盛土を施したものである。

3．内部構造について

内部構造としては，横穴式石室，小石室，木室，横穴墓など各種のものが確認された。

横穴式石室を有するものは8基（1～5号墳，7・8・11号墳）あり，最も多い。未調査の3号墳は不明であるが，それ以外はいずれも無袖形の狭長な石室である。規模は全体として小規模なものであるが，小才遺跡のなかでみた場合，全長5.5m，奥壁幅1.45mの大形の石室（1号墳），全長2.9～4m，奥壁幅0.8～1mの中形石室（2・4・5・8号墳），全長約1.9m，奥壁幅0.5mの小形石室（7号墳）がある。追葬が行われたと考えられる4・5号墳以外は，石室内に棺台とみられる石が据えてあり，これらは基本的にはいずれも単葬墓であったと推測される。なお，木棺については1号墳では長さ10cm前後の鉄釘が出土していることから鉄釘使用の組合式木棺の存在が考えられるが，その他の石室内からは釘が1本も出土していない。ただし，棺台とみられる石があることから鉄釘類を使用しない木棺，あるいはそれに類するものが安置されていたものと考えられる。瑞穂町・江迫第1号横穴墓では玄室内で3体の人骨が検出され，1体は木釘により組立てられた木棺，他の2体は石を土台にして木板を載せ，その上に遺体を置いていた事が確認されている。(8)

石材は，石英安山岩質火山砕屑岩と流紋岩質火山砕屑岩が使用されていた。(9) この2種類の石は，調査区内の岩盤の露頭にみられることから，ごく近辺から石室石材を調達していたものと考えられる。

小石室としたものは10号墳のみである。これに類似した小石室は旭町・後河内古墓群(10)や重富遺跡

（本書第Ⅲ章参照）でも確認されている。後河内では周溝の一部と若干の盛土がみとめられたことから一辺約2.2mの墳丘があったものと考えられている。また副葬品等は出土していないが墳丘から7世紀後半ごろのものと思われる須恵器高坏片が出土している。そうしたことから考えると小才10号墳も，もともとは小規模な墳丘があったと想定され，7世紀後半ごろの築造ではなかったかと推測されよう。

木室墳として紹介してきたものは，9号墳と12号墳の2基のみである。島根県下では，はじめて検出されたものであり，詳細については不明である。大阪府・田辺古墳群などに類似の施設がみられるが，そこでは組合式木棺を直葬したものと考えられている。[11] 東海地方や近畿地方では横穴式木室を有する古墳と考えられているものが相当数知られている。ただし，それらは粘土を用い火化されたものが多く，柱穴を伴うなど木室構造も小才例とは相当異なるものである。小才例は強いて言えば鈴木敏則氏が「伊勢Ⅱ型」[12]と分類されている構造に近いともいえるが即断の限りではない。小才10・12号墳の場合，土層の状況などから木室墳として述べてきたが，今後の類例を矣って検討すべきものといえよう。

4．副葬品について

副葬品は総じてきわめて少ないのが小才古墳群の特徴といえる。7・8・10号墳や2号横穴墓は皆無であった。遺物が出土しているといっても2・4・5・6・9・11・12号墳や1号横穴墓からは少量の須恵器・土師器が出土しているにすぎない。鉄製品を出土しているのは1号墳のみで，大刀と鎌が副葬されていたが玉類や金銅製品などは一切みられなかった。

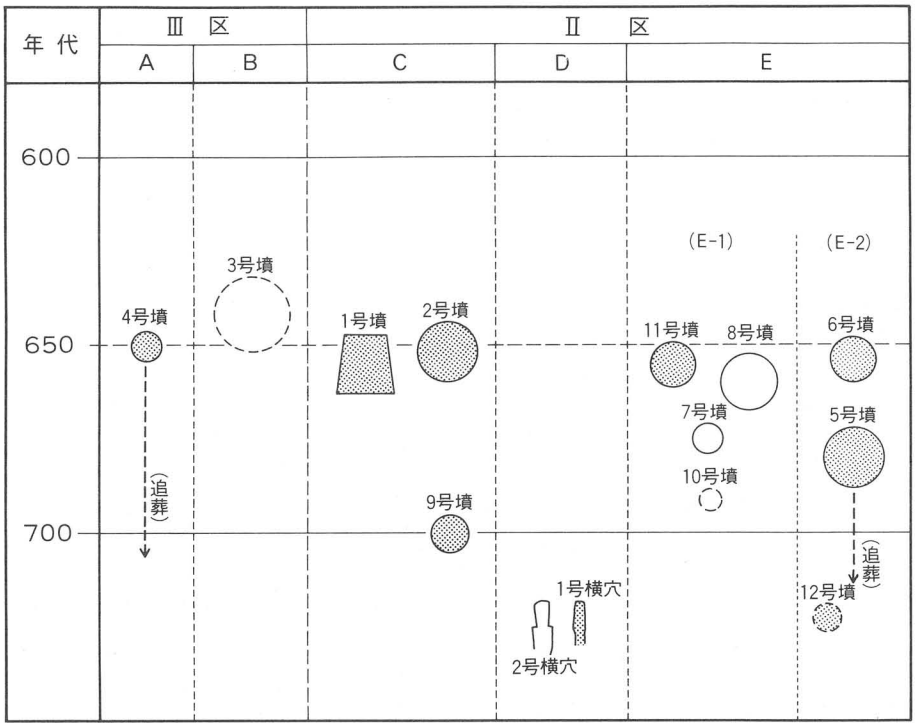
土器のなかでは1号墳と5号墳から出土した土師器は特に注目すべきものといえよう。1号墳出土の土師器坏は，器形・製作技法などから畿内産のものとみられ，5号墳出土の土師器坏は畿内産そのものではないが模倣してつくられたと考えられるものである。こうした土器が副葬されていることは被葬者の性格を考えるうえで重要な意味をもつものといえる。

このほかに1号墳からは184個の土錘が出土している。これらは副葬品である土器類や鉄製品とは異なり，すべて床面より浮いた状態で出土した。平面的な分布をみると，閉塞石のある位置と石室開口部付近に多数みられた。こうした状況からすると閉塞部分と石室開口部に漁網が吊り下げられていたのではないかと想像される。これは石室内と外界とを隔絶するために何らかの精神的行為にもとづいて行われたとも解することができるが，類例がないため不明と言わざるを得ない。

5．古墳群の群構成

本古墳群を構成する各古墳は，石室形態，石室規模，棺台，鉄釘の出土状態などからみて多くは単葬墓であると考えられる。ただし，５号墳については石室内の土層の観察から追葬の可能性が考えられた。また，出土遺物にも，飛鳥Ⅲ～Ⅴ期のものがみられることから追葬が行われたものと考えられる。４号墳については，土層等では確認できなかったが，出土遺物に飛鳥Ⅱ～Ⅲ期ごろのものと飛鳥Ⅴ期のものが含まれていることから追葬のあったことが推測される。

古墳は占地や分布状況などから５つのグループに分類される。ここでは便宜上，西から東に向けてＡ～Ｅ群と仮称することにしよう（第112図）。



第112図　小才遺跡古墳築造時期試案模式図

Ａ群は最も西側の丘陵斜面に位置するもので４号墳のみが単独で存在する。４号墳は７世紀中葉ごろに築造され，その後７世紀末～８世紀前葉まで追葬されたと考えられる。

Ｂ群は中央の丘陵頂上付近に位置する。この付近は発掘調査を実施していないため，３号墳のみしか確認していない。３号墳は径約10ｍの円墳と思われ，横穴式石室をもつ。築造時期等については不明である。

Ｃ群は東側の丘陵斜面に位置するが，斜面の中でも上半の高いところに分布している。１号墳，

2号墳，9号墳の3基が確認されている。2号墳，1号墳は7世紀中葉ごろに築造され，9号墳は7世紀末～8世紀前葉に築造されたものと考えられる。1号墳は唯一方墳であるうえ，石室規模も本古墳群中最大で，鉄製大刀を副葬しているなど中心的な存在といえる。しかし，このグループも7世紀末～8世紀前葉になると木室墳（9号墳）へと変遷する。

D群は，丘陵斜面の中腹にあたり，C群とE群の中間地帯にあたる。2基の横穴墓（1号横穴墓，2号横穴墓）が存在する。1号横穴墓出土土器を手掛りにすれば7世紀代にはこの地帯は造墓活動が行われておらず，C群とE群の墓域を画するが如きところであったが，8世紀前葉になって横穴墓が2基つくられている。あたかも，C群とE群の最終の墓域としてここが選定されたようにもみうけられる。

E群は最も南東部にあたり，丘陵斜面の比較的低いところに位置する。最も多くの古墳が確認されており，5・6・7・8・10・11・12号墳がある。分布の状況からさらに7・8・10・11号墳のグループ（E－1）と5・6・12号墳のグループ（E－2）に細分することが可能である。E－1グループは出土遺物から11号墳が7世紀中葉ごろに築造されたと考えられるが，その他の古墳については不明である。ただし，石室構造・規模などから推測すると7世紀中葉から末にかけて8号墳→7号墳→10号墳と順次築造されたものと思われる。E－2グループは出土遺物からまず6号墳が7世紀中葉ごろに築造されたと考えられる。次に5号墳が7世紀後葉に築造されて8世紀初頭まで追葬され，最後に8世紀前葉ごろに12号墳が築造されたものと考えられる。

このようにみてくると，A・C・E－1・E－2の各単位群においては，7世紀中葉から8世紀前葉にかけての約100年の間に3～4人を埋葬していたものと考えられ，一部追葬が認められるものの，基本的には単葬であり，逐次造墓が行われたものと思われる。これらの単位群は，戸主の死を契機に造墓を行なった有力家父長層の系譜とも考えられるが，そうした点については今後の資料の増加を矣って検討すべきことといえよう。

ところで，小才遺跡の近辺には，やつおもて古墳群[13]（前方後円墳1，円墳19，方墳4）や山ノ内古墳群[14]（円墳30基以上）など江ノ川支流域のなかでは比較的まとまった古墳群がみられる。この古墳群はいずれも6世紀から7世紀前葉までに築造されたものといえる。それに対して小才遺跡は7世紀中葉から8世紀前葉にかけて築造されたものと考えられることから，この地域においてやつおもて10号墳などの前方後円墳が築造されなくなってから以降のいわゆる古墳時代終末期[15]のものとして位置付けることができよう。石見地方ではこれまで終末期の古墳群がほとんど知られていなかっただけに，当地域における古墳の終焉過程を解明するうえで貴重な資料が得られたものといえる。

また，やつおもて古墳群の南西側緩斜面から相当広範囲にわたって8世紀代の瓦や須恵器が採集されていることから寺院跡（重富廃寺）があったものと考えられており[16]，そうした寺院を建立した

氏族と小才遺跡の被葬者とのかかわりなども今後検討すべき重要な課題といえよう。

（松本岩雄）

註

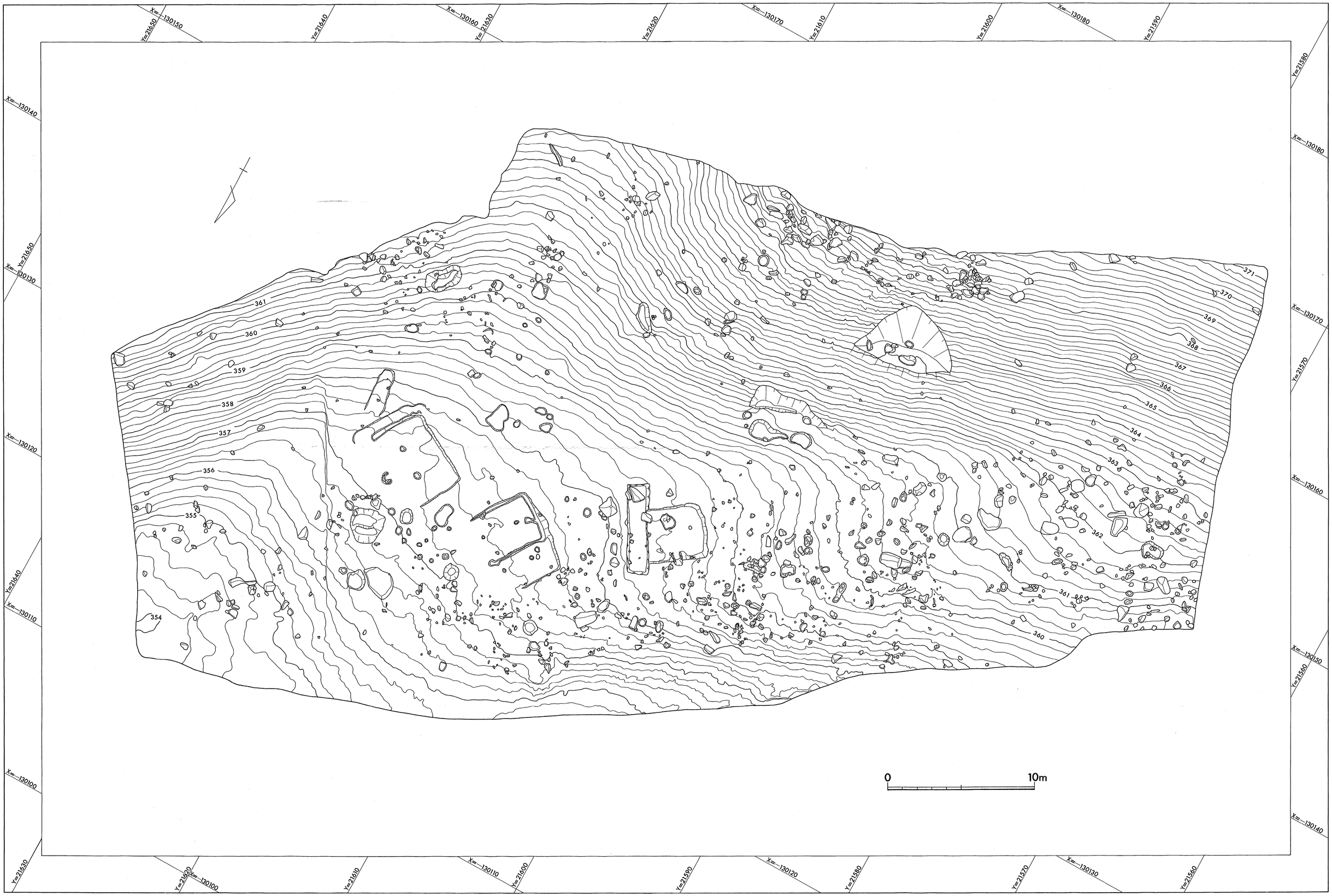
（1）　山本　清　「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』所収　1971年
（2）　山本　清　「横穴の型式と時期について」『山陰古墳文化の研究』所収　1971年
（3）　川原和人，丹羽野裕編　『日脚遺跡』　島根県教育委員会　1985年
（4）　奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ　1978年，林部　均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』第72巻1号　1986年　以下の器種名および，畿内編年はこの文献に基く。
（5）　奈良国立文化財研究所『平城宮発掘報告』Ⅶ　1976年
（6）　林部均氏の御教示による。
（7）　大国晴雄・遠藤浩巳　『白坏遺跡発掘調査概報』　大田市教育委員会　1989年
（8）　今岡稔・吉川正・横山純夫　「瑞穂・江迫横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅴ集　島根県教育委員会　1974年
（9）　三浦清氏の御教示による。
（10）　角田徳幸・永瀬伸二　「後河内古墓群」『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ　島根県教育委員会　1991年
（11）　花田勝広　『田辺古墳群・墳墓群発掘調査概要』　柏原市教育委員会　1987年
（12）　鈴木敏則　「横穴式木室雑考」『三河考古』第4号　1991年
（13）　本書第Ⅳ章参照
（14）　松本岩雄・宮本徳昭ほか　『山ノ内14号墳発掘調査報告書』　旭町教育委員会　1989年
今田修二・角田徳幸　『県営農地開発事業（梨園造成）に伴う山ノ内28号墳発掘調査報告書』　旭町教育委員会　1991年
（15）　白石太一郎　「古墳の終末」『古代を考える　古墳』　吉川弘文館　1989年
（16）　旭町教育委員会　『旭町誌』上巻　1977年

平成４(1992)年３月20日印刷
平成４(1992)年３月27日発行

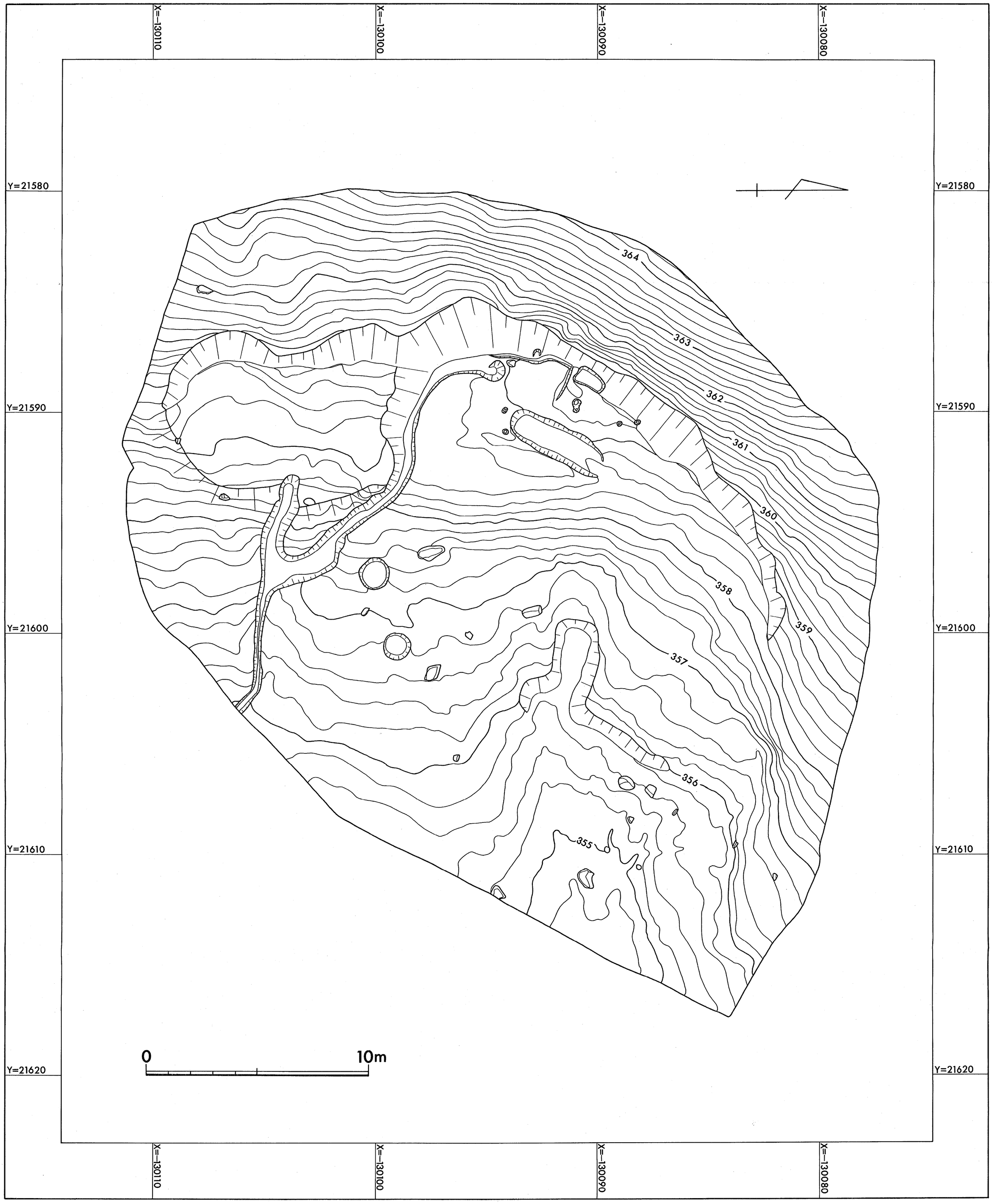
中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
（本文編　第１分冊）

発 行　島根県教育委員会
松江市殿町１番地

印 刷　有限会社 谷口印刷
松江市母衣町89番地



付図１　今佐屋山遺跡Ⅰ区地形測量図



付図２　今佐屋山遺跡Ⅱ区地形測量図